

箕面市粟生間谷東所在

粟生間谷遺跡

古代・中世編

—国際文化公園都市特定土地地区画整理事業に伴う古代から中世の集落の調査—

本文編



2003年2月

財団法人 大阪府文化財センター



粟生間谷遺跡周辺を東から望む

右下が調査地



北西から



南から



調査地遠景

南東から



南から



調査開始時の状況

西から



丘陵上 (手前o城・中央J城・奥I城)

北東から



川合裏川段丘面 (s城)

北から



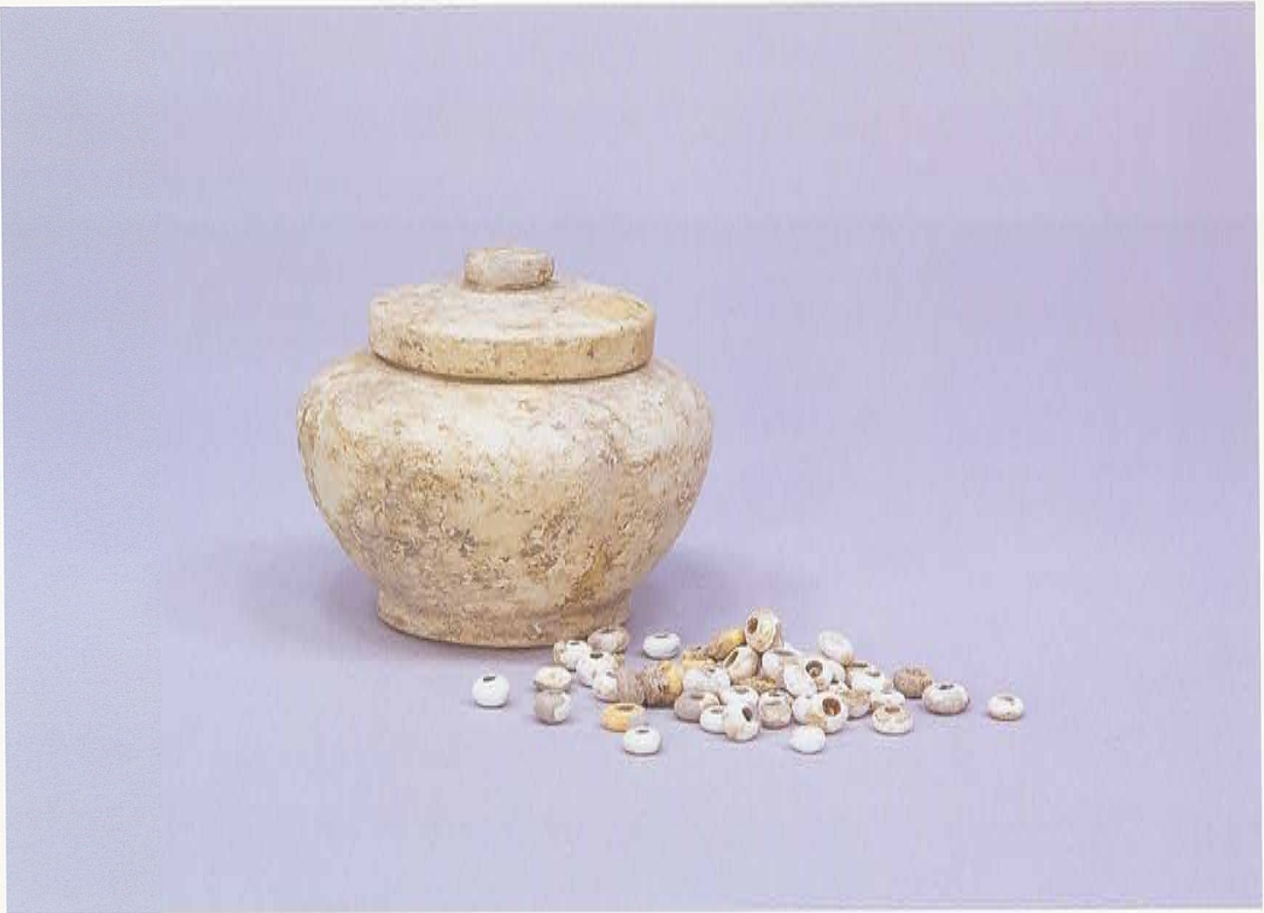
扇状地 (u 城)

北から

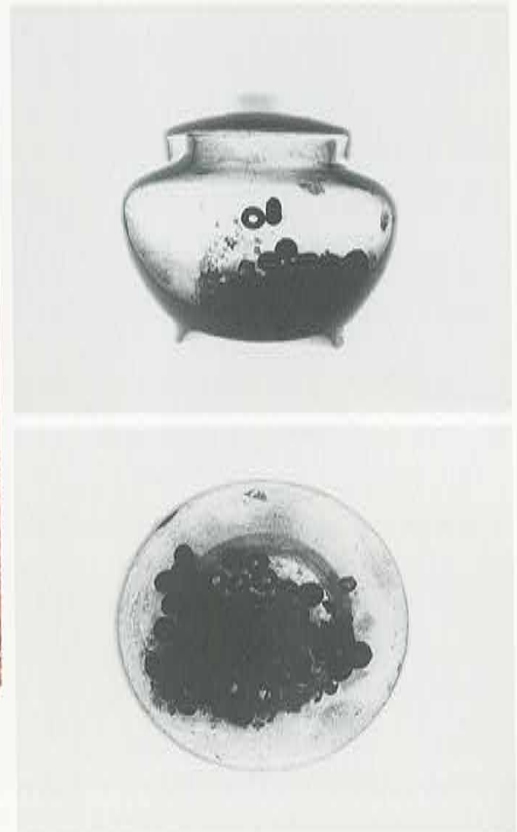


勝尾寺川段丘面 (y 城・奥 x 城)

東から



東から



勝尾寺川段丘面v域 ピット108出土 三彩小壺・ガラス玉



丘陵上 f 域 建物45

東から



勝尾寺川段丘面 y 域 建物143

北から



丘陵上 e 域 建物35・36

南から



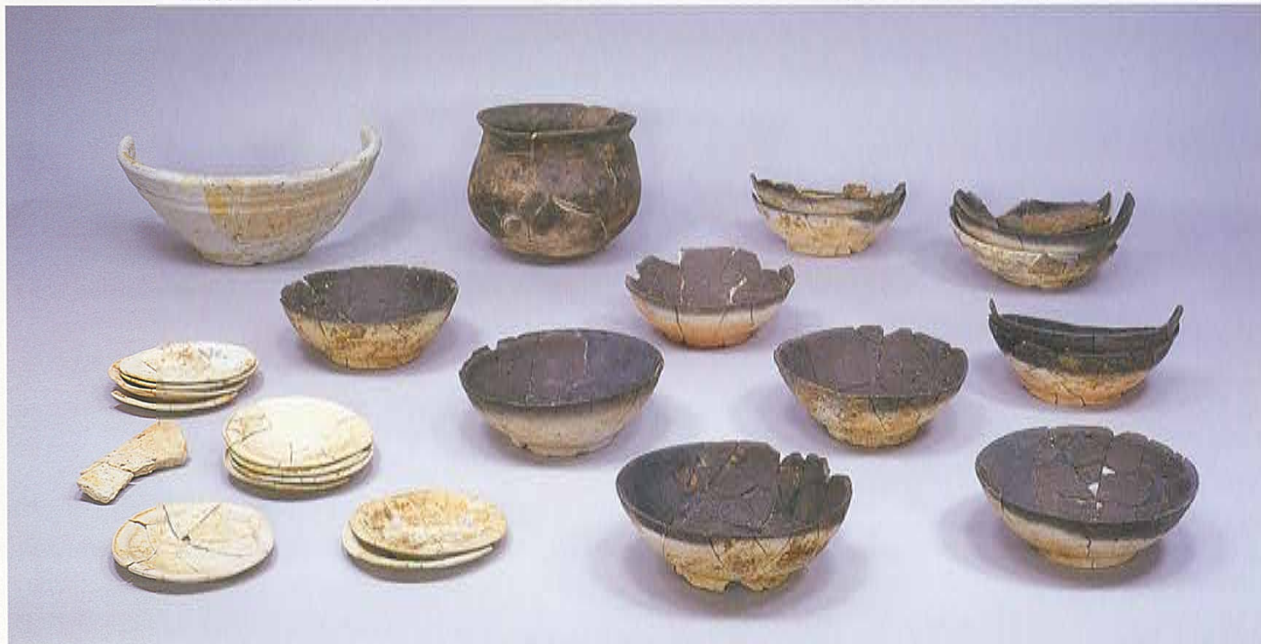
丘陵上 e 域 ビット16

西から



丘陵上 a 域 ビット1

南から



丘陵上 e 域 土坑19出土 土器



丘陵上b域 土坑10出土 土器



丘陵上d域 土坑15出土 土器

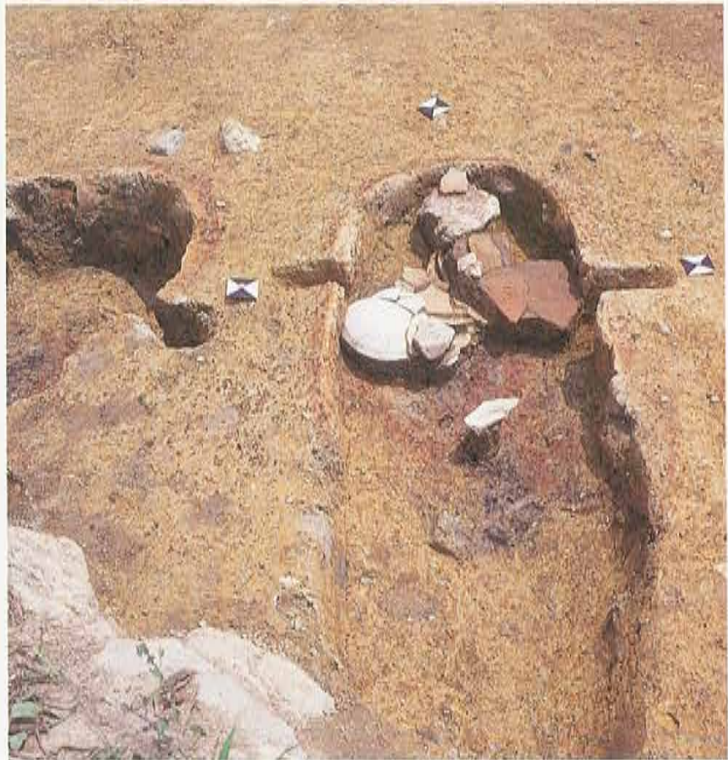


丘陵上 i 域 建物69

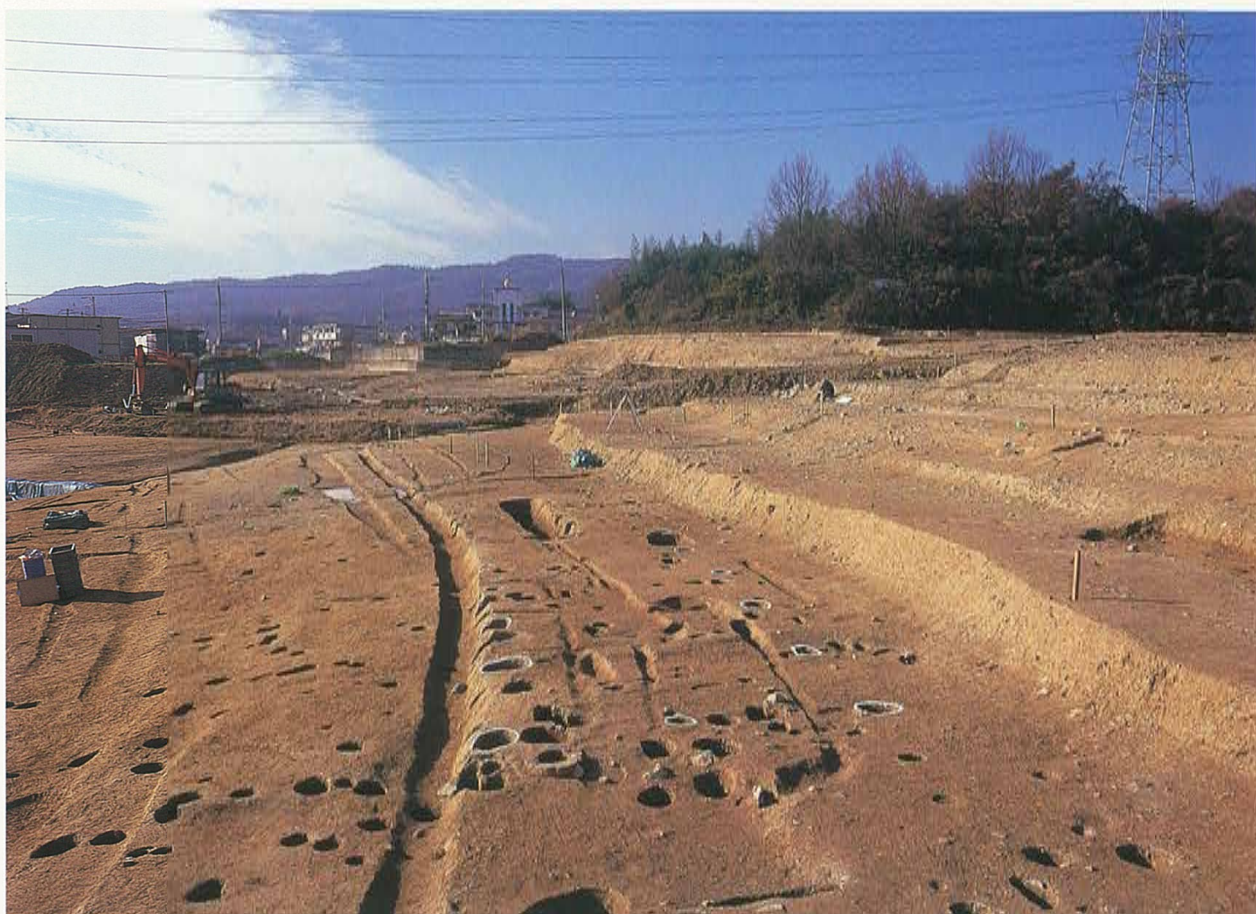
南から



丘陵上 a 域 焼土坑 2・3 南西から



丘陵上 a 域 焼土坑 2・3 南西から



丘陵上 i 域 建物63

東から

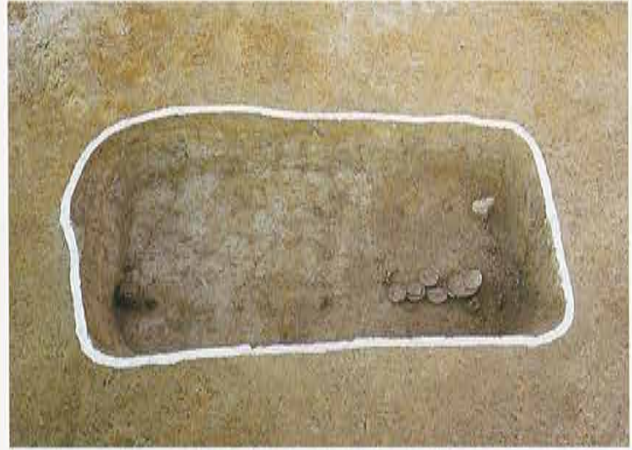


丘陵上 g 域 丘陵先端部の遺構群

西から



丘陵上 j 域 墓 5 南から



丘陵上 m 域 墓 8 東から



丘陵上 q 域 焼土坑56~58 北西から



東から



南から

丘陵上 q 域 焼土坑57



丘陵上q域 墓10出土 高麗青磁皿



丘陵上j域 墓4出土 鏡



丘陵上 q 域出土 輸入陶器



丘陵上 c 域 焼土坑 5・6 南東から



南西から



丘陵上 o 域 焼土坑 31 東から



北西から



川合裏川段丘面 r 域 焼土坑 66 南から



南から

丘陵上 o 域 焼土坑 37



川合裏川段丘面 s 域 井戸9 南東から



勝尾寺川段丘面 x 域 井戸12 南西から



川合裏川段丘面 s 域 集石6

南東から



丘陵上p域 焼土坑53・54 南西から



丘陵上p域 焼土坑55 南西から



丘陵上p域 焼土坑46 北東から



丘陵上p域 焼土坑50 南から



丘陵上土層断面 (i域) 北西から



川1断面 北東から

序 文

粟生間谷遺跡は、大阪府の北部、箕面市の東端で茨木市との境目に位置し、北側に北摂山地がせまり、南側に勝尾寺川が流れ、その河川が形成した段丘面および丘陵の先端部にあたります。

住宅・都市基盤整備公団（現都市基盤整備公団）では、箕面市と茨木市にかけての「国際文化公園都市（彩都）土地区画整理事業」を進めることとなり、当センターがその建設に先立って発掘調査を行うこととなりました。粟生間谷遺跡の調査は6ヵ年にわたり、その後2年間の整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査の成果から、南面する丘陵の緩やかな傾斜地に、これまで知られていなかった後期旧石器時代の遺跡が検出されました。その石器の出土状況から、数群のブロックが形成されていることが判り、石器組成や石材組成から、これまで確認されてきた畿内的な石器の様相とは異なる要素をもった石器群であることが判明しました。また、それらに伴う火山灰も検出されて、分析結果より、AT降灰以後の石器群であると判りました。

縄文時代は、旧石器時代に続き草創期から早期の石器群が出土し、変わらぬ人間活動があったことが窺われます。しかしながら、その後しばらくは明確な営みの痕跡が見られません。後期になり再び活動が認められるようになり、晩期まで続きます。隣接する徳大寺遺跡では、縄文時代晩期の住居址も検出されています。

弥生時代および古墳時代は、遺構が全く検出されず、遺物もわずかに上層の包含層に混入している程度でした。

当遺跡で再び人々の活動が活発になるのは、奈良時代以降で、地鎮のためか奈良三彩の小型壺にガラス玉が納められたものが出土しています。これ以降、中世にかけて掘立柱建物百数十棟が検出され、それらの変遷が明らかになり、中世集落の復原が可能となりました。

なお、『勝尾寺文書』にみえる文献史学で研究されてきた「粟生村」と、発掘調査の成果で得られた中世集落の成り立ちを比較することも出来ました。

最後に、発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました地元関係各位をはじめ、都市基盤整備公団関西支社、大阪府教育委員会、箕面市教育委員会、茨木市教育委員会に深く感謝して序の言葉とします。

2003年2月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う、粟生間谷遺跡（あおまだにいせき）発掘調査報告書である。
2. 粟生間谷遺跡は、大阪府箕面市粟生間谷東3丁目地内に所在する。
3. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会および財団法人大阪府文化財調査研究センターが、住宅・都市整備公団（現都市基盤整備公団）の委託を受けて実施した。
4. 発掘調査は、（その1）は財団法人大阪府埋蔵文化財協会がおこない、（その2）以降は財団法人大阪府文化財調査研究センターがおこなった。期間と担当者は以下の通りである。

（その1）	1994年7月～1995年3月	技師上林史郎・岡本圭司
（その2）	1996年6月6日～1997年1月31日	技師新海正博・山本美野里
（その3）	1997年2月1日～1999年3月31日	係長金光正裕（1997年度）、技師新海正博・ 信田真美世、専門調査員瀬戸哲也（1998年度）
（その4）	1997年6月1日～1998年3月10日	技師森本徹・亀井聡
（その5）	1998年6月1日～1999年3月10日	係長金光正裕、技師森本徹
（その6）	1999年3月5日～2000年3月10日	技師新海正博・信田真美世、専門調査員木村健明
（その7）	1999年5月1日～2000年3月10日	係長金光正裕、技師森本徹、専門調査員福島正和

なお、現地調査において、森屋美佐子、市本芳三、松宮昌樹をはじめとする当センター職員の協力を得た。
5. 整理事業は、2000年6月1日から2002年2月28日まで、財団法人大阪府文化財調査研究センター北部事務所所長小野久隆、係長森屋美佐子の指示のもと、技師信田真美世がおこない、主査上野貞子が写真を、主査山口誠治が保存処理関係・樹種鑑定を担当した。なお、森屋美佐子（写真図版ほか）、新海正博（金属製品・金属製品生産関係遺物・石製品ほか）、岡本圭司、市本芳三、森本徹、鈴木雅美、小野亜由美、正岡大実をはじめとする当センター職員の協力を得た。
6. 自然科学的分析、保存処理は、以下の機関・諸氏に委託した。

花粉分析・種実同定	川崎地質株式会社
残存脂肪酸分析	株式会社 ズコーシャ
鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査	九州テクノリサーチ・TACセンター
石製品の蛍光X線分析	薬科哲男氏（京都大学原子炉実験所）
金属製品保存処理	株式会社 京都科学
7. 各種鑑定・分析は以下の諸氏に依頼した。

石製品などの石材鑑定・分析	京都教育大学名誉教授 井本伸廣氏
三彩小壺内容物の分析	奈良文化財研究所 村上 隆氏
人骨・動物遺体の鑑定・分析	大阪市立大学医学部 安部みき子氏

また、奈良女子大学文学部 西谷地晴美氏には、「中世の環境変動と地域社会－粟生村を中心に－」の玉稿を賜った。深く感謝いたします。

8. 発掘調査および整理作業の過程で、次の方々をはじめとする、多くの諸氏にご指導、ご教示を賜った。記して深く感謝いたします。(敬称略、順不同)

伊野近富・森島康雄(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、岡本直久・河合君近・佐野元・藤澤良祐(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター)、奥井哲秀(茨木市教育委員会)、尾上 実、森田レイ子(太宰府市教育委員会)、橋田正徳(豊中市教育委員会)、重金 誠(能勢町教育委員会)、鋤柄俊夫(同志社大学)、乗岡 実(岡山市教育委員会)、韓 盛旭(大韓民国 松廣寺聖寶博物館)、藤澤一夫(四天王寺国際仏教大学名誉教授)、藤原 学(吹田市教育委員会)、福田 薫(箕面市教育委員会)、前田洋子(大阪市立博物館)、宮田進一(富山県埋蔵文化財センター)、免山 篤(茨木市文化財保護審議委員)、森 郁夫(帝塚山大学)、森村健一(堺市立埋蔵文化財センター)、中世土器研究会

9. 発掘調査および整理作業には、次の方々を中心に参加、協力を得た。

発掘調査

有澤恭子、石井 佑、石川奈々絵、石黒智美、石塚貢子、市川奈緒、伊礼よしの、上河善子、内山義行、梅田陽子、岡部純子、鹿島真由美、勝間悠有子、黒川泰隆、菰田知宏、近藤昌則、酒井 貢、佐々木恵美、澤田正明、高倉淳子、高田泰子、高見 文、田中千賀、中馬雄一、塚本浩哉、辻 康男、百々 瞳、殿岡祐介、富田卓見、仲辻晃明、成田晃一、野口佳子、橋本牧子、幅 伸悟、日高圭悟、樋口玲子、平田麻希、藤本知弥、降井寮治、松田智子、向井 朗、村岡 譲、村上八重子、渡邊健一郎、渡邊健二

報告書作成

秋庭貴美子、今田明子、上河善子、喜田真澄、川崎朝子、近藤千恵、酒井 貢、高田佐和子、立岩美津子、田中正子、辻本ゆりね、津田春子、中川寿美、中田麻矢、中西龍太、西村 環、二宮栄子、波岸初美、野口佳子、樋口玲子、舟槻良子、前田千津子、松岡聖美、松本直美、馬服久美、八十千里、山田久美、山本香織

10. 本調査に関わる遺物、写真、カールスライド、実測図などは、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。
11. 表紙の揮毫は、当センター総務部 白橋鐘道による。

凡 例

1. 本報告書は、本文編、写真図版編、付表編の3分冊と、付図で構成されている。
2. 座標は国土座標に則った平面直角座標系、第Ⅵ座標系に準拠し、座標の記載はすべてm単位である。また、方位は座標北である。
3. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。
4. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5. 遺構番号は、調査時のものから変更した。旧番号は付表編掲載遺構・建物一覧表に記載している。
6. 遺構実測図についての詳細は以下の通りである。

縮尺は、各項冒頭の各城平面図が1/500、墓が原則1/20、井戸が1/40、焼土坑が原則1/20に統一した。建物は原則1/60であるが、大型のものなどは1/80、1/100とした。そのほかは各図のスケールに縮尺を明示しているので参照されたい。

断面位置は、「-」によってその位置を明記した。

被熱痕跡の範囲を橙色（赤色・黒色）で表現している。
7. 遺物番号は、遺物実測図掲載順の通し番号である。写真図版にのみ掲載しているものは、掲載順に、実測図の最終番号に続く番号を付した。
8. 遺物実測図についての詳細は以下の通りである。

縮尺は、土器・木製品・石製品・瓦が1/3、金属製品・金属製品生産関係遺物が2/3、銭貨が1/1である。ただし、一部の石製品、金属製品はその限りではない。土製品は、土錘を2/3としたほかは、統一していない。それぞれの縮尺は、各スケールに明示したほか、1/3以外のものについて、挿図キャプションに付記した。

各遺物実測図の右下には、その種類を示している。略称は、須-須恵器、黒A-黒色土器A類、黒B-黒色土器B類、瓦-瓦器・瓦質土器、陶-陶器、輪陶-輸入陶器である。土器で無記入のものは、土師器である。
9. 「Ⅲ 調査の成果」の各遺構の項における遺物についての記述は、掲載遺物に限らず、出土した遺物すべてを対象としたものである。
10. 全体の平面図は、14枚に分割した。付図1～14で、1/200である。複数遺構面がある部分については、全体平面図に下面を表し、上面を、同じく1/200で、別に付図15～18を作成した。付図19～21は、それぞれ全域を1枚に納めたもので、1/700である。付図19は遺構図、20は平面図、21は地区割り図である。
11. 写真図版についての詳細は以下の通りである。

縮尺は不同である。

遺物写真は、上野貞子が、遺構写真は各調査担当者が撮影したものである。
12. 執筆者は、目次に示した通りである。編集は信田がおこなった。

目 次

カラー図版	
序文	
例言・凡例	
目次	
I 位置と環境	1
自然環境 (新海正博)	2
歴史環境 (信田真美世)	3
II 調査の経緯と方法	
調査の経緯 (新海)	9
発掘調査の方法 (信田)	10
報告書作成の方法 (信田)	12
III 調査の成果 (信田)	17
序 章	17
第1章 丘陵上	27
序 節	27
第1節 丘陵上西部	31
第1項 a城	32
第2項 b城	50
第3項 c城	73
第4項 d城	88
第5項 e城	99
第6項 f城	114
第7項 g城	132
第2節 丘陵上中部	149
第1項 h城	153
第2項 i城	165
第3項 j城	188
第4項 k城	230
第3節 丘陵上東部	240
第1項 l城	241
第2項 m城	245
第3項 n城	255

第4項	o城	279
第5項	p城	291
第6項	q城	310
第2章	川合裏川段丘面	365
序節		365
第1節	西岸	367
第1項	r城	367
第2項	s城	384
第2節	東岸	405
第1項	t城	405
第3章	扇状地	409
第1節	扇状地	409
第1項	u城	410
第4章	勝尾寺川段丘面	417
第1節	勝尾寺川段丘面	417
第1項	v城	418
第2項	w城	425
第3項	x城	429
第4項	y城	457

IV 自然科学分析

序章	自然科学分析の目的と方法	(森本 徹・新海)	479
第1章	花粉分析および種実分析	(川崎地質株式会社・渡邊正巳)	481
第2章	残存脂肪酸分析	(中野益男・株式会社ズコーシャ)	490
第3章	人骨・動物遺体について	(安部みき子)	503
第4章	鍛冶・鑄造関連遺物の金属学的調査	(九州テクノリサーチ・TACセンター)	506
第5章	紡錘車形石製品の非破壊による蛍光X線分析	(藁科哲男)	555

V 総括

第1章	遺物	558	
1.	土器	(信田)	558
1)	各時期の土器－基準資料の提示－	558	
2)	各土器の特徴	563	
2.	金属製品	(新海)	567
3.	金属製品生産関係遺物	(新海)	567
4.	土製品	(信田)	568
5.	石製品	(信田)	568
6.	木製品	(信田)	569

7. 瓦	……………(信田)	569
第2章 集落	……………(信田)	570
1. 各時期の様相	……………	570
2. 集落の画期	……………	575
1) 集落の画期 <丘陵上の集落とその前後>	……………	575
2) 古代から中世へ	……………	575
3) 初期中世集落と中世前期集落 <丘陵上の集落>	……………	576
4) 中世前期から後期へ、近世以降現代までの展望	……………	578
3. 今後の課題－粟生間谷遺跡の特殊性と一般性－	……………	579
付論 中世の環境変動と地域社会－粟生村を中心に－	……………(西谷地晴美)	583
はじめに	……………	583
一 日本中世史研究における粟生村の位置	……………	583
二 環境変動と地域社会	……………	586
おわりに	……………	592

挿 図 目 次

第1図 粟生間谷遺跡の位置	第20図 川2内ピット列 平面図
第2図 周辺地質図	第21図 丘陵上西部地区 Y = -43,670ライン 断面図
第3図 遺跡周辺地図(1)	第22図 丘陵上西部 全体図
第4図 遺跡周辺地図(2)	第23図 a域 平面図
第5図 調査前の棚田と小字	第24図 建物1・2 平面・断面図
第6図 国際文化公園都市全体図	第25図 建物2・6 溝1・2 土坑2 出土遺物
第7図 発掘調査 各事業のトレンチ配置図	第26図 建物3・4 土坑1・2 平面・断面図
第8図 国土座標系とそれによる地区割	第27図 溝1・2 平面・断面図
第9図 地区割	第28図 建物5・6 土坑3・4 平面・断面図
第10図 川1～4 平面図	第29図 建物7 平面・断面図
第11図 川1 断面図(1)	第30図 建物8 平面・断面図
第12図 川1 断面図(2)	第31図 ピット2・3 平面・断面図
第13図 川1上層(中・下流域) 出土遺物	第32図 ピット2・3 出土遺物
第14図 川1中層(上・中・下流域) 出土遺物	第33図 井戸1 ピット1 焼土坑1 集石1 平面・断面図
第15図 川1下層(下流域) 出土遺物(1)	第34図 ピット1 土坑6 出土遺物
第16図 川1下層(下流域) 出土遺物(2)	第35図 土坑6 平面・断面図
第17図 川1下層(下流域) 出土遺物(3)	第36図 焼土坑2 平面・断面図
第18図 川2 断面図	第37図 焼土坑3 平面・断面図
第19図 川2 出土遺物	第38図 焼土坑2・3 出土遺物

- 第39図 その他の遺構 包含層・近世作土層 出土遺物
- 第40図 b域 平面図
- 第41図 建物9・10 平面・断面図
- 第42図 建物11 平面・断面図
- 第43図 建物12 平面・断面図
- 第44図 建物13 平面・断面図
- 第45図 建物14・15 平面・断面図
- 第46図 建物12～15 出土遺物
- 第47図 建物16 平面・断面図
- 第48図 建物17 平面・断面・立面図
- 第49図 建物17 溝10 出土遺物
- 第50図 南東部建物群 平面図
- 第51図 溝11 井戸2 平面・断面図
- 第52図 溝6・11 井戸2 出土遺物
- 第53図 溝7 土坑7 出土遺物
- 第54図 溝13 土坑8 その他の遺構 出土遺物
- 第55図 土坑8・10 平面・断面図
- 第56図 土坑10 出土遺物(1)
- 第57図 土坑10 出土遺物(2)
- 第58図 その他の遺構 出土遺物
- 第59図 近世作土層等 出土遺物
- 第60図 包含層・近世作土層等 出土遺物
- 第61図 c域 平面図
- 第62図 建物18 平面・断面図
- 第63図 建物19 平面・断面図
- 第64図 建物20 平面・断面図
- 第65図 建物21 平面・断面図
- 第66図 建物22 平面・断面図
- 第67図 建物23 平面・断面図
- 第68図 建物24 平面・断面図
- 第69図 建物25 平面・断面図
- 第70図 建物23・24 溝15・19 その他の遺構 出土遺物
- 第71図 建物25付近 平面図
- 第72図 土坑14 平面・断面図
- 第73図 土坑14 出土遺物
- 第74図 焼土坑4～6 平面・断面図
- 第75図 包含層・近世作土層 出土遺物
- 第76図 d域 平面図
- 第77図 建物26 平面・断面図
- 第78図 建物27 平面・断面図
- 第79図 建物28 平面・断面図
- 第80図 建物29 平面・断面図
- 第81図 建物30 平面・断面図
- 第82図 建物31 平面・断面図
- 第83図 建物29 その他の遺構 出土遺物
- 第84図 土坑15 焼土坑7・8 平面・断面図
- 第85図 土坑15 出土遺物(1)
- 第86図 土坑15 出土遺物(2)
- 第87図 e域 平面図
- 第88図 建物32・33 平面・断面図
- 第89図 建物34～36周辺 平面図
- 第90図 建物34 平面・断面図
- 第91図 建物35 平面・断面図
- 第92図 建物36 平面・断面図
- 第93図 建物33・35 溝28 その他の遺構 出土遺物
- 第94図 ビット16・18・19 平面・断面図
- 第95図 ビット16・18 出土遺物
- 第96図 土坑19 平面・断面図
- 第97図 土坑19 出土遺物(1)
- 第98図 土坑19 出土遺物(2)
- 第100図 土坑20 平面・断面図
- 第101図 土器集積1 平面図
- 第102図 土器集積1 出土遺物
- 第103図 包含層・近世作土層等 出土遺物
- 第104図 f域 平面図
- 第105図 建物37～39 平面図
- 第106図 建物40～42 平面・断面図
- 第107図 建物39～43・47・49 出土遺物
- 第108図 建物43・44 柱列1 平面図
- 第109図 建物45 平面・断面図
- 第110図 建物46～49 柱列2 平面・断面図
- 第111図 建物50・51 平面・断面図
- 第112図 ビット33 平面・立面図
- 第113図 ビット33 出土遺物
- 第114図 土坑22 平面・断面図
- 第115図 土坑22 出土遺物

- 第116図 土坑24 平面・立面図
- 第117図 土坑24 出土遺物
- 第118図 焼土坑10 平面・断面図
- 第119図 ピット28 土坑21 その他の遺構 出土遺物
- 第120図 近世作土層 出土遺物
- 第121図 g域 平面図
- 第122図 建物52～54 平面・断面図
- 第123図 建物55 平面・断面図
- 第124図 建物54・55 ピット38 出土遺物
- 第125図 ピット38 平面・断面・立面図
- 第126図 土坑25 平面・断面図
- 第127図 土坑25・26 その他の遺構 出土遺物
- 第128図 土坑26 平面・断面図
- 第129図 土坑29 平面・断面図
- 第130図 焼土坑11 平面・断面図
- 第131図 丘陵先端部 溝・土坑群 平面図
- 第132図 丘陵先端部 溝・土坑群 断面図
- 第133図 土坑29・30・34 出土遺物
- 第134図 溝34 出土遺物（1） 溝35 出土遺物
- 第135図 溝34 出土遺物（2）
- 第136図 溝34（3） 土坑28 出土遺物
- 第137図 その他の遺構 近世作土層 出土遺物
- 第138図 丘陵上中部 全体図
- 第139図 溝36・37 平面・断面図
- 第140図 溝36・37 出土遺物
- 第141図 h域 平面図
- 第142図 建物56 平面・断面図
- 第143図 建物57 平面・断面図
- 第144図 建物58 平面・断面図
- 第145図 溝38 平面・断面図
- 第146図 溝39 平面・断面図
- 第147図 溝40 平面・断面図
- 第148図 井戸3 平面・断面図
- 第149図 土坑36・37 平面・断面図
- 第150図 建物56 溝38・39 井戸3 土坑36
その他の遺構 出土遺物
- 第151図 包含層・近世作土層 出土遺物
- 第152図 i域 平面図
- 第153図 建物59・60 平面・断面図
- 第154図 その他の遺構 出土遺物
- 第155図 建物61 平面・断面図
- 第156図 建物62・63 平面・断面図
- 第157図 建物63 井戸4 ピット52 その他の遺構 出土遺物
- 第158図 建物64 その他の遺構 出土遺物
- 第159図 建物64・65 平面・断面図
- 第160図 建物66～68 平面・断面図
- 第161図 建物69・70 柱列3 溝46 平面・断面図
- 第162図 建物69 溝46 土器集積2 その他の遺構 出土遺物
- 第163図 建物71～73 柱列4 平面・断面図
- 第164図 建物71 溝47 ピット57 その他の遺構 出土遺物
- 第165図 井戸4 平面・断面図
- 第166図 墓1・2 平面・断面図
- 第167図 墓1 出土遺物
- 第168図 墓2 出土遺物
- 第169図 土坑40・41 平面・断面図
- 第170図 土坑42・44 平面・断面図
- 第171図 ピット52・57 平面・断面図
- 第172図 焼土坑12・13 平面・断面図
- 第173図 包含層・近世作土層等 出土遺物
- 第174図 j域 平面図
- 第175図 建物74・76・77 平面・断面図
- 第176図 建物75・78 平面・断面図
- 第177図 建物79 平面・断面図
- 第178図 建物80 平面・断面図
- 第179図 建物81～83 平面・断面図
- 第180図 建物84 平面・断面図
- 第181図 建物74・81・84・87・90・95・96 出土遺物
- 第182図 建物85・86 平面・断面図
- 第183図 建物87 平面・断面図
- 第184図 建物88 土坑53 平面・断面図
- 第185図 建物89 平面・断面図
- 第186図 建物90・91 平面・断面図
- 第187図 建物92 平面・断面図
- 第188図 建物93・94 平面・断面図
- 第189図 建物95 平面・断面図
- 第190図 建物96・97 平面・断面図

第191図 建物98 平面・断面図
第192図 溝54・55 平面・断面図
第193図 墓3・4 平面・断面図
第194図 墓3 出土遺物 墓4 出土遺物(1)
第195図 墓4 出土遺物(2)
第196図 墓5 平面・断面図
第197図 墓5 出土遺物
第198図 墓6 平面・断面図
第199図 墓6 焼土坑17 平面・断面図
第200図 墓6 焼土坑17 出土遺物
第201図 井戸5 土坑47 平面・断面図
第202図 井戸5 土坑47～50 その他の遺構 出土遺物
第203図 溝52 土坑49 平面・断面図
第204図 土坑52 平面・断面図
第205図 溝54 土坑52・53 その他の遺構 出土遺物
第206図 溝58 土坑55・56 平面・断面図
第207図 土坑54 集石2 その他の遺構 出土遺物
第208図 土坑58 平面・断面図
第209図 焼土坑14 平面・断面図
第210図 土坑57 焼土坑15・16 平面・断面図
第211図 焼土坑15 その他の遺構 出土遺物
第212図 近世作土層等 出土遺物
第213図 包含層 出土遺物
第214図 k域 平面図
第215図 k域 面1 平面図
第216図 X = -128, 138.800ライン 断面図
第217図 溝59 平面・断面・立面図
第218図 建物99・100 平面・断面図
第219図 井戸6 平面・立面図
第220図 井戸6 ビット63・64 その他の遺構 出土遺物
第221図 ビット63 土坑61 焼土坑18・19
集石3 平面・断面図
第222図 近世作土層等 出土遺物
第223図 包含層 出土遺物
第224図 包含層 出土遺物
第225図 丘陵上東部 全体図
第226図 1域 平面図
第227図 溝60・61 土坑63・64 集石4 平面・断面図

第228図 土坑63・64 集石4 出土遺物
第229図 近世作土層 出土遺物
第230図 その他の遺構 出土遺物
第231図 m域 平面図
第232図 墓7 平面・断面図
第233図 墓7 出土遺物
第234図 墓8 平面・断面図
第235図 墓8 出土遺物
第236図 土坑65・66周辺 平面図
第237図 土坑66 出土遺物(1)
第238図 土坑66 出土遺物(2)
第239図 土坑66 出土遺物(3)
第240図 包含層 出土遺物
第241図 n域 平面図
第242図 建物101 平面・断面図
第243図 建物102 平面・断面図
第244図 建物103 平面・断面図
第245図 建物105・109・113 溝64 出土遺物
第246図 建物104・105 平面・断面図
第247図 建物106・107 柱列5 平面・断面図
第248図 建物108 平面・断面図
第249図 建物109 平面図
第250図 建物110・114 平面・断面図
第251図 建物111 平面・断面図
第252図 建物112 平面・断面図
第253図 建物113 平面・断面図
第254図 井戸7 平面・断面図
第255図 井戸7 土坑68 出土遺物
第256図 ビット68・69 土坑68・69 平面・断面図
第257図 土坑71・72・76 平面・断面・立面図
第258図 土坑71・72 出土遺物
第259図 土坑77・78 平面・断面図
第260図 土坑76・78 土坑78直上包含層 出土遺物
第261図 土坑77 出土遺物
第262図 土坑73 焼土坑20 平面・断面図
第263図 その他の遺構 出土遺物
第264図 包含層・近世作土層等 出土遺物
第265図 o域 平面図

- 第266図 建物115 平面・断面図
- 第267図 土坑79 平面・断面図
- 第268図 土坑79 近世作土層 出土遺物
- 第269図 焼土坑31 平面・断面図
- 第270図 焼土坑21～23・28・29 平面・断面図
- 第271図 土坑80 焼土坑24・26・27 平面・断面図
- 第272図 土坑81 焼土坑25・32・33・35 平面・断面図
- 第273図 焼土坑30・37～39・42 平面・断面図
- 第274図 土坑82 焼土坑40・41・44 平面・断面図
- 第275図 焼土坑43・45 平面・断面図
- 第276図 p域 平面図
- 第277図 p域 近世遺構 分布図
- 第278図 Y = -43,409ライン 断面図
- 第279図 溝65・66 出土遺物
- 第280図 溝67 出土遺物
- 第281図 土坑83 焼土坑48 平面・断面図
- 第282図 土坑83 焼土坑46～50 出土遺物
- 第283図 焼土坑46・47・50 平面・断面・立面図
- 第284図 焼土坑49 平面・断面図
- 第285図 土坑89 平面・断面図
- 第286図 土坑89 出土遺物
- 第287図 土坑88 出土遺物
- 第288図 土坑87・90・91 平面・断面図
- 第289図 焼土坑52・55 平面・断面図
- 第290図 焼土坑55 出土遺物
- 第291図 焼土坑53・54 平面・断面・立面図
- 第292図 集石5 平面図
- 第293図 集石5 出土遺物
- 第294図 包含層等 出土遺物
- 第295図 q域 平面図
- 第296図 建物116 平面・断面図
- 第297図 建物117 出土遺物
- 第298図 建物117 平面・断面図
- 第299図 柱列6～8 平面・断面図
- 第300図 井戸8 平面・断面図
- 第301図 井戸8 出土遺物(1)(最上層・上層)
- 第302図 井戸8 出土遺物(2)(上層)
- 第303図 井戸8 出土遺物(3)(上層)
- 第304図 井戸8 出土遺物(4)(上層)
- 第305図 井戸8 出土遺物(5)(上層)
- 第306図 井戸8 出土遺物(6)(上層)
- 第307図 井戸8 出土遺物(7)(上層)
- 第308図 井戸8 出土遺物(8)(4層・5層)
- 第309図 墓9 土坑136 平面・断面図
- 第310図 土坑136 出土遺物
- 第311図 墓9 出土遺物
- 第312図 墓10 土坑142 平面・断面図
- 第313図 墓10 土坑142 出土遺物
- 第314図 ビット72 土坑96・100 平面・断面図
- 第315図 ビット72・74・78 土坑96・99 出土遺物
- 第316図 土坑98・99 平面・断面図
- 第317図 土坑98 出土遺物(1)
- 第318図 土坑98 出土遺物(2)
- 第319図 ビット75 出土遺物
- 第320図 土坑101・111・121 平面・断面図
- 第321図 土坑112・115と同様な埋土をもつ遺構 平面分布図
- 第322図 土坑112・115 平面・断面図
- 第323図 ビット83・84 出土遺物
- 第324図 ビット80・82・93 土坑103・108・117 平面・断面図
- 第325図 ビット80・82・90・93 土坑103・108・117
その他の遺構 出土遺物
- 第326図 土坑107・109・133・134・140 平面・断面図
- 第327図 土坑120・143 平面・断面図
- 第328図 土坑126・133・134・143 出土遺物
- 第329図 土坑119・120 出土遺物
- 第330図 土坑119 平面図
- 第331図 土坑135 平面・断面図
- 第332図 土坑128・135 出土遺物
- 第333図 焼土坑56～58 平面図
- 第334図 焼土坑56 断面・立面図
- 第335図 焼土坑57 平面・断面図
- 第336図 焼土坑56・57 出土遺物
- 第337図 土坑116 出土遺物
- 第338図 その他の遺構 出土遺物
- 第339図 その他の遺構 出土遺物
- 第340図 その他の遺構 出土遺物

- 第341図 段丘崖肩部集積遺物（1）
- 第342図 段丘崖肩部集積遺物（2）
- 第343図 段丘崖肩部集積遺物（3）
- 第344図 段丘崖肩部集積遺物（4）
- 第345図 包含層・近世作土層等 出土遺物
- 第346図 包含層 出土遺物
- 第347図 包含層 出土遺物
- 第348図 包含層 出土遺物
- 第349図 川3（川合裏川旧流路） 出土遺物
- 第350図 川合裏川段丘面 全体図
- 第351図 r域 平面図
- 第352図 建物118～120 平面・断面図
- 第353図 建物121 平面・断面図
- 第354図 墓11 土坑152 平面・断面・立面図
- 第355図 墓11 土坑152 焼土坑63 その他の遺構 出土遺物
- 第356図 土坑147・158・174・177 平面・断面図
- 第357図 土坑148 焼土坑60～62・66 平面・断面図
- 第358図 土坑157 焼土坑67・68・70 平面・断面図
- 第359図 焼土坑74～77 平面・断面図
- 第360図 焼土坑69・71～73 平面・断面図
- 第361図 土坑181 焼土坑78 平面・断面図
- 第362図 包含層・近世作土層 出土遺物
- 第363図 s域 平面図
- 第364図 s域 近世面 平面図
- 第365図 土坑182・183 平面・断面図
- 第366図 土坑182 その他の遺構 出土遺物
- 第367図 建物122 平面・断面図
- 第368図 井戸9・10 平面・立面図
- 第369図 井戸9・10 出土遺物
- 第370図 土坑184 平面・断面図
- 第371図 土坑184・187・190・193 出土遺物
- 第372図 土坑187 平面図
- 第373図 土坑191 平面・断面・立面図
- 第374図 集石6上層 平面図（1）
- 第375図 集石6上層 平面・断面・立面図（2）
- 第376図 集石6下層 平面図（3）
- 第377図 集石6下層 平面・断面図（4）
- 第378図 集石6 出土遺物（1）上層
- 第379図 集石6 出土遺物（2）上層
- 第380図 集石6 出土遺物（3）上～下層
- 第381図 集石6 出土遺物（4）下層
- 第382図 その他の遺構 中世包含層 出土遺物
- 第383図 近世作土層等 出土遺物
- 第384図 中世包含層・近世作土層 出土遺物
- 第385図 中世包含層 出土遺物
- 第386図 t域 平面図
- 第387図 墓12 平面・断面図
- 第388図 墓12 出土遺物
- 第389図 包含層・近世～現代作土層等 出土遺物
- 第390図 扇状地 全体図
- 第391図 u域 平面図
- 第392図 建物123・124 平面・断面図
- 第393図 建物125 平面・断面図
- 第394図 焼土坑79・80 平面・断面図
- 第395図 川4 近世～現代作土層 出土遺物
- 第396図 勝尾寺川段丘面 全体図
- 第397図 v域 平面図
- 第398図 $X = -128,374.5$ ライン 断面図
- 第399図 井戸11 ビット108 土坑197・198 平面・断面図
- 第400図 ビット108 出土遺物（1）
- 第401図 ビット108 出土遺物（2）
- 第402図 井戸11 土坑196 その他の遺構 出土遺物
- 第403図 作土層 出土遺物
- 第404図 包含層 出土遺物
- 第405図 w域 平面図
- 第406図 $Y = -43,600$ ライン・第2～3層内集石 断面図
- 第407図 ビット110 平面・立面図
- 第408図 ビット110 第2層・第3～4層 出土遺物
- 第409図 x域 平面図
- 第410図 $Y = -43,570$ ライン 断面図
- 第411図 礫群 平面図
- 第412図 第4層に伴う礫群（部分） 平面・断面図
- 第413図 第5層に伴う礫群（部分） 平面・断面図
- 第414図 建物126 平面・断面図
- 第415図 建物127 平面・断面図
- 第416図 建物128 平面・断面図

第417図 井戸12・14 平面・断面・立面図	第442図 建物144・145 平面・断面図
第418図 井戸13 平面・断面図	第443図 建物146・147 平面・断面図
第419図 集石7 平面・断面図	第444図 建物148 平面・断面図
第420図 建物126～128 井戸12・14 集石7 土器集積4 出土遺物	第445図 建物133・134・137・138・143・146・147 出土遺物
第421図 溝69 集石8 平面・断面図	第446図 土坑206 平面・断面図
第422図 溝69 集石8 土器集積5・6 出土遺物	第447図 土坑203・204 焼土坑87・88 平面・断面図
第423図 建物130・131 平面・断面図	第448図 ビット129 土坑205 焼土坑89・90 平面・断面図
第424図 建物132 平面・断面図	第449図 焼土坑90 その他の遺構 出土遺物
第425図 建物130 その他の遺構 出土遺物	第450図 包含層・近世作土層 出土遺物
第426図 焼土坑81～86 平面・断面図	第451図 試料採取地点図 井戸2 東壁土層断面柱状図
第427図 ビット112～117・125 平面・断面図	第452図 川1 断面1の花粉ダイアグラム
第428図 建物129 平面・断面図	第453図 川1 断面2の花粉ダイアグラム
第429図 近現代盛土層 出土遺物	第454図 井戸4の花粉ダイアグラム
第430図 近世作土層 出土遺物	第455図 溝11の花粉ダイアグラム
第431図 第4層・第5層 出土遺物	第456図 井戸2 東壁の花粉ダイアグラム
第432図 第4層 出土遺物	第457図 井戸2 底部の花粉ダイアグラム
第433図 第5～6層 出土遺物	第458図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成(1)
第434図 y域 平面図	第459図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成(2)
第435図 y域東端部 断面図	第460図 試料中に残存する脂肪のステロール組成
第436図 建物133～137 平面・断面図	第461図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図
第437図 建物138 平面・断面図	第462図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による 種特異性相関
第438図 建物139 平面・断面図	第463図 紡錘車形石製品の蛍光X線スペクトル
第439図 建物140・141 平面・断面図	第464図 X = -128, 250ライン 断面図
第440図 建物142 平面・断面図	第465図 遺構分布変遷図(1)
第441図 建物143 平面・断面図	第466図 遺構分布変遷図(2)

表 目 次

第1表 粟生間谷遺跡の発掘調査	第7表 供試材の履歴と調査項目(1)
第2表 土壌試料の残存脂肪抽出量	第8表 供試材の履歴と調査項目(2)
第3表 試料中に分布するコレステロールと シトステロールの割合	第9表 供試材の組成
第4表 人骨の一覧表	第10表 出土遺物の調査結果のまとめ
第5表 動物遺体一覧表	第11表 紡錘車形石製品の元素比および比重の分析結果
第6表 犬の下顎骨の計測値	第12表 埋葬関係遺構一覧表

写真目次

写真1	椀形鍛冶滓・鍛冶滓の顕微鏡組織	写真16	鉄塊系遺物の顕微鏡組織
写真2	鉄塊系遺物・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真17	鉄塊系遺物の顕微鏡組織
写真3	含鉄椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真18	鉄塊系遺物・炉壁（緑青付着）の顕微鏡組織
写真4	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真19	鉄塊系遺物のマクロ組織
写真5	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真20	炉壁片（鉄塊付着）のマクロ組織
写真6	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真21	鉄塊系遺物のマクロ組織
写真7	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真22	鉄塊系遺物・炉壁片（鉄塊貫入）のマクロ組織
写真8	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	写真23	鉄塊系遺物・三日月状鉄製品のマクロ組織
写真9	鉄塊系遺物・炉壁（鉄塊付着）の顕微鏡組織	写真24	ガラス質滓・鉄塊系遺物（鑄鉄粒）のマクロ組織
写真10	鉄塊系遺物の顕微鏡組織	写真25	鉄滓片・鉄塊系遺物（鑄鉄粒）のマクロ組織
写真11	鉄塊系遺物の顕微鏡組織	写真26	鉄塊系遺物（鑄鉄粒）のマクロ組織
写真12	炉壁（鉄塊貫入）・鉄塊系遺物の顕微鏡組織	写真27	鉄塊系遺物（鑄鉄粒）・炉壁片（緑青付着）のマクロ組織
写真13	三日月状鉄製品の顕微鏡組織	写真28	三日月状鉄製品（AMS-26）の特性X線像と定量分析値
写真14	ガラス質滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織		
写真15	鉄滓片・鉄塊系遺物の顕微鏡組織		

写真図版目次

図版1	粟生間谷遺跡周辺航空写真	図版18	丘陵上西部（3） a域-3
図版2	粟生間谷遺跡全景	図版19	丘陵上西部（4） a域-4
図版3	粟生間谷遺跡全景	図版20	丘陵上西部（5） a域-5
図版4	川1	図版21	丘陵上西部（6） a域-6
図版5	川2（1）	図版22	丘陵上西部（7） a域-7
図版6	川2（2）	図版23	丘陵上西部（8） a域-8
図版7	丘陵上西部全景（1） a域	図版24	丘陵上西部（9） b域-1
図版8	丘陵上西部全景（2） b域	図版25	丘陵上西部（10） b域-2
図版9	丘陵上西部全景（3） c域	図版26	丘陵上西部（11） b域-3
図版10	丘陵上西部全景（4） d域-1	図版27	丘陵上西部（12） b域-4
図版11	丘陵上西部全景（5） d域-2	図版28	丘陵上西部（13） c域-1
図版12	丘陵上西部全景（6） e域	図版29	丘陵上西部（14） c域-2
図版13	丘陵上西部全景（7） f域-1	図版30	丘陵上西部（15） c域-3
図版14	丘陵上西部全景（8） f域-2 g域-1	図版31	丘陵上西部（16） c域-4
図版15	丘陵上西部全景（9） g域-2	図版32	丘陵上西部（17） d域-1
図版16	丘陵上西部（1） a域-1	図版33	丘陵上西部（18） d域-2
図版17	丘陵上西部（2） a域-2	図版34	丘陵上西部（19） d域-3

- 图版35 丘陵上西部 (20) e 域 - 1
- 图版36 丘陵上西部 (21) e 域 - 2
- 图版37 丘陵上西部 (22) e 域 - 3
- 图版38 丘陵上西部 (23) e 域 - 4
- 图版39 丘陵上西部 (24) e 域 - 5
- 图版40 丘陵上西部 (25) e 域 - 6
- 图版41 丘陵上西部 (26) e 域 - 7
- 图版42 丘陵上西部 (27) e 域 - 8
- 图版43 丘陵上西部 (28) f 域 - 1
- 图版44 丘陵上西部 (29) f 域 - 2
- 图版45 丘陵上西部 (30) f 域 - 3
- 图版46 丘陵上西部 (31) f 域 - 4
- 图版47 丘陵上西部 (32) f 域 - 5
- 图版48 丘陵上西部 (33) f 域 - 6
- 图版49 丘陵上西部 (34) f 域 - 7
- 图版50 丘陵上西部 (35) g 域 - 1
- 图版51 丘陵上西部 (36) g 域 - 2
- 图版52 丘陵上西部 (37) g 域 - 3
- 图版53 丘陵上西部 (38) g 域 - 4
- 图版54 丘陵上中部全景 (1) h 域 i 域 - 1
- 图版55 丘陵上中部全景 (2) i 域 - 2
- 图版56 丘陵上中部全景 (3) i 域 - 3
- 图版57 丘陵上中部全景 (4) j 域 - 1
- 图版58 丘陵上中部全景 (5) j 域 - 2
- 图版59 丘陵上中部全景 (6) j 域 - 3
- 图版60 丘陵上中部全景 (7) k 域 - 1
- 图版61 丘陵上中部全景 (8) k 域 - 2
- 丘陵上中部 (1) 溝36 - 1
- 图版62 丘陵上中部 (2) 溝36 - 2
- 图版63 丘陵上中部 (3) 溝36 - 3 溝37
- 图版64 丘陵上中部 (4) h 域 - 1
- 图版65 丘陵上中部 (5) h 域 - 2
- 图版66 丘陵上中部 (6) h 域 - 3
- 图版67 丘陵上中部 (7) i 域 - 1
- 图版68 丘陵上中部 (8) i 域 - 2
- 图版69 丘陵上中部 (9) i 域 - 3
- 图版70 丘陵上中部 (10) i 域 - 4
- 图版71 丘陵上中部 (11) i 域 - 5
- 图版72 丘陵上中部 (12) i 域 - 6
- 图版73 丘陵上中部 (13) i 域 - 7
- 图版74 丘陵上中部 (14) i 域 - 8
- 图版75 丘陵上中部 (15) i 域 - 9
- 图版76 丘陵上中部 (16) i 域 - 10
- 图版77 丘陵上中部 (17) i 域 - 11
- 图版78 丘陵上中部 (18) j 域 - 1
- 图版79 丘陵上中部 (19) j 域 - 2
- 图版80 丘陵上中部 (20) j 域 - 3
- 图版81 丘陵上中部 (21) j 域 - 4
- 图版82 丘陵上中部 (22) j 域 - 5
- 图版83 丘陵上中部 (23) j 域 - 6
- 图版84 丘陵上中部 (24) j 域 - 7
- 图版85 丘陵上中部 (25) j 域 - 8
- 图版86 丘陵上中部 (26) j 域 - 9
- 图版87 丘陵上中部 (27) j 域 - 10
- 图版88 丘陵上中部 (28) j 域 - 11
- 图版89 丘陵上中部 (29) j 域 - 12
- 图版90 丘陵上中部 (30) j 域 - 13
- 图版91 丘陵上中部 (31) k 域 - 1
- 图版92 丘陵上中部 (32) k 域 - 2
- 图版93 丘陵上中部 (33) k 域 - 3
- 图版94 丘陵上東部全景 (1) l 域 m 域 - 1
- 图版95 丘陵上東部全景 (2) m 域 - 2 n 域 - 1
- 图版96 丘陵上東部全景 (3) n 域 - 2
- 图版97 丘陵上東部全景 (4) n 域 - 3
- 图版98 丘陵上東部全景 (5) n 域 - 4 o 域 - 1
- 图版99 丘陵上東部全景 (6) o 域 - 2 p 域 - 1
- 图版100 丘陵上東部全景 (7) p 域 - 2 q 域 - 1
- 图版101 丘陵上東部全景 (8) q 域 - 2
- 图版102 丘陵上東部全景 (9) q 域 - 3
- 丘陵上東部 (1) l 域 - 1
- 图版103 丘陵上東部 (2) l 域 - 2
- 图版104 丘陵上東部 (3) m 域 - 1
- 图版105 丘陵上東部 (4) m 域 - 2
- 图版106 丘陵上東部 (5) n 域 - 1
- 图版107 丘陵上東部 (6) n 域 - 2
- 图版108 丘陵上東部 (7) n 域 - 3

- 図版109 丘陵上東部 (8) n 域 - 4
- 図版110 丘陵上東部 (9) n 域 - 5
- 図版111 丘陵上東部 (10) n 域 - 6
- 図版112 丘陵上東部 (11) n 域 - 7
- 図版113 丘陵上東部 (12) o 域 - 1
- 図版114 丘陵上東部 (13) o 域 - 2
- 図版115 丘陵上東部 (14) p 域 - 1
- 図版116 丘陵上東部 (15) p 域 - 2
- 図版117 丘陵上東部 (16) p 域 - 3
- 図版118 丘陵上東部 (17) p 域 - 4
- 図版119 丘陵上東部 (18) q 域 - 1
- 図版120 丘陵上東部 (19) q 域 - 2
- 図版121 丘陵上東部 (20) q 域 - 3
- 図版122 丘陵上東部 (21) q 域 - 4
- 図版123 丘陵上東部 (22) q 域 - 5
- 図版124 丘陵上東部 (23) q 域 - 6
- 図版125 丘陵上東部 (24) q 域 - 7
- 図版126 川合裏川段丘面西岸全景 (1) r 域
- 図版127 川合裏川段丘面西岸全景 (2) s 域 - 1
- 図版128 川合裏川段丘面西岸全景 (3) s 域 - 2
- 図版129 川合裏川段丘面西岸 (1) r 域 - 1
- 図版130 川合裏川段丘面西岸 (2) r 域 - 2
- 図版131 川合裏川段丘面西岸 (3) r 域 - 3
- 図版132 川合裏川段丘面西岸 (4) r 域 - 4 s 域 - 1
- 図版133 川合裏川段丘面西岸 (5) s 域 - 2
- 図版134 川合裏川段丘面西岸 (6) s 域 - 3
- 図版135 川合裏川段丘面西岸 (7) s 域 - 4
- 図版136 川合裏川段丘面東岸全景 t 域
- 図版137 川合裏川段丘面東岸 t 域
- 図版138 扇状地全景 (1) u 域 - 1
- 図版139 扇状地全景 (2) u 域 - 2
- 図版140 扇状地全景 (3) u 域 - 3
- 図版141 扇状地全景 (4) u 域 - 4
- 図版142 扇状地 (1) u 域 - 1
- 図版143 扇状地 (2) u 域 - 2
- 図版144 扇状地 (3) u 域 - 3
- 図版145 勝尾寺川段丘面全景 (1) v 域
- 図版146 勝尾寺川段丘面全景 (2) w 域
- 図版147 勝尾寺川段丘面全景 (3) x 域 y 域 - 1
- 図版148 勝尾寺川段丘面全景 (4) y 域 - 2
- 図版149 勝尾寺川段丘面 (1) v 域
- 図版150 勝尾寺川段丘面 (2) w 域
- 図版151 勝尾寺川段丘面 (3) x 域 - 1
- 図版152 勝尾寺川段丘面 (4) x 域 - 2
- 図版153 勝尾寺川段丘面 (5) x 域 - 3
- 図版154 勝尾寺川段丘面 (6) x 域 - 4
- 図版155 勝尾寺川段丘面 (7) x 域 - 5
- 図版156 勝尾寺川段丘面 (8) x 域 - 6
- 図版157 勝尾寺川段丘面 (9) y 域 - 1
- 図版158 勝尾寺川段丘面 (10) y 域 - 2
- 図版159 勝尾寺川段丘面 (11) y 域 - 3
- 図版160 勝尾寺川段丘面 (12) y 域 - 4
- 図版161 勝尾寺川段丘面 (13) y 域 - 5
- 図版162 勝尾寺川段丘面 (14) y 域 - 6
- 図版163 川1・2 出土遺物 (1)
- 図版164 川1・2 出土遺物 (2)
- 図版165 川1・2 出土遺物 (3)
- 図版166 川1・2 出土遺物 (4)
- 図版167 丘陵上西部出土遺物 (1) a 域 - 1
- 図版168 丘陵上西部出土遺物 (2) a 域 - 2
- 図版169 丘陵上西部出土遺物 (3) a 域 - 3
- 図版170 丘陵上西部出土遺物 (4) a 域 - 4
- 図版171 丘陵上西部出土遺物 (5) a 域 - 5
- 図版172 丘陵上西部出土遺物 (6) a 域 - 6
- 図版173 丘陵上西部出土遺物 (7) a 域 - 7 b 域 - 1
- 図版174 丘陵上西部出土遺物 (8) b 域 - 2
- 図版175 丘陵上西部出土遺物 (9) b 域 - 3
- 図版176 丘陵上西部出土遺物 (10) b 域 - 4
- 図版177 丘陵上西部出土遺物 (11) b 域 - 5
- 図版178 丘陵上西部出土遺物 (12) b 域 - 6
- 図版179 丘陵上西部出土遺物 (13) b 域 - 7
- 図版180 丘陵上西部出土遺物 (14) b 域 - 8
- 図版181 丘陵上西部出土遺物 (15) b 域 - 9 c 域 - 1
- 図版182 丘陵上西部出土遺物 (16) c 域 - 2
- 図版183 丘陵上西部出土遺物 (17) d 域 - 1
- 図版184 丘陵上西部出土遺物 (18) d 域 - 2

- 図版185 丘陵上西部出土遺物 (19) d 域 - 3
 図版186 丘陵上西部出土遺物 (20) d 域 - 4 e 域 - 1
 図版187 丘陵上西部出土遺物 (21) e 域 - 2
 図版188 丘陵上西部出土遺物 (22) e 域 - 3
 図版189 丘陵上西部出土遺物 (23) e 域 - 4
 図版190 丘陵上西部出土遺物 (24) e 域 - 5 f 域 - 1
 図版191 丘陵上西部出土遺物 (25) f 域 - 2
 図版192 丘陵上西部出土遺物 (26) f 域 - 3
 図版193 丘陵上西部出土遺物 (27) f 域 - 4
 図版194 丘陵上西部出土遺物 (28) f 域 - 5 g 域 - 1
 図版195 丘陵上西部出土遺物 (29) g 域 - 2
 図版196 丘陵上西部出土遺物 (30) g 域 - 3
 図版197 丘陵上中部出土遺物 (1) h 域 i 域 - 1
 図版198 丘陵上中部出土遺物 (2) i 域 - 2
 図版199 丘陵上中部出土遺物 (3) i 域 - 3
 図版200 丘陵上中部出土遺物 (4) i 域 - 4
 図版201 丘陵上中部出土遺物 (5) i 域 - 5 j 域 - 1
 図版202 丘陵上中部出土遺物 (6) j 域 - 2
 図版203 丘陵上中部出土遺物 (7) j 域 - 3 k 域
 図版204 丘陵上東部出土遺物 (1) l 域 m 域 - 1
 図版205 丘陵上東部出土遺物 (2) m 域 - 2
 図版206 丘陵上東部出土遺物 (3) m 域 - 3
 図版207 丘陵上東部出土遺物 (4) m 域 - 4 n 域 - 1
 図版208 丘陵上東部出土遺物 (5) n 域 - 2
 図版209 丘陵上東部出土遺物 (6) p 域 - 1
 図版210 丘陵上東部出土遺物 (7) p 域 - 2
 図版211 丘陵上東部出土遺物 (8) p 域 - 3 q 域 - 1
 図版212 丘陵上東部出土遺物 (9) q 域 - 2
 図版213 丘陵上東部出土遺物 (10) q 域 - 3
 図版214 丘陵上東部出土遺物 (11) q 域 - 4
 図版215 丘陵上東部出土遺物 (12) q 域 - 5
 図版216 丘陵上東部出土遺物 (13) q 域 - 6
 図版217 丘陵上東部出土遺物 (14) q 域 - 7
 図版218 丘陵上東部出土遺物 (15) q 域 - 8
 図版219 丘陵上東部出土遺物 (16) q 域 - 9
 図版220 丘陵上東部出土遺物 (17) q 域 - 10
 図版221 丘陵上東部出土遺物 (18) q 域 - 11
 図版222 丘陵上東部出土遺物 (19) q 域 - 12
 図版223 丘陵上東部出土遺物 (20) q 域 - 13
 図版224 丘陵上東部出土遺物 (21) q 域 - 14
 図版225 丘陵上東部出土遺物 (22) q 域 - 15
 図版226 川合裏川段丘面西岸出土遺物 (1) r 域 s 域 - 1
 図版227 川合裏川段丘面西岸出土遺物 (2) s 域 - 2
 図版228 川合裏川段丘面西岸出土遺物 (3) s 域 - 3
 図版229 川合裏川段丘面西岸出土遺物 (4) s 域 - 4
 図版230 川合裏川段丘面西岸出土遺物 (5)
 s 域 - 5 川合裏側段丘面東岸出土遺物 t 域
 扇状地出土遺物 u 域
 図版231 勝尾寺川段丘面出土遺物 (1) v 域 w 域
 図版232 勝尾寺川段丘面出土遺物 (2) x 域 - 1
 図版233 勝尾寺川段丘面出土遺物 (3) x 域 - 2
 図版234 勝尾寺川段丘面出土遺物 (4) x 域 - 3
 図版235 勝尾寺川段丘面出土遺物 (5) x 域 - 4 y 域 - 1
 図版236 勝尾寺川段丘面出土遺物 (6) y 域 - 2
 図版237 金属製品 (1)
 図版238 金属製品 (2)
 図版239 金属製品 (3)
 図版240 金属製品 (4)
 図版241 金属製品 (5)
 図版242 金属製品 (6)
 図版243 金属製品生産関連遺物 (1)
 図版244 金属製品生産関連遺物 (2)
 図版245 金属製品生産関連遺物 (3)
 図版246 金属製品 (7) 金属製品生産関連遺物 (4)
 図版247 金属製品 (8) 金属製品生産関連遺物 (5)
 図版248 石製品 (1)
 図版249 石製品 (2)
 図版250 石製品 (3)
 図版251 石製品 (4)

付 表 目 次

付表 1	掲載遺構一覧表 (1)	付表33	掲載遺物一覧表 (1)	付表65	掲載遺物一覧表 (33)
付表 2	掲載遺構一覧表 (2)	付表34	掲載遺物一覧表 (2)	付表66	掲載遺物一覧表 (34)
付表 3	掲載遺構一覧表 (3)	付表35	掲載遺物一覧表 (3)	付表67	掲載遺物一覧表 (35)
付表 4	掲載遺構一覧表 (4)	付表36	掲載遺物一覧表 (4)	付表68	掲載遺物一覧表 (36)
付表 5	掲載遺構一覧表 (5)	付表37	掲載遺物一覧表 (5)	付表69	掲載遺物一覧表 (37)
付表 6	掲載遺構一覧表 (6)	付表38	掲載遺物一覧表 (6)	付表70	掲載遺物一覧表 (38)
付表 7	掲載遺構一覧表 (7)	付表39	掲載遺物一覧表 (7)	付表71	掲載遺物一覧表 (39)
付表 8	掲載遺構一覧表 (8)	付表40	掲載遺物一覧表 (8)	付表72	掲載遺物一覧表 (40)
付表 9	掲載遺構一覧表 (9)	付表41	掲載遺物一覧表 (9)	付表73	掲載遺物一覧表 (41)
付表10	掲載遺構一覧表 (10)	付表42	掲載遺物一覧表 (10)	付表74	掲載遺物一覧表 (42)
付表11	掲載遺構一覧表 (11)	付表43	掲載遺物一覧表 (11)	付表75	掲載遺物一覧表 (43)
付表12	掲載遺構一覧表 (12)	付表44	掲載遺物一覧表 (12)	付表76	掲載遺物一覧表 (44)
付表13	掲載遺構一覧表 (13)	付表45	掲載遺物一覧表 (13)	付表77	掲載遺物一覧表 (45)
付表14	掲載遺構一覧表 (14)	付表46	掲載遺物一覧表 (14)	付表78	掲載遺物一覧表 (46)
付表15	掲載遺構一覧表 (15)	付表47	掲載遺物一覧表 (15)	付表79	掲載遺物一覧表 (47)
付表16	掲載遺構一覧表 (16)	付表48	掲載遺物一覧表 (16)	付表80	掲載遺物一覧表 (48)
付表17	掲載遺構一覧表 (17)	付表49	掲載遺物一覧表 (17)	付表81	掲載遺物一覧表 (49)
付表18	建物一覧表 (1)	付表50	掲載遺物一覧表 (18)	付表82	掲載遺物一覧表 (50)
付表19	建物一覧表 (2)	付表51	掲載遺物一覧表 (19)	付表83	掲載遺物一覧表 (51)
付表20	建物一覧表 (3)	付表52	掲載遺物一覧表 (20)	付表84	掲載遺物一覧表 (52)
付表21	建物一覧表 (4)	付表53	掲載遺物一覧表 (21)	付表85	掲載遺物一覧表 (53)
付表22	建物一覧表 (5)	付表54	掲載遺物一覧表 (22)	付表86	掲載遺物一覧表 (54)
付表23	建物一覧表 (6)	付表55	掲載遺物一覧表 (23)	付表87	掲載遺物一覧表 (55)
付表24	建物一覧表 (7)	付表56	掲載遺物一覧表 (24)	付表88	掲載遺物一覧表 (56)
付表25	建物一覧表 (8)	付表57	掲載遺物一覧表 (25)	付表89	掲載遺物一覧表 (57)
付表26	建物一覧表 (9)	付表58	掲載遺物一覧表 (26)	付表90	掲載遺物一覧表 (58)
付表27	建物一覧表 (10)	付表59	掲載遺物一覧表 (27)	付表91	掲載遺物一覧表 (59)
付表28	建物一覧表 (11)	付表60	掲載遺物一覧表 (28)	付表92	掲載遺物一覧表 (60)
付表29	建物一覧表 (12)	付表61	掲載遺物一覧表 (29)	付表93	掲載遺物一覧表 (61)
付表30	建物一覧表 (13)	付表62	掲載遺物一覧表 (30)	付表94	掲載遺物一覧表 (62)
付表31	建物一覧表 (14)	付表63	掲載遺物一覧表 (31)		
付表32	建物一覧表 (15)	付表64	掲載遺物一覧表 (32)		

付 図 目 次

付図1	平面図 (1)	付図12	平面図 (12)
付図2	平面図 (2)	付図13	平面図 (13)
付図3	平面図 (3)	付図14	平面図 (14)
付図4	平面図 (4)	付図15	丘陵上中部 k 域 (東部 l 域) 面 1 平面図
付図5	平面図 (5)	付図16	丘陵上東部 o 域 近世遺構分布図 川合裏川段丘面 s 域 近世面平面図
付図6	平面図 (6)	付図17	勝尾寺川段丘面 w 域 平面図
付図7	平面図 (7)	付図18	勝尾寺川段丘面 平面図
付図8	平面図 (8)	付図19	全城遺構図
付図9	平面図 (9)	付図20	全城平面図
付図10	平面図 (10)	付図21	地区割り図
付図11	平面図 (11)		

I 位置と環境

粟生間谷（あおまだに）遺跡は、大阪府箕面市粟生間谷東3丁目に位置する。



第1図 粟生間谷遺跡の位置（1：300,000）

自然環境

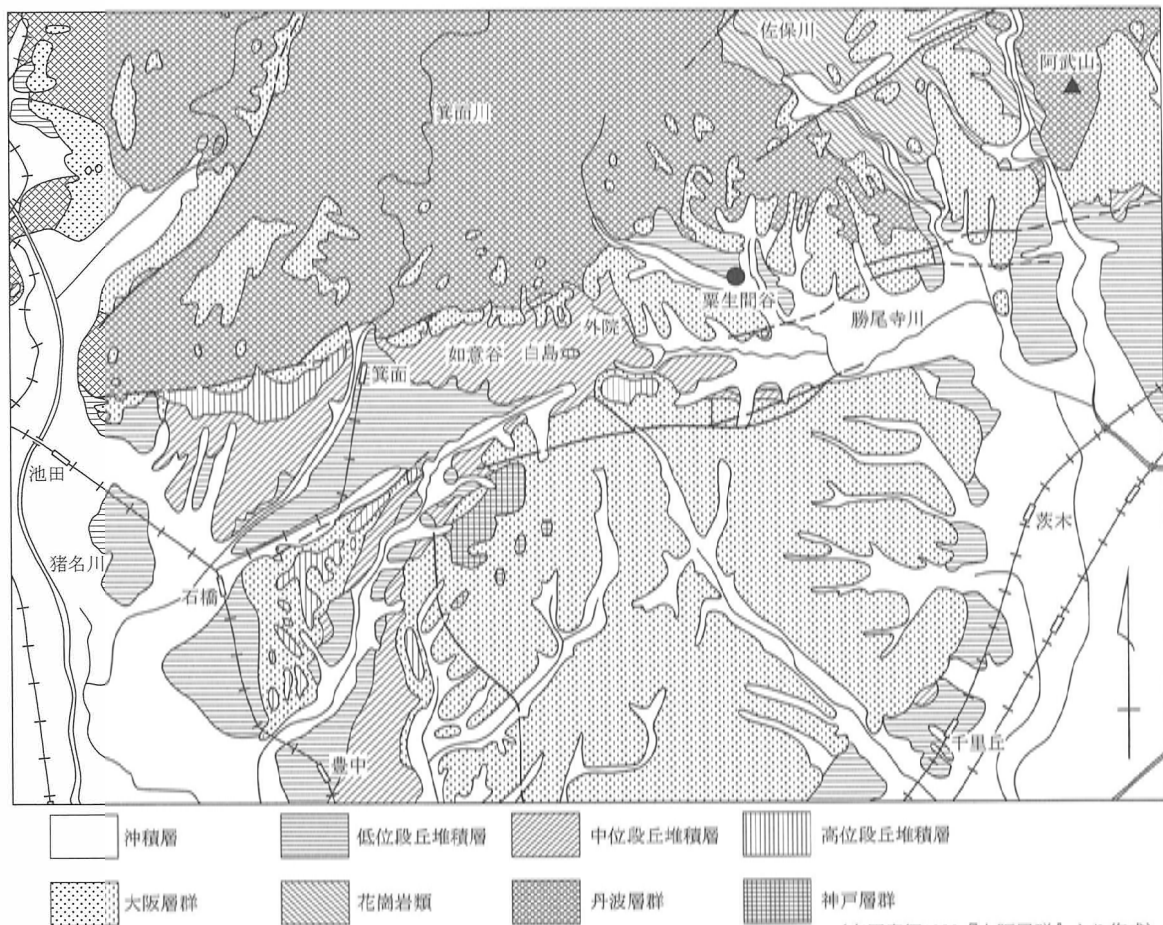
粟生間谷遺跡は、北摂山地から派生する丘陵の先端部に立地する。遺跡の南側には勝尾寺川が北西から南東に向けて流れ、東側は勝尾寺川の支流である川合裏川が北から南に向けて流れている。

川合裏川は、調査地の南東で勝尾寺川に合流する。勝尾寺川は、蛇行しながら東に流れ、茨木川に注いだのち、南下してさらに安威川と合流する。これらの河川は、沖積平野である三島平野を形成している。勝尾寺川が流れ出る北摂山地は、東は京都盆地の西端、西は六甲山地、南は大阪平野に接し、北は亀岡盆地の南東部にいたる、東西に長い、広大な範囲を占める山地である。

北摂山地は、地質学的にみると、丹波帯とよばれる古生代末から中生代前半に堆積した砂岩、泥岩、チャートなどから構成される部分と、中生代白亜紀頃の花崗岩類（茨木複合花崗岩帯）で構成される部分からなる。北摂山地の南縁には、八手状に多数の丘陵が派生している。これらの丘陵の先端部付近には低位・中位段丘堆積層が、丘陵基部側には大阪層群がみられる。

粟生間谷遺跡は、勝尾寺川と川合裏川に挟まれた丘陵先端の低位段丘、勝尾寺川と川合裏川が形成した河岸段丘面、調査地北東の谷筋の開口部に展開する扇状地に立地している。丘陵上は緩斜面で、東端と南端が傾斜の急な段丘崖であり、河岸段丘面にいたる。

勝尾寺川を挟んで南側にも、丘陵が続いており、その低位段丘には庄田遺跡、宿久庄西遺跡が立地している。この丘陵と粟生間谷遺跡の立地する丘陵は、勝尾寺川の開析によって分断され、東西に長い谷を形成している。



第2図 周辺地質図 (縮尺 1 : 80,000)

遺跡周辺は、近世以降、大半が棚田として利用されており、低位段丘地帯には、開析谷をせきとめた、ため池が多くみられる。微地形は改変を受けており、さらに近年の大規模な宅地開発などによって大幅に地形改変が進んでいる箇所もみられる。勝尾寺川沿いの河岸段丘面や低位段丘上には、奥、中村、山ノ口、川合などの集落がある。

歴史環境

粟生間谷遺跡は、摂津国、なかでも北摂と呼ばれる地域にある。北摂とは、旧豊能郡、現在の豊中市、池田市、箕面市、豊能郡を含む、大阪府北東部地域の呼称である。

遺跡周辺は、島下郡に属す。島下郡は、東に隣接する島上郡とともに、もとは三島郡であった。現在の箕面市のほか、高槻市、茨木市、吹田市、島本町などを含み、摂津国のなかでも、猪名川の流れる河辺郡とともに、広い平野部に古くから耕地が展開していた地域である。島下郡の西隣は豊島郡で、『箕面市史』ではその境を、現在の箕面市新家の西側、外院辺りに想定している。粟生間谷遺跡は、この島下郡と豊島郡の境界に近い、島下郡の西端部に位置している。『倭名類聚抄』には、島下郡内に、新野、宿人、安威、穂積の4郷が記載されており、遺跡周辺は、宿人郷に属す。

遺跡は、平野部の北西隅より約3km西、勝尾寺川が開析する丘陵地に立地している。勝尾寺文書には条里呼称が記載されている史料が多くみられるが、条里地割自体は、平野部にはみられるものの、遺跡周辺ではみられない。

遺跡の南約2km、丘陵を挟んだ位置に、西国街道（山陽道）が通っている。古くから京都と西国諸国を結ぶ、幹線道路となってきたものである。摂津国内には、和銅4（711）年、島上郡に大原駅、島下郡に殖村駅がおかれた。10世紀に編纂された延喜式には、草野、須磨、葦屋がみられ、前記2駅は廃止されたと考えられる。草野駅の位置は不明であるが、箕面市萱野、稲、牧落などが候補にあげられている。豊島郡には、豊島牧の存在も想定される。

遺跡周辺には、新屋坐天照御魂神社（茨木市宿久庄など）、須久久神社（宿久庄）、爲那都比古神社（箕面市白鳥）などの式内社がある。

遺跡の北東、勝尾寺川につくった谷筋を山中へと登っていくと、西国三十三箇所第二十三番札所の勝尾寺がある。『箕面市史』によると、奈良時代の山林修行者によってその歴史がはじまったが、創立の経過は不明である。寺の名が確実な史料にみえるのは、『三代実録』元慶4（880）年3月19日条で、清和太上天皇が大和と摂津の名山を巡幸したという記事である。こののちは、勝尾寺文書の承平5年2月5日総持寺資材帳写から、10世紀前半の承平年間までに、島下郡の総持寺（茨木市総持寺所在 西国三十三箇所第二十二番札所）の別院となっていたことがわかる。摂関期から院政期にかけては、浄土教信仰が広がり、諸国で聖の活動が盛んになったが、勝尾寺は、箕面寺とともに『梁塵秘抄』に納められた俗謡にうたいこまれるほど、聖の代表的な聖地となった。また、鎌倉時代には、本尊千手観音の信仰が盛んになり、参詣の人々でにぎわった。現在、国道171号線沿いの新家に一の鳥居があり、参道はここから外院を通る。古代から中世にかけての詳細な交通路を知ることは難しい。しかし、現在府道が通る勝尾寺川沿いは、地形からみて、古くから道筋とされていても不思議ではない。京都など東方からの勝尾寺参詣には、このルートの方が距離はやや短く、参詣の人々が遺跡内を往来していたことも想定される。

天慶8（945）年、「志多羅神」と称する神の神輿を奉じた群衆が、西方から山城国へ向かうという事

件がおこった。7月25日河辺郡の方から数百人が3基の神輿を擁し、「捧幣撃鼓 歌舞羅列」して、豊島郡の方へ来、「道俗男女貴賤老少」が集まり、翌朝まで歌い舞ったのち、島下郡に向かった。29日には島上郡から岩清水八幡宮の対岸山崎郷にあらわれ、「郷々上下貴賤」が集まり、岩清水八幡宮へとわたった。道中その数が膨れ上がったといわれる群衆のなかに、山陽道に近い、遺跡周辺に住む者の姿があったことは、想像するに難くない。『本朝世紀』天慶8年8月3日条は、その時人々が高唱していた「童謡」も伝えている。以下に、戸田芳実（1967）の読みを参考にしながら、以下に引用する。

「月は笠着る 八幡は種蒔く いざ我等は 荒田開かむ」「しだら打てと 神は宣まふ 打つ我等が 命千歳」「しだら米 早買はば 酒盛れば その酒 富める始めぞ」「しだら打てば 牛は湧ききぬ 鞍打ち敷け 米負はせむ」 反歌「朝より 蔭は蔭れど 雨やは降る 米こそ降れ」「富は揺み来ぬ 富は鏝懸け 揺み来ぬ 宅儲けよ 煙儲けよ さて我等は 千年栄えて」

「志多羅」とは、拍子をうつ意。この事件については戸田氏の著書に詳しく、これを民衆運動とし、「富豪層を先頭にして中世が農村から確実に出発しはじめたことの宗教的表現」と述べている。「童謡」には、「富豪層の自信と決意、農村における自己の主導的役割の自覚と誇示が率直に表現されている」。氏のいう「富豪層」とは、9・10世紀の史料中に「富豪之輩」と記されているもので、「律令的公民の階層分解の中から、稲穀・銭貨・牛馬・用具・奴婢などの動産的富を蓄積しつつ上昇してきた大経営者であって、私墾田・私営田・私出挙・私交易など、律令体制と対立する新しい経済活動の中心的主体として活躍した地方の上層であった」。粟生間谷遺跡では、特に中世前期に集落が展開するが、上記の叙述は、遺跡や周辺地域を考える上で看過できないものと思われる。

摂関期には、豊島郡から島下郡にかけての千里丘陵一帯に、摂関家領の垂水牧が設けられ、平安末には近衛家領・春日社領の大荘園となった。島下郡の東牧と豊島郡の西牧があり、前者は遺跡周辺の箕面市粟生・小野原、茨木市宿久庄も含んでいた。

「粟生村」の名は、勝尾寺文書の康治元（1142）年藤原佐長譲状に「摂津国嶋下郡中条粟生村」とみえるのが初見である。勝尾寺文書の久安6（1150）年12月23日藤原佐長譲状には、「みたうすりのときは むらの人々 さにつくはかりの人々 せんれいのことくすりすへし もしけたいせむ人はさいちに あらすまじ」とある。御堂とは、村内にあった菩提寺という寺院である。この史料から、当時、粟生村に階層秩序と存地規制が存在していたことがわかる。

鎌倉時代の粟生村は、領有関係が複雑であったが、最高の領主は、摂津国衛と春日社であった。ほかに、近衛家、綾小路家の所領、総持寺、勝尾寺の領田もあった。『箕面市史』によると、実態は複雑ではあるものの、所当米は国衛へ、炭・焼米は垂水牧の領家春日社へ納める、のが本来の形であった。本来、摂津国の公領（国衛領）であったが、垂水牧が荘園として発展するに伴って、公領粟生村の公田が、垂水牧の領家春日社の雑役免田になったと考えられる。

都に近く、山陽道が通るこの地域では、木材は商品化されやすい。材木として売るのみならず、炭が盛んに生産された。勝尾寺文書欠年11月26日勝尾寺年行事書状案には、住民が寺領山林内に「炭竈」を設け、山林は伐りつくされて「野山」のごとくなった、住民たちの領主に竈の撤去を求めたが承知されず、実力で「破却」した、と記されている。盛んであった炭生産の様子がわかる貴重な史料である。

鎌倉時代から南北朝期の史料には、粟生村内に、「天王宮」「若宮天満天神」などがあることが記されている。西谷地晴美（1991）によると、「天王宮」「若宮天満天神」は、「粟生村の西と東に鎮座していたと思われ」、「粟生村の鎮守というにふさわしく、中世の粟生村において村落結合の一つの中心であっ

た」。鎌倉から室町時代にかけておこなわれた天王宮の奉納相撲など、住民によって村内社寺の神事仏事が恒例としておこなわれていた。

鎌倉時代から室町時代にかけては、有力土豪芥川岡一族の領主的活動がみられる。しかし、15世紀以降はその名が史料上にみられなくなり、かわって粟生姓を名乗る一族が勢力をのびし、江戸時代まで存続していく。

現在、粟生を冠する地名は、箕面市粟生間谷・粟生外院・粟生新家、茨木市粟生岩阪がある。遺跡の立地する間谷には、奥、中村、山ノ口、川合の集落があり、この4村で秋祭りなどの行事をおこなっている。奥村、中村など、南北朝期の史料にすでにみえる地名である。棚田とため池のひろがる地域であるが、近年は、大規模開発によって、急速に宅地、店舗などが増加しつつある。

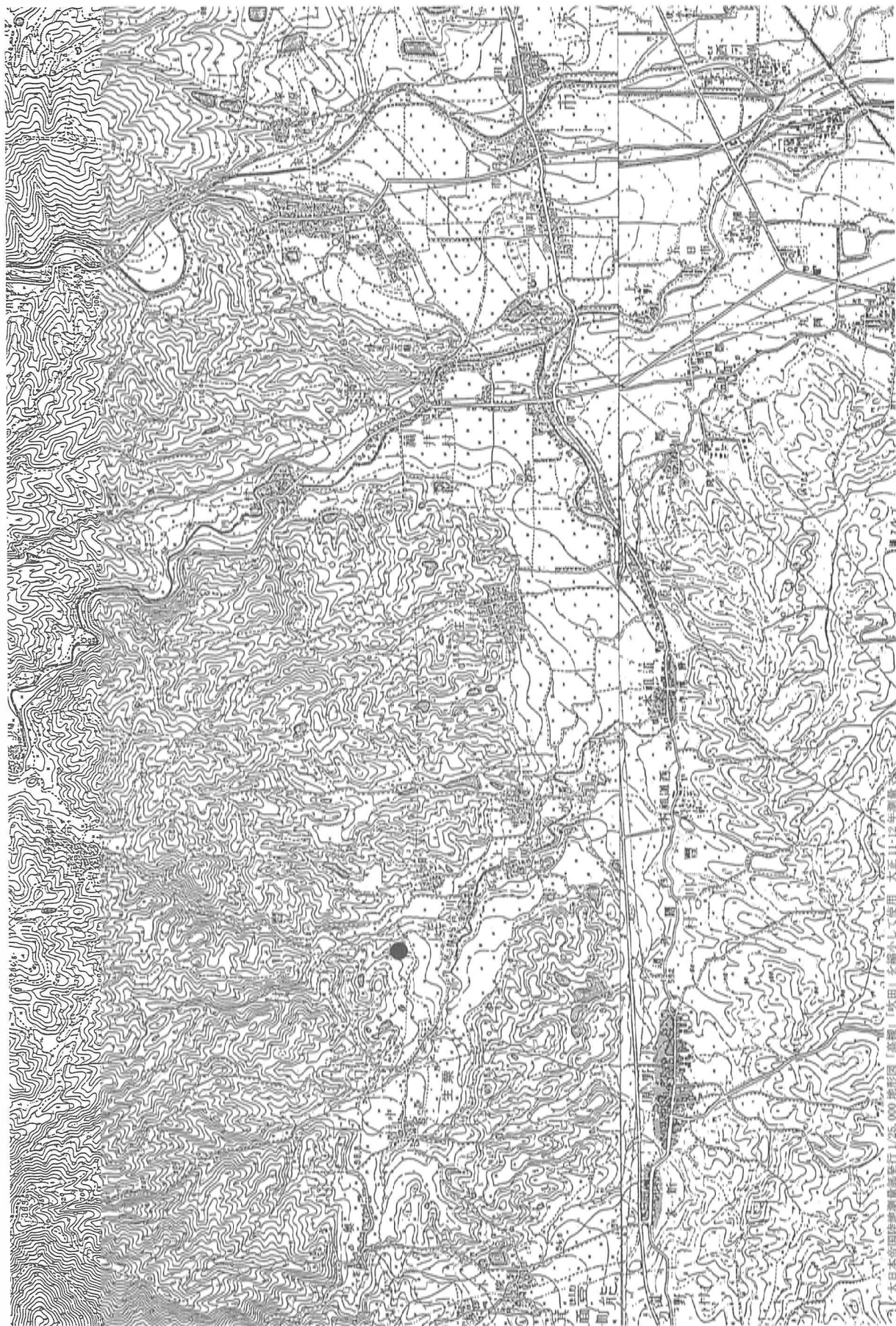
国際文化公園都市、モノレールの建設に伴い、1994年に粟生間谷遺跡の調査を開始して以後、96年度に徳大寺遺跡、97年度に庄田遺跡、98・99年度に宿久庄西遺跡など、大規模な発掘調査がおこなわれた。徳大寺遺跡は、粟生間谷遺跡の北東に接する。丘陵の先端部には、近世に黄檗宗寺院である徳大寺が建っていた。丘陵下の扇状地では、平安時代のもと思われる梵鐘鑄造遺構のほか、11世紀代の鍛冶遺構が検出されている。庄田遺跡、宿久庄西遺跡は、ともに粟生間谷遺跡とは勝尾寺川を挟んだ南の丘陵上に立地する。前者には奈良時代の建物群、後者には奈良時代以降、中世にかけての遺構群が展開していることが確認されている。また、1982年の箕面市教育委員会による、粟生間谷大日遺跡の調査では、粟生間谷遺跡と同時期のもと思われる建物などが検出されている。

粟生村周辺関連文献

- 佐藤進一 『鎌倉幕府訴訟制度の研究』 1943
 戸田芳実他 『箕面市史』 1964
 阿部 猛 「中世における寺院経済維持の形態－摂津国勝尾寺の場合－」『中世日本荘園史の研究』 1966
 戸田芳実 『日本領主制成立史の研究』 1967
 佐々木宗雄 「荘園制下の土地所有形態の一考察－摂津国嶋下郡粟生村における－」『ヒストリア』第80号 1973
 山崎ゆり子 「中世前期の土地所有－摂津国粟生村について－」『寧楽史苑』第21・22合併号 1977
 小田雄三 「鎌倉時代の畿内村落における刀禰について」『年報 中世史研究』2号 1977
 鈴木鋭彦 『鎌倉時代畿内土地所有の研究』 1978
 奥山研司 「中世北摂における名の構造と土地所有形態」『史学研究』144 1979
 鈴木鋭彦 「中世土地売券における女性」『政治経済史学』161号 1979
 田中寿朗 「鎌倉時代の村落についての一考察」竹内理三編『荘園制社会と身分構造』 1980
 丹生谷哲一 「中世畿内村落における刀禰」『歴史研究』18号 1981
 河音能平 「中世前期北摂武士団の動向」『中世封建社会の首都と農村』 1984
 西谷地晴美 「中世成立期における「加地子」の性格」『日本史研究』275 1985
 西谷地晴美 「国衙領粟生村に関する一考察」『神戸大学史学年報』創刊号 1986
 鈴木国弘 「摂津藤原氏の村落支配と『氏』結合の展開」『史叢』38 1987
 鈴木国弘 「摂津粟生村の中世村落－ある「村落領主」一族の盛衰－」『日本歴史』478 1988
 戸田芳実 『初期中世社会史の研究』 1991
 西谷地晴美 「村落構造とその矛盾 中世前期の村落」日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座 第4巻 政治I』 1991

発掘調査報告書

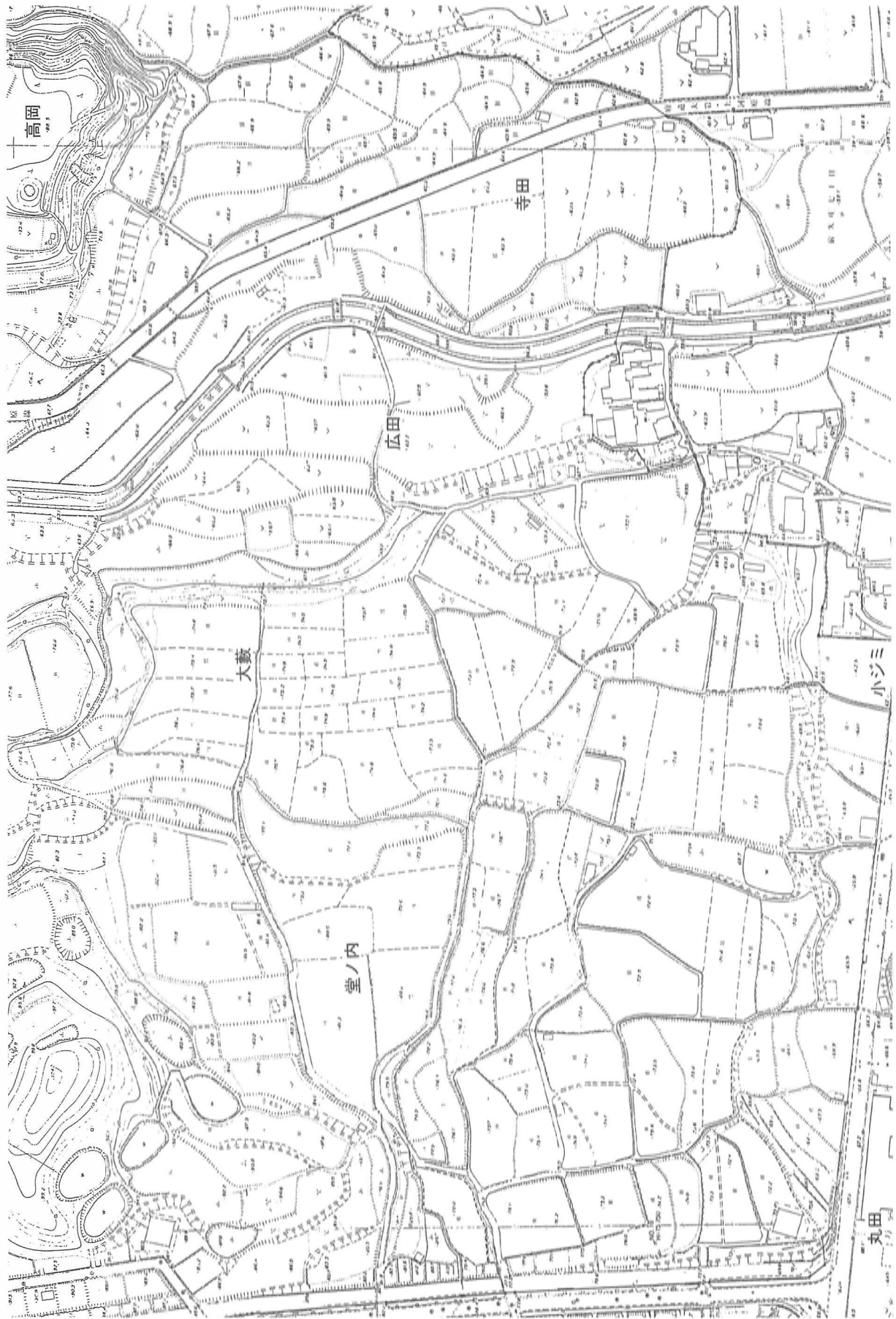
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 『庄田遺跡』 1999
 財団法人大阪府文化財調査研究センター 『徳大寺遺跡』 1999
 財団法人大阪府文化財センター 『宿久庄西遺跡』 2002



第3図 遺跡周辺地図(1) (1:40,000)



第4図 遺跡周辺地図(2) (1:10,000)



第5図 調査前の棚田と小字（1：2,500）

II 調査の経緯と方法

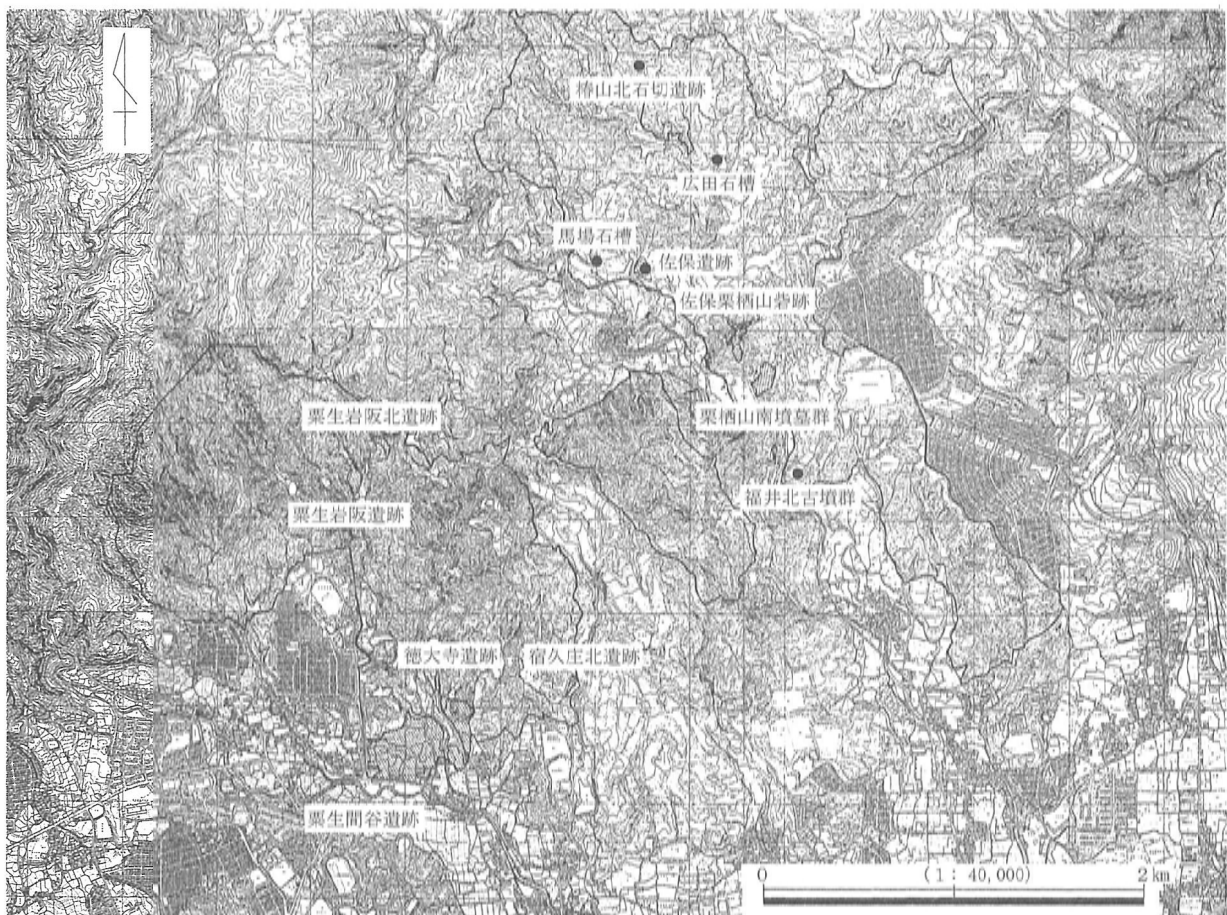
調査の経緯

粟生間谷遺跡の発掘調査は、住宅・都市整備公団（現：都市基盤整備公団）による『国際文化公園都市特定土地区画整理事業』に伴う発掘調査である。

国際文化公園都市は、箕面市および茨木市にまたがる北部の丘陵地帯に所在し、総面積742.2haの広大な地域である。計画地域は茨木川以東の東部地区、府道1号線および茨木川間の中部地区、府道1号線以西の西部地区に大きく区分されている。

これらの事業内では遺跡の分布がほとんど確認されていなかったため、1993年度に3度に亘る分布調査が（財）大阪府埋蔵文化財協会（以下、協会と称す）・大阪府教育委員会によっておこなわれた。その後作成された分布図を基に、確認調査を1994年度に協会が、1995年度からは（財）大阪府文化財調査研究センター（以下、センターと称す）が数年度に亘っておこなった。その結果、西部地区では粟生間谷遺跡、徳大寺遺跡、宿久庄北遺跡、粟生岩阪遺跡、粟生岩阪北遺跡、東部地区では佐保栗栖山砦跡、栗栖山南墳墓群、福井北古墳群、佐保遺跡、椿山北石切場跡の各遺跡を確認した。中部地区では、遺物がわずかに出土したものの、遺構は認められなかった。

新たに発見された遺跡は本調査が必要であると判断され、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のも



第6図 国際文化公園都市全体図

と、協会による粟生間谷遺跡（1994年度）の調査を皮切りに、センターによって粟生岩阪、粟生岩阪北、徳大寺、佐保栗栖山砦跡、栗栖山南墳墓群、宿久庄北、佐保の各遺跡が順次調査された。なお、粟生岩阪遺跡、徳大寺遺跡、佐保栗栖山砦跡、栗栖山南墳墓群は、すでに報告書が刊行されている。

粟生間谷遺跡の調査は、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、1994年度に協会が確認調査をおこない、続いて本調査を開始した。その後1年の期間を置き、1996～99年度にセンターが本調査をおこなった。この間、調査成果の早期公開を目的として、1995年1月28日に現地説明会をおこない、1999年6月6日～29日に発掘速報展『発掘!! あおまだに』を茨木、箕面の両市で開催した。

整理事業は、センター北部調査事務所において2000年2月～2002年2月まで実施し、2002年度に報告書の印刷をおこなった。

第1表 粟生間谷遺跡の発掘調査

事業名	面積	調査期間	調査担当者
(その1)	8,206㎡	1994年7月～1995年3月	上林史郎 岡本圭司
(その2)	16,970㎡	1996年6月～1997年1月	新海正博 山本美野里
(その3)	36,679㎡	1997年2月～1999年3月	金光正裕（1998年3月まで） 新海正博 信田真美世 瀬戸哲也（1998年4月から）
(その4)	13,800㎡	1997年6月～1998年3月	森本 徹 亀井 聡
(その5)	16,950㎡	1998年6月～1999年3月	金光正裕 森本 徹
(その6)	12,270㎡	1999年3月～2000年3月	新海正博 信田真美世 木村健明
(その7)	8,980㎡	1999年5月～2000年3月	金光正裕 森本 徹 福島正和

発掘調査の方法

調査総面積は、113,855㎡である。これを（その1～7）の7事業にわけて実施した。（その1）は協会、その2以後はセンターによる。さらに各事業では、（その1・2）はⅠ～Ⅲ区、（その3）は1～12トレンチ、（その4～6）は1～6トレンチ、（その7）は1～4トレンチに分割して調査をおこなった。各地区は、その7以外では棚田を単位として設定されているため、その平面形、面積が多様である。約400㎡～5,000㎡の、合計40地区である。

本報告書に用いた国土座標系とそれによる地区割りは、第8図に示した。国土座標の第Ⅵ座標系に基づいた地区設定である。ただし、調査段階では、（その1）では協会規定の地区割りを、（その2～7）ではセンター規定の地区割りを使用している。遺物の取り上げは、基本的にその1では1辺4mの範囲で、その2～7では第Ⅳ区画である1辺10mの範囲でおこなった。報告書ではセンター規定の地区割りに統一している。

掘削は、現代表土を重機で、以下近世を中心とする複数の作土層とそれに伴う盛土層、部分的に遺存する包含層、遺構などを人力でおこなった。

遺構面全体の平面図は、航空測量によって作成した。1/20または1/50と、1/100の遺構図、平面図である。遺構面が複数存在する場合には、最も下位の遺構面（旧石器時代、縄紋時代を除く）でのみ航空測量を実施し、以上の面では平板実測をおこなった。各遺構の平面・断面・立面図などは、技師の指



第7図 発掘調査 各事業のトレンチ配置図

導のもと、主に調査補助員が作成したが、本報告書に掲載している遺構図のなかには、航空測量図をもとに作成したものもある。

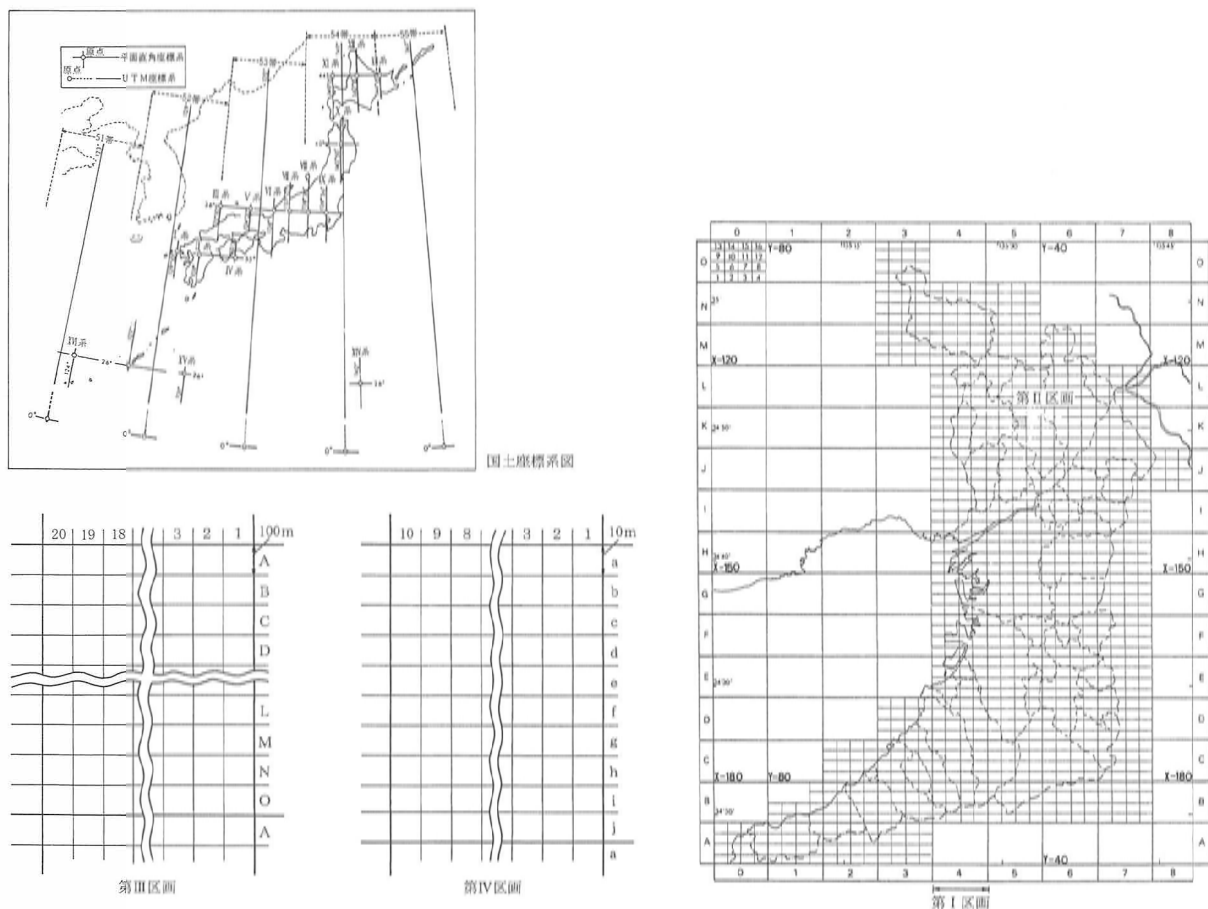
報告書作成の方法

粟生間谷遺跡は、旧石器時代、縄紋時代、古代～中世、近世の複合遺跡である。縄紋時代以前と古代以降でわけ、それぞれを「旧石器・縄紋時代編」、「古代・中世編」の別冊として報告書を刊行することとした。

発掘調査の方法の項に記したように、調査は7事業、40地区にわけておこなったが、それらは調査地のなかで入り組んでいる状況である。そのため、各事業、地区にとらわれず、整理した形で報告をおこなうこととした。

まず、地形で、丘陵上、川合裏川段丘面、扇状地、勝尾寺川段丘面の4地区にわけた。さらに、丘陵上は、調査で検出した川1・2を境界として丘陵上西部・中部・東部に、川合裏川段丘面は、西岸、東岸にわけた。この7地区をさらに、地形、遺構群のまとまりによって分割し、a～yの25域とした。a～yの域名は、それぞれの地区ごとではなく、遺跡全体を通して付けている。丘陵上西部はa～g域、中部はh～k域、東部はl～q域、川合裏川段丘面西岸はr・s域、東岸はt域、扇状地はu域、勝尾寺川段丘面v～y域である。

遺構名称（種類）・番号については、各事業で付け方の原則が異なっているため、調査時のものを踏襲して掲載すると非常に煩雑になる。そのため、報告書記載遺構については、遺構名を統一し、新たな



第8図 国土座標系とそれによる地区割

番号を付すことにした。旧遺構名・番号は付表編の遺構一覧表に記している。本報告書に掲載していない遺構については新たな遺構番号を付与していない。

建物の柱穴は、建物ごとに番号を付けた。建物1の柱穴1、または建物1-1といった具合である。井戸には、溜め井と考えられるものも含めた。墓の遺構名は、土葬、火葬にかかわらず埋葬をおこなったと思われる遺構に付し、骨が出土していても遺構自体が被熱しており、火葬をおこなったのみである可能性をもつものは、あえて含めなかった。遺構自体が被熱しているものは、その性格（土器焼成、火葬、その他）にかかわらず、すべて焼土坑とした。

柱穴のうち柱痕を平面で検出したものについては、その輪郭を各遺構図、平面図に、遺構の輪郭と同じ太さの線で示した。ただし、断面でのみ確認したものは図示し得なかった。また、建物の断面図で点線で表現している柱穴があるが、これは調査時に断面図を作成しておらず、測量図から得たレベルで復元したものである。

焼土坑の平面図には被熱痕跡の範囲をあみかけで示した。これは、肉眼観察で被熱痕跡が認められた範囲であり、焼土化している部分、淡く被熱痕跡が認められる部分など、さまざまな程度の部分を含んでいる。

遺物は、コンテナ約350箱が出土した。実測可能なものはできる限り実測図を掲載したが、川、包含層、丘陵上東部q域の段丘崖肩部集積などから出土したものについては、その限りではない。川、包含層出土遺物は、周辺の遺構群から出土したものと同様なものが中心である。遺跡内で比較的出土数が少ないと思われるものを中心に掲載した。近世作土層には、当該時期のものは少数の小片が含まれているのみで、集落が展開していた中世を中心とする時期の遺物が多く含まれている。この層出土のものについても包含層と同様な基準で実測図を掲載した。ただし、近世作土層は、客土であるため、これに含まれる古代～中世の遺物が、本来よりその地区、域に存在していたものとは限らない。

17

	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
a										
b										
c										
d										
e										
f										
g										
h										
i										
j										

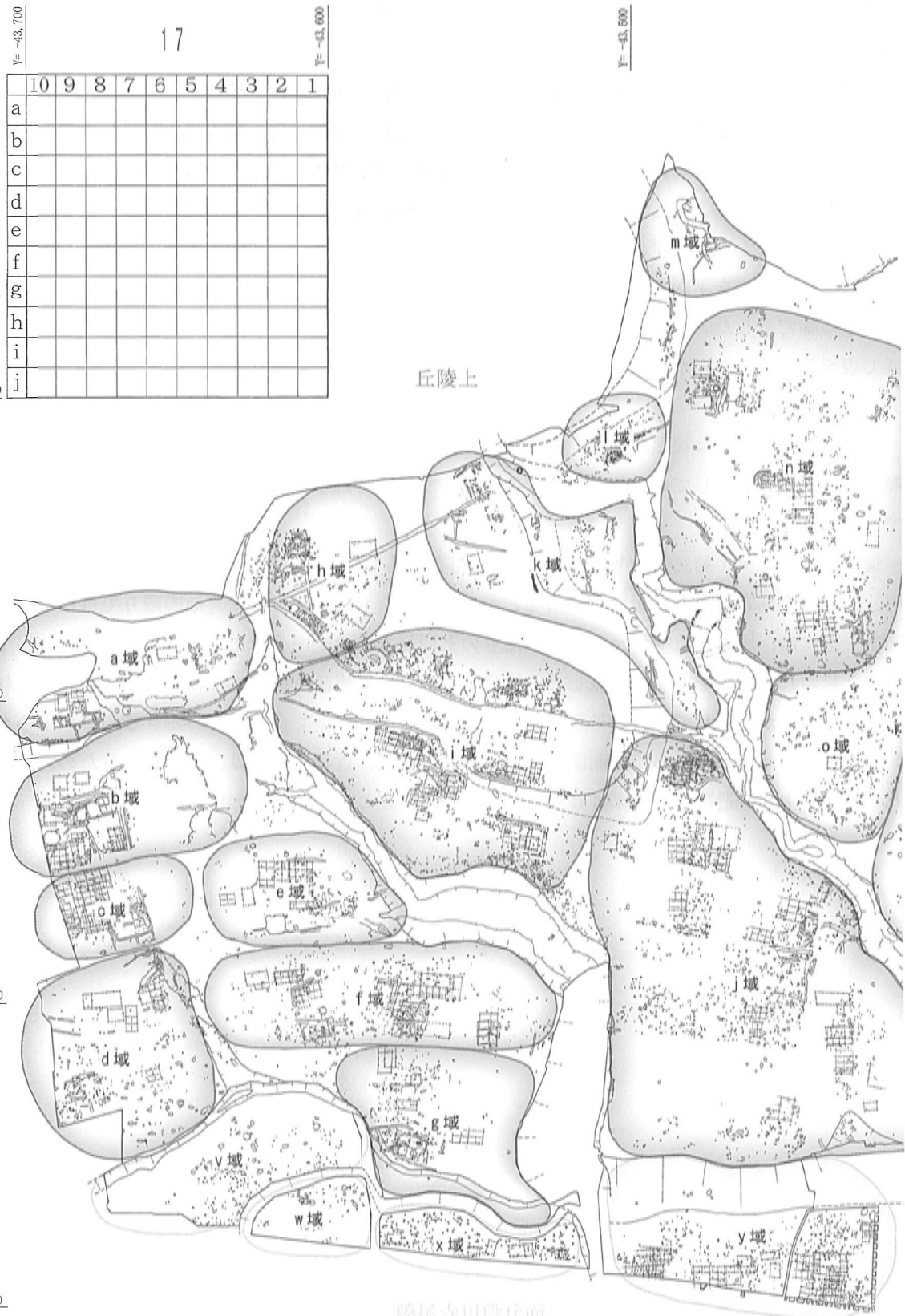
X = -128,100

X = -128,200

X = -128,300

X = -128,400

F



第9図



地区割

Ⅲ 調査の成果

序章

調査地内では、合計4本の川を検出した。調査成果の報告は地区毎におこなうが、これらは複数地区を貫いて流れているため、序章を設けて報告する。

川1（第10～17図 図版4）

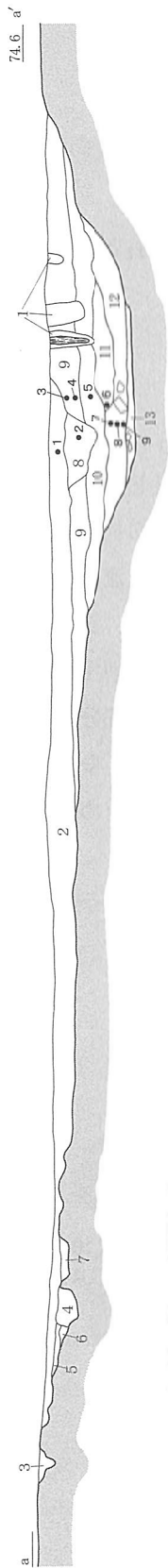
丘陵上西部地区、中部地区の境界としている。

丘陵上中部地区は、西部、東部に比べてやや標高が高く、尾根状を呈している。川1は、この地形の西側の裾に沿って流れている。調査地北西部から南東方向または南方向を指向して蛇行しながら丘陵上を流れ、勝尾寺川段丘面地区のx域、y域の境界部分にいたる。現況では調査地南端から約70m先に勝尾寺川が東西方向に流れており、これに注いでいたと考えられる。調査地内における最上流部分は、削平の影響もあるものかなり浅くなっており、本来の最上流に近い可能性もある。ただし、調査地外には尾根地形の周囲に湿地、ため池が分布しており、これが川の痕跡である可能性は高い。削平の影響は大きい、上流部分で幅約11m、深さ約0.7m、中流部分で幅約10m、深さ約1.3m、下流部分で約22m、深さ約2.2mである。調査地内の最下流部分は削平が著しく、輪郭さえ捉えられなかった。やや規模が小さくなっている可能性がある。なお、丘陵上西部地区 f・g 域の東側部分では、現況がため池となっており、調査をおこなっていない。

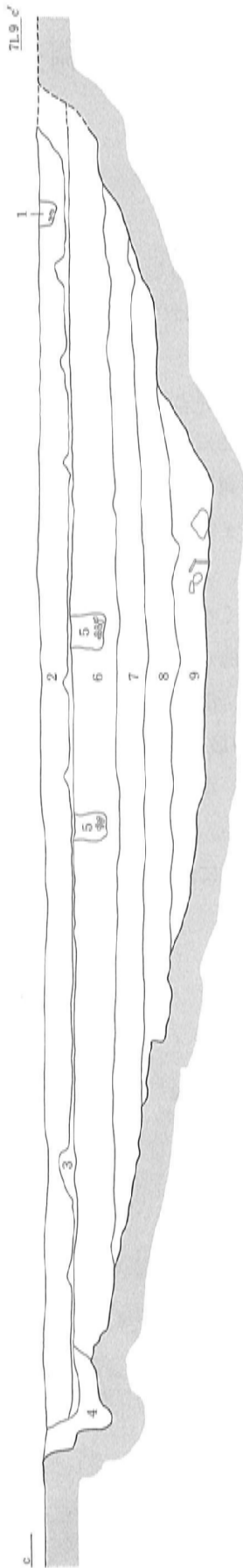
断面では、シルト～粘土で徐々に埋没していったことがうかがわれる。流路部分は、下層から中層の



第10図 川1～4 平面図



- 1. 5V 6/1 オリーブ灰 シルト質粘土 核
 - 2. 10R 4/2 灰黄褐 シルト Mn・Fe・7.5R 6/1 シルトブロック・炭含む
 - 3. 10R 5/2 灰黄褐 シルト→細砂 Mn・2.5V 7/6 明黄褐 シルトブロック・炭含む 濃埋土
 - 4. 2.5V 7/4 浅黄 シルト 濃埋土
 - 5. 2.5V 4/1 黄灰 シルト Mn・2.5V 7/4 浅黄 シルトブロック含む 濃埋土
 - 6. 2.5V 4/1 黄灰 シルト 炭含む 濃埋土
 - 7. 2.5V 5/1 黄灰 シルト 炭・2.5V 7/4 浅黄 シルトブロック含む 濃埋土
 - 8. 2.5V 5/1 黄灰 シルト→粘土 Mn・炭含む
 - 9. 2.5V 5/1 黄灰 シルト→粘土 Fe多く含む 7にくらべてやや7.5R 5/6 明褐色の色調が強い
 - 10. 10R 5/1 黄灰 シルト→中砂 Fe多く含む
 - 11. N 5/0 灰 シルト→中砂 Fe・炭・2.5V 7/1 灰白 中砂ブロック含む チラミナあり
 - 12. N 3/0 暗灰 粘土
 - 13. M 4/0 灰 細砂→粗砂 1辺が2~5cm前後の小礫を含む
- 花粉分析から推定地点



- 1. 5V 5/1 灰 細砂まじり粘土 小礫含む
- 2. 2.5V 6/3 におい黄 細砂まじりシルトと2.5V 5/2 暗灰黄 シルトまじり粘土がブロック状にまじる中→大礫含む
- 3. 5V 5/2 灰オリーブ 細砂まじりシルト 水田作土層
- 4. 2.5V 5/3 黄褐 細砂まじりシルト 中礫・基盤層粘土ブロック含む
- 5. 2.5V 5/1 黄灰 粘土
- 6. 2.5V 5/2 暗灰黄 粘土 シルト・細砂含む 全体にFeとMn沈着
- 7. 5V 5/2 灰オリーブ 細砂・シルトまじり粘土 小礫含む 上部にFe沈着 全体にFe・Mn沈着
- 8. 2.5V 4/2 暗灰黄 シルトまじり粘土 中砂→中礫含む
- 9. 5V 3/2 オリーブ黒 シルトまじり粘土 粗砂→大礫含む



※断面位置は第10図

第11図 川1 断面図(1)

中世前期の遺物を含む層群ではほぼ埋没している。上層部分には、水田作土層が複数枚みられる。調査前には、川のほとんどの部分が水田となっていた。また、一部が水路として水の通り道を残し、f・g域東側部分ではため池となっていた。

北側の調査地外は等高線が密な山地形となっており、小規模な尾根と谷が入り組んでいる。発掘調査中には激しい雨が降ると、北方の山からの多量の水が遺跡内の傾斜地を流れ落ちる状況がみられた。川1は、こういった水を集めて排水していたと思われる。また、川底にあたる基盤層は、多くの部分で礫を非常に多く含む層で、水はけが非常によい。若干の流れはみられたかもしれないが、常時多量の水が流れていた可能性は低いと思われる。

出土遺物は、多くが周囲の遺構群から出土するものと同様のものである。各層毎の出土遺物の傾向も、前述したように上層に近世のものが含まれている以外はほとんど変化がみられない。掲載遺物は、遺跡全体をみても比較的希少であると思われるものを中心に選んだ。ただし、木製品は掲載したものの以外には出土していない。33~37は、f域東部の北側部分でまとまって出土したものである。

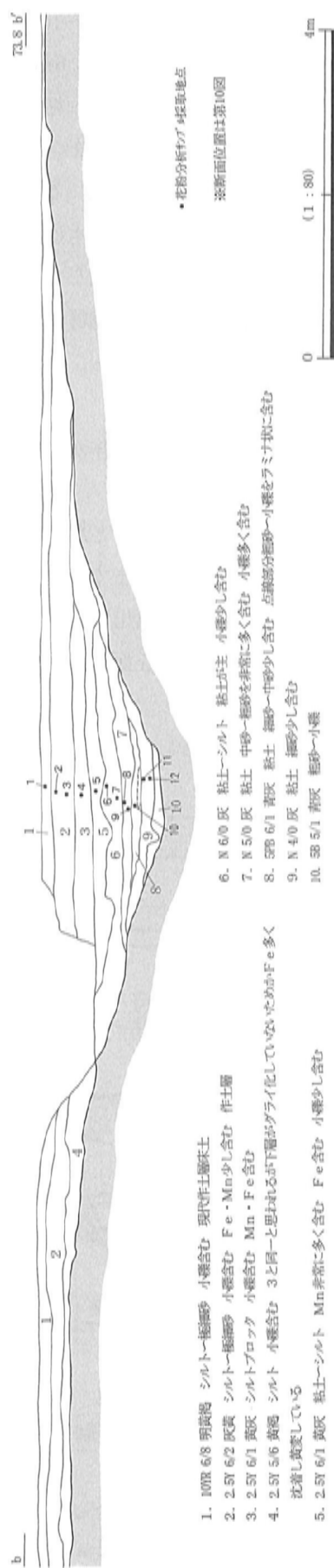
下層の遺物出土量は、中・上層に比べて非常に少なく、川の初現期は不明であるといわざるを得ない。平安期以前のはほとんどみられないが、周囲が大きく開発されたのがその時期以降であるため、それ以前の遺物があり出土しないのは当然であるといえる。f域北側部分で下層から縄紋土器が出土しているが、古代・中世の遺構面の基盤層は旧石器・縄紋時代の包含層であるため、これで川の時期を決めることはできない。

IV 第1章に花粉分析の結果を記載している。

川2 (第10・18・19図 図版5・6)

丘陵上中部地区、東部地区の境界としている。

丘陵上中部地区の尾根状を呈する地形の東側の裾に沿っている。丘陵上北部中央から南東方向、東方向、南方向を指向し、丘陵上を蛇行しながら流れる。調査地外の川合裏川段丘面には、水路として水の通り道が残っており、これを辿ると丘陵上東部地区q域南部から東向して川合裏川段丘面を通り、川合裏川に注いでいる。上流は、調査地外、北側に続いているが、調査地内から続く尾根地形に沿って湿地が分布しており、これらが川の痕跡である可能性が高い。削平の影響はあ



第12図 川1 断面図(2)

るが、上流部分では幅約9m~16m、深さ約1.2m~2.0m、中流部分では幅約10m、深さ約1.6m、下流部分では幅約10m、深さ約3.6mである。

上流域、中流域ではシルト~粘土で徐々に埋没していったことがうかがわれる。しかし、下流域では状況が全く異なり、多量の礫を含むシルト層が下部を埋めている。礫は大きいものでは人頭大のものがみられ、土石流堆積状である。この部分はかなり深く開析されている。川底にあたる基盤層は、多くの部分で礫を非常に多く含み、水はけがよい。流路部分は、川1同様、下層から中層にかけての中世前期の遺物を含む層群でほぼ埋没している。近世には水田化している。

遺物の多くは、周辺の遺構群から出土するものと同様のものばかりである。丘陵上東部Q域の北岸部分では、肩部分の包含層から、13世紀代の土器がコンテナ数個分出土している。木製品は出土していない。

下流域の下層から動物遺体が出土しており、鑑定結果をIV 第3章に記載している。

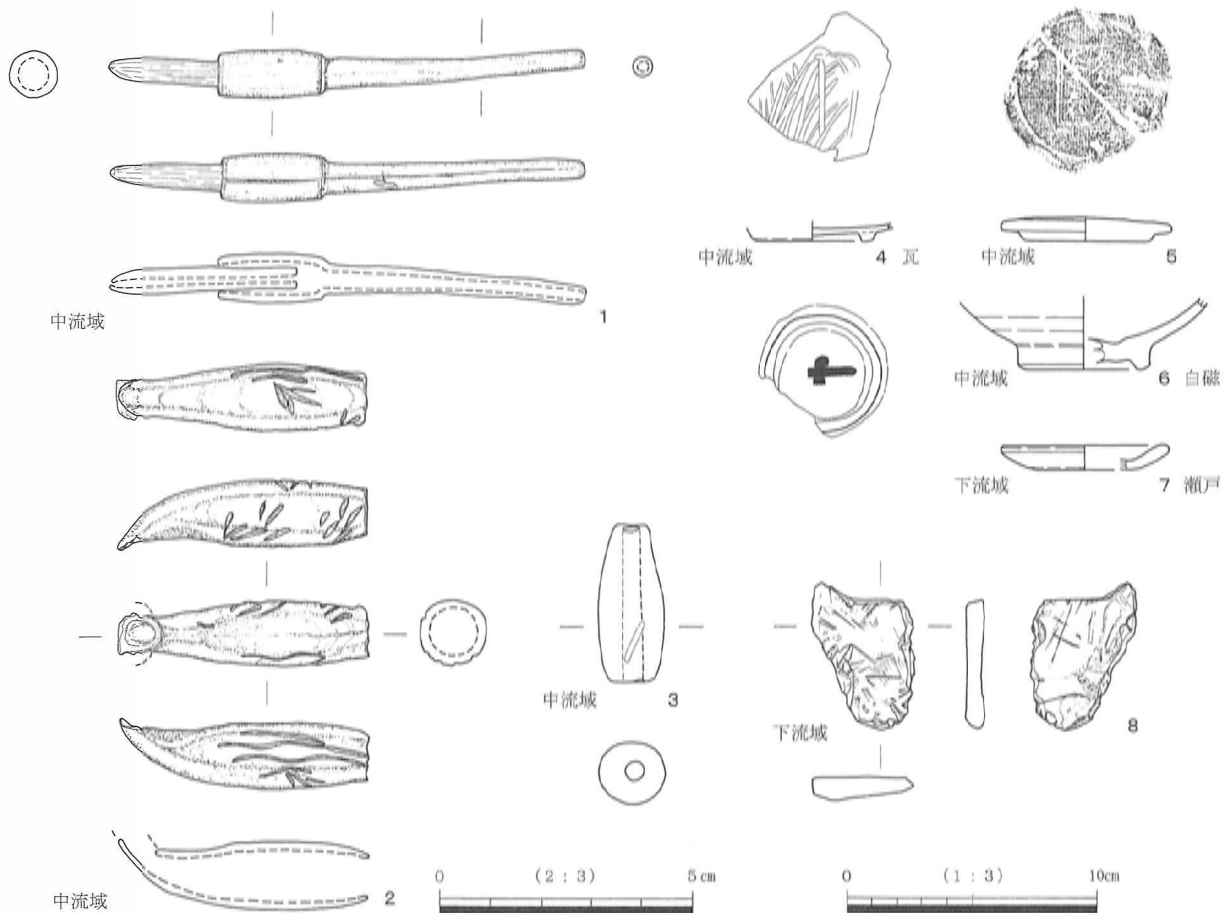
川3 (第10・349図)

川合裏川の旧流路であると思われる。川合裏川段丘面西岸地区では、コンクリートで固められている現川合裏川に接する部分まで調査をおこなっており、東端部で、旧流路、または氾濫した際に抉られたと思われる箇所を複数検出している。ただし、その時期は不明である。

遺物は、川合裏川段丘面地区の冒頭に掲載している。

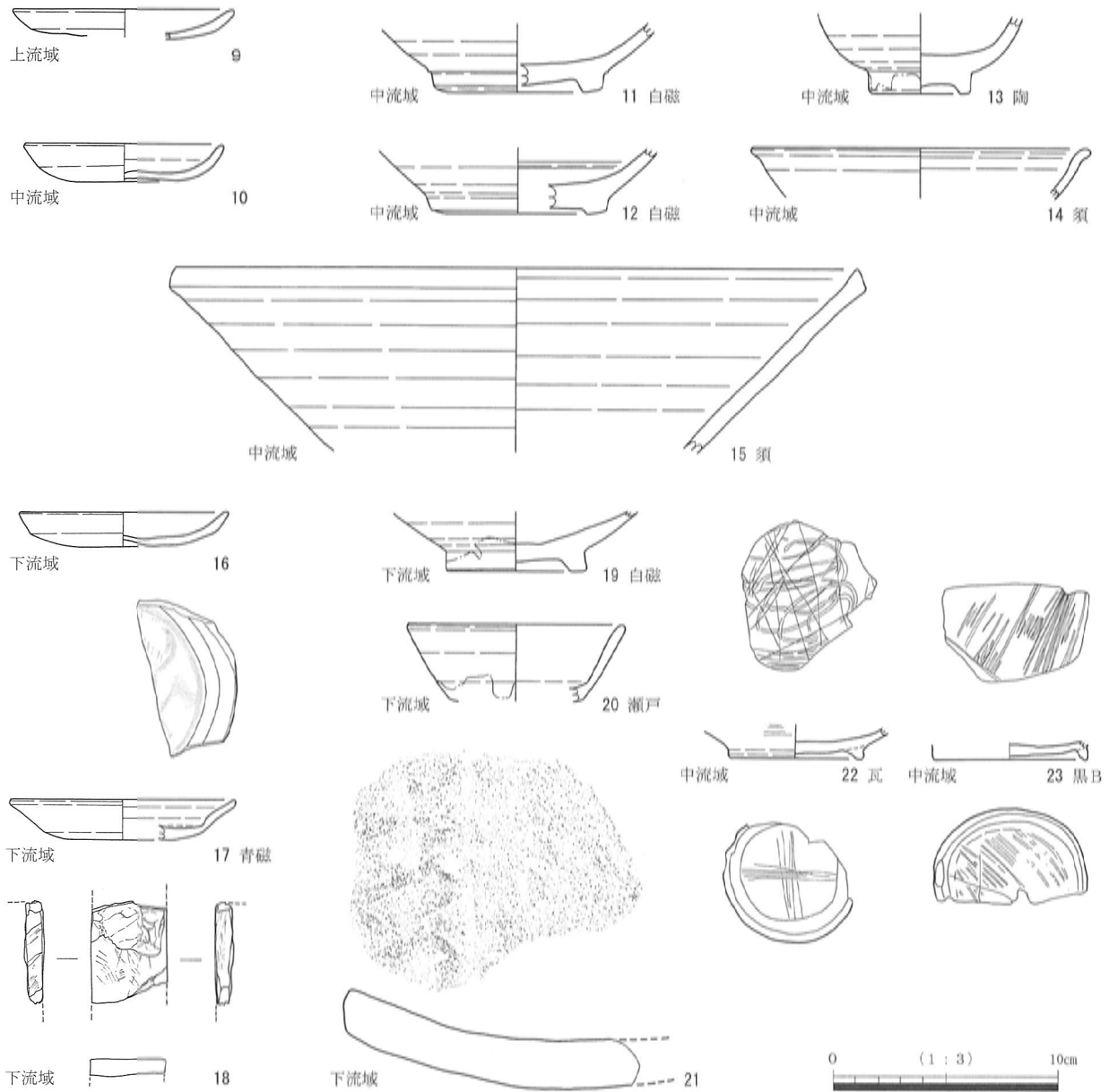
川4 (第395図)

扇状地地区で検出した。北東の調査地外は山地形で、それを開析する谷筋を流れてきて扇状地にいた

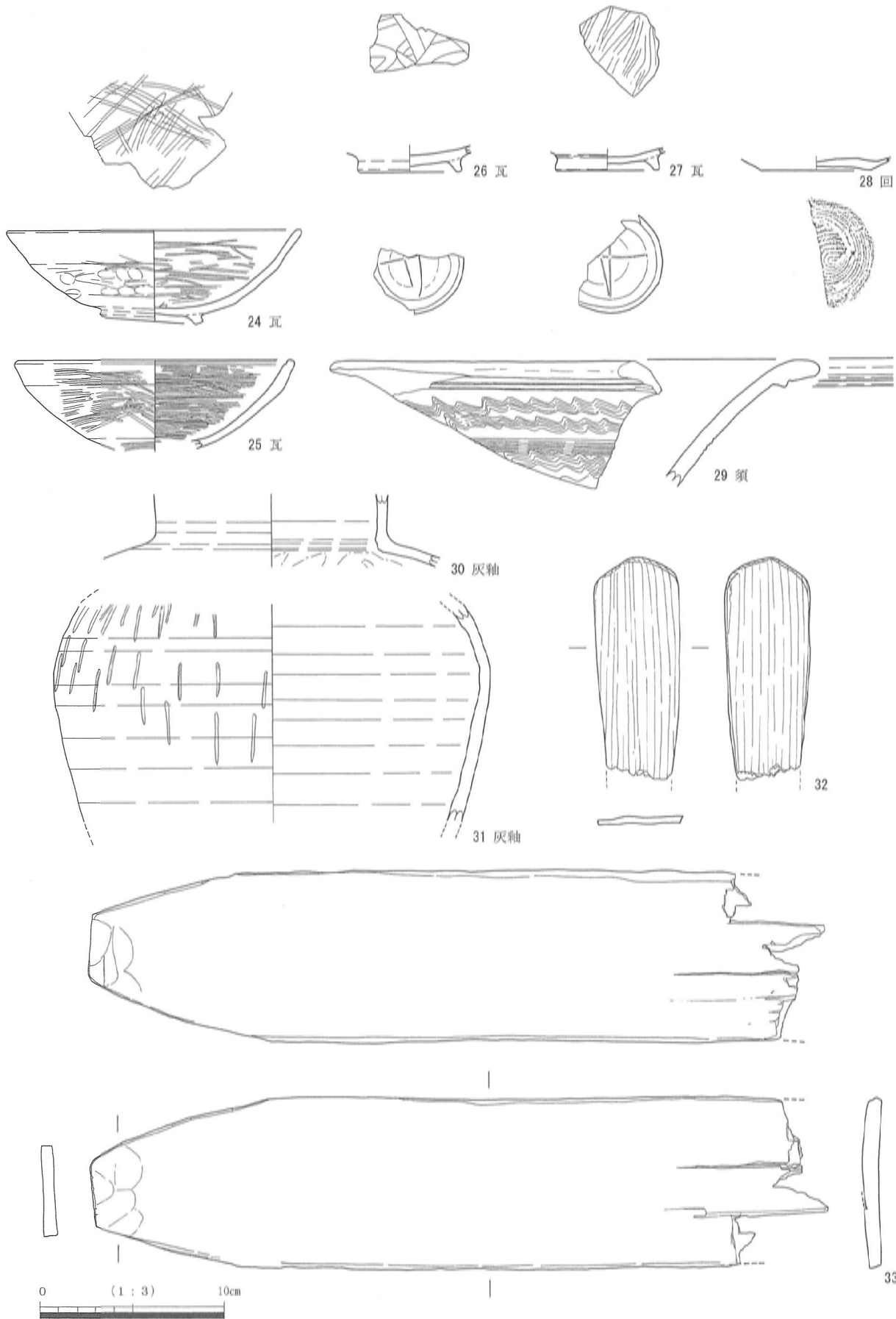


第13図 川1上層(中・下流域) 出土遺物(2/3 = 1~3)

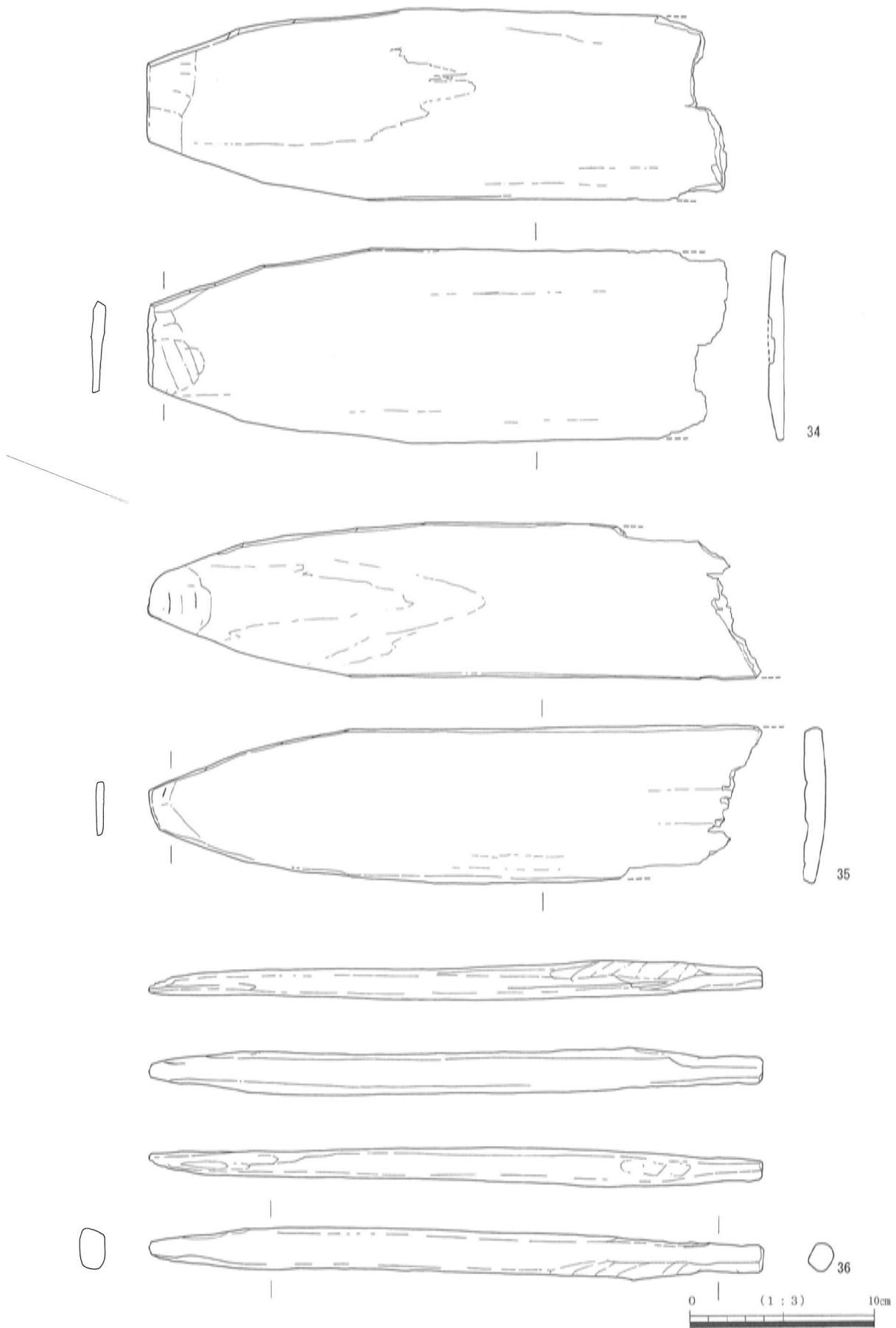
る。扇状地地区の東端部を南西に向けて流れ、調査地外で川合裏川に注いでいたと思われる。近世には水田となる。遺物は、少量出土したのみである。扇状地地区第395図に1366の緑釉陶器を掲載している。



第14図 川1中層(上・中・下流域) 出土遺物



第15図 川1下層（下流域） 出土遺物（1）

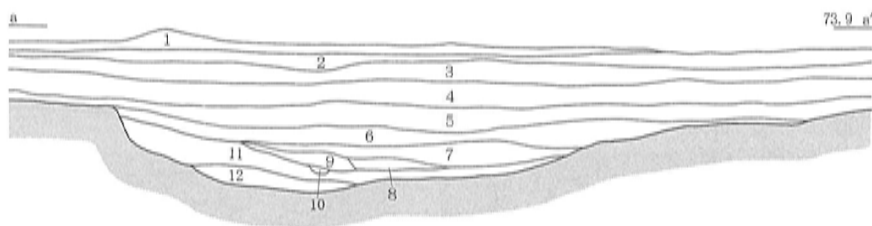


第16図 川1下層（下流域） 出土遺物（2）

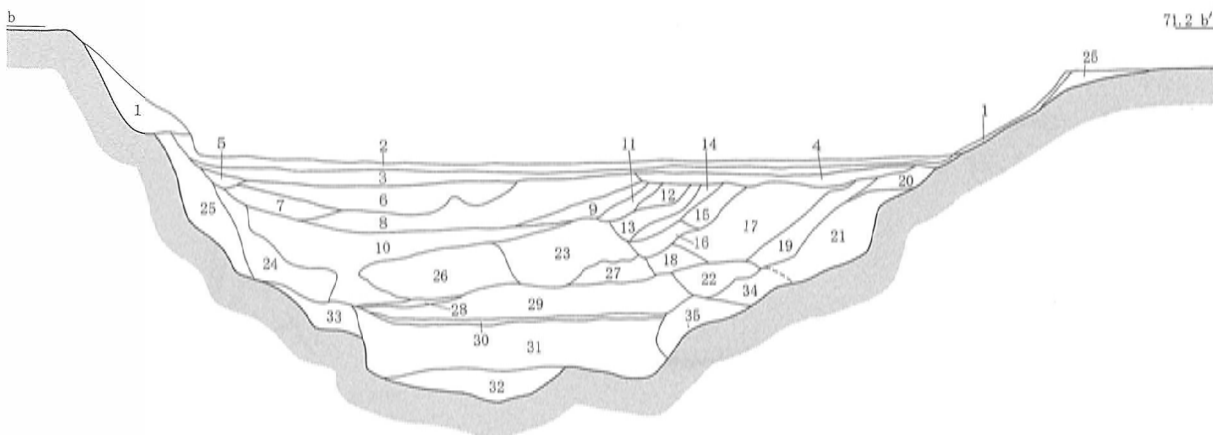


0 (1 : 3) 10cm

第17図 川1下層(下流域) 出土遺物(3)

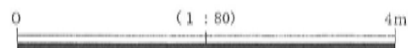


- | | |
|---|--|
| <p>1. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト $\phi 0.3-0.5$ cmのMn粒・10YR 5/8 黄褐 シルトを含む
中世または近世層 作土層か</p> <p>2. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト Mn粒をほとんど含まない 中世または近世層 作土層か</p> <p>3. 10YR 4/4 褐 砂質シルト 包含層</p> <p>4. 2.5Y 5/2 暗灰黄 砂質シルト 10YR 4/6 褐シルトブロックを多量に含む
Fe・Mn粒を含みしりがある 包含層</p> <p>5. 2.5Y 5/2 暗灰黄 砂質シルト 4にくらべて10YR 4/6 褐 シルトブロックが少ない
Mn粒は同程度含む 包含層</p> | <p>6. 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂質シルト 粘性がある Mn粒(10YR 2/3 黒褐)
Fe粒(5YR 6/8 明赤褐)を含む</p> <p>7. 10Y 5/1 灰 砂まじり粘土層</p> <p>8. 10Y 5/1 灰 粘土まじり砂</p> <p>9. 10Y 5/1 灰 砂まじり粘土</p> <p>10. 2.5Y 4/1 黄灰 シルト</p> <p>11. 7.5YR 3/1 黒褐 砂質シルト 腐植物を含む 1辺20 cm前後の礫を含む</p> <p>12. 7.5YR 3/1 黒褐 砂 腐植物を含む 1辺20 cm前後の礫を含む</p> |
|---|--|

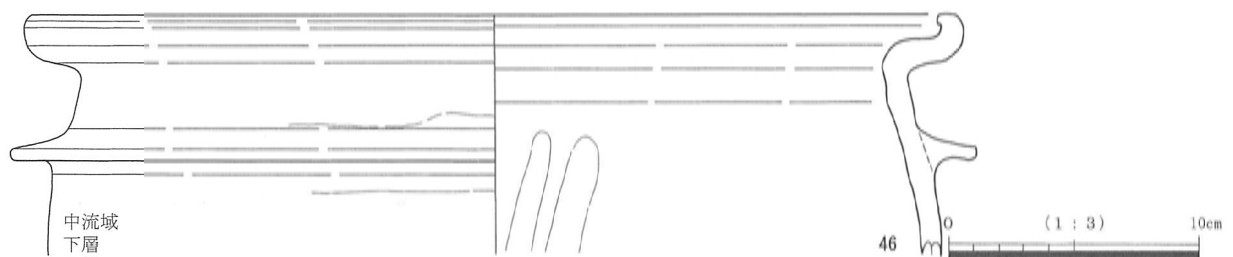
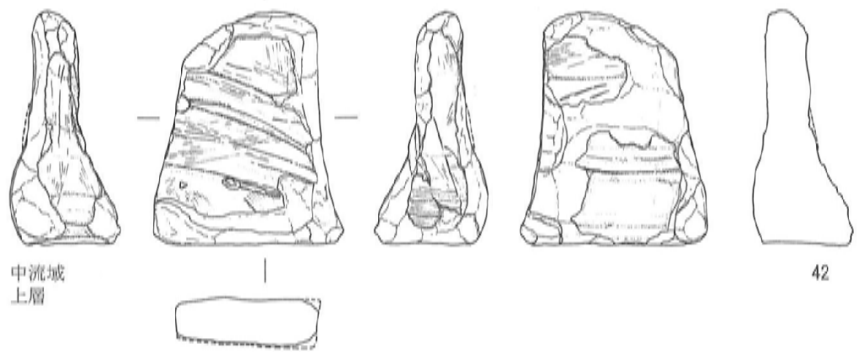
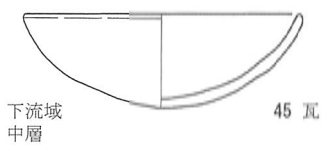
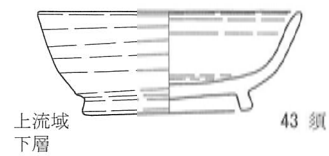
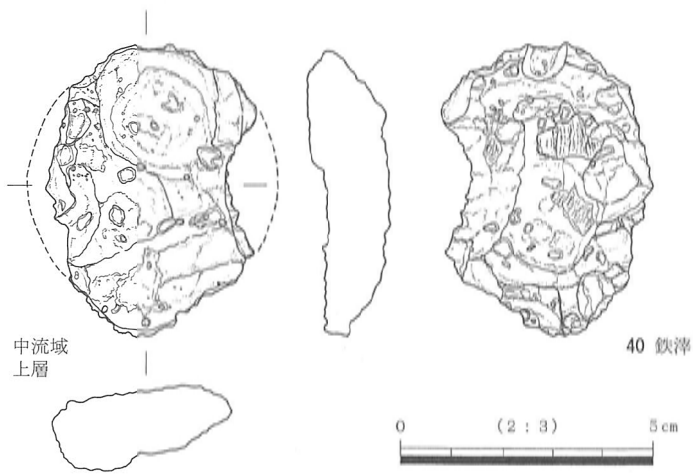
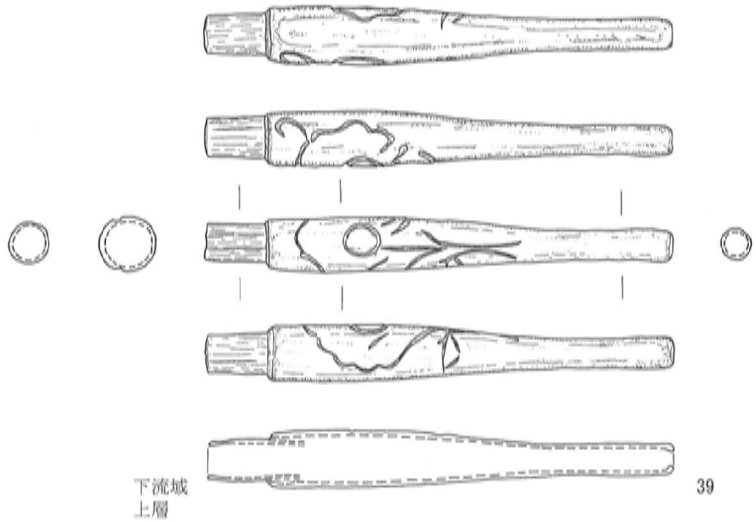
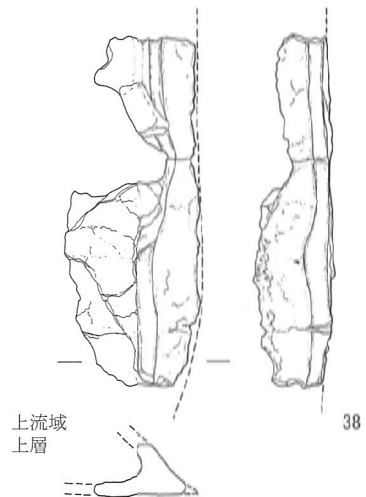


- | | |
|--|---|
| <p>1. 10YR 5/4 にぶい黄褐 シルト 1辺5-15 cmの角礫を含む 棚田石垣裏込め</p> <p>2. 2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂-中砂まじりシルト 現代作土層</p> <p>3. 10YR 6/8 明黄褐 中砂まじりシルトと10YR 7/1 灰白 シルトの互層 近世作土層</p> <p>4. 2.5Y 6/2 灰黄 中砂まじりシルト 2cm前後の小礫を含む 近世作土層</p> <p>5. 10YR 6/3 にぶい黄褐 細砂まじりシルト 炭・Mnを含む</p> <p>6. 10YR 5/4 にぶい黄褐 礫まじりシルト質粘土 2-7 cm前後の角礫を多く含む</p> <p>7. 10YR 5/4 にぶい黄褐 細砂-シルト 5 cm前後の角礫をわずかに含む</p> <p>8. 10YR 5/4 にぶい黄褐 礫まじり砂質シルト 2-7 cmの礫を多量に含む 炭・中砂を含む</p> <p>9. 10YR 5/3 にぶい黄褐 シルトまじり礫 3-5 cmの礫を含む</p> <p>10. 10YR 5/1 褐灰 礫まじり粘土 10-15 cm前後の礫を多量に含む</p> <p>11. 10YR 5/2 灰黄褐 シルト質粘土まじり礫 2-5 cmの礫を含む</p> <p>12. 10YR 5/6 黄褐 粗砂まじりシルト 炭・2-5 cm程度の角礫を含む</p> <p>13. 10YR 4/6 褐 中砂・シルトまじり礫 2-7 cm前後の礫を含む</p> <p>14. 10YR 5/6 黄褐 中砂まじりシルト</p> <p>15. 10YR 4/6 褐 礫まじりシルト質粘土 2-4 cm前後の礫を含む</p> <p>16. 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土まじり礫層 3-15 cmの礫を含む</p> <p>17. 10YR 5/4 にぶい黄褐 中砂まじりシルト 3-5 cm程度の礫をわずかに含む</p> <p>18. 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土まじり礫層 3-5 cm前後の礫を含むが14にくらべて少ない</p> | <p>19. 10YR 4/4 褐 細砂まじりシルト 炭を含む 礫ほとんど含まない</p> <p>20. 10YR 4/2 灰黄褐 シルト-細砂 1-2 cm程度の礫を含む</p> <p>21. 10YR 4/2 灰黄褐 シルト-細砂 10-30 cmの礫を含む</p> <p>22. 10YR 5/4 にぶい黄褐 粘土まじり礫 15 cm以上の礫を含む</p> <p>23. 10YR 4/4 褐 礫まじりシルト 2-15 cmの礫を含む</p> <p>24. 10YR 5/4 にぶい黄褐 シルト 炭・焼土粒を含む</p> <p>25. 10YR 4/3 にぶい黄褐 細砂まじりシルト 炭・Mnを含む 包含層</p> <p>26. 10YR 5/4 にぶい黄褐 粘土 礫は含まない</p> <p>27. 10YR 5/6 黄褐 細砂-シルト Fe・Mnを含む</p> <p>28. 10YR 6/1 褐灰 シルト-中砂</p> <p>29. 10YR 5/3 にぶい黄褐 シルト-中砂 1辺が2 cm前後の礫を含む
10YR 6/1 褐灰 シルトブロックMn含む</p> <p>30. 10YR 6/8 明黄褐 シルト質粘土</p> <p>31. N 5/0 灰-10Y 5/1 灰 シルト-粘土</p> <p>32. 10Y 5/1 灰 シルト-粗砂 1辺2-25 cm程度の礫を含む</p> <p>33. 10YR 5/3 にぶい黄褐 シルト-中砂 主体はシルト Mn含む 包含層か</p> <p>34. 33と同じだがやや粘質がある 包含層か</p> <p>35. 10YR 6/3 にぶい黄褐 シルト質粘土</p> |
|--|---|

※断面位置は第10図



第18図 川2 断面図



第19図 川2 出土遺物 (2/3 = 38~40)

第1章 丘陵上

序節

北摂山地南裾の丘陵である。南側が勝尾寺川に、東側が川合裏川に開析され、段丘崖となっている。丘陵上は、全体的に北摂山地寄りの北にいくほど地形が高い。

丘陵上では、おおよそ北西から南東に向けて流れる、川1・2を検出した。この両河川を境界として、西部、中部、東部の3地区に分割して報告することとする。

西部地区は、全体的に北西が高く南東が低い地形であるが、丘陵上においては比較的平坦な部分である。中部地区は、2条の川に挟まれた、北西から南東に伸びる尾根状の地形を呈する部分である。3地区のなかでは最も等高線が密である。東部地区は、丘陵上では比較的平坦な地形であるといえる。北側と東側は段丘崖に接し、南西側は川2によって深く開析されている。

層序

基本層序は、現代表土（竹藪の東部地区q域南部以外は水田作土）以下、近世作土層、時期不明の作土層、包含層である。

近世作土層は、明黄色（一部灰色砂混じり）のシルトで、ほぼ全域に存在し、床土とのセットが複数みられる部分も多い。また、その下に棚田造成に伴う盛土がある箇所もある。

上記の層の下に、同じく近世作土層と思われる灰色の細砂層が存在している箇所がある。5cm程度の薄い層で、全域でみられるわけではない。一部で畝群を確認している。

さらにその下に時期不明の作土層が1層ある。第464図の2層と3層である。両者は土質は異なるものの、畦畔を挟む同時期の層である。詳細な平面分布は不明であるが、主に前者はi域とj域の境界より東に、後者は西に分布する。西に分布する層は、灰褐色シルト～粘土で、床土を伴う水田作土と思われる。東に分布する層は褐色細砂～シルトで、下層の包含層に砂が混じった土質である。厳密には確認できていないが、この層からは染め付けなど近世の遺物の出土がみられず、近世以前の作土層である可能性がある。

包含層は、褐色シルト層である。ただ、東部地区q域でのみ土質が異なり、にぶい黄橙色シルト～細砂である。全体的に棚田の大規模な造成によって削平を受けており、遺存していない範囲の方が広い。特に等高線の間隔が狭い中部地区は、遺存している範囲がきわめて狭い。折り込みの第21図は西部地区を南北に縦断する断面図である。比較的旧地形が平坦で、調査地のなかでも比較的包含層の遺存状況がよい地区においても、棚田造成の際に著しい削平を受けていることがみてとれる。

川2内ピット列（第20図）

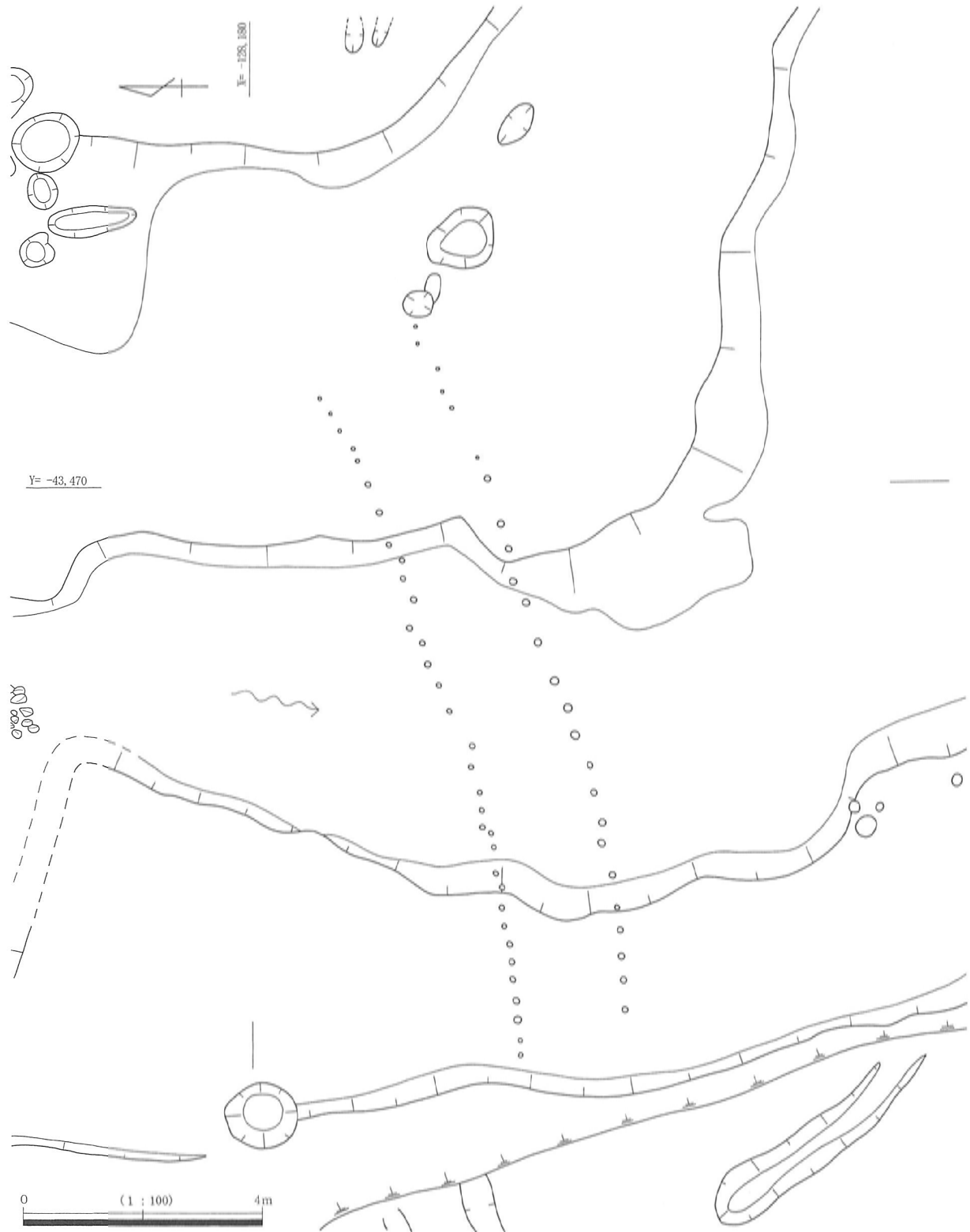
川2内で、川の流れに垂直方向の、並行する2列の枕列を検出した。北列は34基、南列は25基のピットからなる。ピットの直径は約0.1m～0.2mである。

ピット間は北列で0.3m前後、南列で0.5m前後で、両列の間はほぼ一定で約2mである。直線的ではなく、若干弧状を呈する。部分的にピットの並びがイレギュラーになっているが、その歪みは両列で対

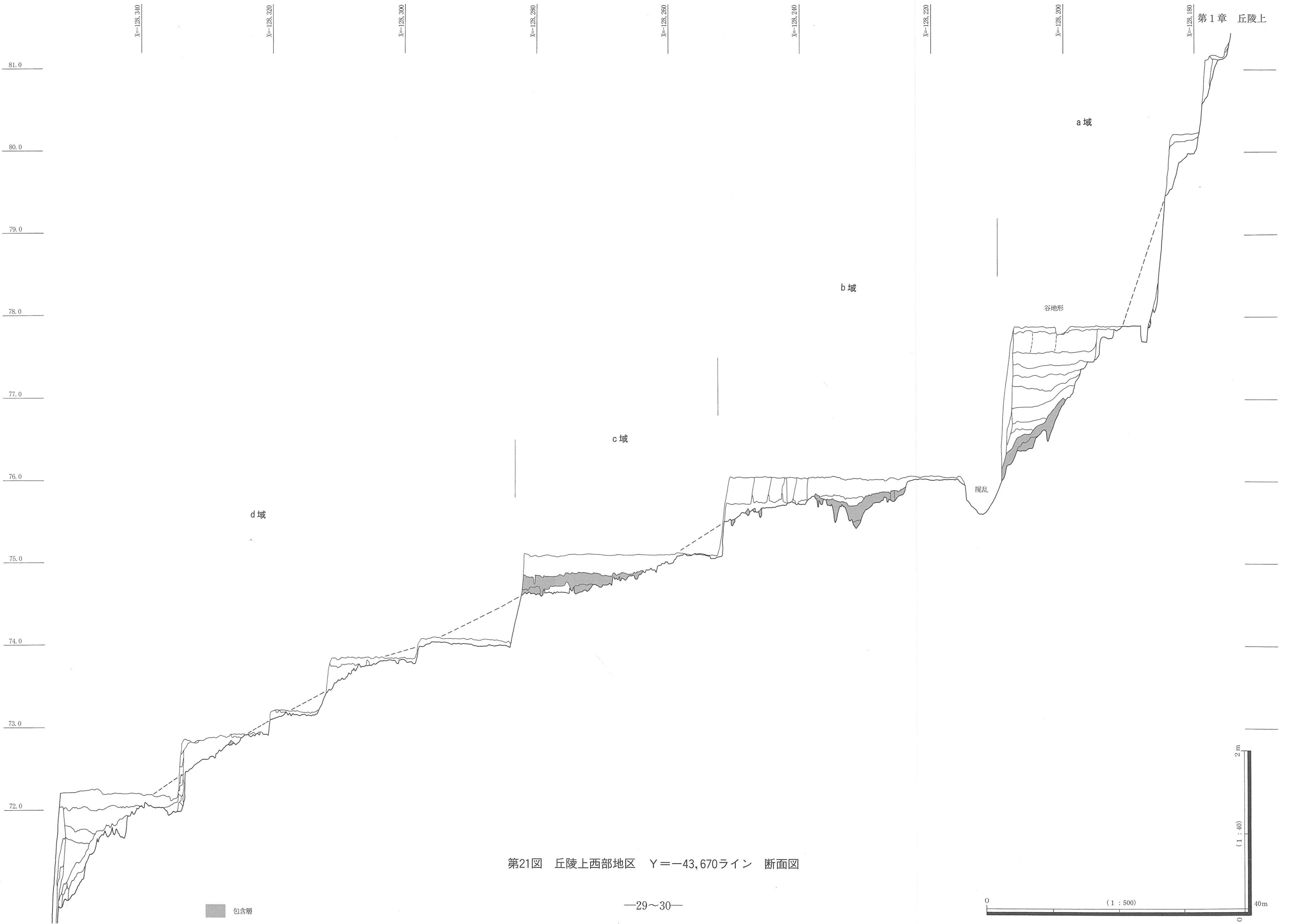
応している。

極めて簡単な構造のものであると思われるが、橋状のものを構成していたのではないかと考えられる。調査地内では上流域で、深さ約1.0mと比較的浅い箇所に位置する。これより下流は深さが増し、設置することは難しい。東部地区と中部地区の行き来に使われていたのではないだろうか。

遺物は出土していないため、時期は不明である。



第20図 川2内ピット列 平面図



第21図 丘陵上西部地区 Y=-43,670ライン 断面図

第1節 丘陵上西部



第22図 丘陵上西部 全体図 (1 : 1,500)

第1項 a域(付図1・2)

調査地全体の北西角にあたる。丘陵上西部は比較的平坦な地形であるが、この部分より北、調査地外は等高線が密になり、北摂山地の様相を呈しはじめる。北側の部分は尾根と谷地形の入り組んだ地形となっており、a域はその尾根の先端、およびその直下のやや平坦な部分にあたる。南側はb域で、東側が川1を挟んでh域である。

主な遺構には、建物8棟・井戸1基・焼土坑3基などがあり、他に、溝・土坑・ピットなどがある。

建物1(第23・24図 図版16・17)

西部に位置し、すぐ北側は調査地外である。南北2間×東西1間、約5.0m×4.1m、面積約20.5㎡である。主軸は、N-4.5°-Wを向く。東西は1間であるが、広い柱間をもつ。東辺、西辺ともに柱穴の規模は南北中央の柱穴(2・5)が相対的に浅い。

12世紀前葉~13世紀前葉かと思われる土師器皿、瓦器碗の小片が出土している。

重複している建物2とは同様の構造である。前後関係は不明である。

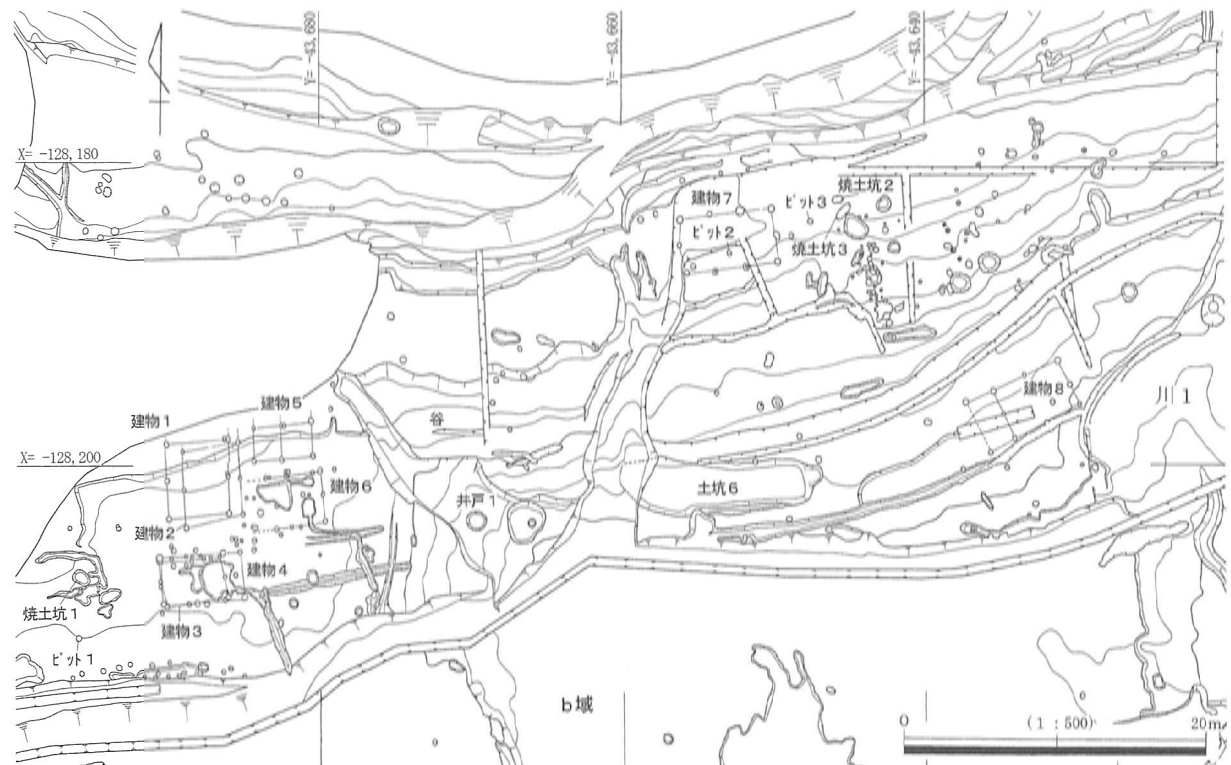
建物2(第23~25図 図版16・17)

西部に位置し、すぐ北側は調査地外である。南北2間×東西1間、約5.0m×3.8m、約19.0㎡である。平面形は、菱形状にやや歪んでいる。主軸は、N-4.5°-Wを向く。東辺、西辺共に中央の柱穴(2・5)が相対的に浅い。東西の柱間が広い。建物1と重複する。

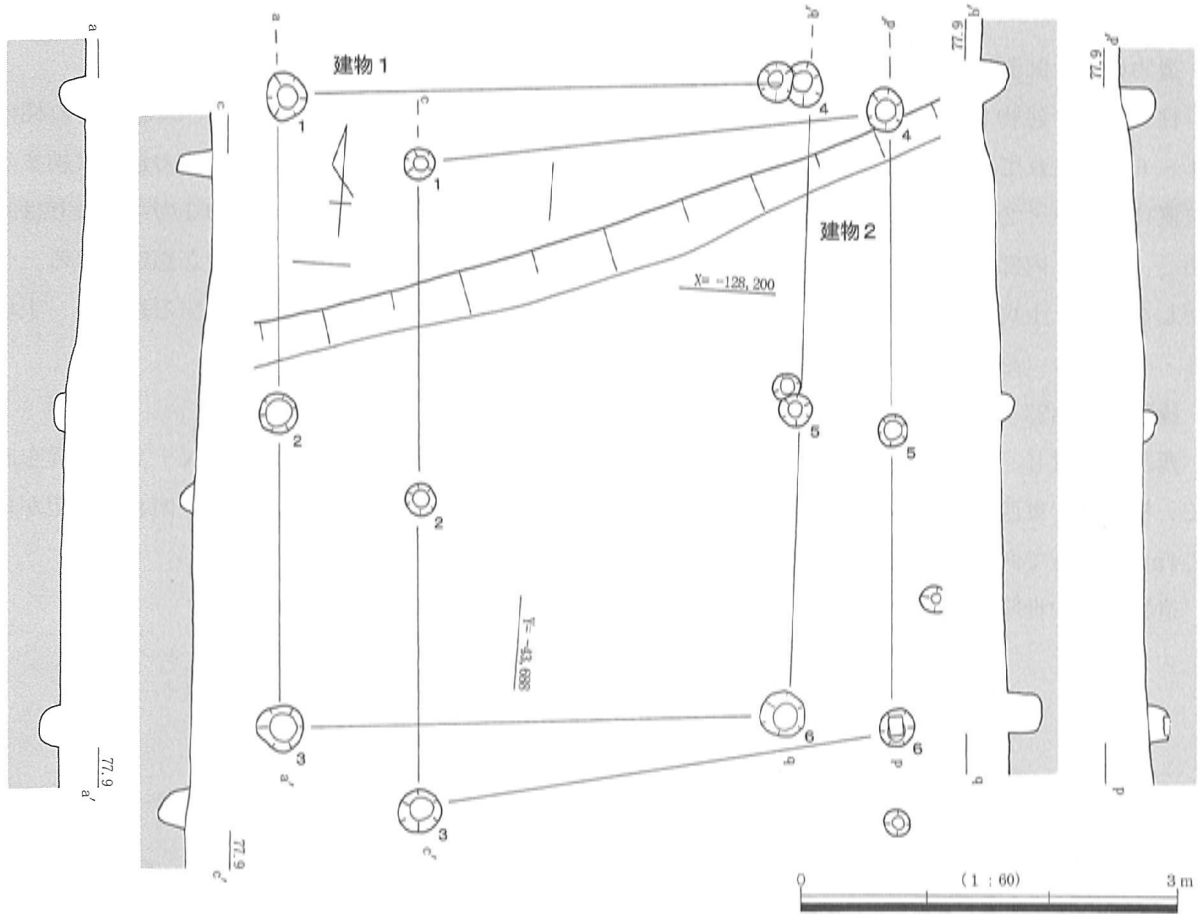
遺物は、12世紀中葉~13世紀前葉かと思われる土師器大皿・煮炊具、瓦器碗などの小片が出土している。

建物3(第23・26図 図版16・18)

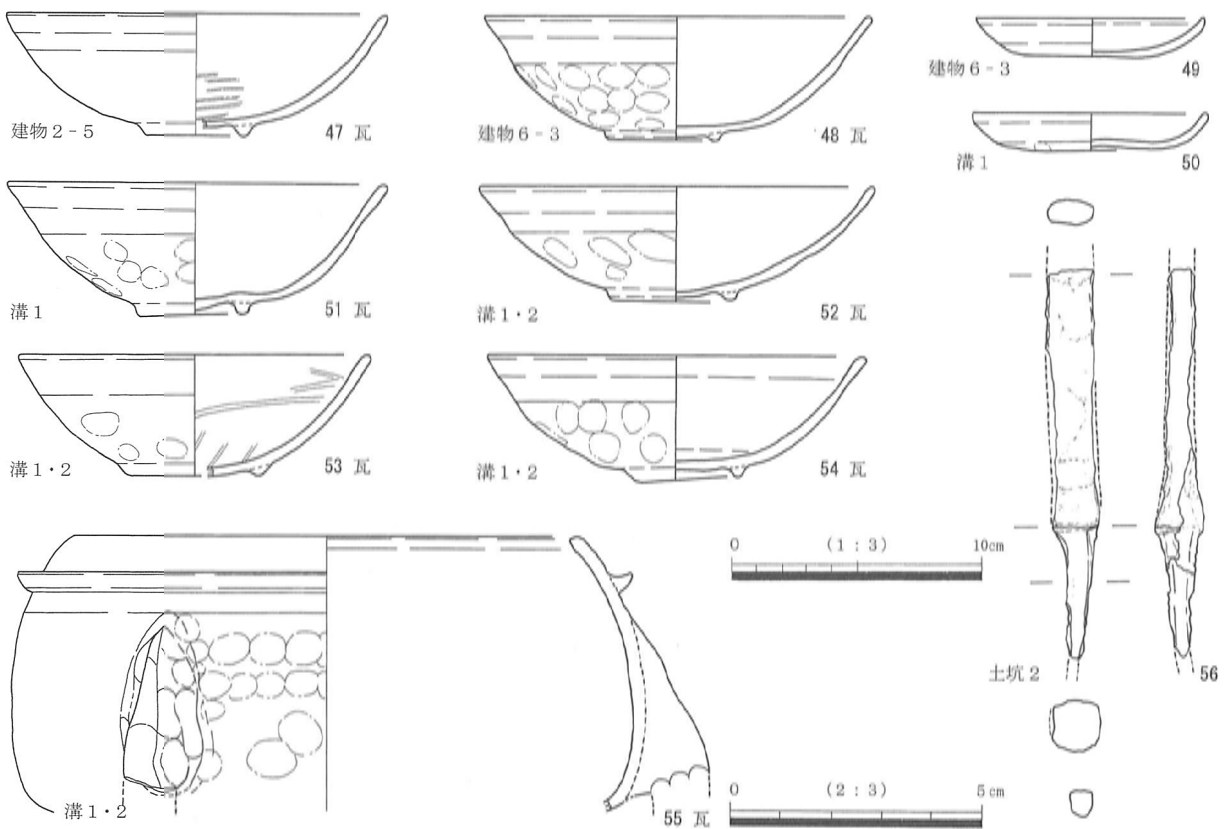
西部に位置し、東西2間×南北2間、約4.2m×2.8m、約11.8㎡である。主軸は、N-6.5°-Wを向く。面積、柱穴の規模ともに小規模である。柱間は、東西約1.9m~2.1m、南北約1.4m~1.6mであ



第23図 a域 平面図



第24図 建物1・2 平面・断面図



第25図 建物2・6 溝1・2 土坑2 出土遺物 (2/3=56)

る。

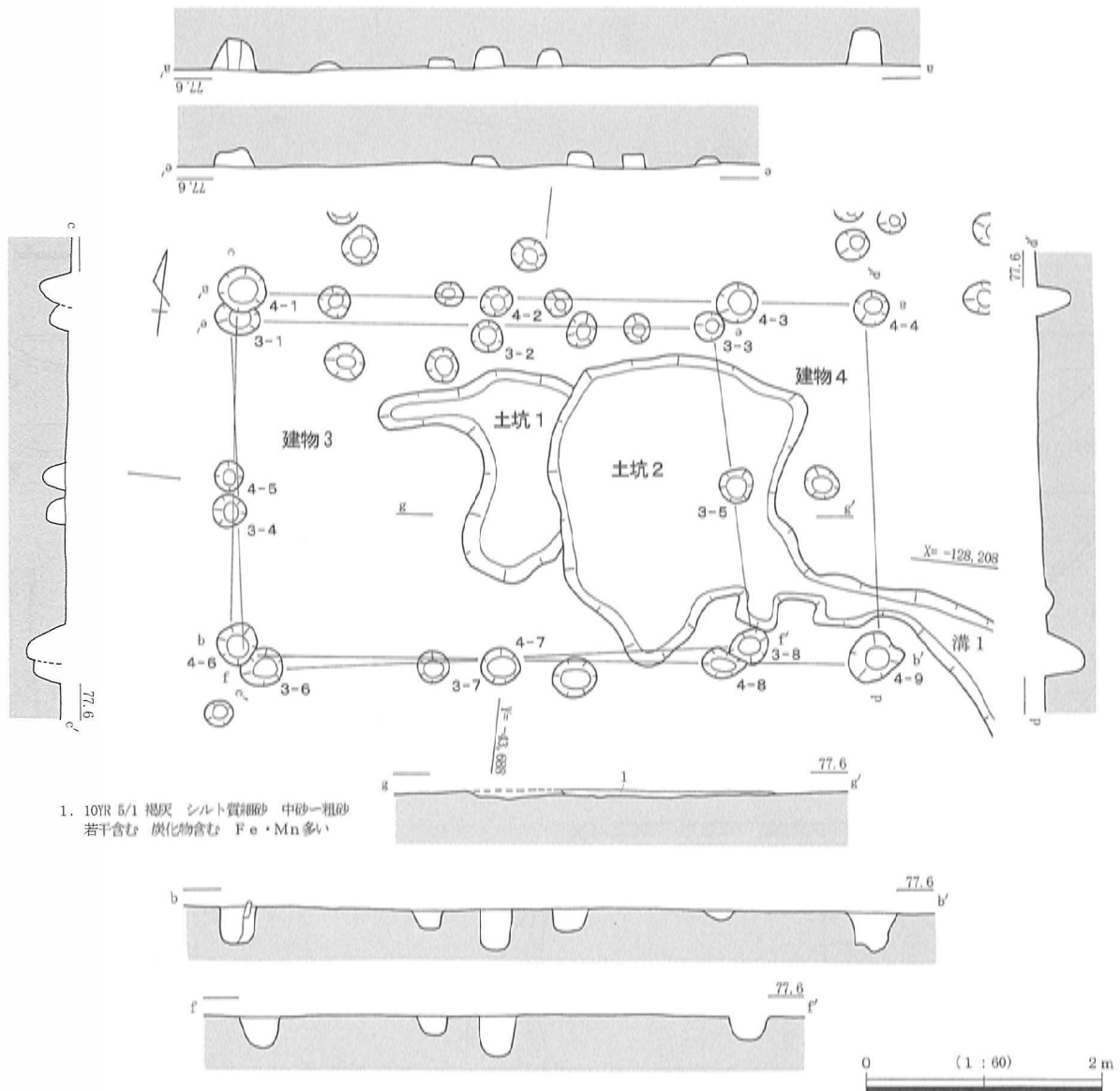
遺物は、土師器小皿、瓦器椀の小片が出土したのみである。

柱穴7は、建物3・4で使用されていたと思われる。建物3の柱穴1・6がそれぞれ建物4の柱穴1・6に切られており、建物4が新しく、東側に1間拡張したことが想定できる。2棟の建物に納まる位置に土坑1・2があり、これらにも切り合い関係がみられる。新しい土坑2が建物3の東辺よりはみ出し、建物4内部に納まることから、建物3と土坑1、建物4と土坑2の組み合わせが想定できる。しかしながら、土坑2と建物3の柱穴5との切り合いは確認していない。北東に、類似する建物6、土坑3・4がある(第28図参照)。

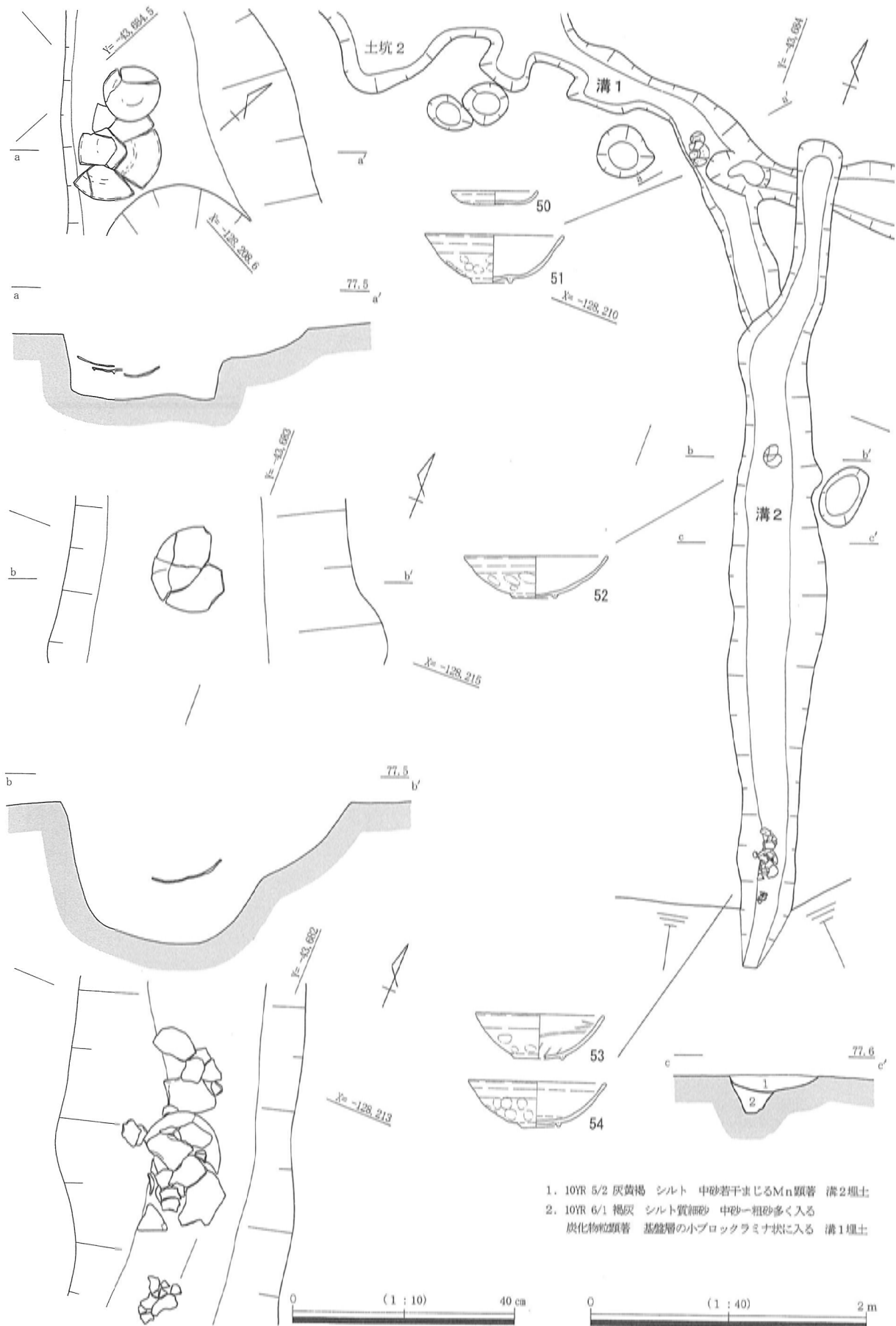
建物4 (第23・26図 図版16・18)

西部に位置し、東西3間×南北2間、約5.4m×3.1m、約16.7㎡である。主軸は、N-7°-Wを向く。柱間は、東西の東端の1間が約1.2m~1.3mとやや狭く、他が約1.9m~2.3mで、南北の西辺が約1.4m・1.6mである。東辺は中央に柱穴がなく、1間である。

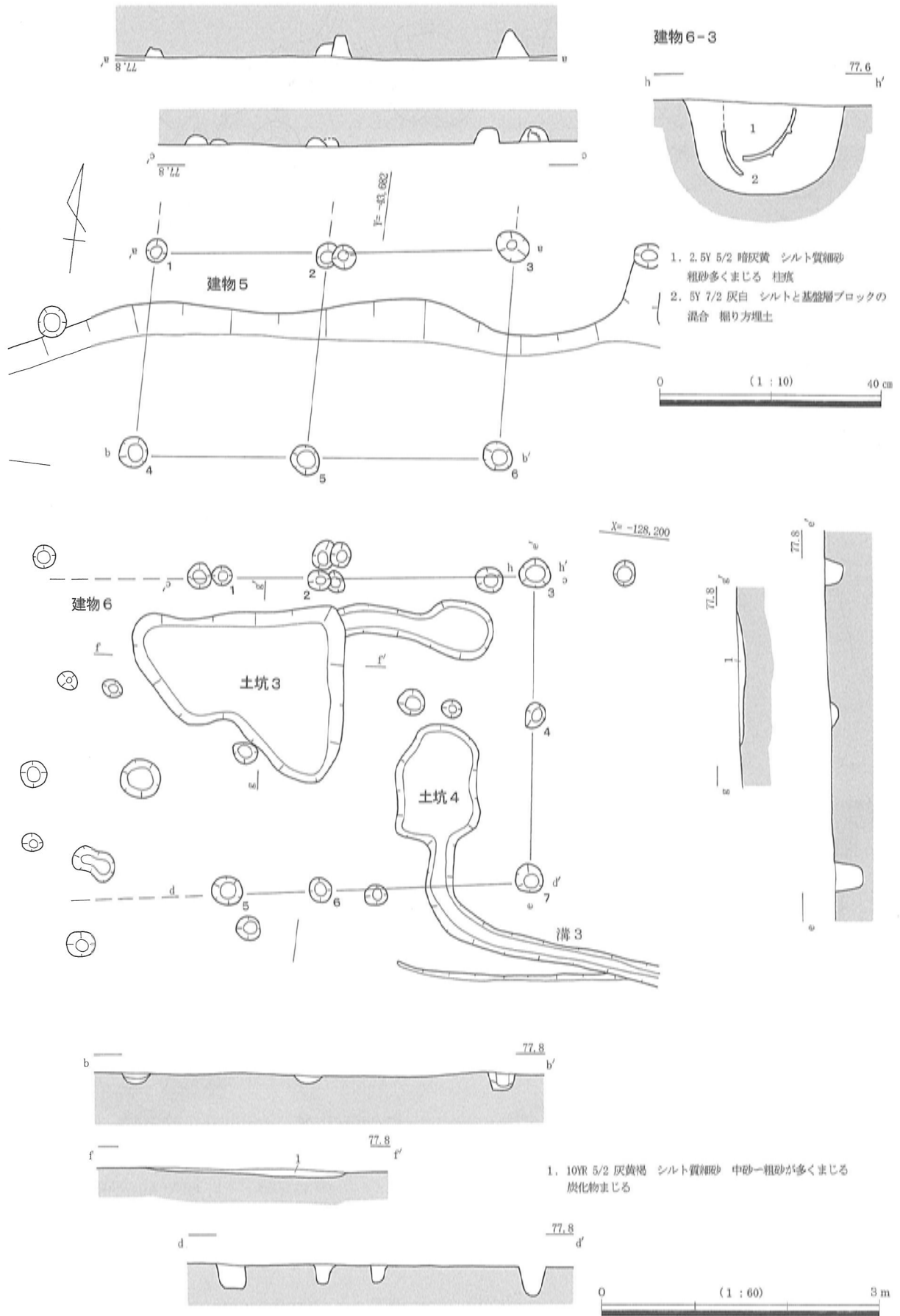
遺物は、12世紀の土師器皿、和泉型瓦器椀などが出土している。



第26図 建物3・4 土坑1・2 平面・断面図



第27図 溝1・2 平面・断面図



第28図 建物5・6 土坑3・4 平面・断面図

建物3を切っており、位置関係から、土坑2との関連が想定される。

建物5（第23・28図 図版16・19）

西部に位置し、東西2間×南北1間、約3.9m×2.2m、約8.6㎡である。主軸は、正方位を向く。北側の調査地外に続いている可能性がある。柱間は、東西約1.9m～2.1m、南北約2.2m～2.3mである。

出土遺物はほとんどなく、時期が不明である。

建物6（第23・25・28図 図版16・19・167）

西部に位置し、東西2間以上×南北2間、約3.3m以上×3.3m、約10.9㎡以上で、小規模な建物である。主軸は、N-5°-Wを向く。

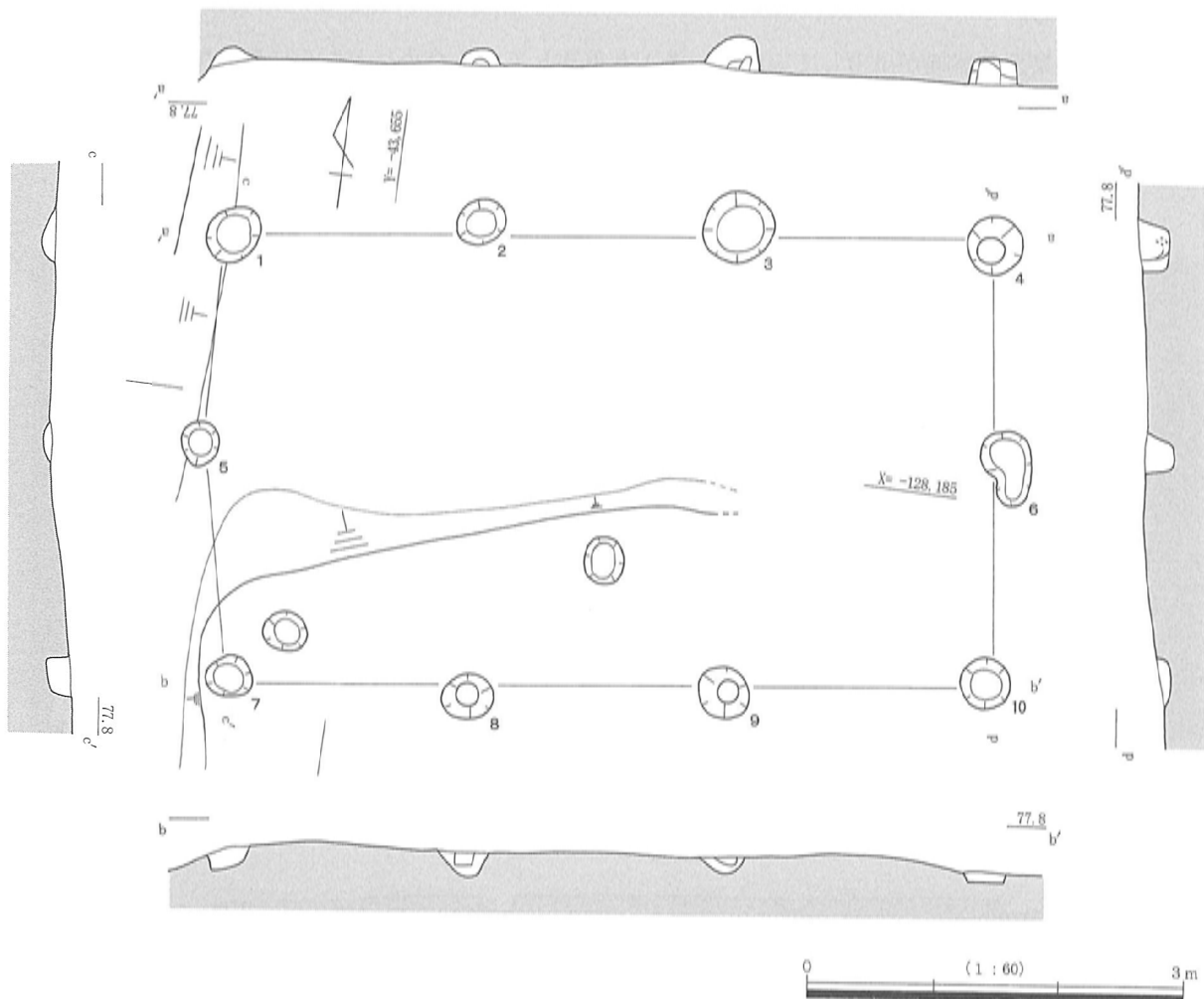
遺物は、柱穴3から完形の瓦器椀と土師器皿が出土している。12世紀中葉～後葉のものであると思われる。

土坑3・4が内部に位置する。建物3・4と同様に、これらの土坑との関連が想定できる。

建物7（第23・29図 図版20）

東部に位置し、北は尾根先端の崖面に接する。東西3間×南北2間、約6.2m×3.6m、約22.3㎡である。主軸はN-6°-Wを向く。柱間は東西約2.0m～2.1m、南北約1.8mである。

遺物は、柱穴7から12世紀中葉～13世紀の土師器皿の小片が出土している。また柱穴8からは鉄釘が出土している。



第29図 建物7 平面・断面図

北側の崖下から西側にかけて溝5があり、これが建物に付属するものであれば、尾根からの雨水などの排水の機能を果たしていたと想定される。

建物8 (第23・30図 図版20)

東部に位置し、川1西岸に立地する。東西3間×南北2間、約6.7m×3.5m、約23.5㎡である。主軸は等高線に沿い、正方位からは27°西へ振れている。西辺中央の柱穴の有無は確認できなかった。川1に向かう溝に柱穴9が切られる。

遺物は、細片が出土したのみである。

溝1 (第25・27図 図版18・167)

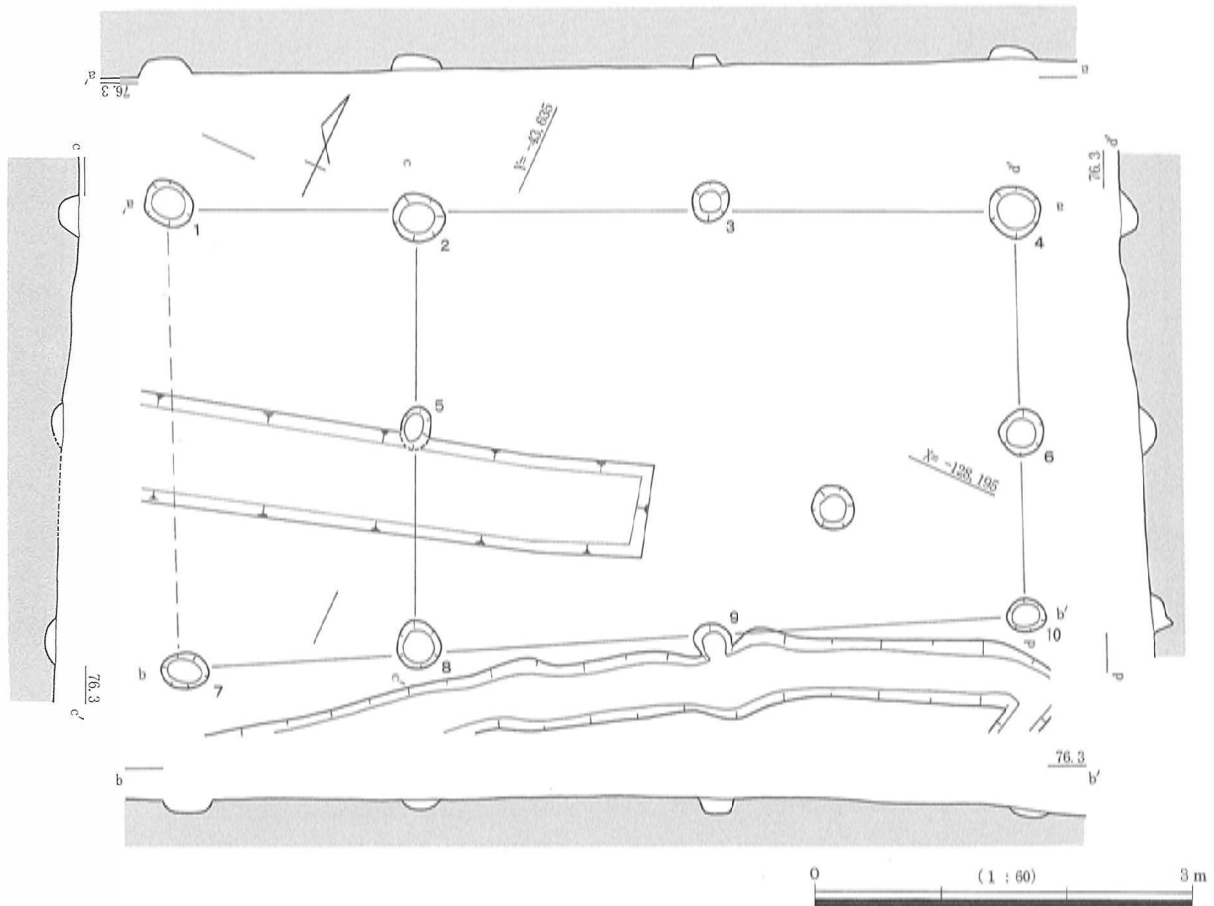
土坑2から伸びる溝である。土坑の南東隅から東南東へ約2m伸びた箇所で分岐し、東行する部分と南行する部分に分かれる。検出長約11.5m、幅約0.3m~0.7m、深さ約0.1m~0.3mである。東行部分は、谷地形に向けて約10m伸びており、途中、直交する溝3に切られている。南行する部分は、溝2と重なっており、これに切られている。地形の低い方へと伸び、土坑2からの排水機能を果たしていたと考えられる。

枝分かれ部分で完形に近い土師器皿と瓦器椀が出土しており、12世紀中葉~後葉の時期が考えられる。

溝2 (第25・27図 図版18・167)

西部に位置する南北方向の溝である。検出長約5.9mで、幅約0.3m~0.7m、深さ約0.1mである。溝1を切っている。

遺物は、和泉型瓦器椀が出土しているが、溝1と重複しているため、どちらに属しているか不明である。



第30図 建物8 平面・断面図

る。

位置関係から、溝1を再掘削した可能性がある。

溝3（第28図）

土坑4の南端から南へ約1m伸び、屈曲し東行してからさらに南へ屈曲している溝である。全長が約7.8m、幅が約0.2m～0.6m、深さが0.1m以内である。土坑4からの排水機能をもつと思われる。南端付近で溝1を切っている。

遺物は、12世紀中葉～13世紀前葉と思われる和泉型瓦器椀、東播系須恵器鉢の小片がある。

溝5

尾根先端部の崖下に立地し、現代里道の直下で検出した、西端部で南に曲がるカギ型の溝である。長さは東西約7.0m、南北約7.0mで、幅が約1.9m、深さが約0.3mである。埋土から人為的な埋め戻しがおこなわれたことが想定できる。底面で集石1を検出しているが、溝との関係は不明である。内部のピットは埋没前のもので、柵または塀であった可能性も考えられる。

遺物は、磨滅した細片が少量出土したのみである。

井戸1（第23・33図 図版21）

中央部の浅い谷地形の底に位置する。楕円形で、長径約1.4m、短径約1.2m、深さ約1.1mである。埋土に基盤層のブロックを含み、人為的に埋め戻されたようである。壁は垂直で、底面は平らである。井戸というよりは水溜めの機能をもっていたと想定できる。

遺物は、12世紀中葉～後葉を中心とする土師器、須恵器、和泉型瓦器椀などの小片と骨片が出土している。骨片は、安部みき子氏に鑑定を依頼し、馬の可能性があるとの結果を得ている。

ピット1（第23・33・34図 図版20・168）

西端部で検出したピットで、径約0.1m、深さ約0.1mである。篠窯須恵器の小壺が逆さまの状態出土した。小壺は口縁の一部が欠損しているが、意図的に打ち欠いたものか不明である。壺内に入っていた土を洗浄したが、何も認められなかった。ピットと土器の大きさがほぼ同じであることから、土器の埋納をおこなった遺構であると思われる。

壺は、10～11世紀前葉の時期が考えられる。周辺にこの時期のものと確認できる遺構はこれのみであり、包含層からも同時期の遺物はほとんど出土していない。

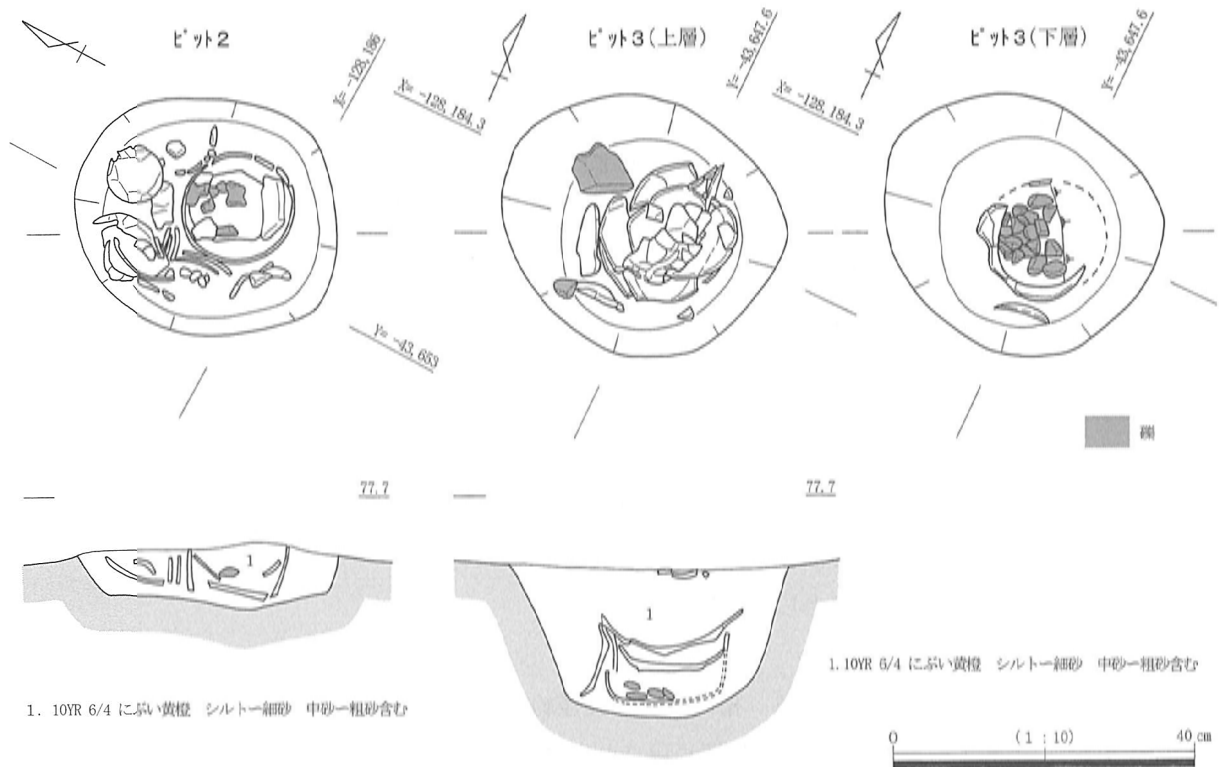
ピット2（第23・31・32図 図版21・168）

東部に位置し、円形で、径約0.3m、深さ約0.1mである。遺物の出土状況から上部が削平を受けたと考えられる。瓦質土器が正置の状態出土し、中には小石が数個入っていた。また、回転台土師器皿が瓦質土器の周辺などから出土した。土器の埋納をおこなったと思われる。

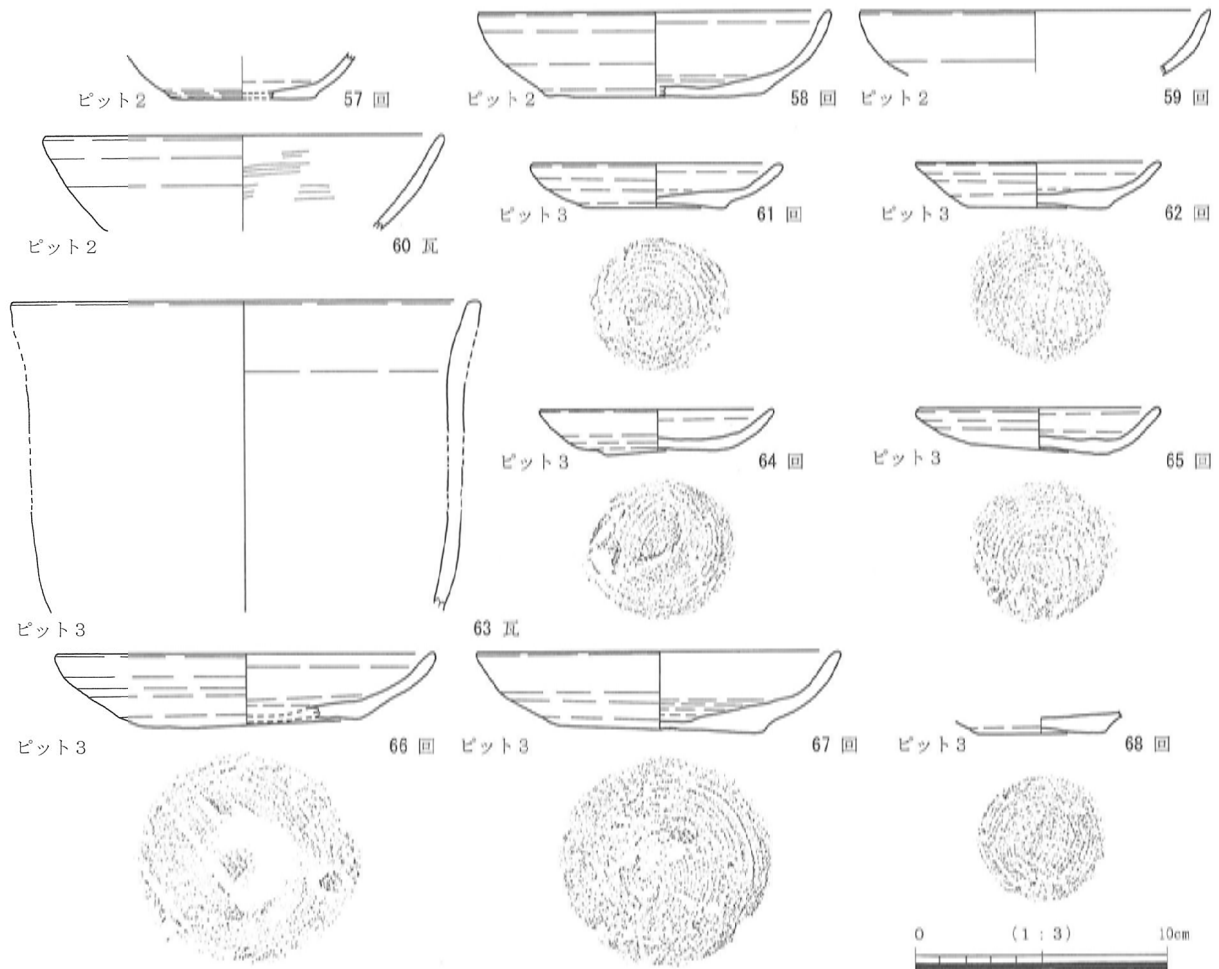
遺物は、瓦質土器、回転台土師器皿、和泉型瓦器椀片が出土した。瓦質土器はきわめて遺存状態が悪く、底部が遺存していたものの体部は痕跡を留めるのみであった。平底で筒状の体部をもち、ピット3出土の瓦質土器と同様のものと思われる。土師器で確認できるものはすべて回転台土師器である。回転台土師器は大皿・小皿が出土しているが、粉碎しており復元困難である。瓦器椀は小片が1点出土したのみである。約5.4m東側に位置するピット3と同種の遺構と考えられる。

ピット3（第23・31・32図 図版21・167・168）

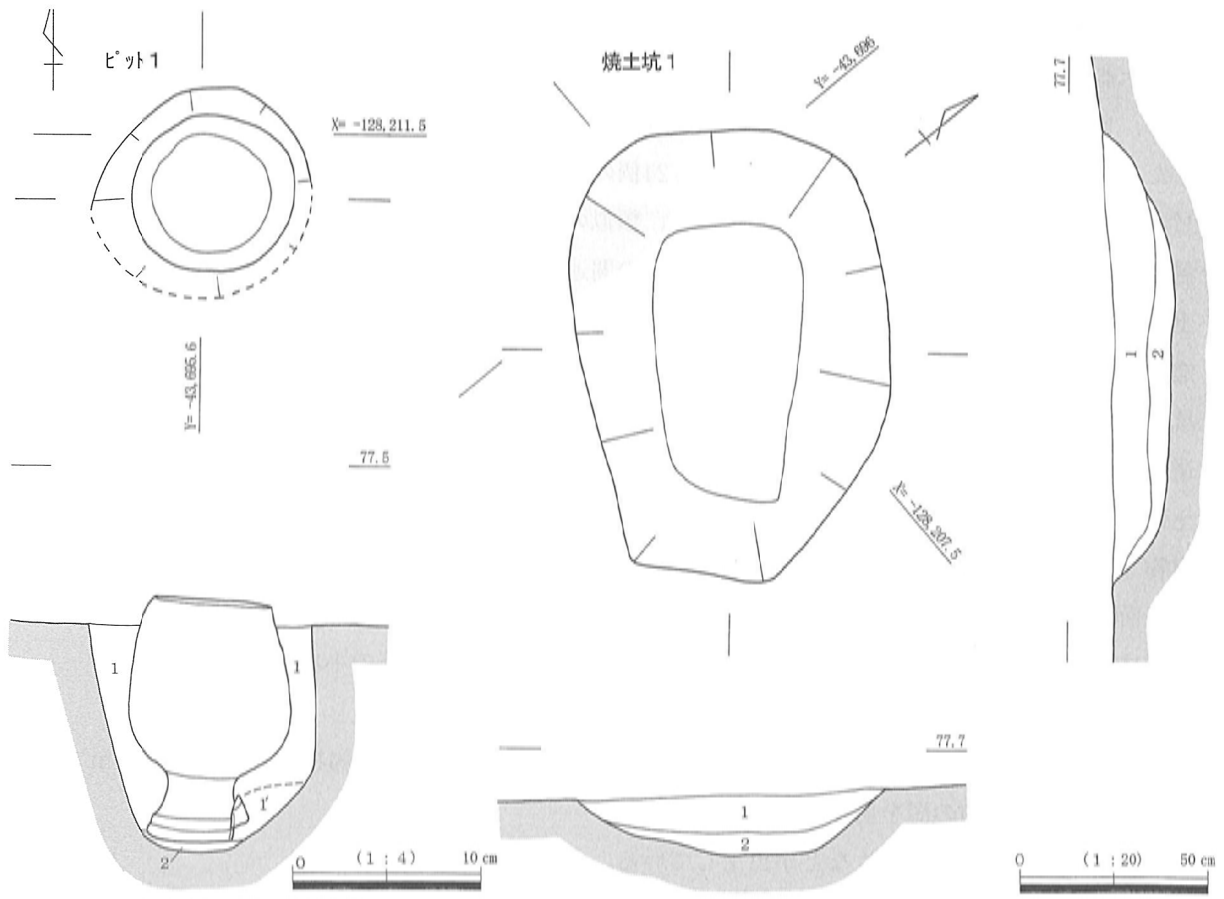
ピット2の東側約5.4mに位置し、径約0.4m、深さ約0.2mである。ピット2同様、瓦質土器と回転台土師器が出土した。瓦質土器は遺存状態が悪いが、痕跡から平底と推定できる。その内部には回転台



第31図 ピット2・3 平面・断面図

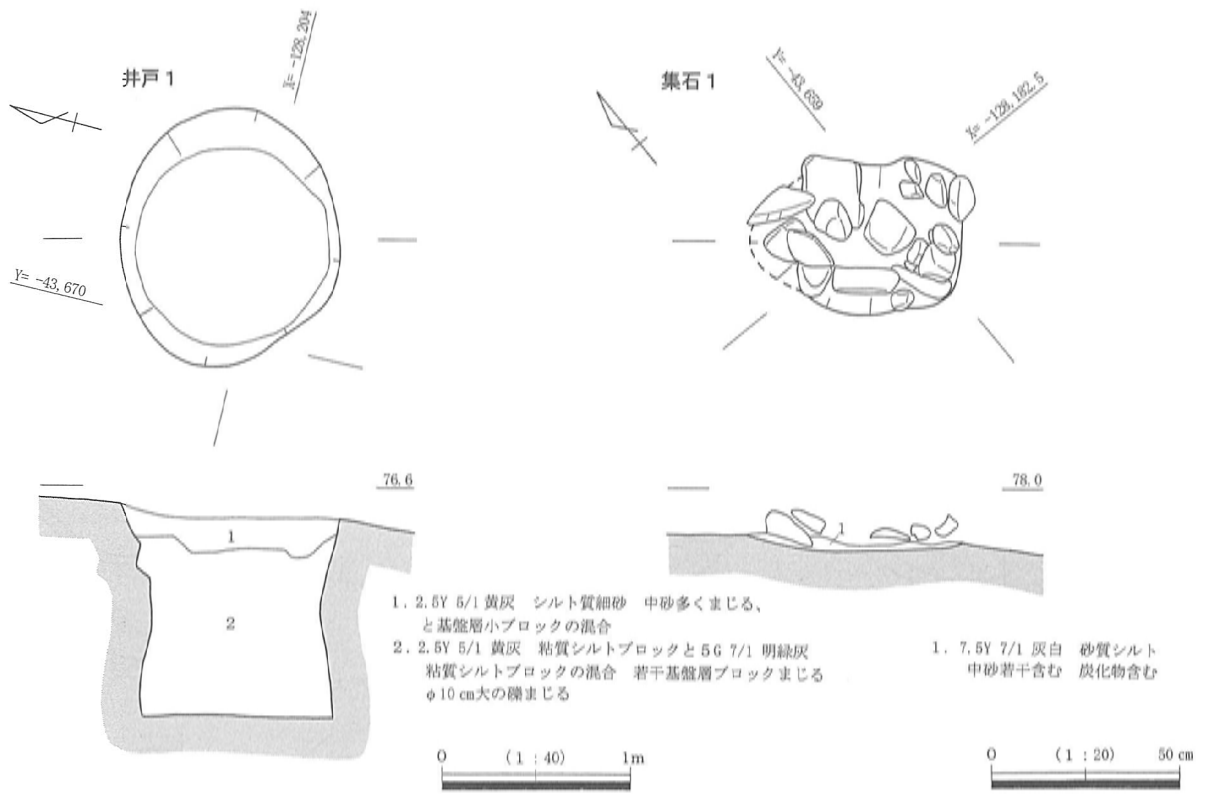


第32図 ピット2・3 出土遺物



1. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト 細砂-中砂多く含む
粗砂・小礫わずかに含む
1' 基盤層ブロック若干まじる
2. 2.5Y 7/1 灰白 シルト

1. 7.5YR 5/2 灰褐 シルト質細砂 中砂-粗砂含む Mn・Fe多く含む
2. 炭化物・灰層



1. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト質細砂 中砂多くまじる、
と基盤層小ブロックの混合
2. 2.5Y 5/1 黄灰 粘質シルトブロックと5G 7/1 明緑灰
粘質シルトブロックの混合 若干基盤層ブロックまじる
φ10 cm大の礫まじる

1. 7.5Y 7/1 灰白 砂質シルト
中砂若干含む 炭化物含む

第33図 井戸1 ピット1 焼土坑1 集石1 平面・断面図

土師器皿が正置で数枚重なっており、底部からは小石が出土した。土器の埋納をおこなったと考えられる。

瓦質土器は口径が回転台土師器大皿より一回り大きいものである。回転台土師器は瓦質土器の外にもみられ、ピット内で大皿が完形2点と破片が最低でも1点、小皿が完形4点と破片が最低でも1点を確認した。小石は、井本伸廣氏に鑑定を依頼し、24個の内7個が砂岩、17個が頁岩であるとの結果を得た。

ピット2と遺物の出土状況が同様なことから、類似の遺構であると思われる。なお、これらの東側に位置し、回転台土師器が出土した焼土坑2・3との関連性も考慮する必要があるだろう。

土坑1 (第26図 図版18)

建物3・4内部に位置し、南北約1.8m、東西1.5m以上、深さ0.1m前後の浅い不定形の土坑である。土坑2に切られており、全容は不明である。

遺物は、瓦器の小片がわずかにみられるのみである。

土坑2 (第25～27図 図版18・237)

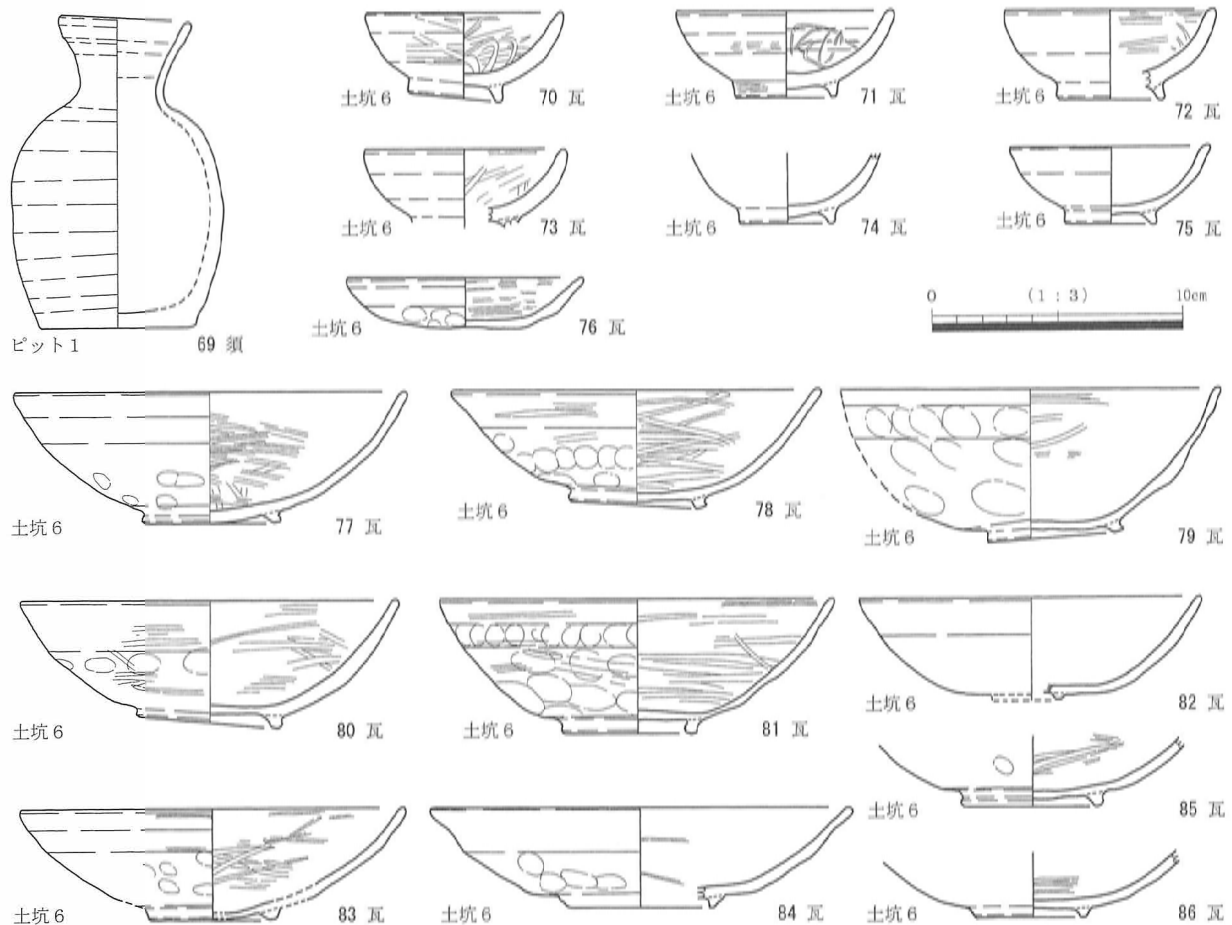
建物3・4内部に位置する。東西約2.1m、南北約2.5mの不定形の土坑である。深さが0.1m弱と浅く、底面に凹凸がみられ、南東隅から溝1が伸びている。土坑1を切っている。

遺物には、鉄鏝1点、および12世紀後葉～13世紀前葉の和泉型瓦器碗の小片などがみられる。

土坑3 (第28図 図版19)

土坑4とともに建物6内部に位置する。不定形で、東西約2.3m、南北約1.9m、深さ約0.1mである。東に位置する東西方向の溝を切っている。

遺物は、和泉型瓦器碗の小片などが出土している。



第34図 ピット1 土坑6 出土遺物

土坑4 (第28図 図版19)

建物6内部、土坑3の南東に位置する土坑である。楕円形で南北約1.3m、東西約0.8m、深さ0.04mである。南端から溝3が伸びている。

遺物は出土していない。

土坑6 (第23・34・35図 図版21・169)

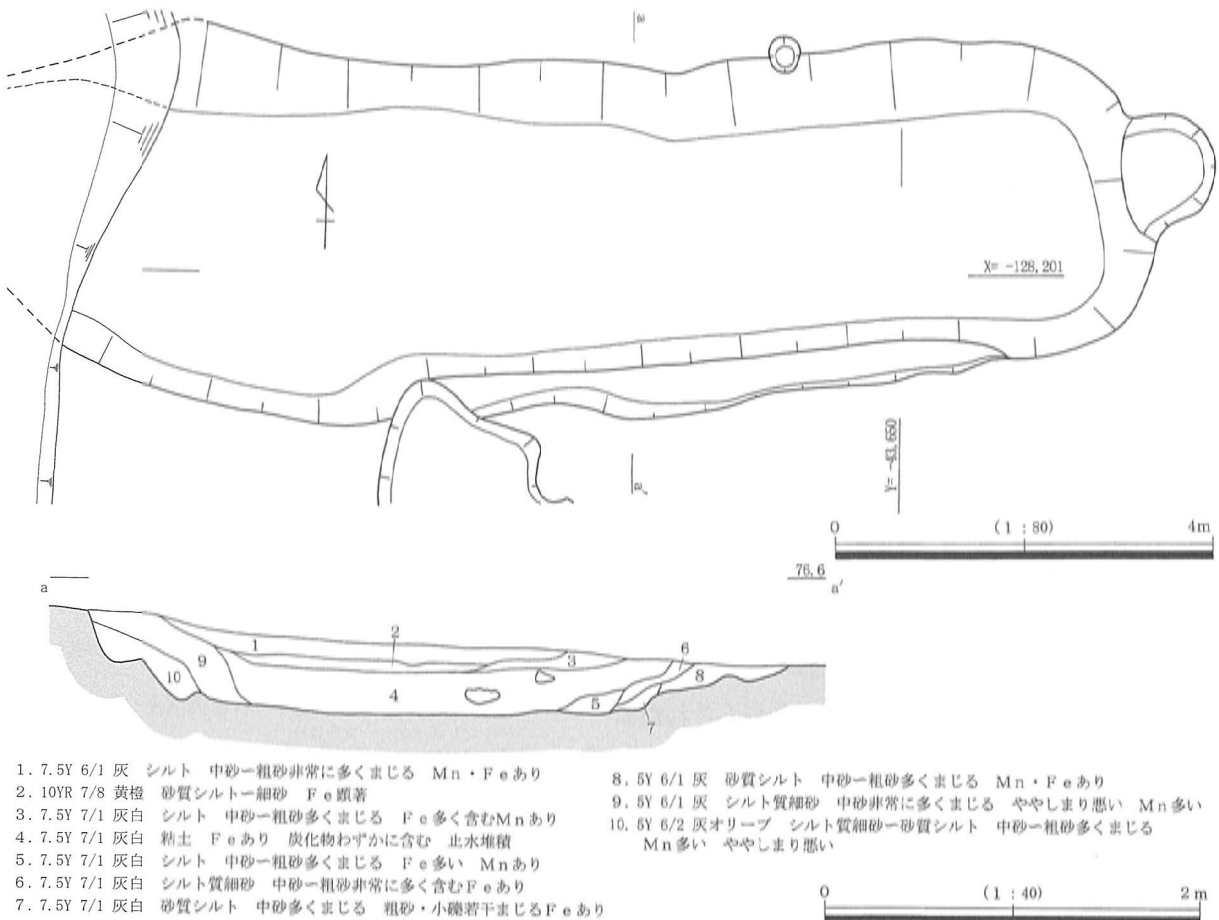
やや歪な隅丸長方形の大型の土坑である。西端は後世の里道および溝によって削平されている。4層は灰白色粘土、5～8層が灰白色シルトで、止水堆積と思われる。4層に礫と遺物が含まれていた。

遺物には全体的に小片が多く、磨滅の著しいものもみられる。瓦器椀・皿、土師器大皿・小皿、白磁碗、須恵器甕、土師器煮炊具、焼土塊などである。遺跡全体をみてもこの遺構以外ではあまり出土していない小型の瓦器椀が数個体出土しているのが特徴的であり、瓦器椀にバラエティがある。11世紀後葉のものもわずかに含むが、ほぼ12世紀中葉～13世紀前葉のものである。

焼土坑1 (第23・33図 図版21)

西端部に位置するやや歪な方形の土坑で、長さ約1.2m、幅約0.8m、深さ約0.2mである。埋土下層は炭層である。壁の一部に被熱痕跡が認められる。北側の溝が同時に存在していたとすれば、防水の機能を果たしていた可能性が考えられる。

遺物の出土はない。



第35図 土坑6 平面・断面図

焼土坑2 (第23・36・38図 図版22・23・172)

東部に焼土坑3と隣接して位置する。西部分は、後世の棚田造成で削平されていた。焼土坑3と同様な規模をもつ長楕円形と想定される。検出長約0.7m、幅約0.4m、深さ約0.2mである。

壁がほぼ垂直に立ち上がる。壁および底面は被熱しており、厚さ2cm程焼け締まり、橙色～赤褐色化している。

出土した遺物は土師器のみで、器種が確認できたものはすべて回転台土師器皿である。図示したものが7点あり、その他に若干の破片がある。大皿と小皿があり、底部切り離し痕は磨滅のため良く観察出来ないものが多いが、判断し得たものはすべて糸切りである。大皿は焼土坑3出土のものに比べて、体部が底部から内湾しながら立ち上がっている。

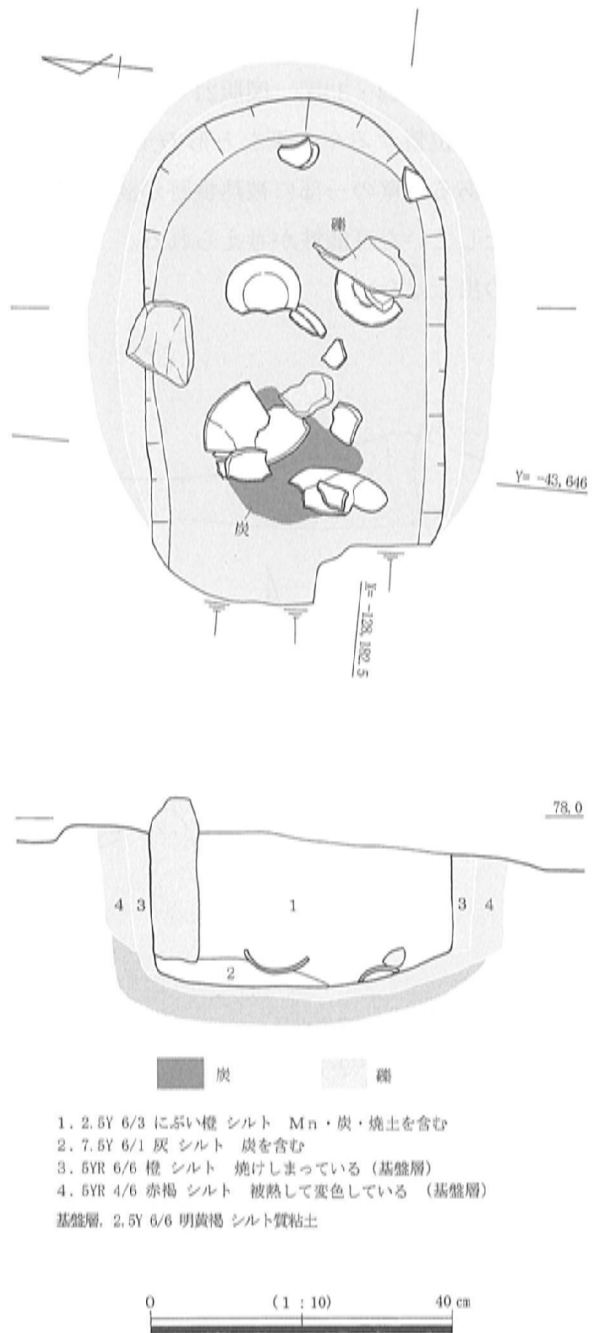
焼土坑3と同種の遺構と思われ、回転台土師器焼成遺構であると考えられる。

焼土坑3 (第23・37・38図 図版22・23・169～172)

焼土坑2の南側に位置し、長楕円形と考えられ、検出長約1.2m、最大幅約0.5m、深さ約0.2mである。短辺の壁は垂直に立ち上がるが、北東端部の壁の立ち上がりは緩やかである。底面は北東から南西方向へと低くなっており、南西端ではやや底面が高くなってくるものの、壁の立ち上がりは顕著ではない。底面の高い北東半分では壁がよく焼け締まり、橙色～赤褐色を呈する。北東部の底面中央部も壁ほど強くはないが被熱しており、橙色を呈する。ただし、壁の立ち上がり部周辺は被熱痕跡が顕著ではない。南西部も被熱している可能性があるが、その痕跡は確認できなかった。北東部では非常に強い被熱の痕跡を残しており、南西部が被熱していたとしても北東部に比べて弱いものであったと考えられる。中央部にはごく薄い炭層がみられた。

焼土坑2の主軸が東西方向であるのに対し、主軸方向が北東-南西方向である。南東部は棚田造成による削平を受けている。

多数の回転台土師器皿が、北東部の底面に近い部分で出土した。これは底面に強い被熱がみられた箇所と一致する。土器は、完形に近い状態に復元できたが、破片が重なって出土しており、完形のものも秩序だて置かれていたとは考えられない。礫も多く出土しているが、上層からの出土でほとんどが土器よりも上に位置し、様々な大きさのものがみられ、



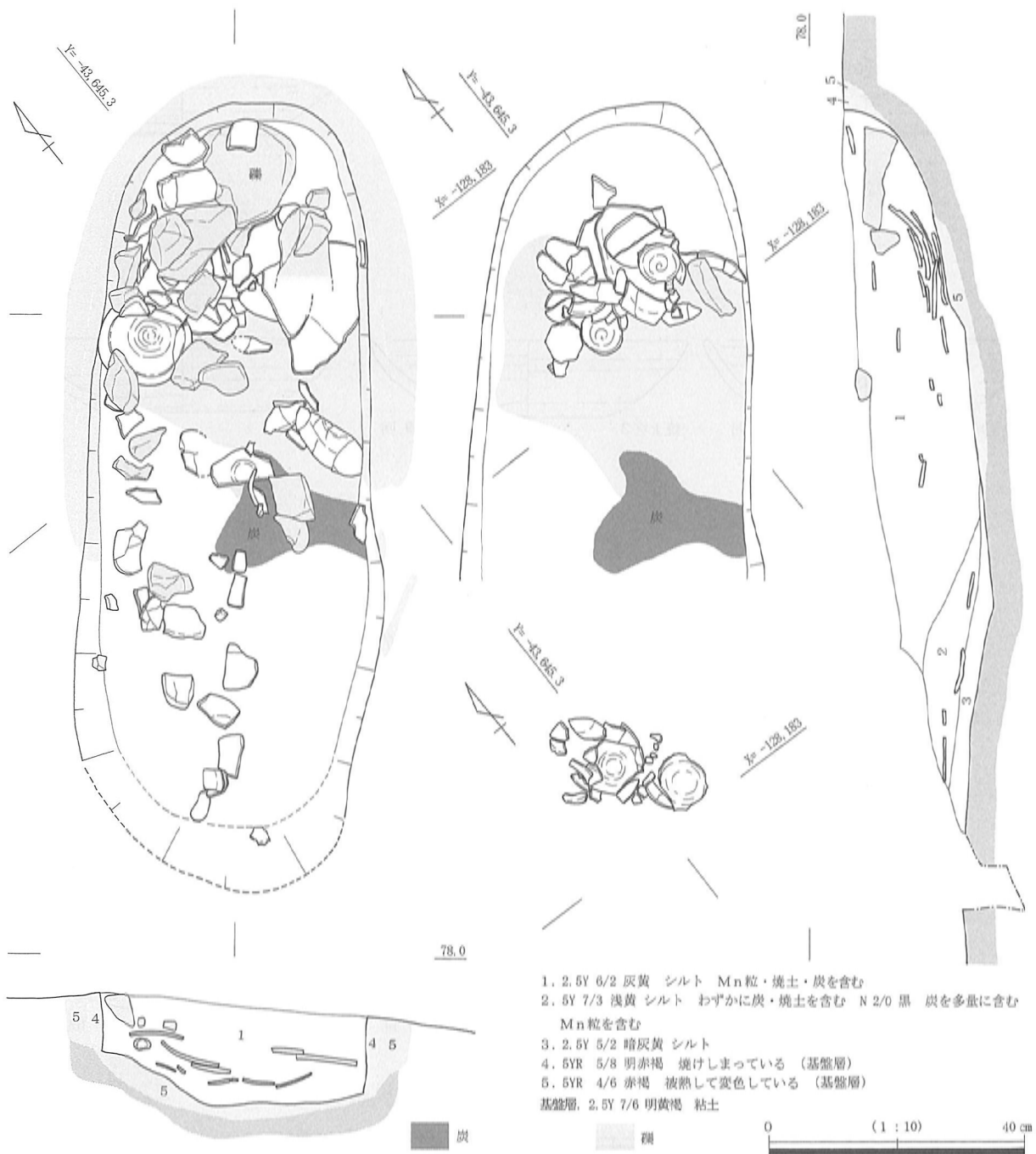
第36図 焼土坑2 平面・断面図

大きいものは約16cmである。部分的に被熱痕跡がみられるものもある。

出土した遺物はすべて土師質で、大皿と、胎土が粗く器壁の厚い（約0.8cm）破片の2点を除いて、他は回転台土師器皿である。回転台土師器皿には小皿と大皿があり、底部切り離し痕は磨滅のため良く観察できないものが多いが、判断できるものはすべて糸切りである。皿には底部の切り離し方が粗雑で、水平にならないものもみられる。器形にもバリエーションがみられる。

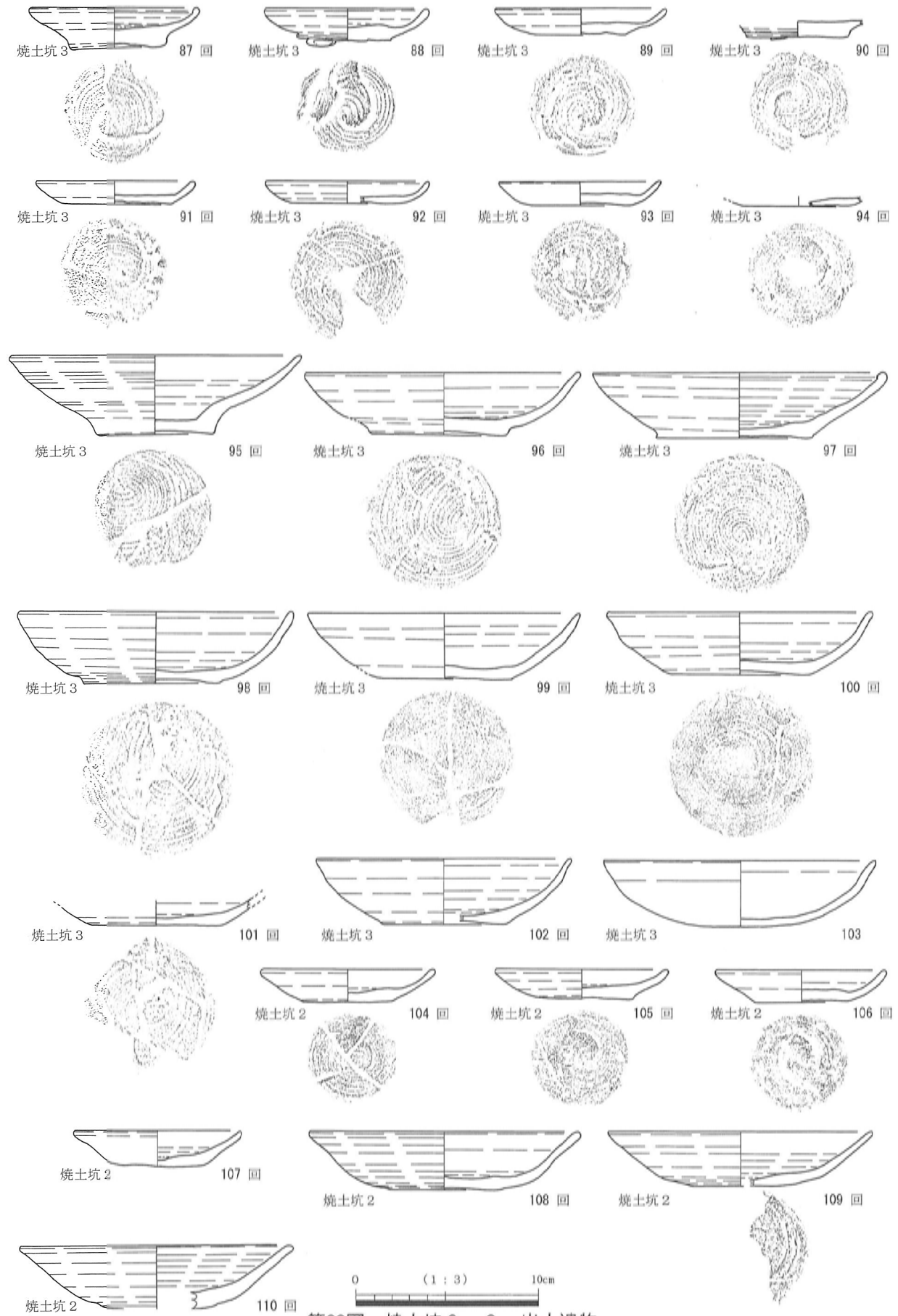
北には同種の遺構の焼土坑2があり、西側には回転台土師器皿が出土するピット2・3が位置する。

包含層は北端の尾根上にはほとんど存在せず、尾根下の平坦部の一部にのみ存在していた。北端部では遺構を少数検出したのみであるが、これは削平が及んだためであるのか、もとより遺構が希薄であっ



第37図 焼土坑3 平面・断面図

第1節 丘陵上西部(a城)



第38图 烧土坑2・3 出土遗物

たのか不明である。平坦部では、南部にのみ包含層が遺存していた。尾根の直下である北半部は、棚田造成時に削平を受けており、建物7の柱穴など、上部が削られているものも多い。

包含層出土遺物は、11～12世紀のものがほとんどである。その他の遺構からは、少量の小片が出土したのみで、11世紀代のものもみられるが、12世紀のものが多い。

小結

a域では10～11世紀前葉のピット1が最も古い遺構である。この時期のものは、当域では他に全く確認しておらず、単独で存在していた可能性が高い。これは丘陵上の遺構のなかでも古い時期に属するもので、山際のこの箇所にも単独で存在する意義を、遺跡全体の位置関係から考える必要がある。

この地域では、11世紀代と確実にいえる遺構はない。ただし、回転台土師器の焼成遺構と考えている焼土坑3は、出土遺物の大部分を占める回転台土師器の時期が確定できないため時期を決め難いが、11世紀代の土師器皿1点が出土しており、この時期の遺構である可能性がある。

東部には回転台土師器焼成遺構の焼土坑2・3、回転台土師器を埋納したピット2・3がある。この回転台土師器は遺跡内で普遍的に出土する遺物ではあるが、これら特徴的な遺構が、この狭い範囲に分布しているのは特殊な状況であり、何らかの関係が想定される。

回転台土師器の大皿を比較してみると、焼土坑2出土のものが口径14.5cm～14.8cm、器高3.0cm～3.5cm、焼土坑3出土のものが口径14.5cm～15.9cm、器高3.4cm～4.4cmであり、ピット2出土のものが口径13.9cm、器高3.4cm、ピット3出土のものが口径14.3cm～15.0cm、器高2.9～3.2cmを測る。相対的に焼土坑2・3に比べてピット2・3出土のものが口径が小さく、器高が低い。

焼成遺構2基出土のものと埋納遺構出土のものとは胎土も異なり、焼成遺構で焼成したものを供給したのではないと考えられる。それでもなお、まとめて存在するこれらの遺構に関連性があると考えれば、短期間の連続した時期のものであり、その間この場所が回転台土師器と何らかのつながりをもち続けていた、ということになるだろうか。ちなみに、焼土坑2出土のものと焼土坑3出土のものも口径、器高がやや異なる。

時期の想定できる遺構の大半は、12世紀中葉～13世紀前葉である。a域の中央で南北方向の浅い谷地形を検出している。周辺の遺構群と同時期に存在していたと思われる。

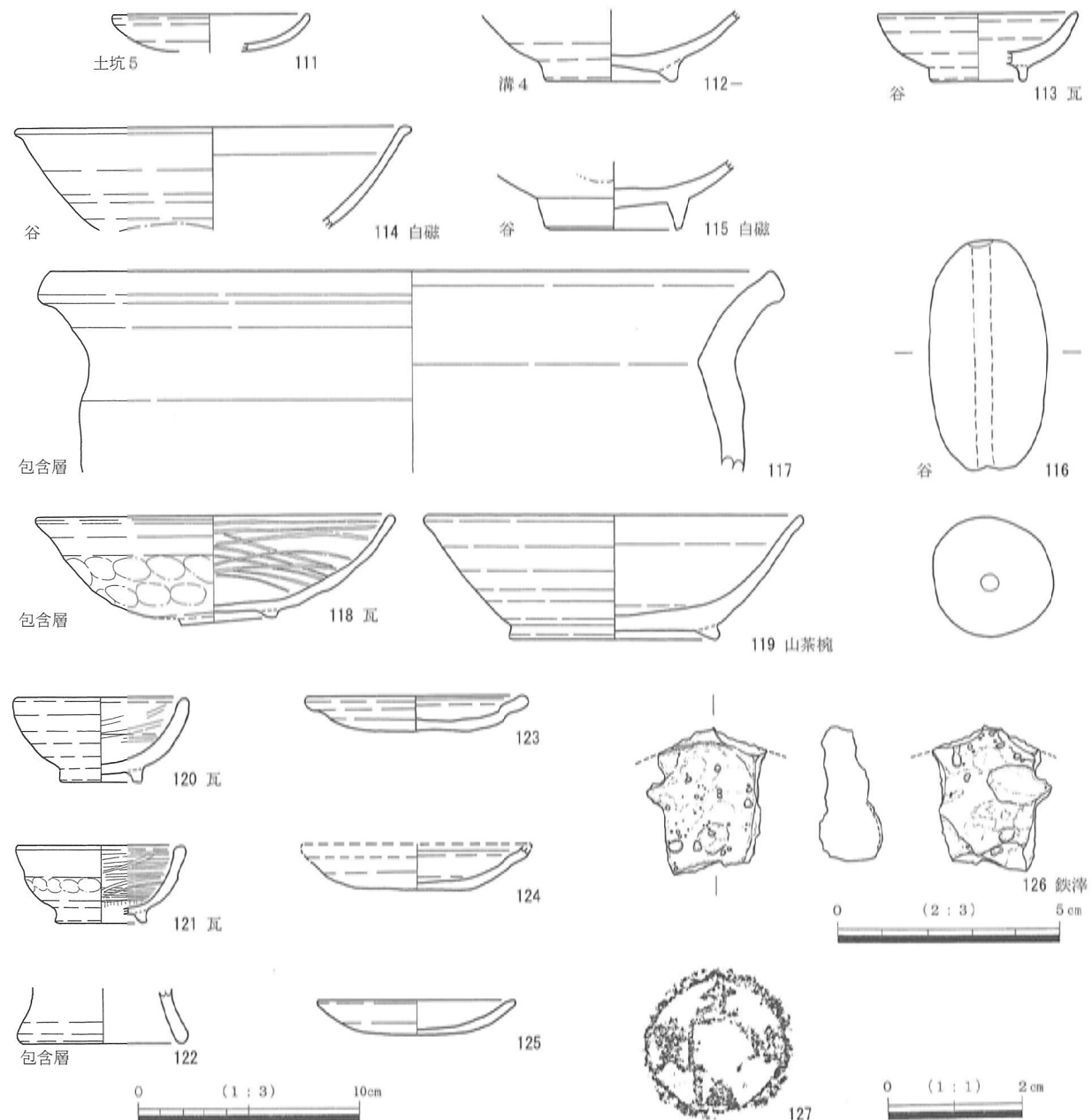
谷以西の建物群のうち、建物3・4・6は、小規模で、内部に土坑を伴うと想定され、何らかの作業をおこなうためのものである可能性がある。溝1を溝3が切っていることから、建物3・4・6の順も想定されるが、溝1から溝2へと掘り直されていることもあり、建物4と建物6は同時に存在していたとも考えられる。前後関係にある建物3と4の北側には、同じく重複関係にある建物1・2、建物6の北側に建物5が位置しており、これらがセット関係であることも想定される。

谷以東では、北に建物7、南に建物8を復元したが、周辺に柱穴がみられず、共に単独で立地していたと思われる。ただし、建物8は時期が不明である。大規模な土坑6は止水堆積で、周囲の遺構との関連が不明であるが、水に関連する何らかの機能を果たしていたものであろう。

a域の西側および北側は、調査地外である。西側には遺構が続いている可能性がある。北側は冒頭で述べたような地形で、確認調査をおこなった結果、遺構がほとんど確認されていない。

a域の東側は川1を挟んでh域であるが、この部分では川は非常に浅い。h域はa域より新しい遺構が展開しているが、11世紀代の遺物が出土している遺構もみられる。南側はb域で、北端部では棚田造成時に削平を受けており、遺構を全く検出していないものの、それ以南ではa域とは中心となる時期がややずれる遺構群が展開している。つまり、a域で検出した遺構・遺物は、主として12世紀中葉～13世紀前葉のもの、11世紀代のものであるが、川1を挟んで東には、12世紀代のものは広がってはいないが11世紀代のものが若干分布しており、南側のb域には同時期のものは広がってはいない。

焼土坑2・3の類例として、高槻市ツゲノ遺跡¹⁾でこれと同種と考えられる遺構が調査されている。第17調査区SK04は、この焼土坑3と、被熱している点、回転台土師器皿が多量に出土している点などが共通しているうえに、規模、平面・断面の形状も酷似している。さらに、被熱については、壁が被熱赤変しており、その被熱痕跡の確認できる範囲が北半部である点、底面に炭がみられる点が共通する。



第39図 その他の遺構 包含層・近世作土層 出土遺物 (2/3 = 116・126 1/1 = 127)

出土遺物はほぼ全点が土師器である。また、回転台土師器の底部は、確認できたものがすべて糸切り離しであることも共通している。ただし異なる点もみられる。焼土坑3では底面中央が被熱痕跡を示すのに対して、S K04は底面中央に向かって被熱痕跡がみられなくなる。埋土中の礫の有無も相違点である。また回転台土師器については、S K04では多量の小片が出土しているものの復元できる割合が低く、焼土坑3では量がS K04に比較するとやや少ないようではあるが比較的大きな破片が多く復元できる割合が高い。ツゲノ遺跡の調査概報では疑問点をあげながらも、「特に壁体の遺存状況からこの土坑自体がある種の焼成遺構」であり、「器種の限定された皿が多量に出土している点から、特に皿類の焼成とみることでもできる。」としている。粟生間谷遺跡でも同じ理由から、焼土坑2・3を回転台土師器皿の焼成遺構と考えたい。

この時期の焼成遺構には、堺市平井遺跡²⁾の瓦器焼成遺構など古代の土師器焼成遺構と同じく、土坑を掘削しただけの簡単な構造のものもあるが、煙管状窯とよばれる構造窯も各地で調査されている。これは上部構造を有するものであるが、これらの土坑も上部構造を有していた可能性も考えられる。ただ、それにしては崩落土や焼土壁の破片がみられない。礫については、出土状況から、遺構がその機能を終えた後に落ち込んだ、または放り込まれたものと考えられる。香川県国分寺楠井遺跡³⁾では礫をとまなう窯が調査されている。焼土坑3の礫についてはごく一部ではあるが被熱を確認したのものも存在することから、焼成遺構に関わっていた可能性も考えておく必要がある。いずれの問題にしても焼成遺構の構造については、今後類例の調査・研究が深まるまで待たざるを得ない。

ツゲノ遺跡では土坑に10世紀後半～11世紀前半の時期が与えられているが、本遺跡では前述の土師器皿が11世紀代と考えられるため、これと同時期もしくはこれ以降の時期と考えられる。ただし当遺跡では、12世紀中葉～後葉以降の遺構からは、回転台土師器皿がほとんど出土していないため、12世紀前葉以前である可能性が極めて高い。

註

- 1) 大阪府教育委員会 『ツゲノ遺跡発掘調査概報・Ⅱ』 1988
- 2) 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 『平井遺跡』 1988
- 3) 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊 国分寺楠井遺跡』 1995

第2項 b域(付図2)

調査地の北西部に位置し、南へと緩やかに下がる地形ではあるが、丘陵上においては極めて平坦といえる部分である。北側がa域、南側はc域である。川1を挟んで東側はi域である。

主な遺構として、建物9棟・井戸1基があり、他に、溝や土坑などがある。

建物9(第40・41図 図版24)

西半の北部に位置し、東西1間×南北2間、約4.8m×4.5m、約21.6㎡である。主軸は、N-2°-Wを向く。柱間は、南北が約2.3mで、東西の1間が広いのが特徴的である。

遺物は出土していない。

建物10(第40・41・51図 図版24)

西半の北部に位置し、東西2間×南北1間、約4.5m×3.7m、約16.7㎡である。主軸は、N-3°-Wを向く。柱間は、東西が約2.3mと南北の柱間が広いのが特徴的である。

遺物は出土していない。

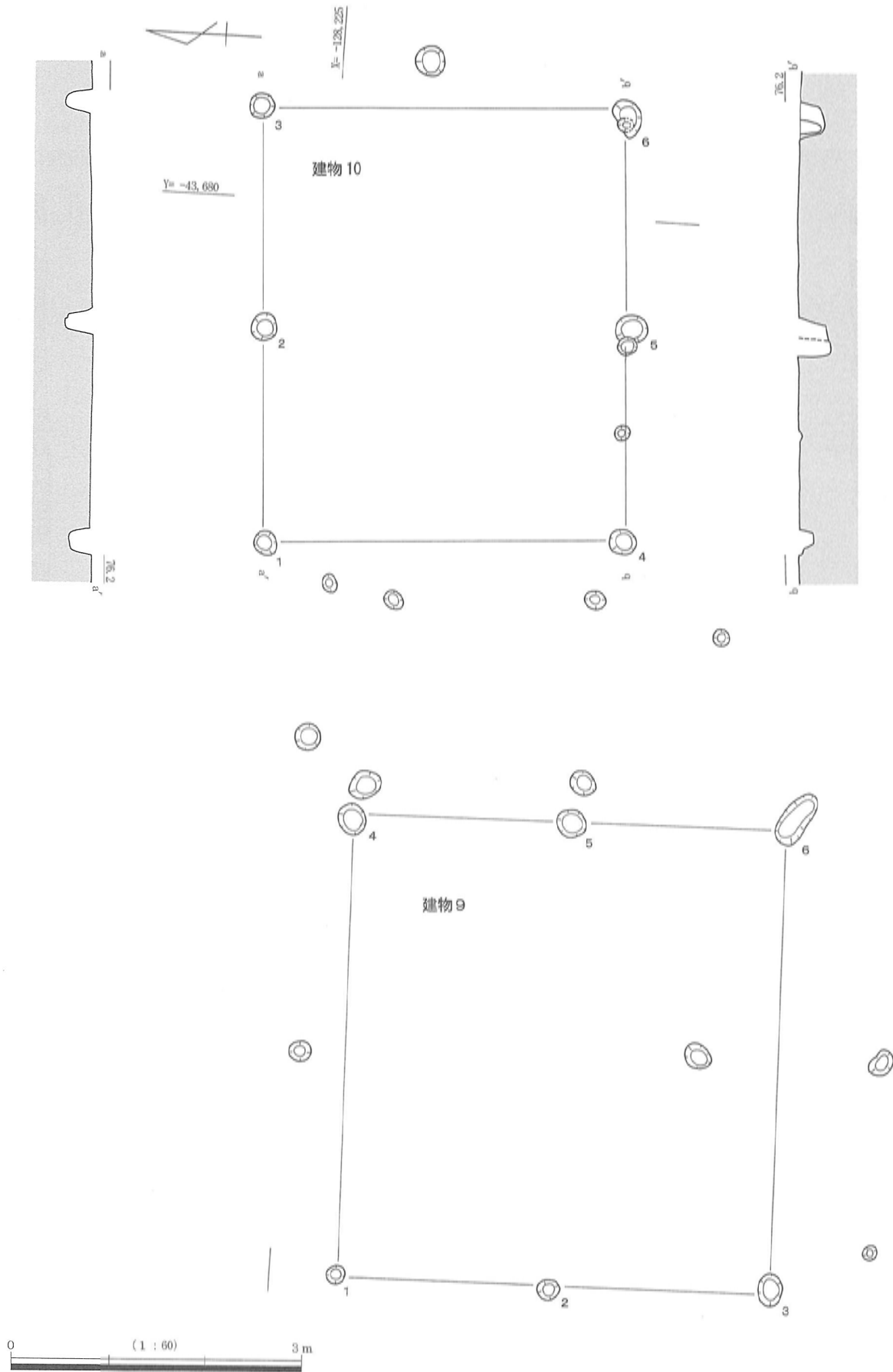
建物11(第40・42・50図 図版24・26)

西半中央部に位置し、総規模は、東西約15.2m×南北約6.6m、約100.3㎡である。主体となるのは、東西7間×南北2間、約14.0m×4.6m、約64.4㎡である。主軸方向は、N-4°-Wを向く。柱穴20・23には焼土が多く含まれていた。東辺中央では柱穴を検出していないが、西辺中央の柱穴16が深さ約0.1mと比較的浅いことから土坑によって削平を受けたとも想定できる。

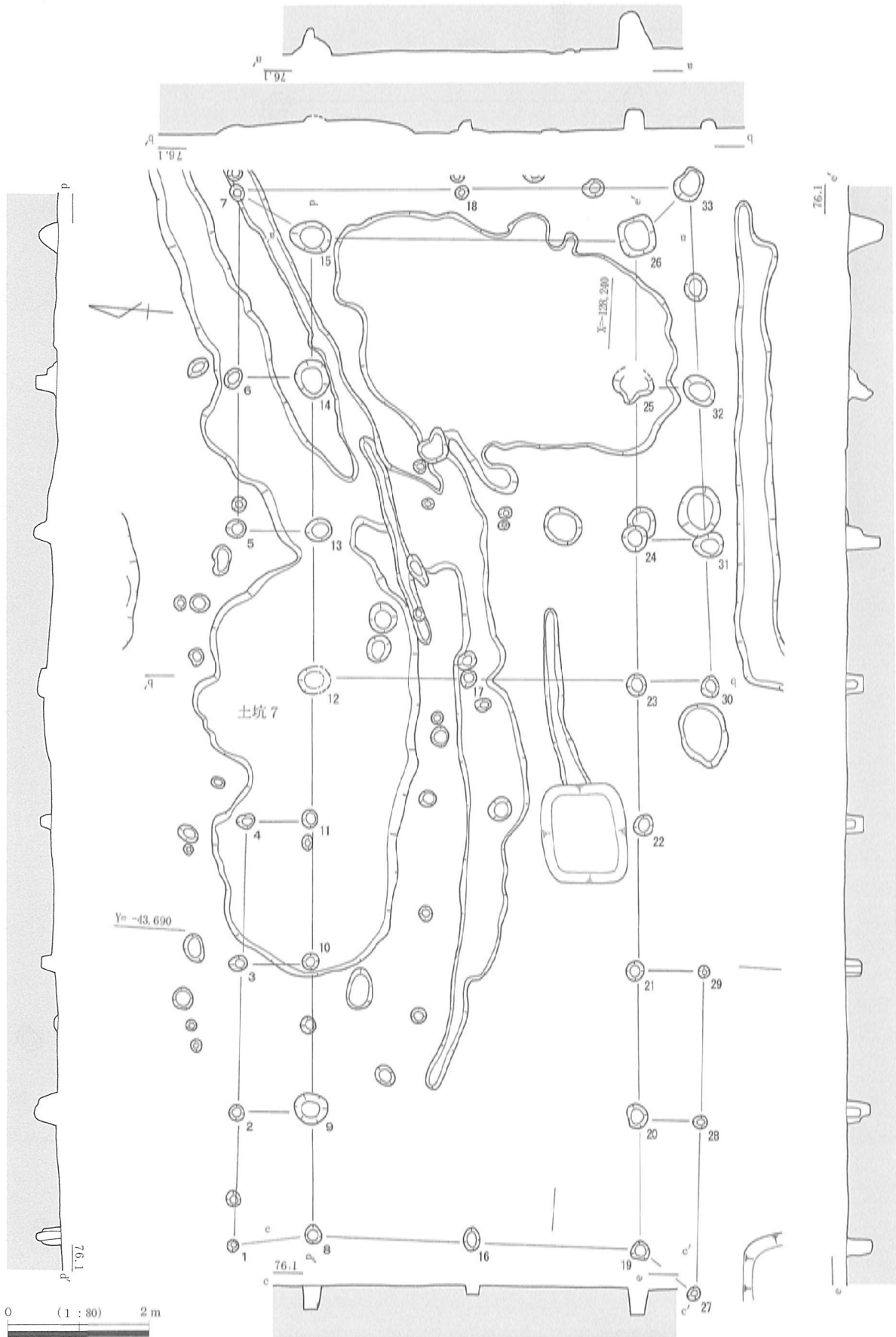
上記部分の約0.7m~1.0m外側には、径約0.3mのやや小規模な柱穴が西辺を除いて巡っている。これらが構成する柱列では北列と南列のそれぞれ中央近くで柱穴を検出しておらず、途切れる部分がみら



第40図 b域 平面図



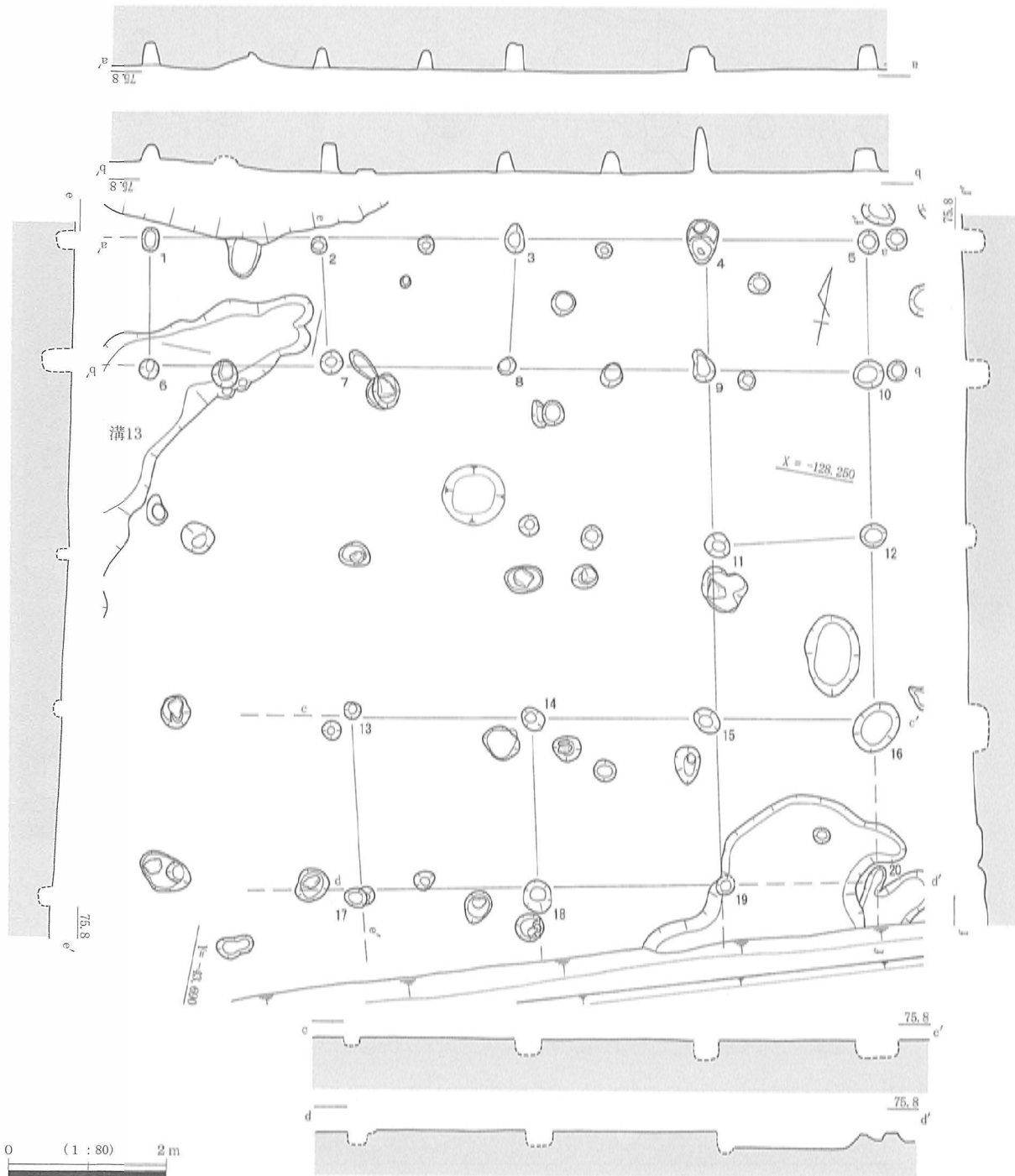
第41図 建物9・10 平面・断面図



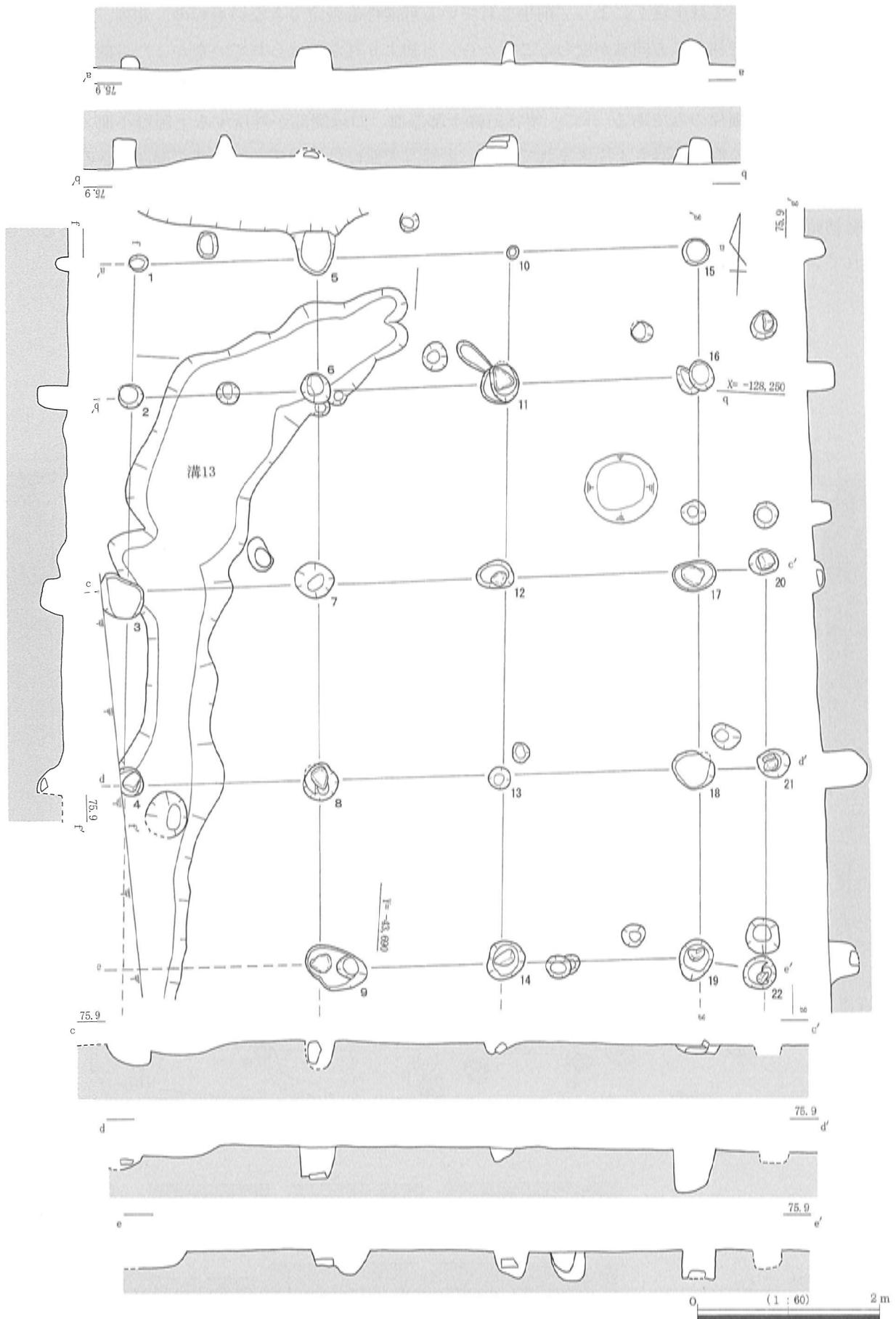
第42図 建物11 平面・断面図

れる。北列については土坑7によって削平されている可能性も否定できないものの、北列、南列ともにこの部分を挟んで柱列の方向軸が変わることから、当初より柱が設けられていなかった可能性が考えられる。

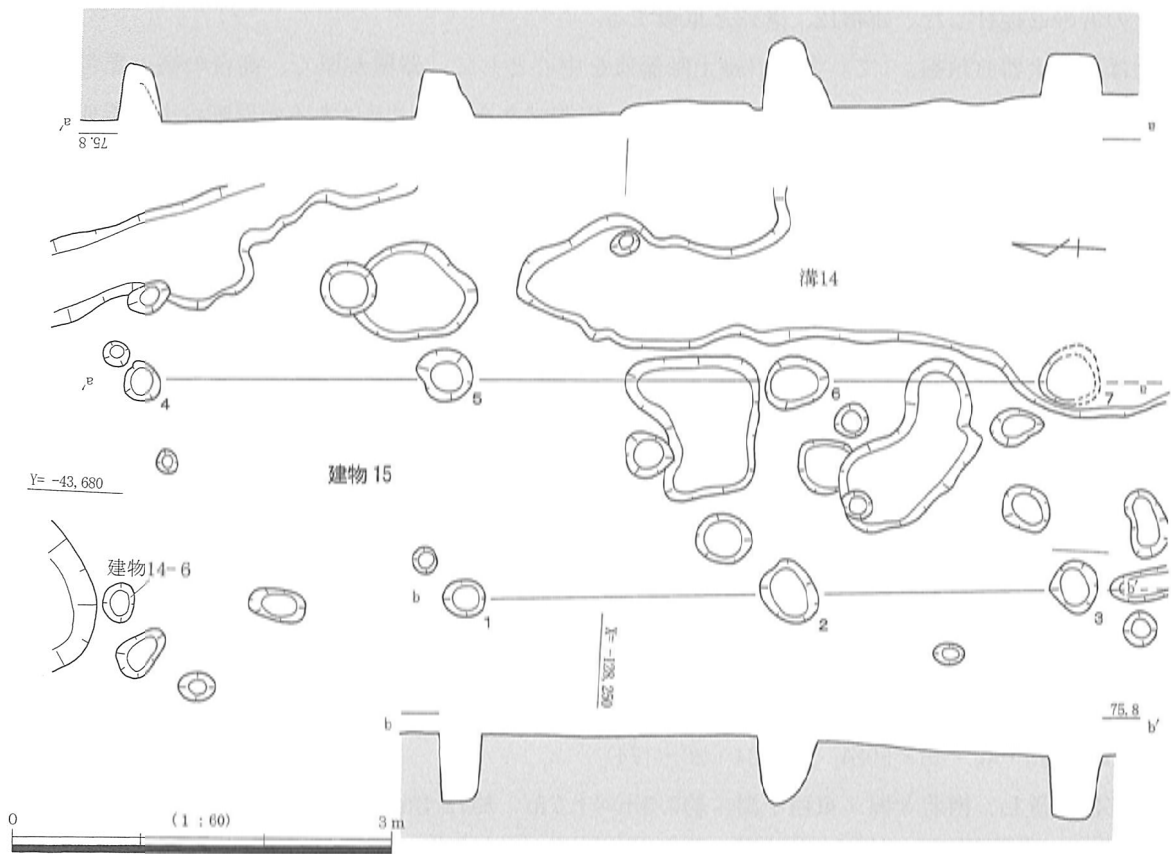
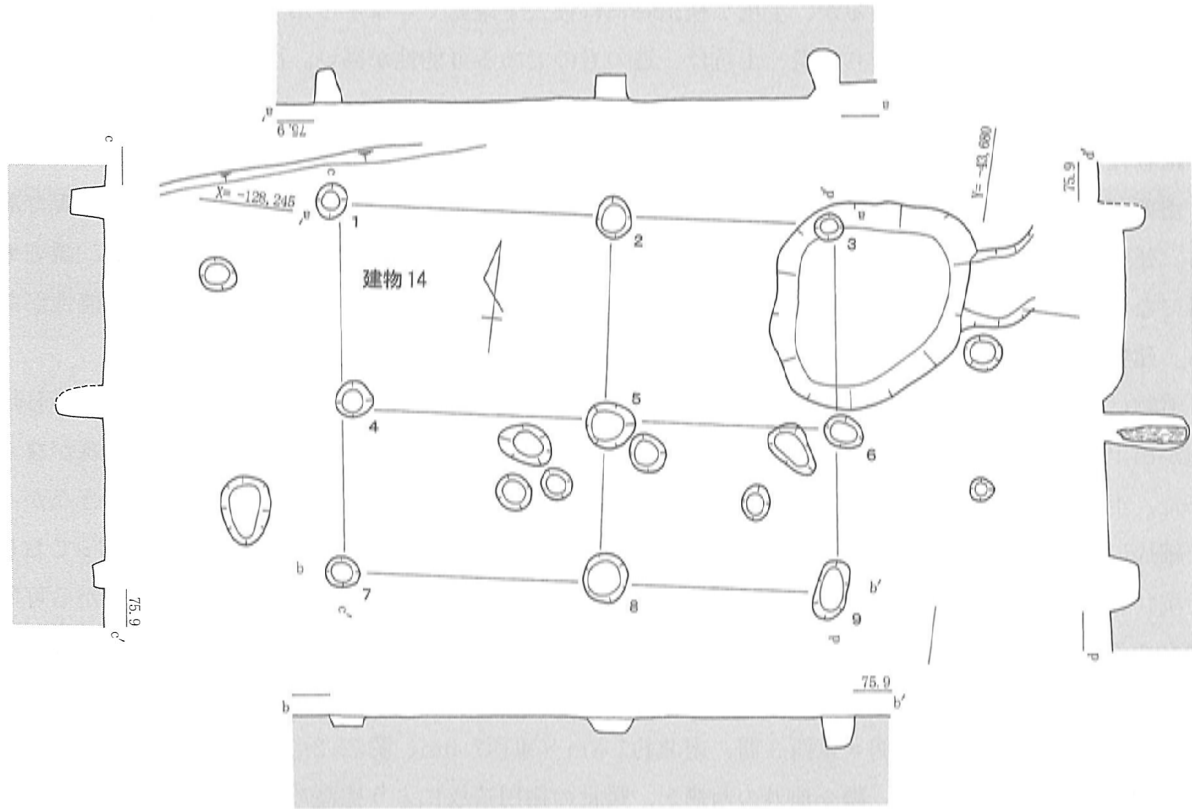
遺物は小片、細片のみである。「て」字状口縁土師器皿、口縁端部が外反する土師器小皿・大皿、黒色土器B類などの他、瓦器も1片含まれている。土師器大皿には口縁部2段ナデが確認できるものもあり、「て」字状口縁の土師器皿片には、比較的薄手のものもみられる。11世紀中葉を中心とした11～12世紀初頭までの間に納まるようである。また、複数の柱穴に焼土塊、炭片などが少量ずつではあるが含まれている。焼土塊の最大のもは柱穴25出土で、約6cm大である。



第43図 建物12 平面・断面図



第44図 建物13 平面・断面図



第45図 建物14・15 平面・断面図

土坑、溝などと重複しているが、土坑7検出時には柱穴を確認できなかった。その他の遺構との切り合いは不明なものの、この辺りの溝、土坑は一連のものである可能性が高い。出土遺物から、建物の方が古いと考えられる。

建物12(第40・43・46・50図 図版24・26・174)

南西部に位置し、東西4間×南北4間、約9.0m×8.2mの復元である。主軸方向はN-14°-Wである。建物13の柱穴が2度利用されたと仮定すれば、西部分に若干の柱穴を加えることができる。調査地外になる西側と、後世の棚田造成により削平を受けている南側には、さらに柱穴が存在した可能性がある。建物13・14と重複している

遺物は「て」字状口縁土師器皿、口縁部に1段ナデを施し端部が外反する土師器大皿、黒色土器B類椀が出土している。142の「て」字状口縁の土師器皿はやや薄手で、144の黒色土器B類椀は沈線がなく、また、土坑10出土の一括資料に比べると高台が高く、やや古い様相を示している。他に図化できなかった細片には142の「て」字状口縁の土師器皿より器壁の厚いものもみられる。遺物の時期は揃っており、土坑10よりやや古いか、ほぼ同じ時期と考えられ、11世紀中葉かそれよりやや古く、前葉にかかる可能性もある。

建物13(第40・44・46・50図 図版24・26・173・174)

南西部に位置する南北4間×東西3間、南北約7.8m×東西7.0m、約52.2㎡の総柱建物である。主軸方向はN-2°-Wである。調査地外の西側と、後世の棚田造成により標高75.0mまで削平されている、南側に続いている可能性がある。根石を多くの柱穴で確認しているが、柱痕が明瞭に認められるものはない。また炭化物粒を埋土に多く含むものがみられる。柱穴19出土の黒色土器B類椀片は建物14の柱穴4出土のものと接合した。建物12、溝13と重複する。

遺物は黒色土器B類椀、「て」字状口縁土師器皿を中心として、器壁が厚く、高台の高い黒色土器A類椀、口縁部2段ナデの土師器大皿、土師質土錘、実測できない細片ではあるが回転台土師器皿、須恵器甕なども出土している。「て」字状口縁土師器皿には薄手のものも若干含まれている。柱穴11・16出土の「て」字状口縁土師器皿は80%程度遺存、柱穴15・18出土の黒色土器B類椀は25%程度遺存しているなど、他の建物の出土遺物に比べると遺存率が高いものが多い。出土遺物はおしなべて11世紀中葉のものである。

建物14(第40・45・46・50図 図版24・26・174・243)

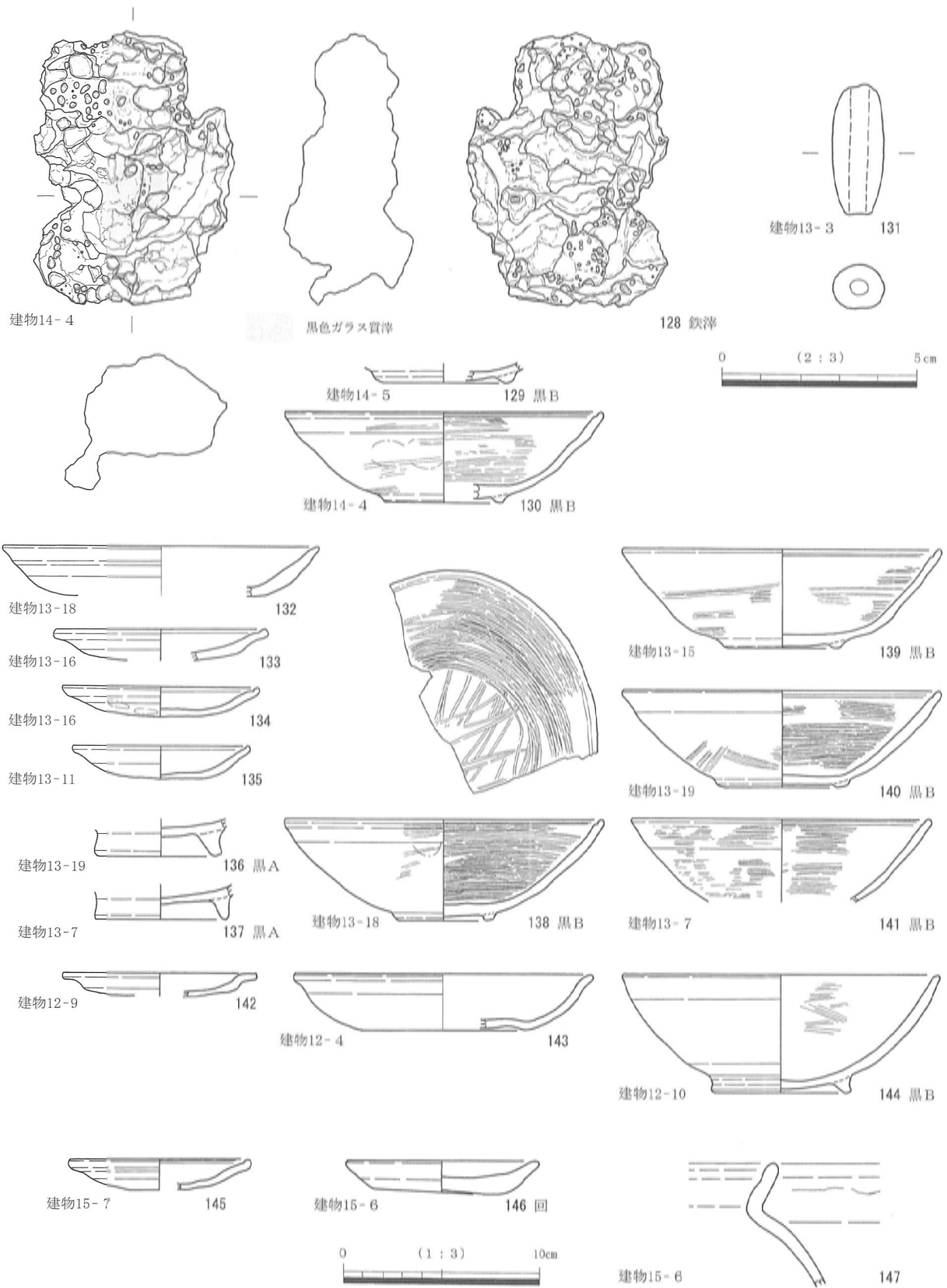
南西部に位置し、東西2間×南北2間、約4.0m×2.9m、約11.6㎡である。主軸は、N-6°-Wを向く。柱穴埋土に炭化物粒を含むものがみられる。柱穴6には痩せていると思われるが直径約16cmのヒノキの柱根が遺存していた。柱穴4出土の黒色土器B類椀が建物13の柱穴19出土のものと接合した。建物12と重複している。

柱穴4からは鍛冶滓(128)が出土している。ほかに黒色土器B類椀、やや薄手の「て」字状口縁土師器皿などの小、細片が出土している。建物13と近い時期であるとすれば、11世紀中葉前後の時期が想定できる。

建物15(第40・45・46・50図 図版24・26・174)

南西部に位置し、南北3間×東西1間、約7.5m×1.7m、約12.8㎡である。主軸は、N-3°-Wを向く。後世の棚田造成によって削平を受けている南側にも柱穴が存在していた可能性がある。

建物14の柱穴6を復元に取り入れると、柱列の西列が東列の北端と揃うが、詳細は不明とせざるを得



第46図 建物12~15 出土遺物 (2/3 = 128・131)

ない。

遺物は、「て」字状口縁土師器皿や、黒色土器B類椀などが中心で、回転台土師器皿や土師器甕などもみられる。土師器大皿は口縁端部が外反するものが中心であるが、外反しないものもみられ、器壁はおおよそ厚い。「て」字状口縁土師器皿には比較的少量ではあるが器壁の薄いものもみられる。11世紀中葉の時期のものと考えられる。

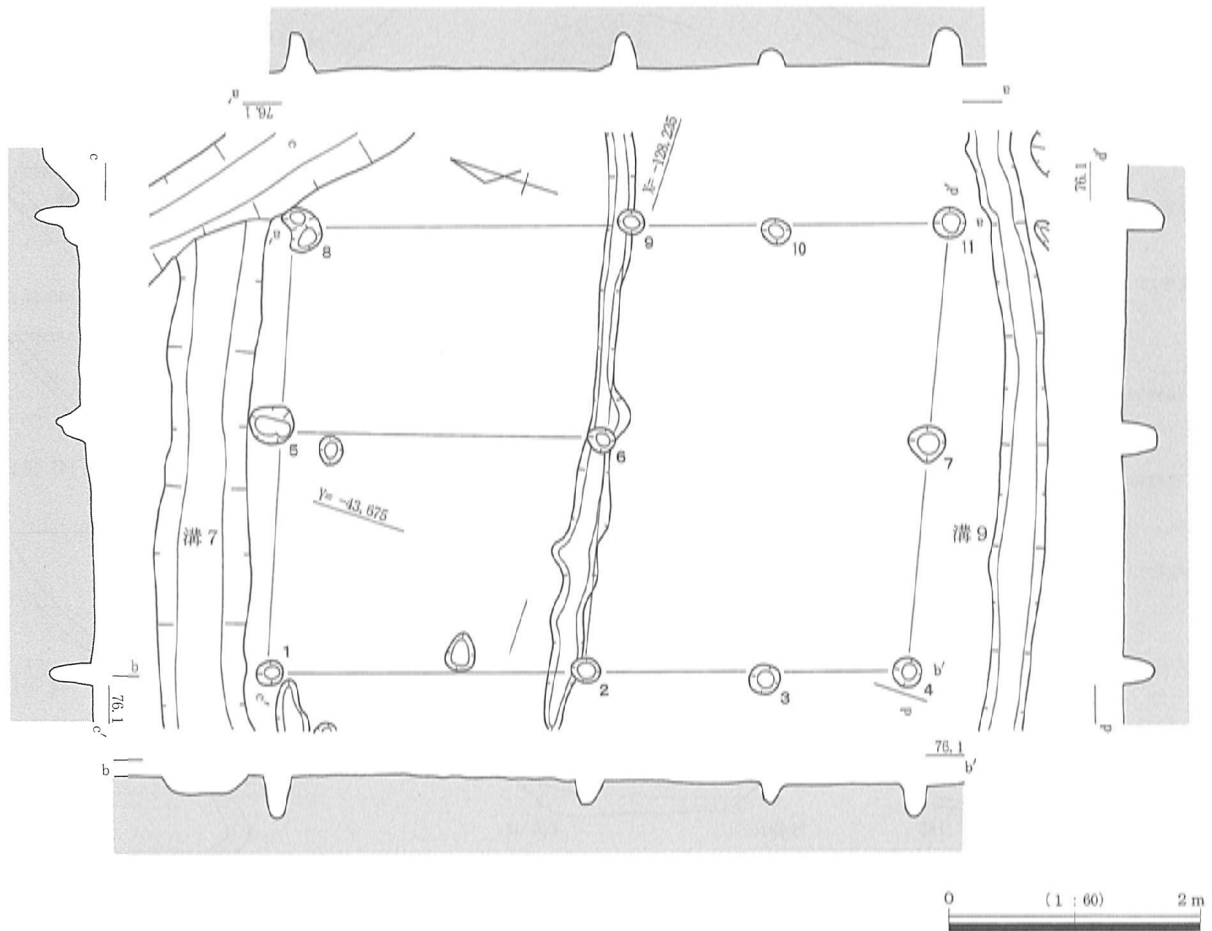
建物16 (第40・47・51図 図版24)

西半東部に位置し、南北3間×東西2間、約5.2m×3.6m、約18.7㎡である。主軸はN-18°-Wを向く。南北方向の柱間は、北側の1間が約2.6m、南側の2間が約1.1m~1.4mである。東西方向の柱間は約1.7m~1.9mである。

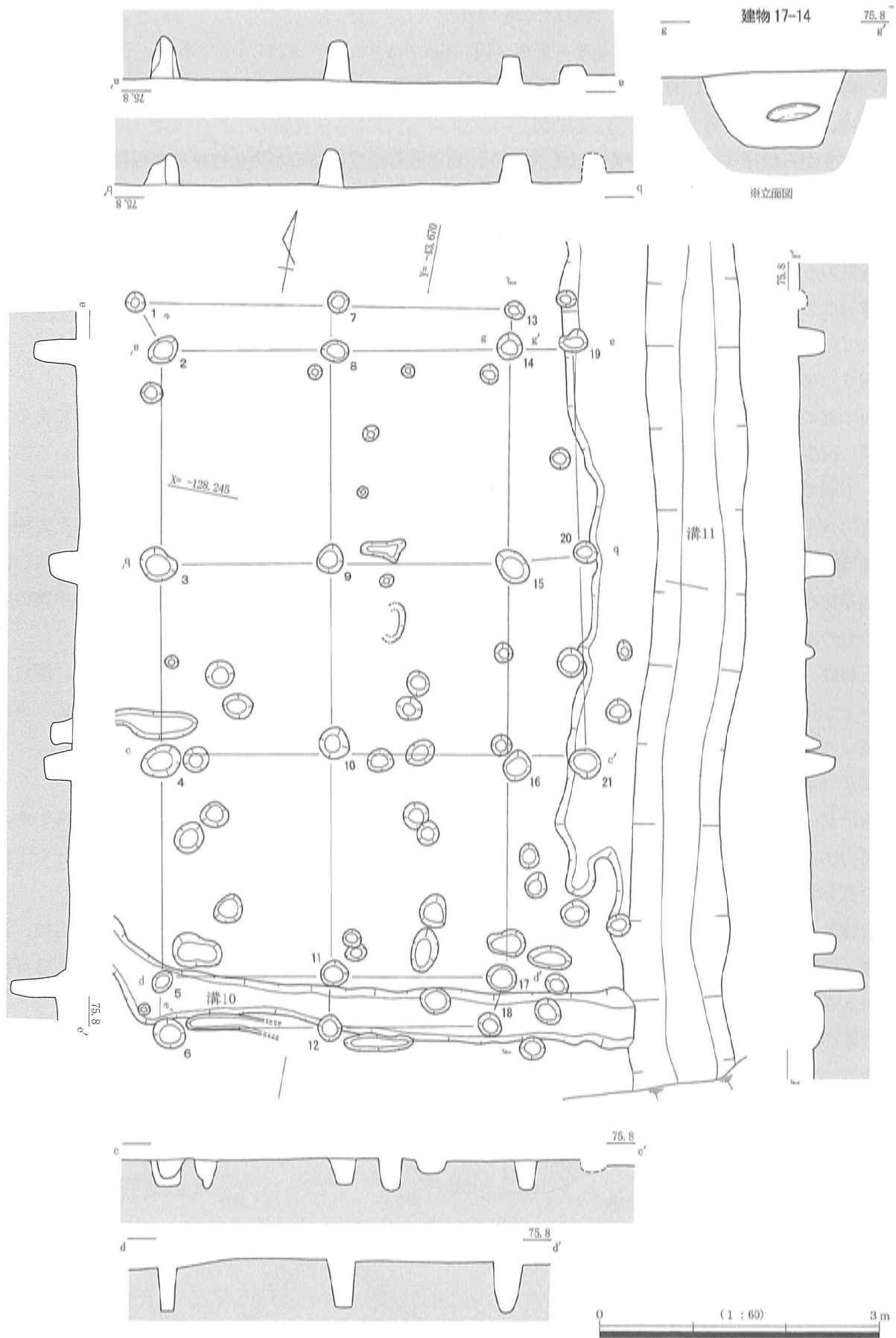
北・南・東を溝7・9・11に囲まれており、同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物は細片のみで、「て」字状口縁土師器皿、口縁部の外反する土師器小皿、口縁端部をややつまみあげる土師器小皿、黒色土器B類椀、瓦器椀などがある。柱穴5からは焼土片も出土している。時期はb域の他の建物に比べると幅があり、11世紀中葉~12世紀前葉までのものが含まれている。

前述した11世紀中葉の遺物が出土している南西部の建物群とは方向軸を異にし、より新しい時期と考えられる溝群と方向軸を揃える。溝群の時期と出土した細片から判断するならば、11世紀後葉~12世紀前葉の時期があげられる。



第47図 建物16 平面・断面図



第48図 建物17 平面・断面・立面図

建物17 (第40・48・49・51図 図版24・26・175)

西半の南東部に位置し、南北3間×東西2間、約6.6m×3.7m、約24.4㎡である。その外側に北・東・南側と柱列が並び、付属の施設を構成しており、南北約7.7m×東西4.5m、総面積約32.6㎡である。主軸は、N-10°-Wを向く。

柱穴9からは径5cmの炭化材が出土しており、他にも若干ではあるが炭化物粒を含む柱穴がみられる。

柱穴14から150の土師器皿が完形で出土した。これは、底から浮いた位置で、正置の状態である。他に口縁部2段ナデの土師器小皿・大皿、和泉型瓦器椀、焼土片も出土している。12世紀前葉～中葉前後の時期のものと考えられる。

溝11と方向軸をあわせている。溝11と切り合いを有す溝10が南辺と重なっているが、柱穴5が溝に切られている可能性がある。

溝6 (第51・52図 図版177)

西半部の中央やや北寄りに位置する長さ約13.0m、幅約0.7m、深さ約0.3mの東西方向の溝である。東側に位置する井戸2、溝11の辺りで口を開いているのか、さらに南東方向に溝として続いているのかは、不明である。

遺物は小破片が多く出土しており、口縁部2段ナデの土師器小皿、黒色土器B類椀、和泉型瓦器椀、土師器鍋などがある。須恵器甕片は、井戸2出土のものと同接合した。黒色土器B類椀、「て」字状口縁土師器皿など11世紀中葉を中心としたものも含まれるが量的に少なく、おおよそ12世紀前葉～中葉の時期のものが中心である。

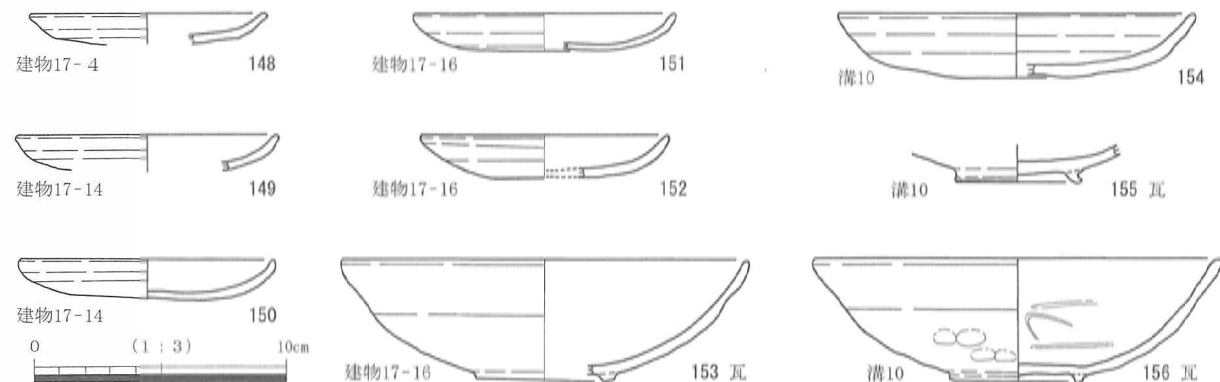
東側は、地形的に低くなっており、この部分への排水を目的として掘削された溝と思われる。溝11、井戸2とは近い時期のものであると思われるが、厳密な時期関係は不明である。溝6は、溝11より東にも続いている可能性もある。南側には同様に東西方向の溝7がある。

溝7 (第47・51・53図 図版175)

西半部の中央で溝6の南側に位置し、東西方向の溝が複数連結した形状を呈すが、一連の遺構である。全長約20.0m、溝部分の幅は約0.6mである。検出面からの深さは溝の東部分で約0.2m、西部分や土坑状の部分では0.1m以下と浅い。

遺物は小片が多く出土しているがあまり接合しない。図示した土師器羽釜以外には和泉型瓦器椀、瓦質甕、白磁碗、焼土小片がみられる。ガラス質滓の小片も出土しており、炉壁の溶けたものである可能性がある。

西端部分で土坑7と接続しているが、遺物の出土状況などから同時並存していたと考えられる。



第49図 建物17 溝10 出土遺物

溝 8 (第40図)

溝 6 と一連のものである可能性があるが詳細は不明である。検出長約2.5m、幅約1.0m、深さ約0.3mである。

遺物は、磨滅した小片が少量出土したのみである。

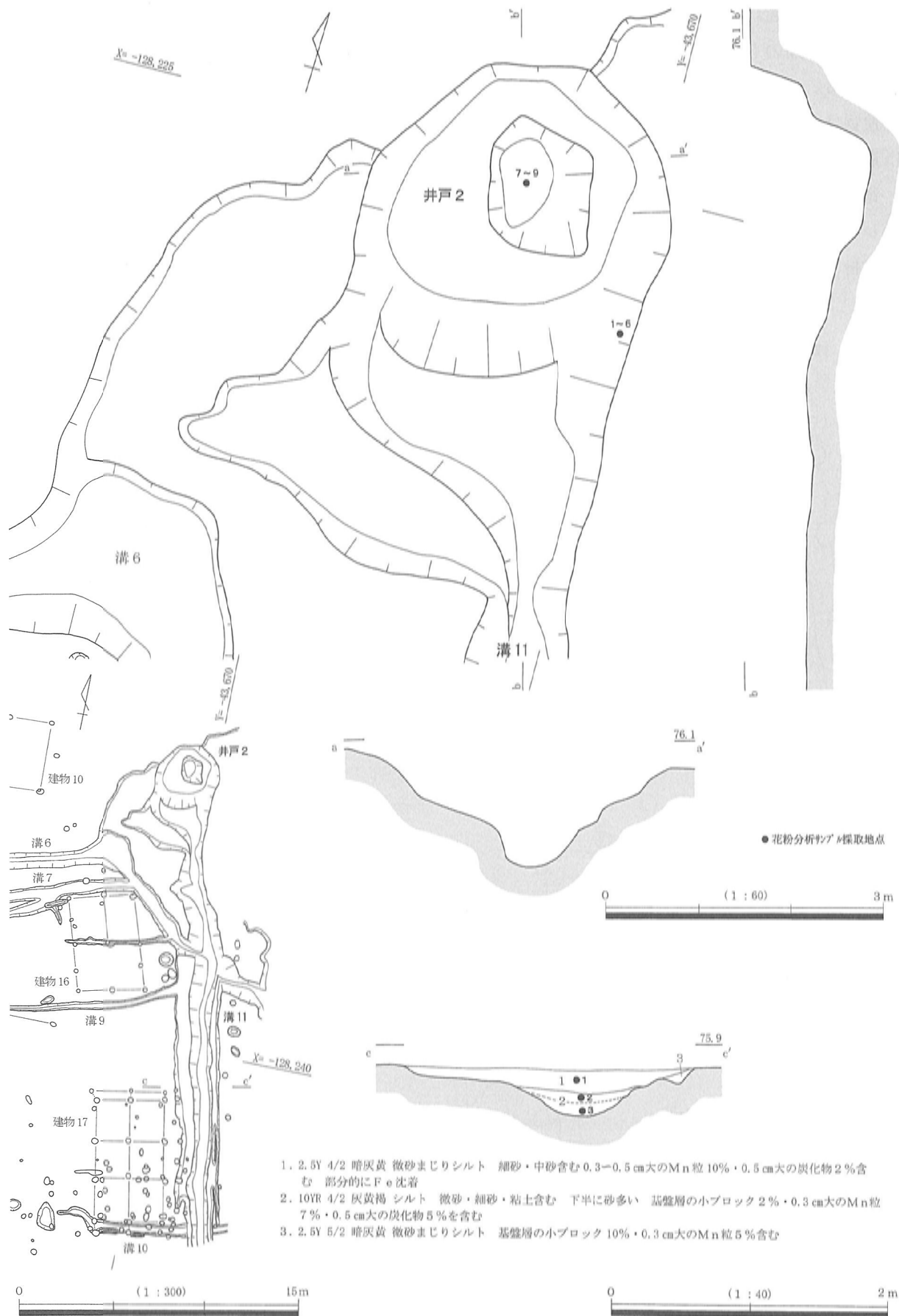
溝 9 (第47・51図)

建物16の南に位置する東西方向の溝である。長さ約9.6m、幅約0.4m、深さ0.1m以下である。底面のレベルは、若干東に向かって下がっている。

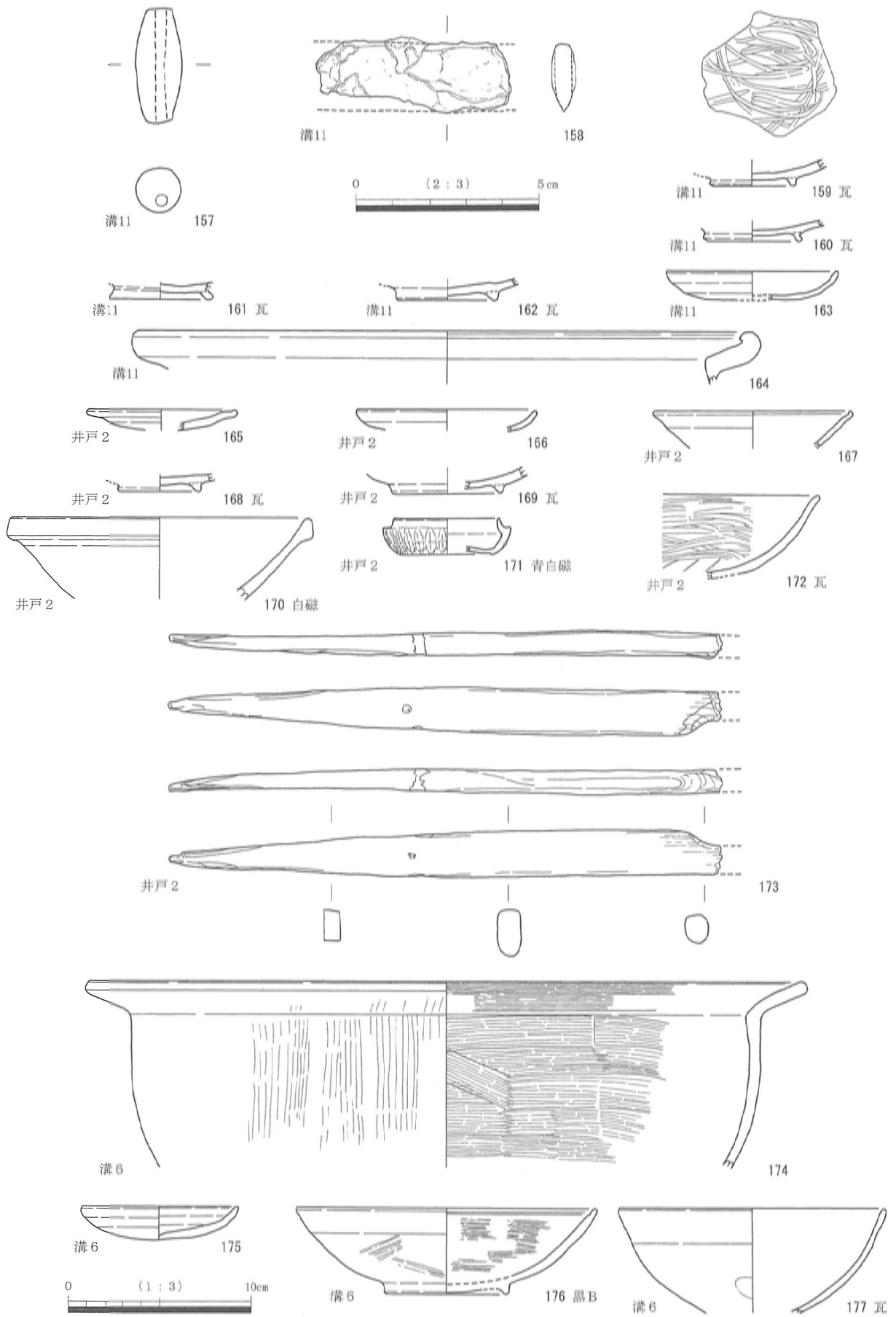
遺物は細片がわずかに出土した。



第50図 南東部建物群 平面図



第51図 溝11 井戸2 平面・断面図



第52図 溝6・11 井戸2 出土遺物 (2/3 = 157・158)

溝10 (第48・49・51図 図版175)

建物17と重複する東西方向の溝で、検出長約9.6m、幅約0.5m、深さ約0.1mである。

出土遺物は少量で、和泉型瓦器椀、土師器皿などがあり、12世紀前葉～中葉のものが主である。

溝11と切り合い関係にあり、建物17の柱穴5を切っている可能性がある。ただし周辺に密集している小規模なピットのなかには、溝を切るものが存在することも確認している。

溝11 (第40・48・50～52図 図版176)

井戸2から南へ伸びる溝である。検出した長さ約23.0m、幅約2.4mである。溝の断面形は中央が深く、両サイドがやや浅くなる2段落ちの形態である。浅い部分で深さ約0.1m、深い部分で約0.3mである。

遺物は小破片が多量に出土しているが、磨滅しておりほとんど接合しなかった。瓦器椀、土師器皿・煮炊具、底部外面へら切り離しの回転台土師器皿、須恵器甕、瓦質土器、玉縁口縁の白磁碗、土錘、刀子状の鉄製品(158)などがある。瓦器椀は和泉型と楠葉型が同じ位の割合で、土師器皿は口縁部2段ナデのものなどがみられる。11世紀後葉～12世紀中葉のものが多。花粉分析をおこなっており、IV第1章に結果を記載している。

南は棚田造成時に削平されており、c城の溝22につながることも想定できるが、不明である。浅い部分の底面ではピットを検出しており、建物17付近の小規模なピットと切り合い関係が想定される。建物16・17がこの溝と方向軸を揃えている。

溝12 (第50図)

建物11の南側、建物14の北側に位置するやや広角に曲がる溝である。南側は棚田の造成時に削平されている。東西方向の長さ約6.5m、北東から南西方向の検出長約3.0m、幅約0.5mである。深さ0.1m以内と浅く、底のレベルはほぼ一定である。埋土に6cm大までの焼土塊を多く含む。

土器は小片が少し出土したのみで、「て」字状口縁土師器皿、土師器大皿、黒色土器B類椀、瓦器椀などがある。

溝13・14との位置関係から一連のものである可能性もあるが、詳細は不明である。東西方向部分は周辺の建物群と軸が揃う。

溝13 (第43・44・50・54図 図版176)

南西端部に位置する南北方向の溝で、北端がわずかに北東方向に曲がっている。検出した長さ約10.0m、幅約0.8m～1.5mで、深さ約0.1m～0.2m、底面のレベルは南に向け低くなる。埋土は、シルトである。完形の土師器大皿(198)が埋土の上位で逆さまの状態出土した。南西部分は側溝にあたり、全容は不明である。位置的にみて溝12と一連のものである可能性がある。

遺物は、198以外に小片が多く出土している。瓦器椀、土師器などが主で、土師器小皿には「て」字状口縁の最終段階のものと口縁端部が外反するものがみられ、瓦器椀は和泉型と少量ではあるが楠葉型が混じっている。おおよそ11世紀後葉～12世紀前葉のものが大勢を占める。

溝14 (第45・50図)

建物15の東側に位置する南北方向の溝で、検出した長さ約10.0m、幅約0.6m、深さは0.1m以内と浅く、底のレベルは南へと低くなる。検出し得た部分の南端部は土坑状に広がっているが、本来2条の溝であったとも考えられる。南部が棚田造成時に削平され全容不明である。位置的にみて溝12・13と一連のものである可能性がある。

遺物は小片が少量出土したのみで、黒色土器B類、「て」字状口縁土師器皿などがある。

井戸2 (第40・51・52図 図版24・27・176)

径約3.0mの不整円形の2段掘りで、深さ約1.3mである。埋土下層は水成堆積のシルトで、調査時に湧水がみられた。南側が溝11と連結しており、これに水を流していたと思われる。須恵器甕片が溝6出土のものと同接合した。

遺物は小片が多い。図化はできなかったが、須恵器甕片が比較的目立ち、タタキの異なる数種の破片が確認できる。瓦器椀は和泉型が大勢を占め、土師器は口縁部2段ナデのものがみられる。そのほか青白磁合子、白磁碗などがある。図化できなかったが曲げ物の小片も出土している。11世紀代のものも含まれているが、全体からみると少量で磨滅しており、12世紀前葉～中葉のものが中心を占める。

IV 第1章に、花粉分析の結果を記載している。

土坑7 (第42・53図 図版175)

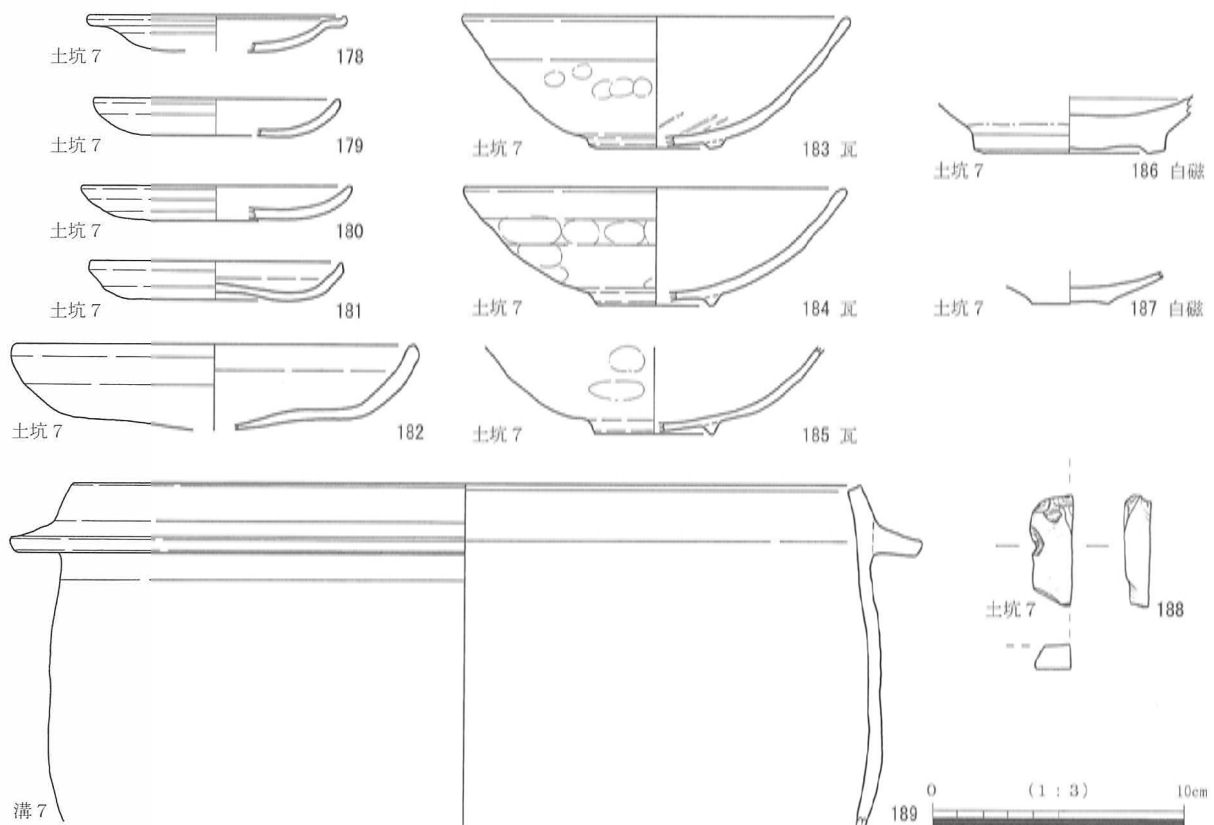
やや歪な長楕円形の土坑で、東西約6.0m、南北約3.0m、深さは0.1m以内で浅い。埋土に礫を多く含む。

出土遺物量は多いが、小片であり接合しない。瓦器椀は大半が和泉型である。白磁碗、口縁部2段ナデの土師器皿、土師器煮炊具、東播系須恵器鉢、瓦質甕、凝灰岩製砥石、滑石片の他、骨片、炭・焼土片も出土している。11世紀代のものも若干含まれるが、およそ12世紀前葉～後葉のものである。

遺物の出土状況から溝7と同時に並存していたと思われる。建物11と重複している。

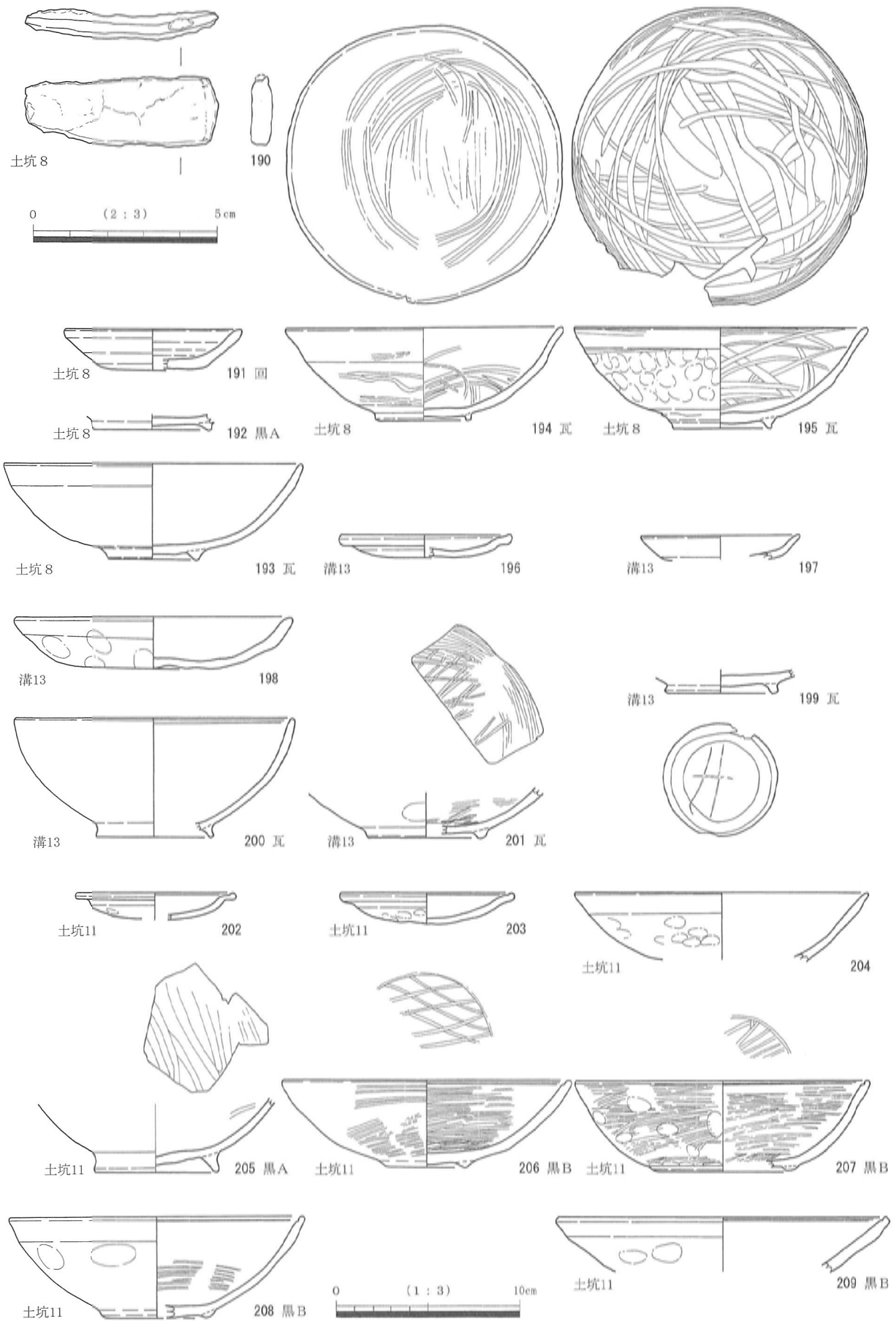
土坑8 (第40・50・54・55図 図版27・177)

南西部に位置する南北径約4.7m、深さ約0.6mの大型の円形土坑である。壁の立ち上がりは緩やかで皿状の断面形である。埋土は、土坑掘削後に一部が砂質シルトで埋まった後、下位1/3に止水堆積のシルトが堆積し、上位2/3はシルト質の砂で埋め戻されている。194の瓦器椀は、ほぼ完形で、正置の

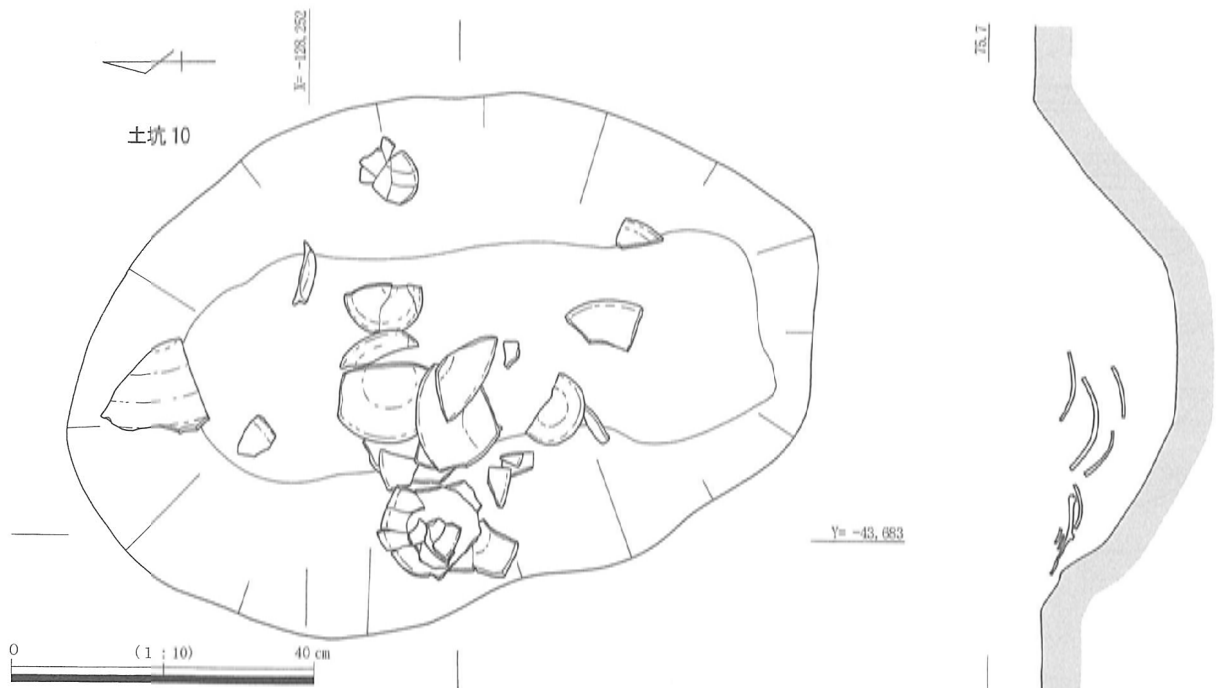
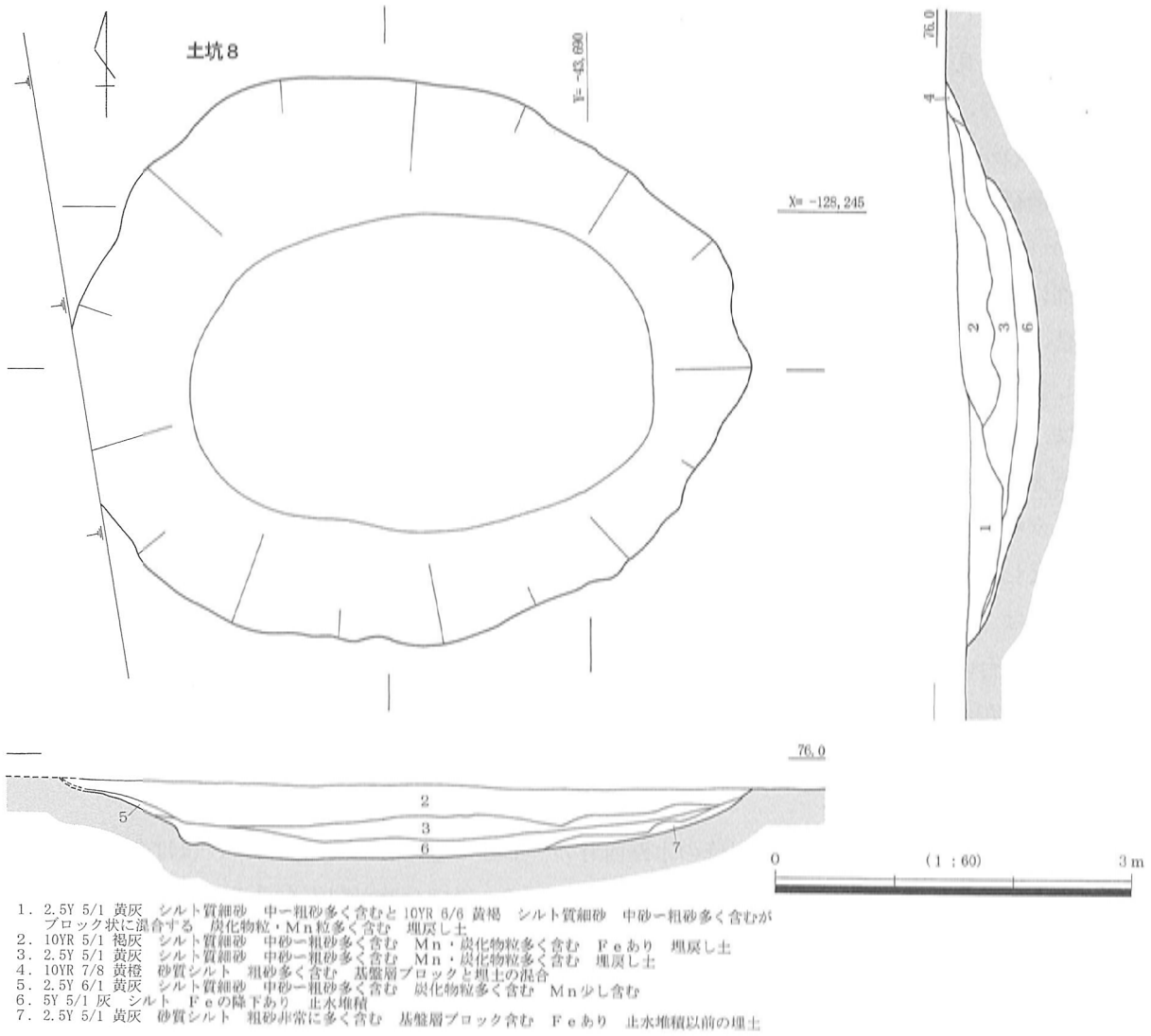


第53図 溝7 土坑7 出土遺物

第1節 丘陵上西部(b城)



第54図 溝13 土坑8 その他の遺構 出土遺物 (2/3 = 190)



第55図 土坑8・10 平面・断面図

状態で出土した。建物13の柱穴5を切っている。

遺物は完形の瓦器碗と多くの小片がある。瓦器碗はほとんどが和泉型である。土師器小皿は、口縁部2段ナデのもの、c域の土坑14でも出土している口縁端部が外反する1段ナデのものがみられるが、1段ナデのものが若干多いようである。他に、回転台土師器皿、鉄製品(180)が出土している。11世紀後葉～12世紀中葉の時期が考えられる。

土坑10(第40・50・55～57図 図版24・27・178～180)

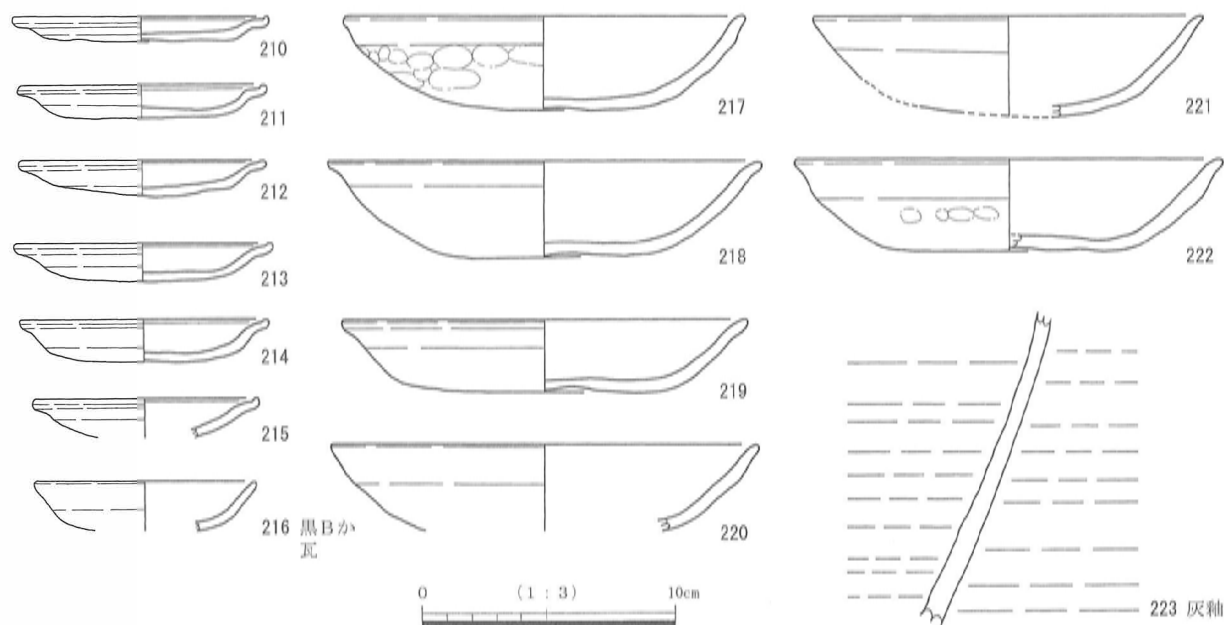
南西部に位置し、やや歪な楕円形で、長径が約1.0m、短径が約0.7mである。深さが約0.2mと浅いが、多量の遺物が出土した。掲載した出土状況図では中央に遺物が集中しているが、図化する前に取り上げてしまったものも多く、本来は土坑全体にみられた。破片が重なり合っている状況である。

遺物は、多くの黒色土器B類碗、土師器皿のほか、灰釉陶器の体部片、黒色土器A類碗も出土している。黒色土器B類碗は、磨滅のため観察できないものも多いが、内外面ともに密なミガキを施す。外面は分割ミガキで、見込みには十字状、一筆書きの平行線状などの暗紋がみられる。口縁部が強い横ナデにより外反し沈線の断面形状が段状になるものと、口縁部が外反せず沈線も線状に入るものがみられる。土師器小皿は「て」字状口縁のもので器壁は厚い。黒色土器A類碗は全体的に少量であり、沈線はなく器壁が厚く高台の大きいものである。その他、磨滅が著しいために判別が難しいが瓦器または黒色土器B類の可能性のある小皿(216)、2.6cm大の鉄滓などもみられる。これを11世紀中葉として粟生間谷遺跡の基準資料としている。

包含層は中央を南北に伸びる近世以降の水路西肩の一部分に遺存していたのみで、ほぼ全域で近世作土層を除去した段階で基盤層上面となる。程度は別として、ほぼ全域が削平を受けていると思われる。出土遺物は周辺の遺構の時期と同じ12世紀のものが多い。輸入磁器が比較的多く含まれていた。

また、その他の遺構から出土した遺物は、記載している遺構と同時期、同様なものばかりである。

西半部では、前述した通り、多くの遺構を検出しているにも関わらず、その北端部では全く遺構を検出しておらず、棚田造成時に大きく削られて遺構が失われた可能性が高い。ただし、北側のa域とは遺



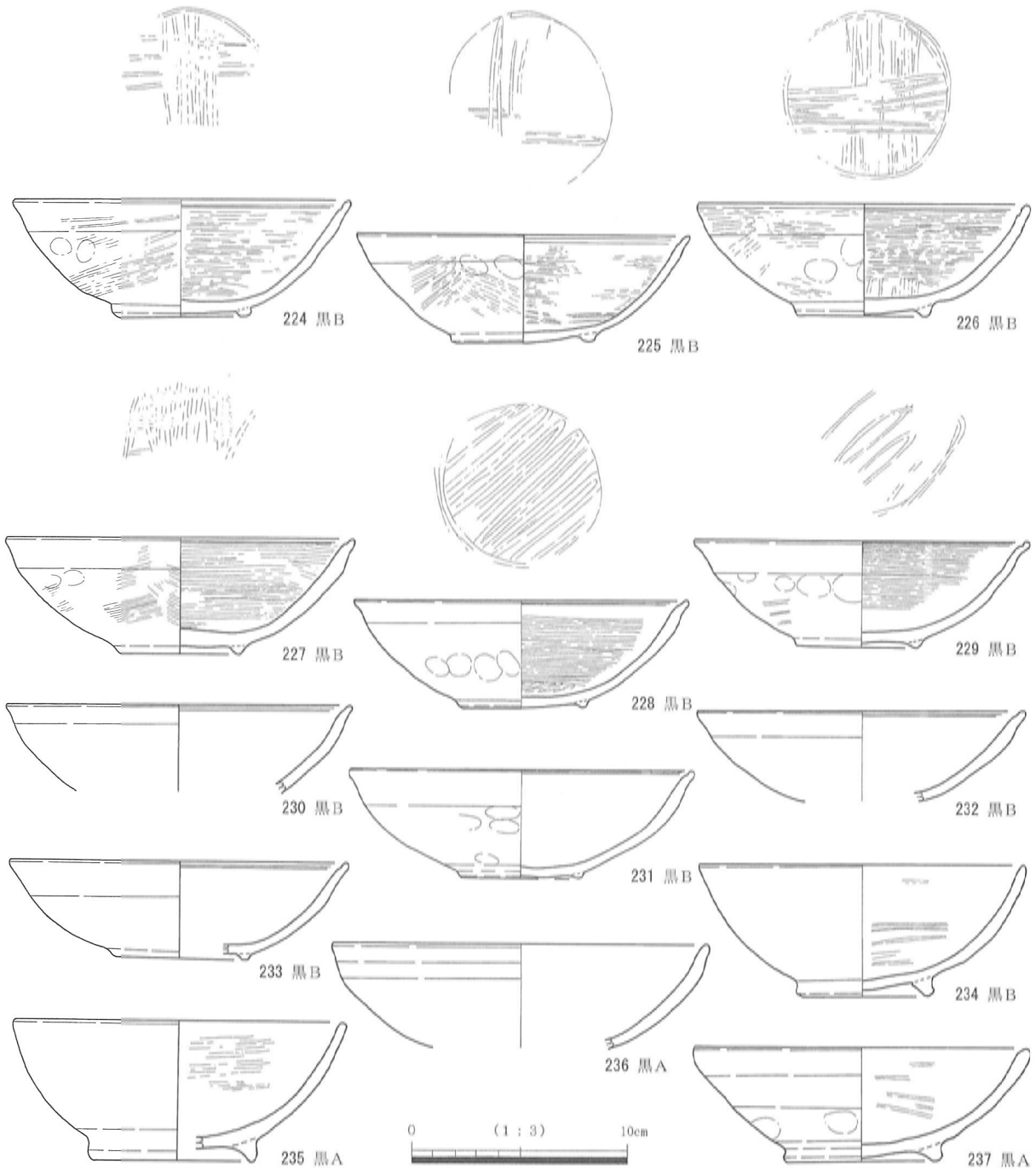
第56図 土坑10 出土遺物(1)

構の中心となる時期がややずれており、ちょうど境界にあたるこの部分ではもとより遺構が少なかった可能性もある。

東半部分では a 域から続く浅い谷状の地形を検出しているが、これも棚田の段下にあたる部分では削平を受けている。東半ではこの谷以外にほとんど遺構がみられず、西半と対照的である。少なくとも谷地形際の部分には遺構があったとすれば遺存していると思われるため、本来より遺構が少なかった可能性が高いと思われる。

小結

b 域の遺構は、11世紀中葉を中心とするもの、12世紀のもの2時期に大別できる。



第57図 土坑10 出土遺物(2)

南西部の建物群(建物12~15)と土坑10などが、黒色土器B類椀、器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿などを出土する遺構群で、11世紀中葉を中心とする時期である。

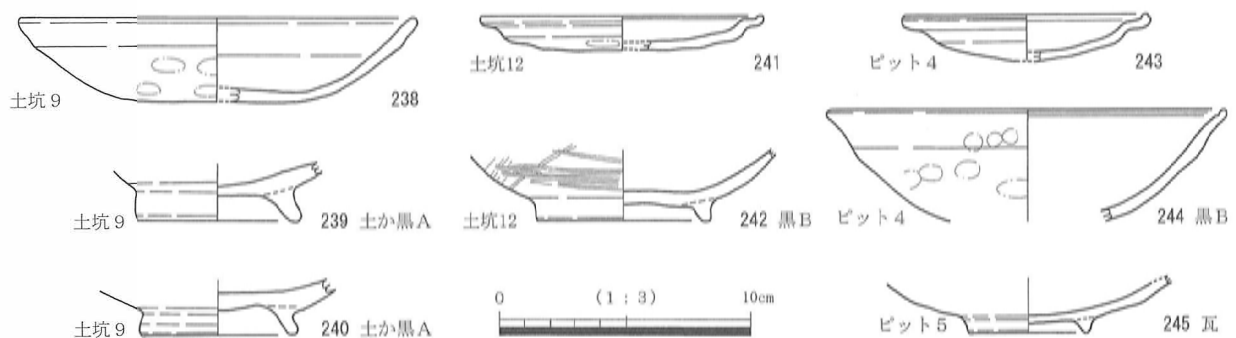
南西部の狭い範囲に建物4棟が密集している。建物12のみ方向軸を違え、かつ他の建物13・14と重なっている。また、柱穴出土遺物も、他の3棟より若干古い様相のものである。まず建物12が建てられ、その後他の3棟が建てられた可能性がある。建物13~15の3棟は重ならず、方向軸も揃えているため、同時に存在した可能性が高いと思われる。なお、北側にある建物11も、これら3棟と方向軸が揃っており、同じ時期である可能性が高いと思われる。さらに、建物15とは東辺もほぼ揃っている。溝14は少量の小片が出土したのみで断定はできないが、11世紀の建物群と同時期に存在していた可能性がある。溝14の2条に分かれている部分のうち東側部分は建物12に、西側部分が3棟に方向をあわせているとみえなくもない。また、建物11の東辺とも位置があっているとみえる。

遺跡全体において、黒色土器B類が主な遺物として出土する遺構は少なく、ましてこのように多くの遺構が展開している箇所は稀である。また、建物13など面積が広い建物がみられること、出土遺物に比較的大きな破片が多く、量が多いのも特徴的である。

北側の建物9・10は遺物が出土していないため時期が不明であるが、方向軸は11世紀中葉の建物群とほぼ同じである。

12世紀代の遺構は、井戸2、それから南へ伸びる溝11、溝11に向かって伸びる東西方向の溝群を中心に展開している。溝11と東西溝群の交点の南西側に、溝に北と東を限られるように位置する建物16、その南側で溝11の西肩に沿うように建つ建物17は、方向軸も溝とあっていることから、溝群と同時期のものである可能性が高いと思われる。前述した11世紀中葉を中心とする時期の建物群とは方向軸を異にしていることもその理由の一つである。ただし2棟の建物が同時に存在していたかどうかは不明である。井戸2からの湧水を溝11に流し、生活用水として利用していたと考えられる。東側は浅い谷地形であるが、井戸2、溝11の北半部の東側はこれに向かって地形がやや低くなっている。a域の谷地形との位置関係から、谷地形は溝11のすぐ東側まで、もしくは溝11の部分まで広がっていたのが、棚田造成時に削平された可能性が考えられる。井戸2、溝11はこの部分を利用して生活用水を得るためにつくられたと思われるが、さらに東西方向の溝も含むこれらの遺構群は、地形の高い北側から流れてくる水に対する治水の機能ももっていた可能性が考えられる。他に、西南部に位置する土坑8は大型の土坑で、これも水溜めなどの水に関する遺構であると思われる。

b域は、これまで述べてきたように、大きくは11世紀中葉を中心とする時期、12世紀代の遺構にわけられる。前者からは主として黒色土器B類、後者からは主として和泉型瓦器椀が出土しているが、遺跡

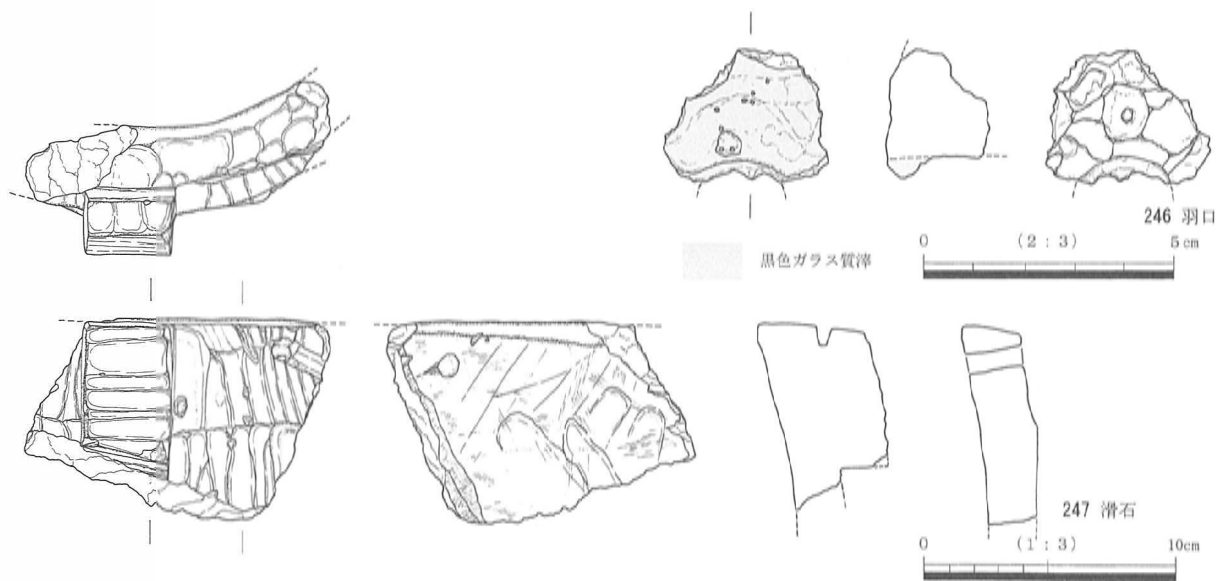


第58図 その他の遺構 出土遺物

全体をみると両者の間に、主として楠葉型瓦器碗が出土する時期が存在する。d域の土坑15が代表的なその時期の一括出土資料である。これは、共伴する土師器皿から黒色土器B類碗の時期と大きく時期を違えるものではないと思われるが、やや新しい様相を呈しており、11世紀後葉の時期を考えている。b域にはこれに該当する遺構はほとんどみられず、かつ南のc域でこの時期の遺構が非常に多くみられるため、このb域の2時期の遺構群は連続したものではないといえる。

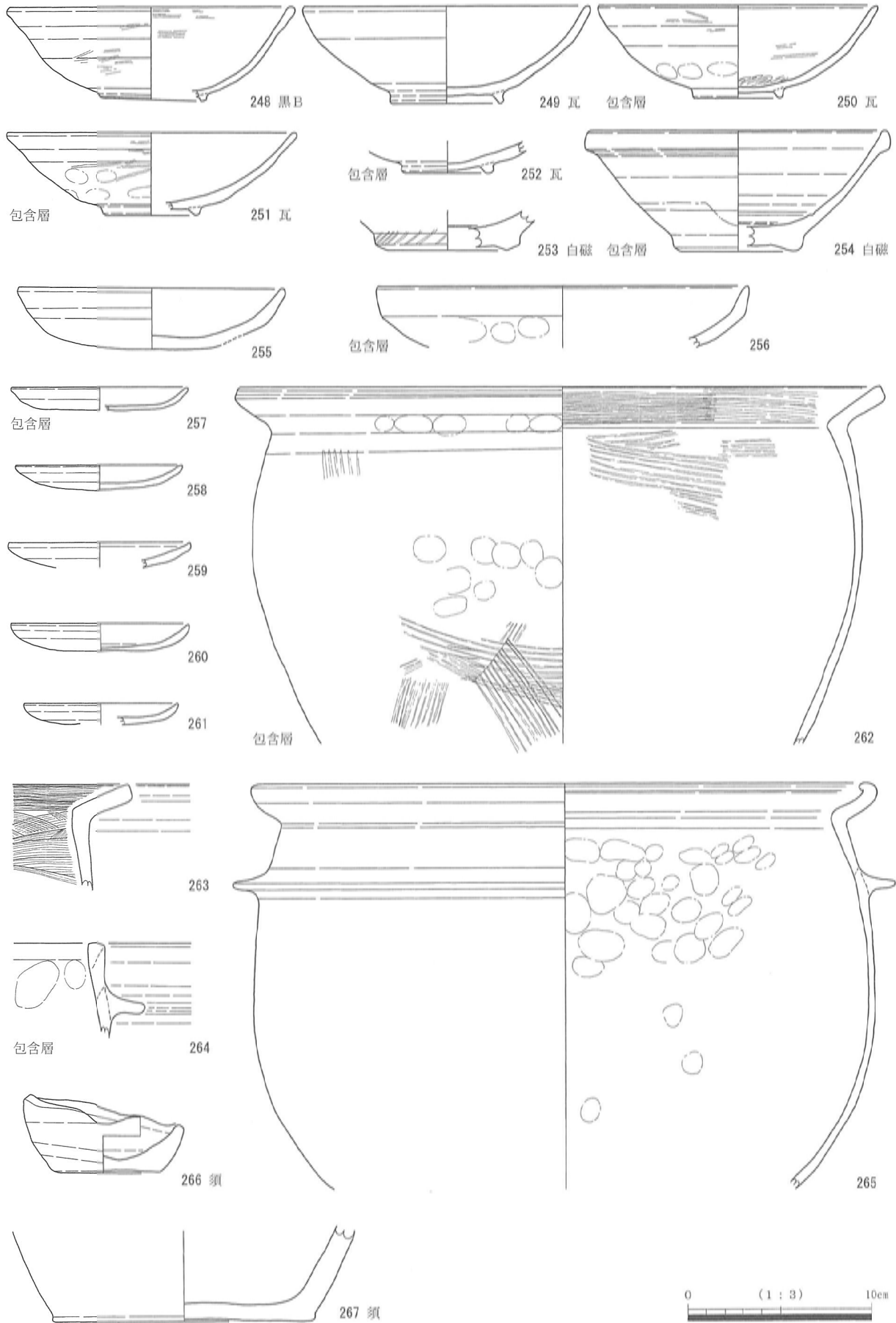
ただ、建物12・13と重なる溝13の出土遺物は、時期的に11世紀中葉の遺構群と12世紀の遺構群との間の様相を示している。この溝は位置的にみると溝12・14と一連のものであることが想定され、溝14が11世紀の建物群と同時に存在していた可能性を先述した。しかし、溝12・13からは建物出土遺物よりやや新しい時期の遺物が出土していること、溝13は建物12・13と重なっており時期差が存在することなど、問題点も多い。また、溝12・13は、土坑8との位置関係も気になるところである。

b域の西側は調査地外であるが、遺構の分布状況からみて同様な遺構が広がっていると思われる。北側はa域で、やや地形が高くなっており、b域とは中心となる時期がややずれる遺構群が展開している。南側はc域で、非常に多くの建物があり、楠葉型瓦器碗が主に出土する。b域の黒色土器B類碗が出土する建物群と連続する次時期のもので、南に建物の立地が変わったことがわかる。ただし、b域の建物とは、面積、平面形態、総柱であることなど、共通点が多い。



第59図 近世作土層等 出土遺物 (2/3 = 246)

第1節 丘陵上西部(b城)



第60図 包含層・近世作土層等 出土遺物

第3項 c域 (付図2)

丘陵上西部の中央に位置する。南へと緩やかに下がる地形ではあるが、b域と同様、丘陵上においては極めて平坦な部分である。南側はd域、東側はe域である。

主な遺構に、建物8棟・焼土坑3基のほか、溝・土坑・ピットなどがある。

建物18 (第61・62図 図版28・30)

西端に位置する。南北8間×東西2間、約16.7m×4.5m、約75.2㎡の建物としているが、西側の調査地外に続く可能性がある。主軸は、 $N-14.5^{\circ}-W$ を向く。南端部の南北の柱間は、他が約2.0m～2.1mであるのに対して、約2.5mと若干ではあるが広がる。総柱構造となっている部分もあるが、南北中央柱列では3箇所て柱穴を検出していない。その部分には0.1m前後の近世の棚田に伴う段差や土坑があるが、検出している柱穴の深さをみれば削平の可能性は低いと思われる。

遺物は、小片のみではあるが、半数の柱穴から出土している。瓦器、黒色土器B類椀、土師器皿、底部外面糸切り離しの回転台土師器などがある。瓦器椀の判別可能なものは楠葉型である。11世紀中葉～12世紀前葉の範疇に入るものである。

建物19と重複し、建物21と柱列の並びを揃える。

建物19 (第61・63図 図版28・30)

西端に位置する。南北3間×東西1間、約6.6m×2.3m、約15.2㎡の建物としているが、西側の調査地外に続く可能性がある。主軸方向は、 $N-15^{\circ}-W$ である。建物18と重複している。

遺物は細片がごく少量あるのみで、最終段階の「て」字状口縁土師器皿、瓦器などである。

建物20 (第61・64図 図版28・30)

北西部に位置する。東西4間×南北3間、約10.6m×6.2m、約65.7㎡である。主軸方向は、 $N-15^{\circ}-W$ である。ただし、棚田造成時に削平を受けている北側にも柱穴が存在していた可能性は否定で



第61図 c域 平面図



第62図 建物18 平面・断面図

きない。総柱建物としているが、南西部で柱穴を検出していない。その部分には近世の柵田に伴う約0.1mの段差が存在しており、削平された可能性もある。建物21・22と重複している。

遺物は小片のみであるが、6基の柱穴から出土しており、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器B類、楠葉型瓦器椀、器壁の厚い黒色土器A類などがある。11世紀代を中心とした11世紀中葉～12世紀前葉の範疇に入るものと思われる。

建物21 (第61・65図 図版28・30)

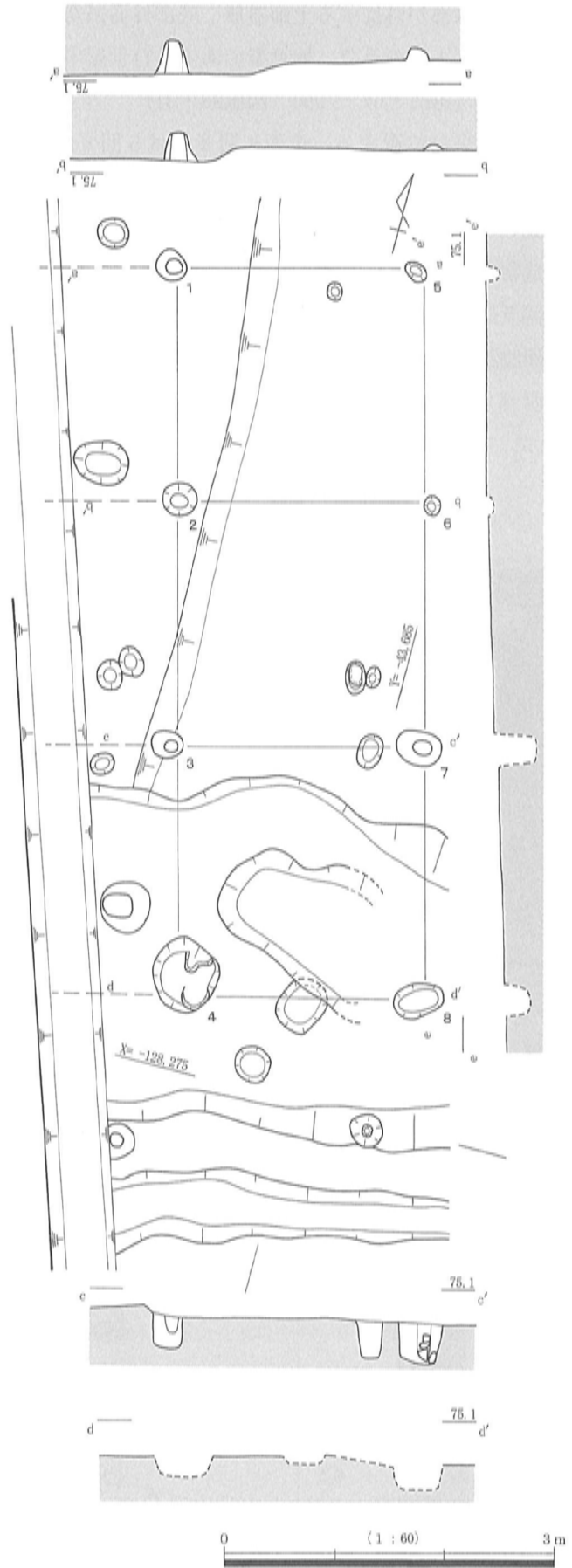
北西部に位置する。東西5間×南北3間で、さらに北側に1間、約1.1mと柱間の狭い部分が付く。約10.2m×7.4m、約75.5㎡の総柱建物である。主軸は、N-12.5°-Wを向く。西部で1箇所柱穴を検出していないが、この部分には近世柵田に伴う約0.1mの段差が存在しており、削平された可能性もある。建物18・24と柱の並びをほぼ揃えている。建物20・22と重複している。

遺物は、10基の柱穴から小片が出土しており、「て」字状口縁土師器皿、口縁部が外反する土師器大皿・小皿、楠葉型瓦器椀、黒色土器B類などがある。11世紀中葉～12世紀前葉の範疇に入るものである。

建物22 (第61・66図 図版28・30)

西半部中央に位置する。南北6間×東西1間、約14.4m×4.1m、約59.0㎡であるが、さらに東辺北半および西辺南半の外側に約1.4m～1.7m張り出す部分が付く。主軸方向は、N-13°-Wである。東西の柱間は約4.2mで、南北の柱間が約2.4m～2.7mであるのに対し、ほぼ倍の広さをもつ。張り出し部を入れた総面積は、約81.1㎡である。建物20・21・23・24と重複している。

遺物は5基の柱穴から小片が出土している。瓦器、黒色土器B類椀、「て」字状口縁土師



第63図 建物19 平面・断面図

器皿、口縁部が外反する土師器皿、底部外面糸切り離しの回転台土師器皿などがあり、瓦器碗で判別可能なものは1点のみで、楠葉型である。11世紀中葉～12世紀前葉の範疇に入るものである。

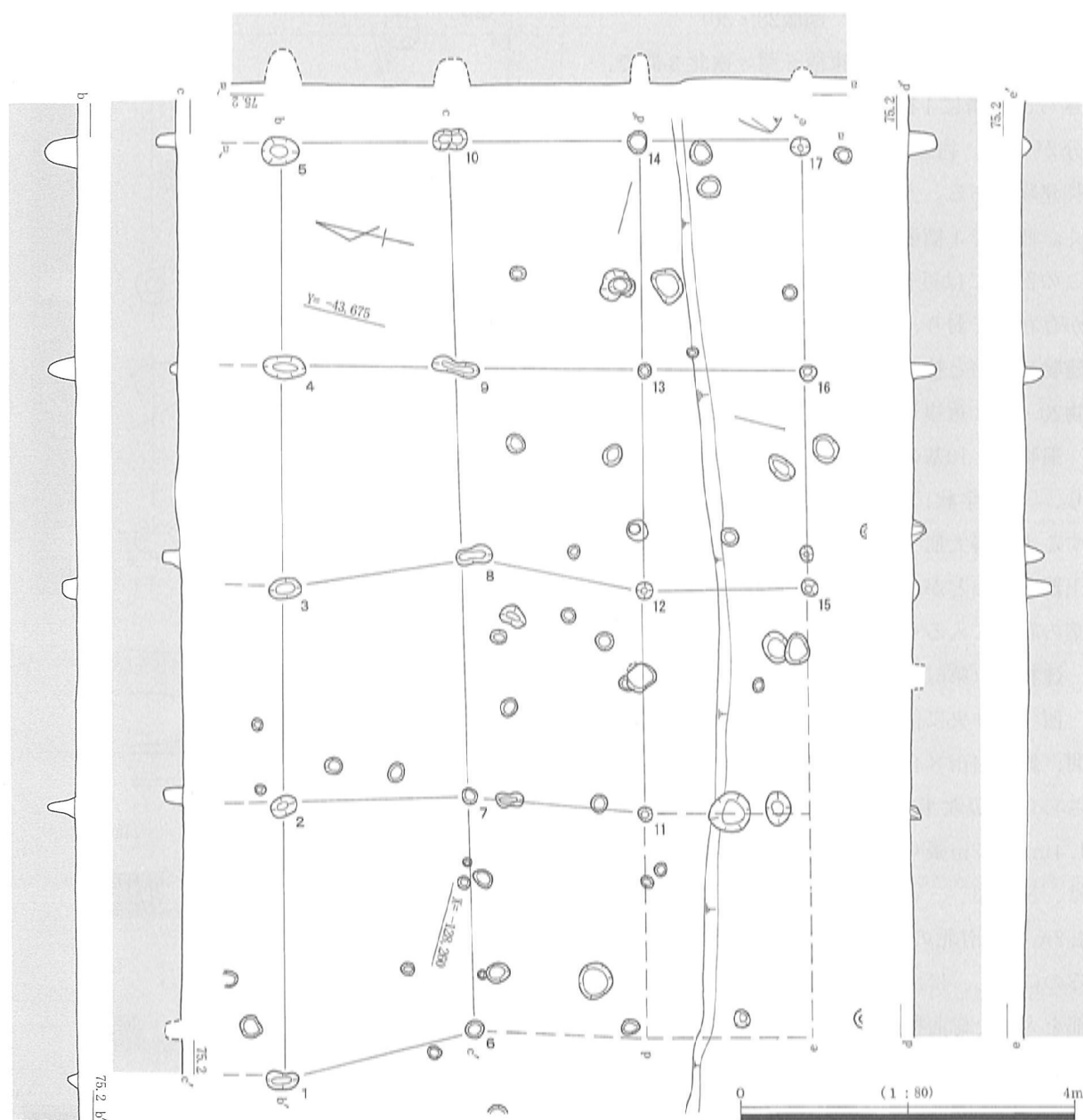
建物23 (第61・67・70図 図版28・31)

西部中央に位置する。東西4間または5間×南北4間、約8.0mまたは9.7m×7.1m、約56.8㎡または68.9㎡である。主軸方向は、N-10°-Wである。柱穴を欠いている箇所があるが、調査時に建物を認識していなかったため、詳細は不明である。建物22・24と重複している。

遺物は、「て」字状口縁土師器皿、底部外面糸切り離しの回転台土師器皿のほか、黒色土器B類、土師器煮炊具などの小片が出土している。11世紀中葉～12世紀前葉の範疇に入るものである。

建物24 (第61・68・70図 図版28・31・181)

西部中央南寄りに位置し、東西5間×南北3間、約9.9m×5.6m、約55.4㎡である。主軸はN-14.5°-Wを向く。北側にある建物21と東西両辺や柱の並びを揃えている。



第64図 建物20 平面・断面図

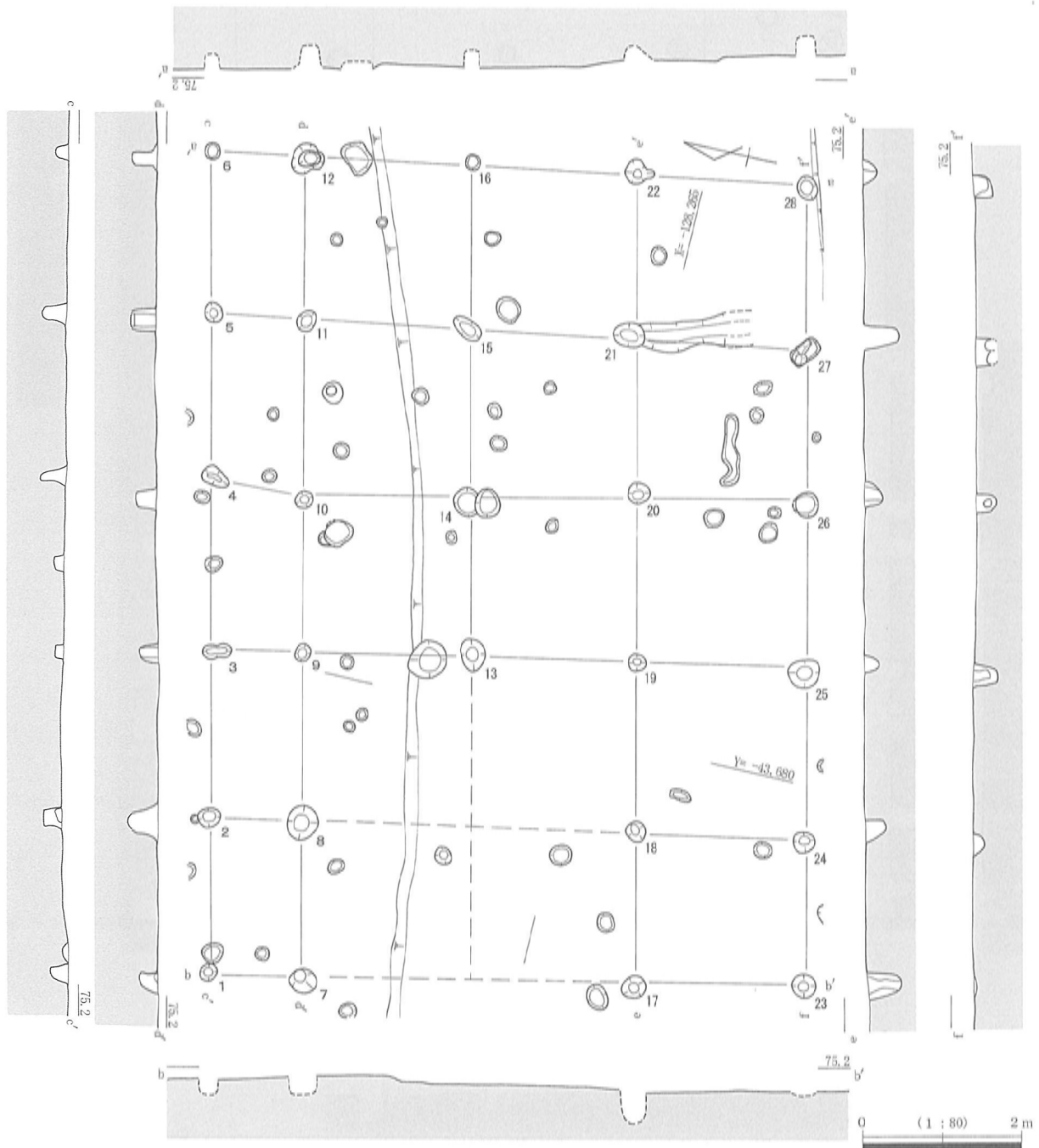
遺物は小片のみで、「て」字状口縁土師器皿、口縁部の外反する土師器皿などがあり、11世紀中葉～12世紀前葉のものである。柱穴10から出土した焼土塊は、上げ真土のようなきめ細かい土が表面に付着し、鑄型の可能性がある。ただし、上げ真土に相当する部分に被熱痕跡は認められない。

建物25（第61・69・71図 図版28・31）

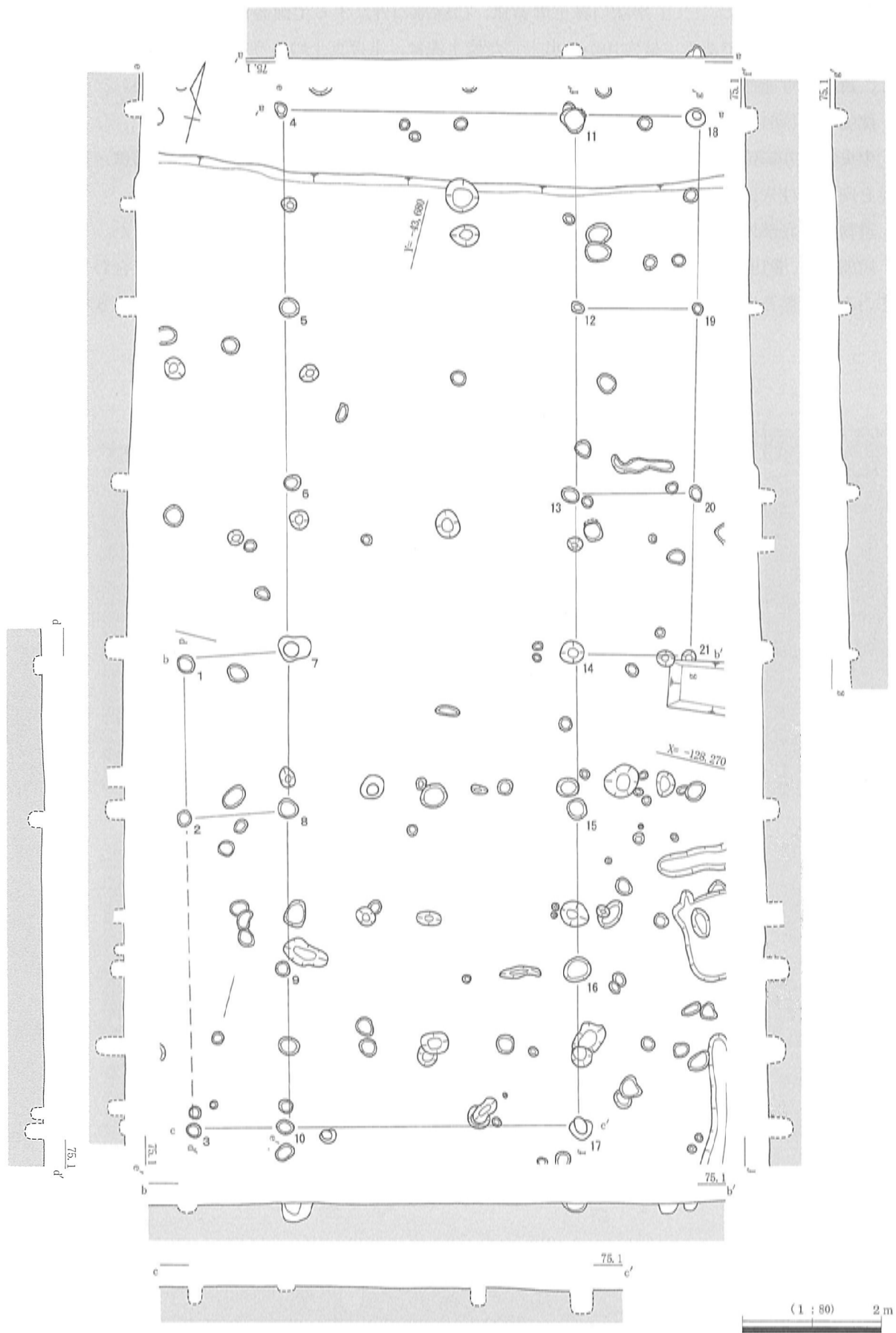
中央南寄りに位置し、南北2間×東西2間、約5.1m×3.5m、約17.9㎡である。主軸は、N-17°-Wを向く。柱穴は径約0.1m～0.2mと小規模である。柱穴6には柱痕が認められた。

遺物は、底部外面へら切り離しの回転台土師器大皿、土師器煮炊具などが少量出土した。

周囲には、溝19などの溝群が巡っているが、これらで区画された中の東半分は方向軸を合わせて納まっている。溝群とほぼ同時期に存在していた可能性が高いと思われる。建物として復元はできなかったが、



第65図 建物21 平面・断面図



第66図 建物22 平面・断面図

建物25と重複して同様な規模の柱根を残すピット12があり、区画内に前後関係をもつ建物が存在した可能性が高い。それぞれの溝との詳細な時期関係は不明である。

溝16 (第71図)

中央西よりに位置する南北方向の溝で、検出長約7.0m、幅約0.4m、深さ約0.1m～0.2mである。北端部周辺は棚田造成による削平を受けた部分であり、以北が削平された可能性もある。

遺物は小片のみであるが、楠葉型瓦器椀が比較的目立つほか、土師器大皿がある。11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

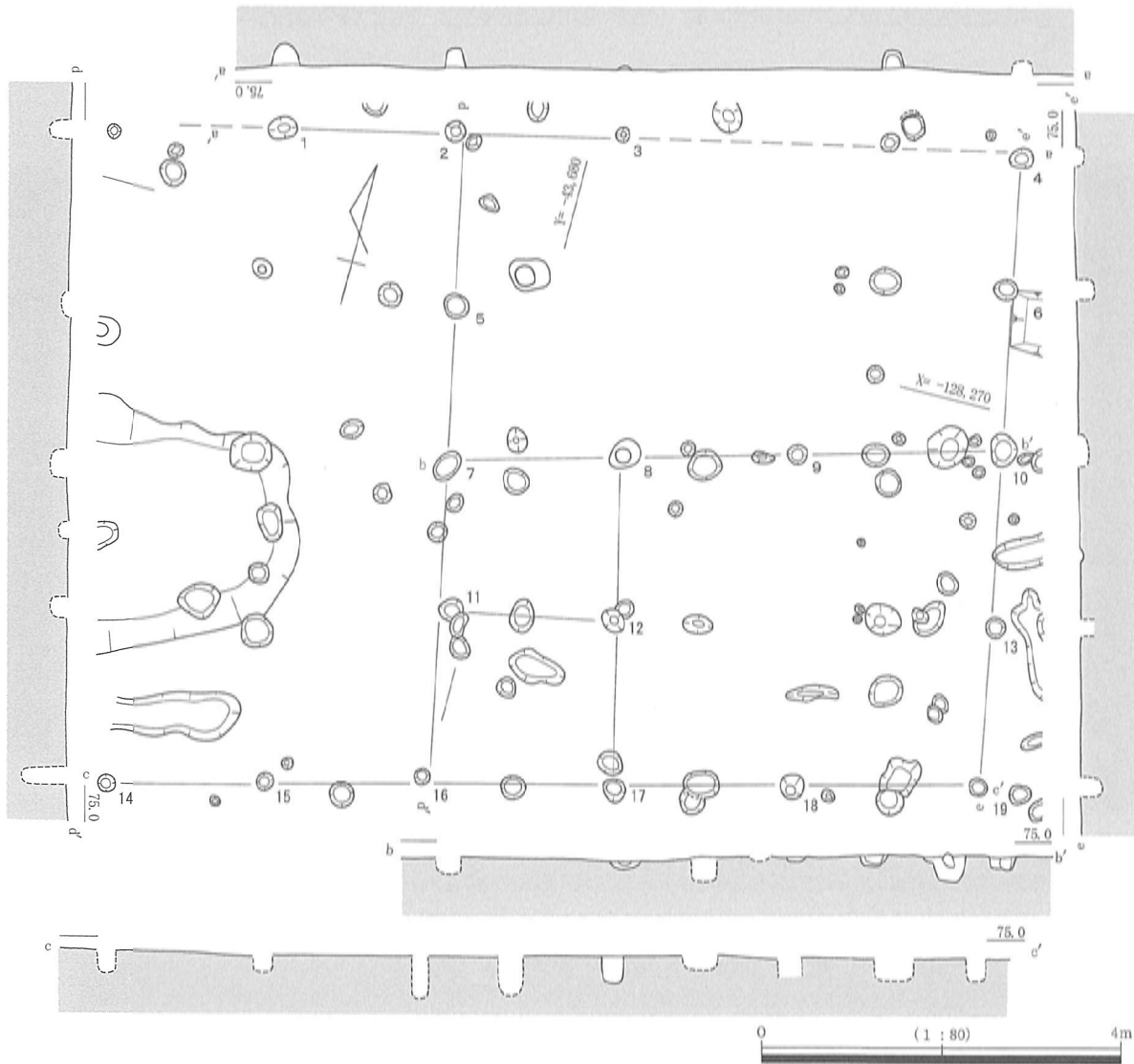
直交する東西方向の溝17を切っている可能性がある。南の延長上に溝19の南北部分と溝20があり、方向軸を揃える南北溝22が約12m東にある。

溝17 (第69・71図)

中央部に位置する東西方向の溝で、長さ約11.5m、幅約0.5m、深さ約0.1mである。

遺物は、瓦器椀、口縁部が外反する土師器皿、最終段階の「て」字状口縁土師器皿などの小片が出土している。11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

直交する南北方向の溝16に切られ、東端部で同方向の溝18を切っている可能性がある。溝19の東西方



第67図 建物23 平面・断面図

向部分と近接して並行しており、その東端の位置も揃っている。南北方向の溝20・22とは交わっていないが、延長すれば直交する位置関係である。

溝18 (第69・71図)

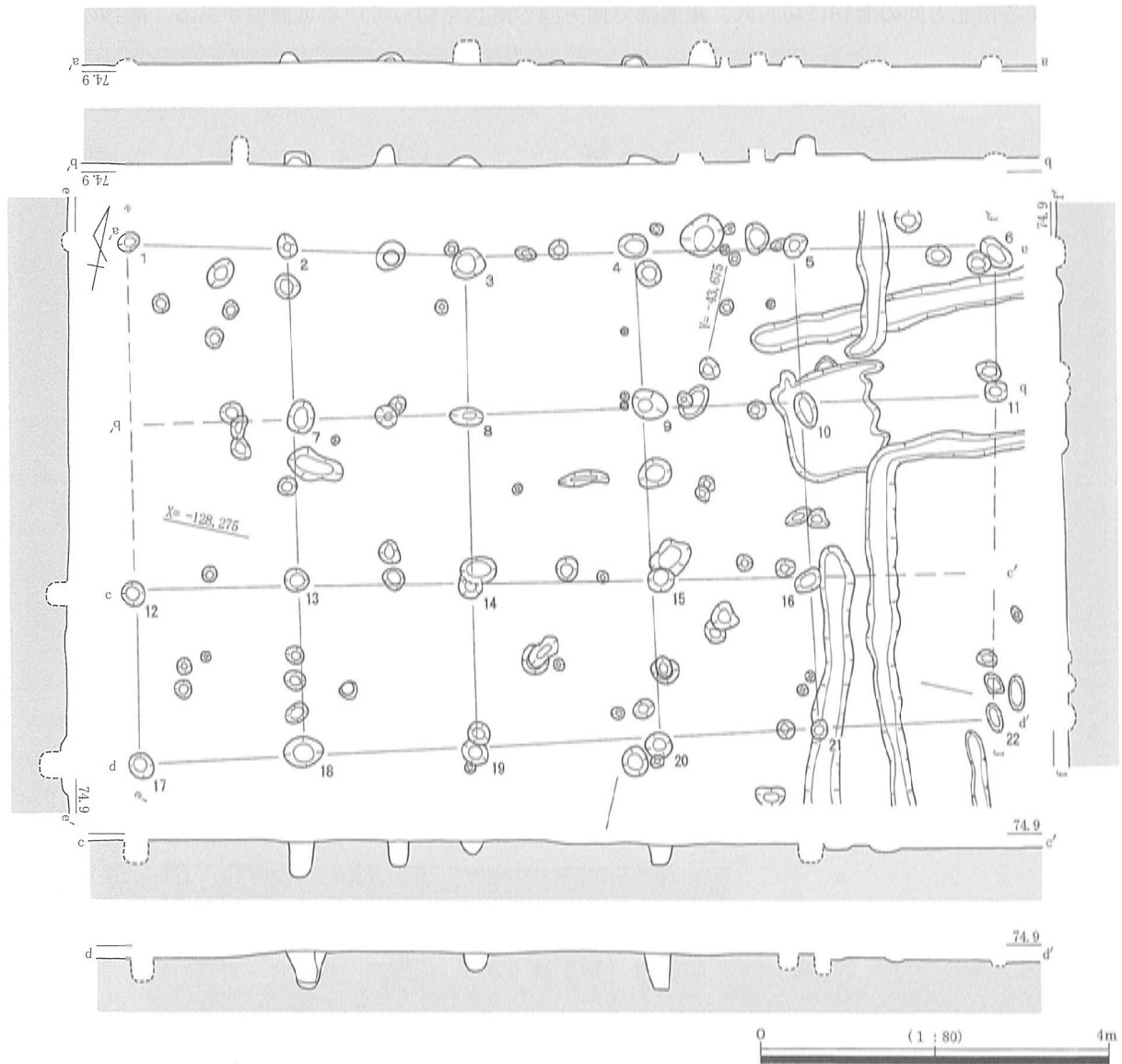
中央東寄りに位置する東西方向の溝で、検出した長さ約1.7m、幅約0.3m～0.7m、深さ約0.1mである。同方向の溝17に西側部分を切られている可能性がある。

遺物は小片のみで、瓦器椀、口縁部が外反する土師器皿が出土しており、11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

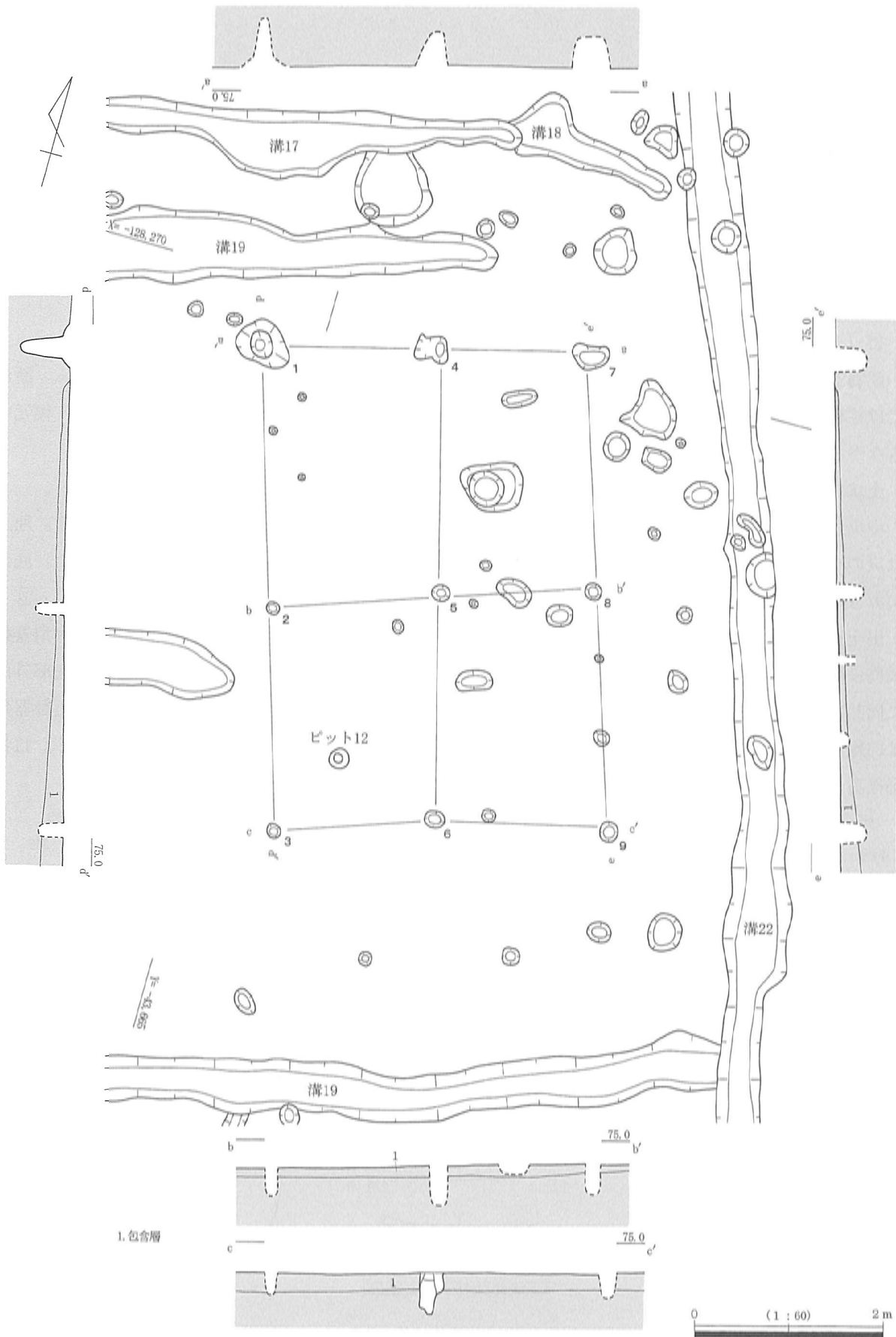
溝19 (第69～71図 図版181)

中央部南寄りに位置する「コ」字形の溝で、最大規模東西約11.0m、南北約8.0m、溝の幅約0.2m～0.7m、深さ約0.1mである。平面形態から、区画の機能を果たしていた可能性がある。

遺物は、土鍾のほかは小片のみで、瓦器椀と土師器皿がある。土師器皿には口縁部1段ナデのもの、端部がやや外反するものとまっすぐおさめるものなどがある。11世紀後葉～12世紀前葉のものと考えら



第68図 建物24 平面・断面図



第69図 建物25 平面・断面図

れる。

溝20 (第71図)

中央南部に位置する南北方向の溝で、検出した長さ約9.8m、幅約0.4m、深さ約0.1mである。南は棚田の造成により削平されている。遺物は、出土していない。

溝22 (第69・71図)

中央部東寄りに位置する南北方向の溝である。検出長約18.0m、幅約0.5m~0.7m、深さ約0.1mである。溝16・19・20の南北方向部分に方向軸を揃える。遺物は出土していない。

北に延長した位置にb域の溝11が、南の延長線上にd域の谷地形があるが、それぞれの間は棚田の段差によって削平されており、詳細は不明である。

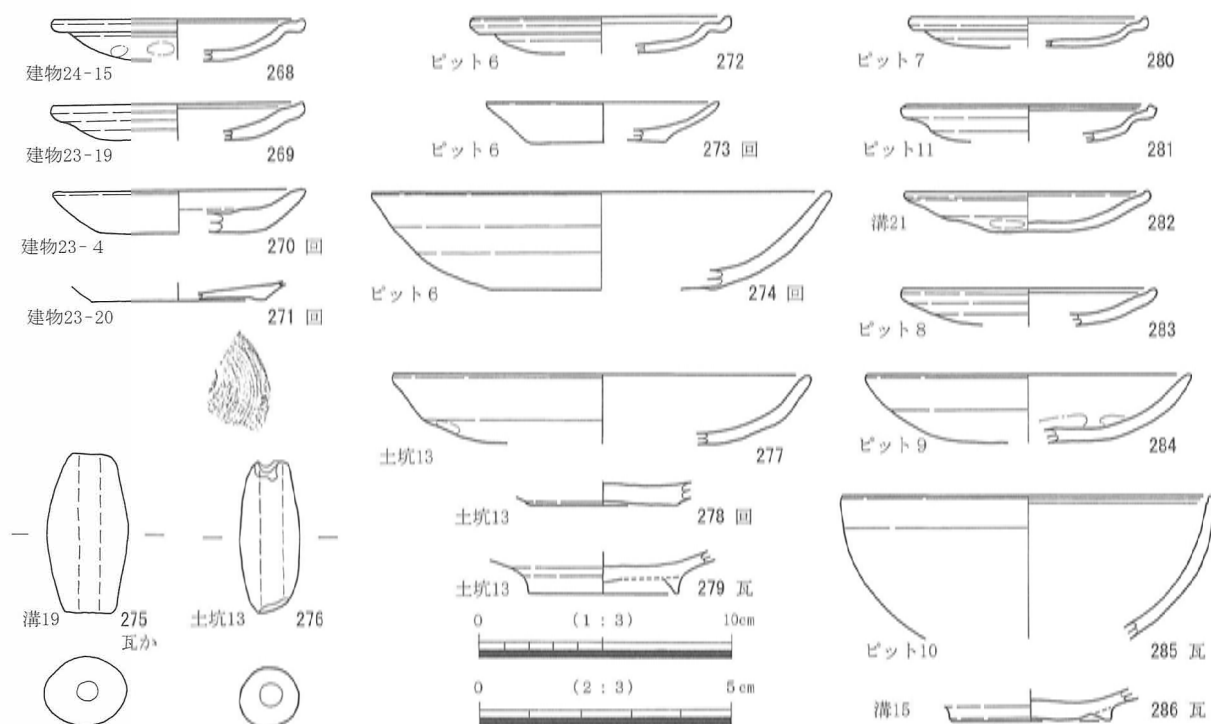
ピット12 (第69・71図 図版31)

建物25と重複する。直径約0.2m、深さ約0.4mの小規模な柱穴であるが、柱根が遺存している。断面では柱根が掘り方よりも下方におよんでいる状態がみられた。建物などに伴うと想定されるが、復元できなかった。

土坑14 (第61・72・73図 図版31・182)

中央東寄りに位置し、径約0.7mの不整円形で、深さ約0.4mである。底面は、ほぼ平らである。埋土は炭の小片を含むシルトで、上部から下部まで遺物を多く含み、須恵器鉢が底付近から出土した。底部に大きな自然石が入っていた。埋土から人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。

出土遺物には、瓦器椀、土師器小皿、東播系須恵器鉢のほか、回転台土師器大皿、土師器の大型器種、最終段階の「て」字状口縁土師器皿の小片などがある。瓦器椀には和泉型と楠葉型がみられ、底部外面に同じ線刻をもつものが2個存在する。いずれも磨滅しており、ミガキなどは観察できない。土師器皿は口縁部が外反するものと、口縁部を2段ナデするが端部をつまみあげていないものがみられる。11世紀後葉~12世紀前葉のものと思われる。



第70図 建物23・24 溝15・19 その他の遺構 出土遺物 (2/3 = 275・276)

焼土坑 4 (第61・74図 図版31)

北側に建物群が展開し、南側は遺構が希薄となる、c域南西部に位置する。方形で、1辺約0.8m、深さ約0.2mである。近世の溝に切られている。壁の上部、断面の上層に対応する部分が被熱して焼土化している。壁の焼けしまっている部分は橙色であるが、その外側部分は赤黒色である。下層は炭層である。



第71図 建物25付近 平面図

埋土に対して残存脂肪酸分析をおこなっており、結果をIV 第2章に記載している。

焼土坑5 (第61・71・74図 図版31)

中央部に位置し、焼土坑6と近接する。長辺約0.7m、短辺約0.6mの方形で、深さ約0.2mである。最下層は炭化物・灰を多く含む層、上・中層は埋め戻し土と思われる層で、壁付近から埋められたと想定される。壁は、埋土の中層以上に対応する部分を中心に被熱し、焼土化している。壁の焼けしまっている部分は橙色であるが、その外側は赤黒色である。遺物は出土していない。

焼土坑6 (第61・71・74図 図版31)

焼土坑5の南西に近接する。円形で、径約0.8m、深さ約0.1mである。下層は炭化物主体の層で、上層が埋め戻したと考えられる層である。壁に被熱して焼土化している部分がみられる。

遺物は、磨滅が著しい楠葉型瓦器椀、黒色土器A類などが出土している。

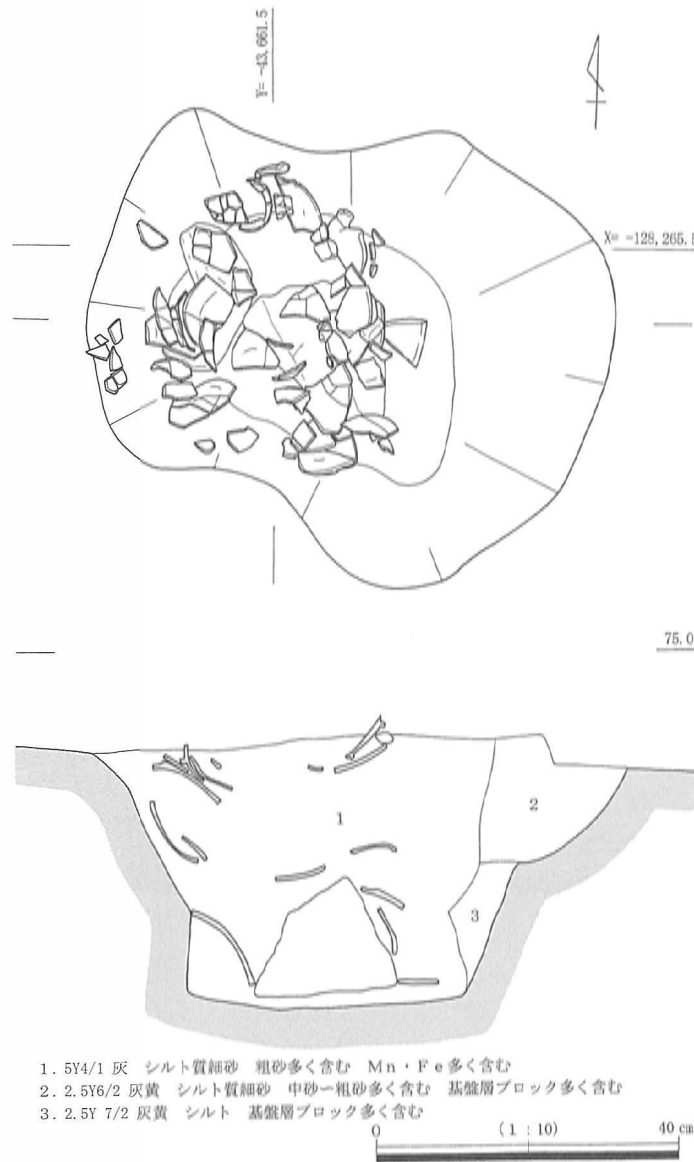
包含層は、南西部、南東端と東端のごく一部にのみ遺存していた。それ以外の部分では近世作土層を除去した段階で基盤層上面となる。近世作土層は複数層に分けられるが、その掘削中に古い段階の棚田

の段差を確認した。調査前の段階にいたるまでに段差をなくし、一筆の面積を広げる造成がおこなわれたことがわかる。包含層からは、古手の瓦器椀が多く出土している。黒色土器B類椀の出土数は非常に少なく、b域と対照的である。全体的にd域の土坑15よりやや新しい様相のものであり、11世紀後葉のものが多くを占めるが、12世紀前葉のものも一定数みられる。特筆すべきものとして、近世作土層から底部外面に「□□合子記」と陽刻された青白磁合子が、包含層から2箇所穿孔をもつ瓦器椀底部片が出土している。また、近世作土層から、鋳造鉄製品と鍛冶滓2片が出土している。

西半では北東部および南西部を除く広い範囲で遺構を検出しており、他の域に比べると削平の程度は低いと思われるが、棚田の段直下などでは、遺構が失われる程度の削平を受けたと想定される。

小結

c域の遺構から出土した遺物の時期は、ほぼ11世紀中葉～12世紀前葉に限られる。ただし、きわめて少数であるが、黒色土器A類椀、器壁の薄い「て」字状口縁土師器



- 1. 5Y4/1 灰 シルト質細砂 粗砂多く含む Mn・Fe多く含む
- 2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質細砂 中砂～粗砂多く含む 基盤層ブロック多く含む
- 3. 2.5Y 7/2 灰黄 シルト 基盤層ブロック多く含む

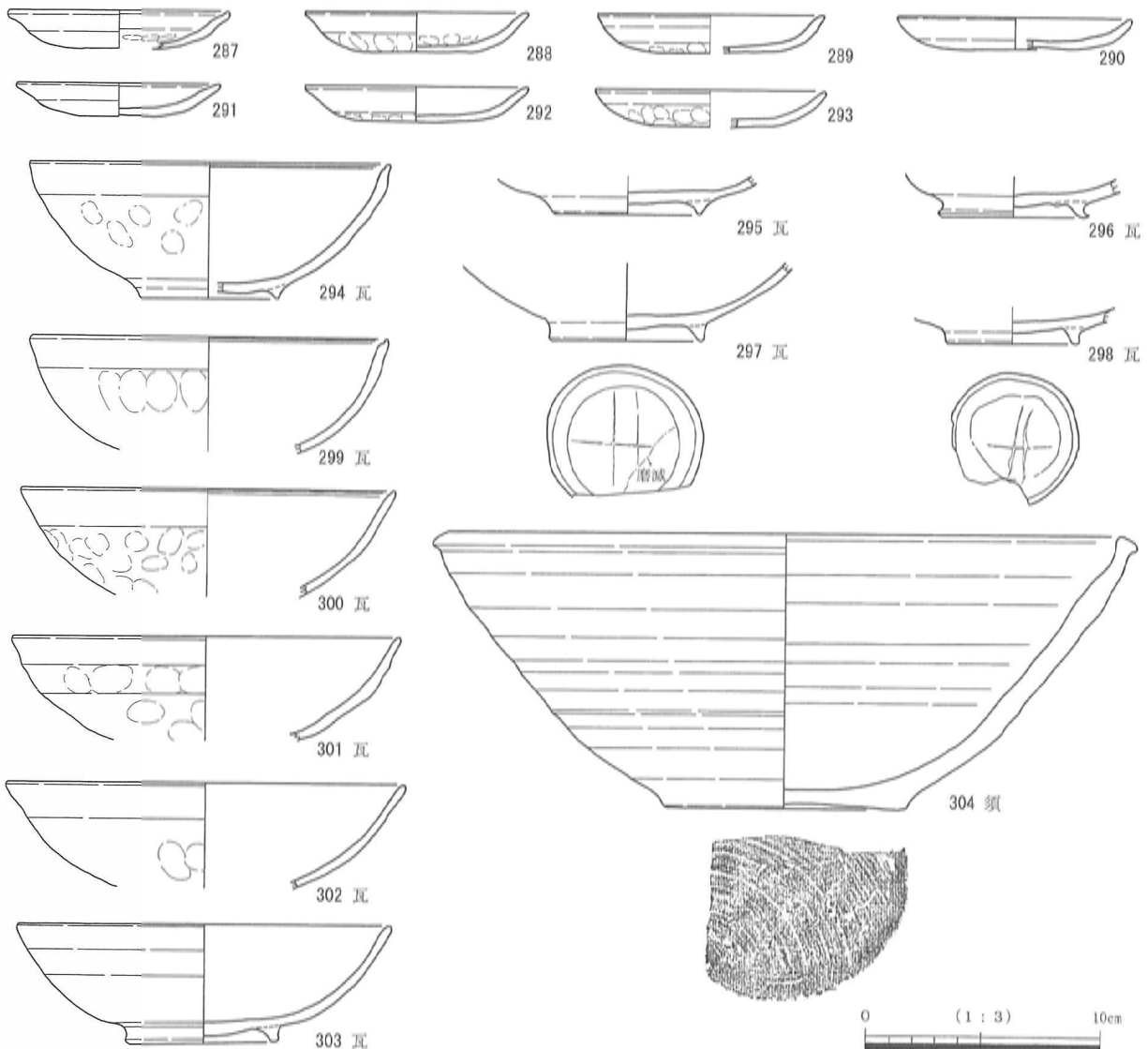
第72図 土坑14 平面・断面図

皿など10世紀～11世紀前葉のものが出土した遺構もある。

建物群からは、黒色土器B類椀、瓦器椀、器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿などが出土している。黒色土器B類椀はb域とほぼ同様のもので、これらがb域の遺構群に近接しているために混じり込んだものである可能性は否定できない。瓦器椀が小片であるためにその時期を決め難いが、b域では瓦器椀がほとんど出土していないことから、b域とc域に時期差が存在することは明らかである。建物の個別記載の項では、出土遺物の時期を11世紀中葉～12世紀前葉と記したものが多いが、遺構の変遷を考える上では、11世紀後葉～12世紀前葉と時期をより限定して考えた方がわかりやすいと思われる。ただし、b域の小結でも述べたが、b域との時期差はわずかなものであり、連続していると想定している。

西半の主として南東部に展開している溝群からは、黒色土器B類椀はほとんど出土していない。これは単にb域から離れている部分に位置しているために混じり込まなかったとも考えられるが、一方で、建物群が黒色土器B類椀から瓦器椀への移行期、併用期のものにあたると思えば、溝群の方が若干新しいものであるとも考えられる。ただし、時期差が存在したとしても、ごくわずかな差であると思われる。

土坑14からは、c域で最も新しい様相のものが出土している。土師器小皿は「て」字状口縁ではなく、



第73図 土坑14 出土遺物

口縁部が外反しているものとまっすぐに立ち上がるもので、瓦器碗は楠葉型と和泉型が混じっている。遺跡全体をみても、このような様相の一括出土遺物はほとんどみられない。ただ、これも表記すれば11世紀後葉～12世紀前葉となり、遺物の様相からみたわずかな時期差でしかない。溝群と同時期のものである可能性もあるが、溝出土遺物が小片であるため、詳細は不明といわざるを得ない。

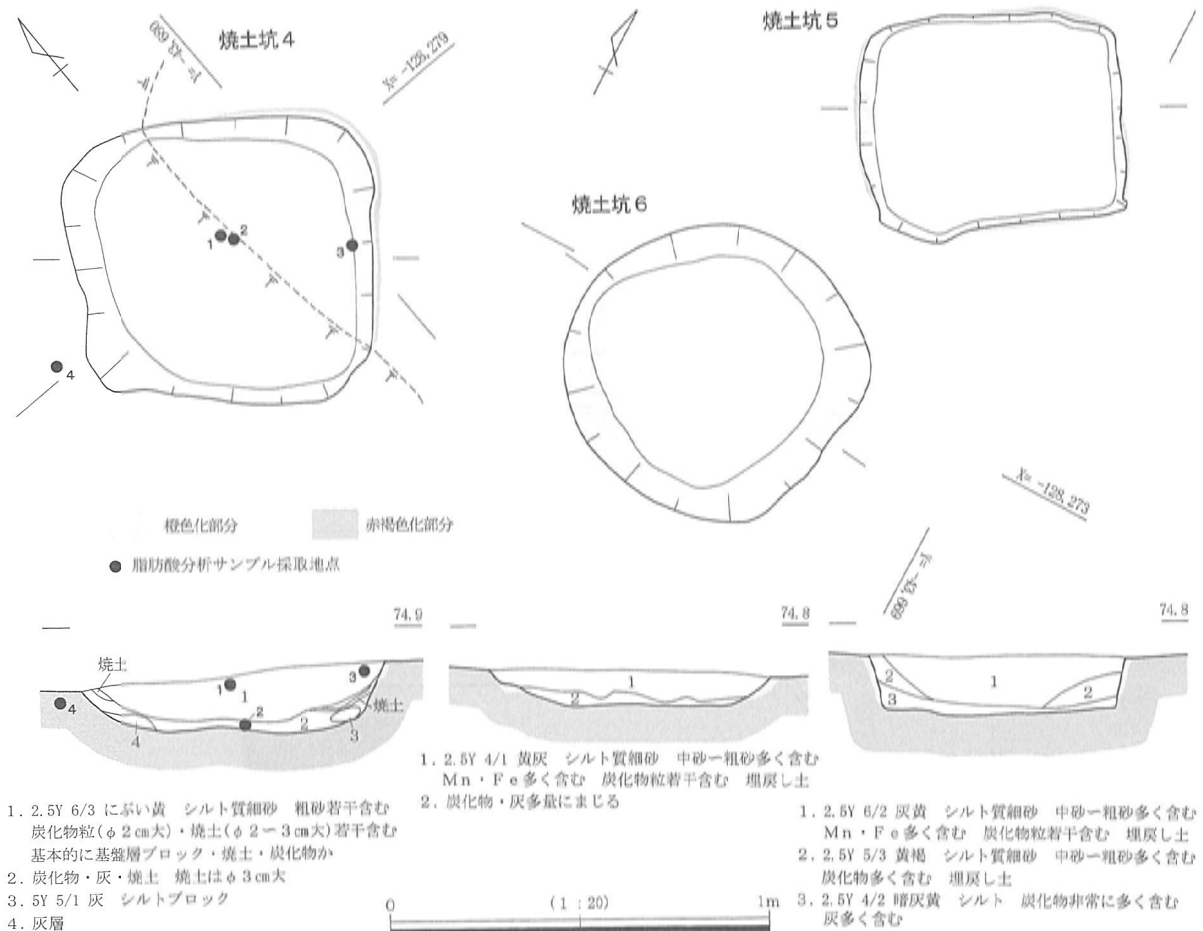
以上、c城の遺構の時期は11世紀後葉～12世紀前葉にほぼ限定されると思われる。建物、溝には重複関係や切り合い関係が多くみられ、そのセット関係や先後関係が問題となるが、限られた時期幅のなかで少量の遺物によって差を見出すことは困難であり、詳細な時期関係は不明であるといわざるを得ない。建物群、溝群の方向軸もほぼ揃っているため、位置関係や組み合わせなどから推測するほかはない。

c域には多くの建物が重複して建てられているが、遺跡全体をみてもこのような箇所は少ない。また、総柱の建物が多く、その面積が広いこともこの域の特徴である。

全体的にみれば、建物群は建物20～23の重複関係や位置関係からみて最低でも4時期に分けられると考えられる。西端部に位置する建物18・19とその東の建物群は、ごく一部を除いて重なっておらず、両者のいずれかの組み合わせが同時期に存在した可能性が高いと思われる。なお、建物18と21、21と24の位置関係に関連性が想定される。

溝群についても建物と同様で、同時並存したもの、時期差があるものが混在していると思われる。

溝19の「コ」字の開口部分を区切る位置に、南北方向の溝22がある。北側の東西方向部分には溝17・18が、南北方向部分には溝20が近接して並行している。また、南北方向部分を北に延長した位置には溝



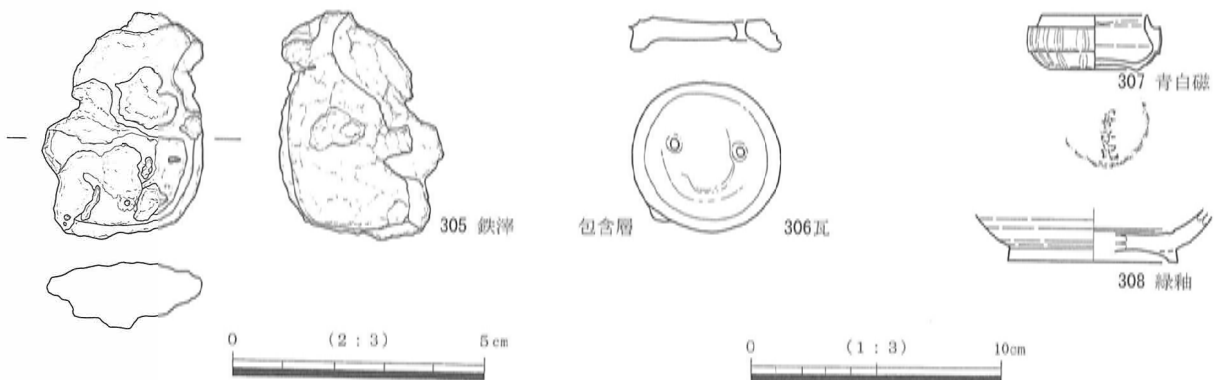
第74図 焼土坑4～6 平面・断面図

16が、北側の東西方向部分を西に延長した位置には溝15がある。これらは、何らかの区画を構成していたとも考えられるが、建物などとの組み合わせの詳細は不明である。例えば、溝19は平面形態から区画の機能を果たしていた可能性が考えられる。区画された内部の東半には建物25があり、さらに柱穴であるピット12の存在から重複する建物も想定される。区画内西半では柱穴を検出しておらず、焼土坑5・6を検出している。これらは位置的に区画との関連が想定されるが、時期は不明である。

建物群と溝群はそれぞれ主に西寄り、東寄りに位置し、やや重複はしているものの、その位置関係には棲み分けがみてとれる。その時期関係については前述した通りであるが、それらが同時期のもの、異なる時期のものいずれであったとしても、その境界辺りで土地を東西に分ける何らかの意識が存在したものであると思われる。

c域東半ではほとんど遺構を検出していない。この状況は北側のb域でも同様で、b域で検出した浅い谷地形が、この部分まで伸びていた可能性が高い。

c域の西側は調査地外であるが、同様な地形が続いており、c域の遺構群の続きが展開している可能性が高い。北側のb域にも同様な地形が続いている。前述したようにc域よりやや古いと思われる遺構群が、c域北西部のすぐ北側に展開している。これらはc域の遺構群と時期的に連続すると考えられる。両域の建物は、その規模、平面形態などが似ている。方向軸については、b域の建物群は建物12を除いてc域の建物群とそれを異にしている。ちなみに建物12は、b域の建物のなかでも古いものと想定しており、c域の建物と同時期であるとは考えていない。また、b域では12世紀前葉～中葉の、c域の次時期にあたる遺構群も展開している。この時期の建物は以前に比べて小規模である。詳細なレベルでのそれぞれの時期関係は不明であるが、c域の前後の時期にb域が土地利用されていたと考えられる。南側はd域で、c域と同時期の建物などの遺構群を検出している。ただ、削平の影響を強く受けており、c域と隣接する部分の状況は不明である。東側はe域で、c域と同時期の遺構は確認していない。



第75図 包含層・近世作土層 出土遺物 (2/3 = 305)

第4項 d域(付図2・3)

南西部に位置し、南は約3.4mの高低差を有する段丘崖で、丘陵先端部分にあたる。b・c域に比べて南へと低くなる地形の傾斜が増し、棚田造成に伴う削平の影響も大きくなっている。

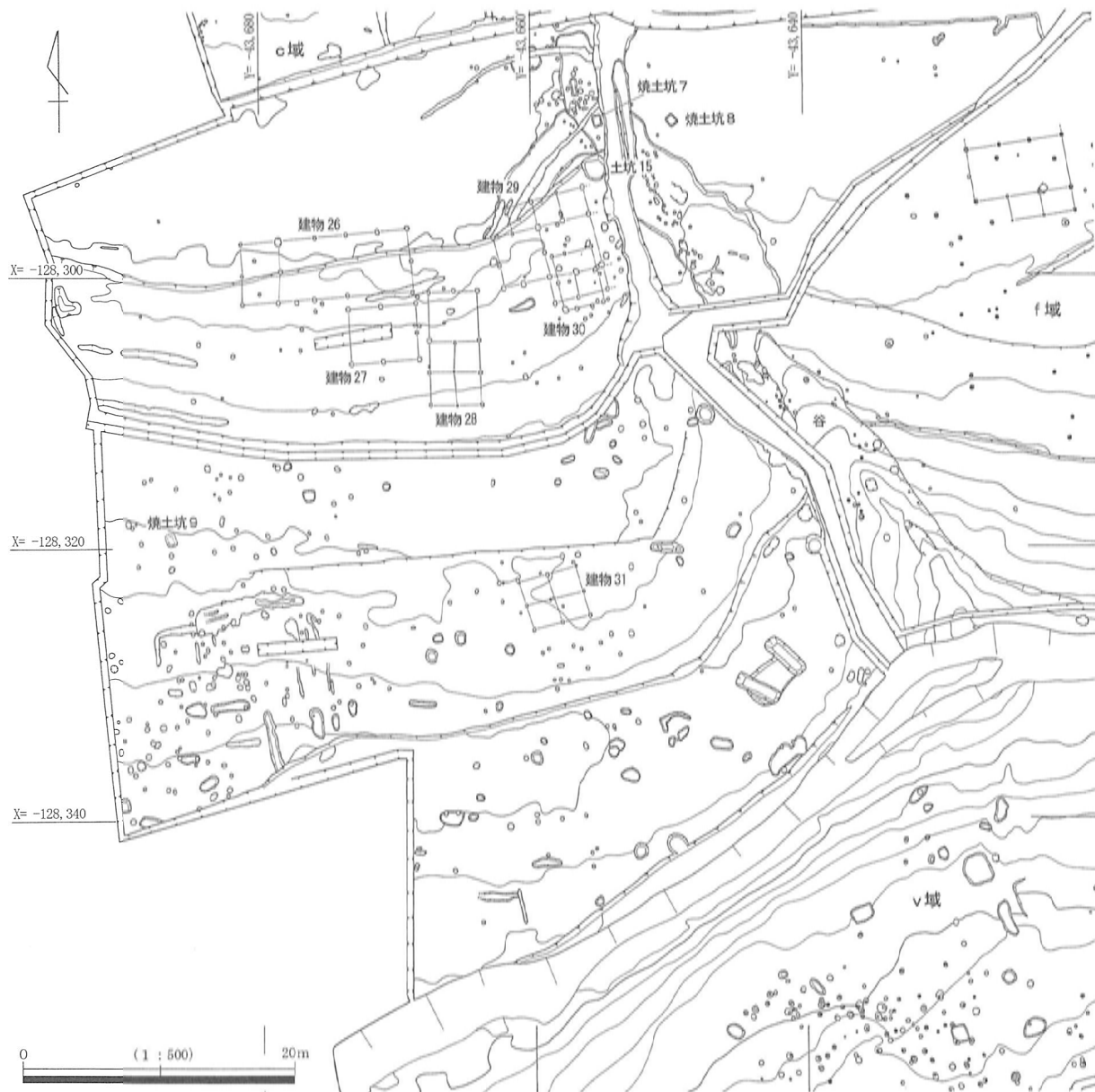
主な遺構に、建物6棟・焼土坑3基があり、他に、土坑などがある。

建物26(第76・77図 図版32・33)

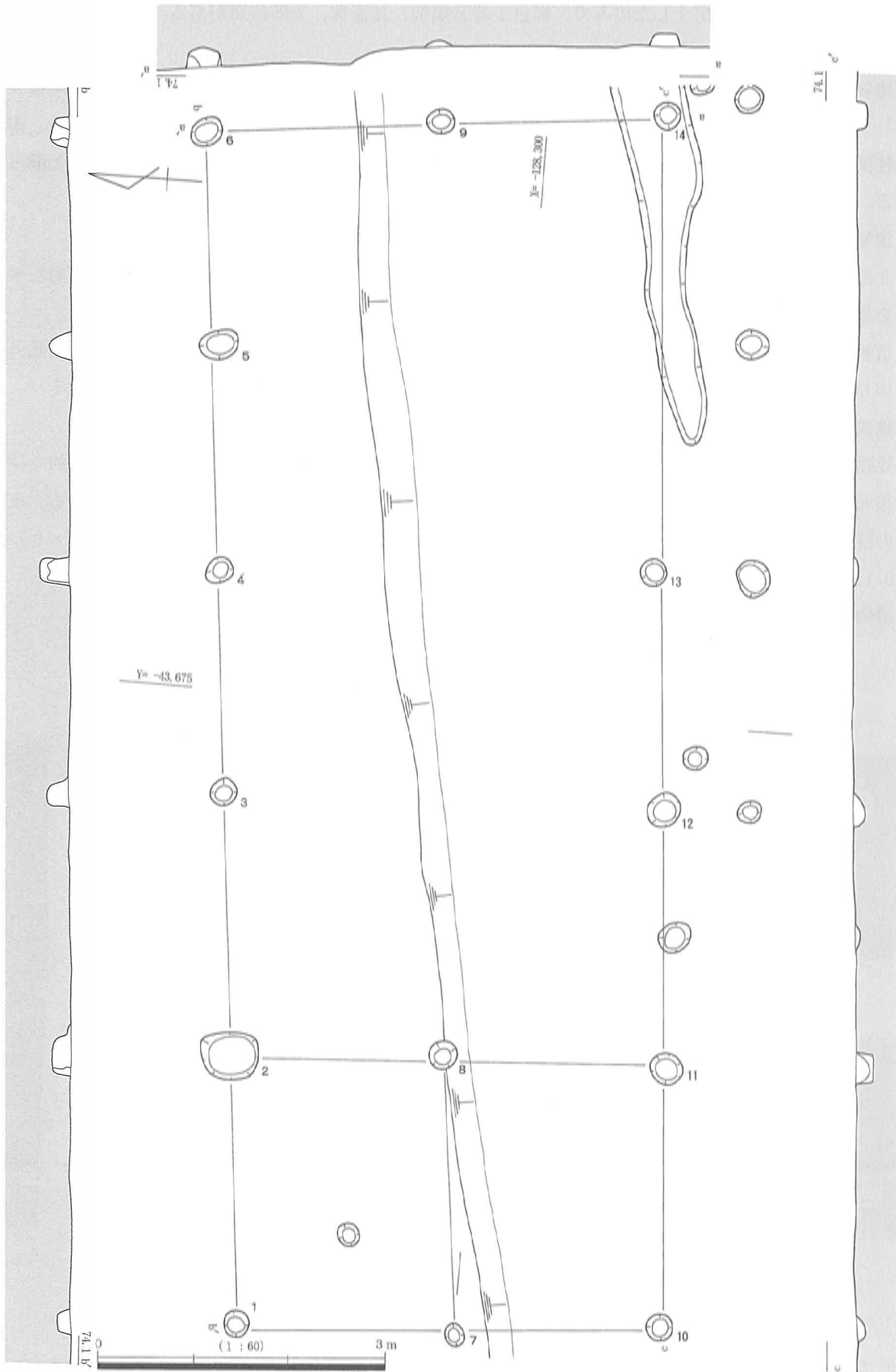
北半部に位置し、東西5間×南北2間、約12.5m×4.6m、約57.5㎡である。主軸方向は、N-7°-Wである。建物中央部分には東西に後世の棚田の段差が存在しており、中央の柱穴が削平された可能性がある。建物以北も後世の棚田造成によって大きく削平を受けている。遺物は出土していない。

建物27(第76・78図 図版32・33)

北部に位置し、東西2間×南北2間、約4.9m×4.1m、約20.1㎡である。主軸方向は、N-5°-Wである。西側中央と中央の柱穴が攪乱により消失した可能性がある。建物26と方向軸をほぼ同じくして近接し、東端の位置と柱の並びを揃える。



第76図 d域 平面図



第77图 建物26 平面・断面图

遺物は、小片が少量出土したのみで、黒色土器B類椀、瓦器椀、土師器皿がある。

建物28 (第76・79図 図版32・33)

建物27の東側に位置し、南北3間×東西2間、約8.4m×3.7m、約31.1㎡である。主軸方向はN-2°-Wである。南半は総柱で、南北中央の柱穴3基は小規模である。北半には屋内に柱がなく、南北の柱間は北半が約3.7m、南半が約2.3mである。方向軸はややずれるが、北辺が建物26の南辺と揃っている。遺物は出土していない。

建物29 (第76・80・83図 図版32・33)

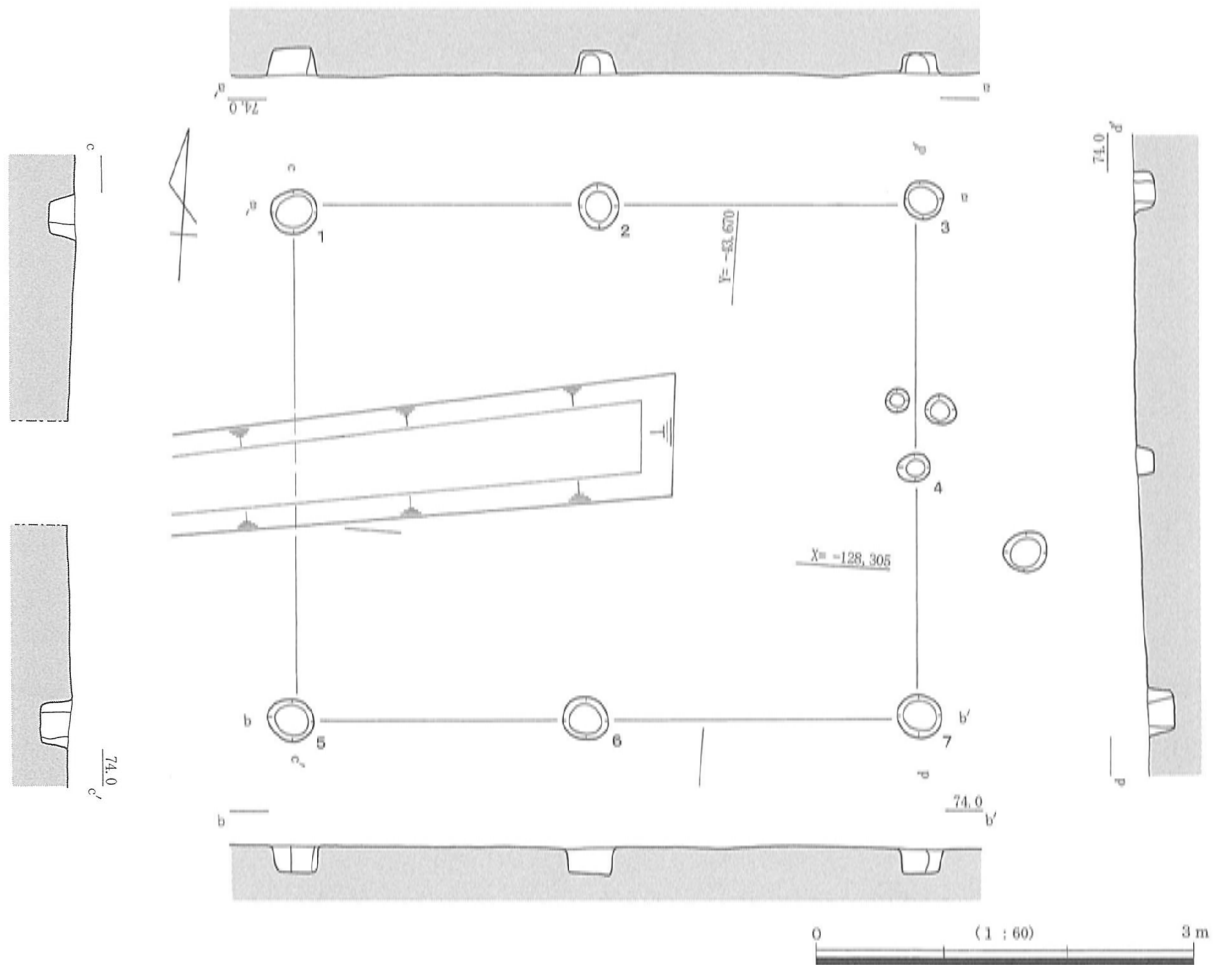
北部やや東寄りに位置し、最大南北4間×東西4間、約7.9m×7.3mであるが、西側が変則的な平面形を呈し、約47.7㎡である。主軸方向は、N-15°-Wで、建物30と重複し、方向軸も揃える。

遺物は、少量ではあるが4基の柱穴から出土しており、「て」字状口縁土師器皿、瓦器椀、底部外面糸切り離しの回転台土師器大皿の他、黒色土器B類椀小片がある。11世紀中葉～後葉と思われる。

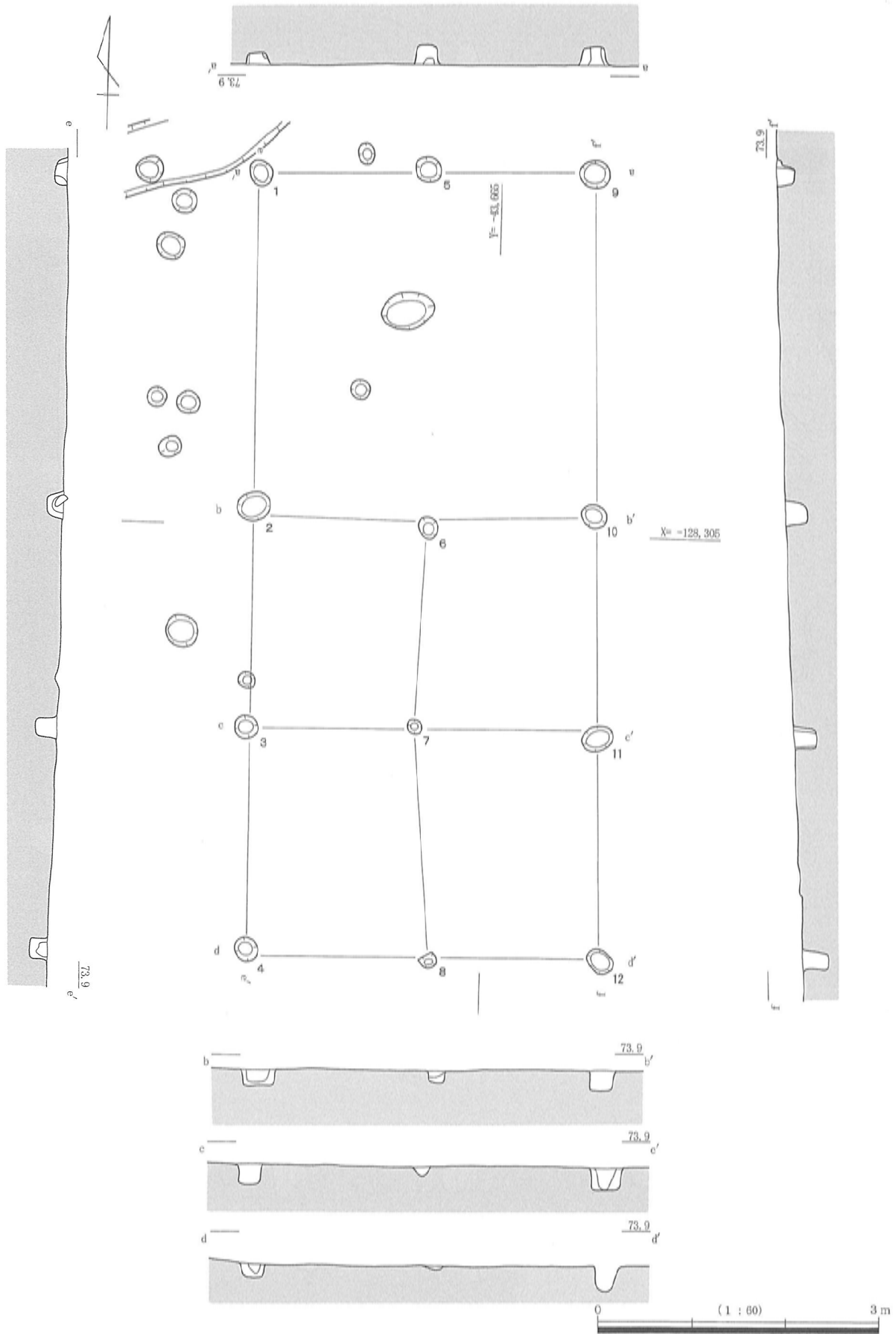
建物30 (第76・81図 図版32・33)

建物29と重複する、南北2間の南北棟建物である。東西は1間である可能性もあるが、変則的な柱間に復元している。南北約4.3m×東西3.0m、約12.9㎡である。主軸方向は、N-15°-Wである。東西列の柱穴のうち、中央西側(柱穴2・8)は約0.3m～0.4mと比較的深く、中央東側(柱穴3・9)が約0.1m～0.2mと比較的浅い。建物29と重複する。

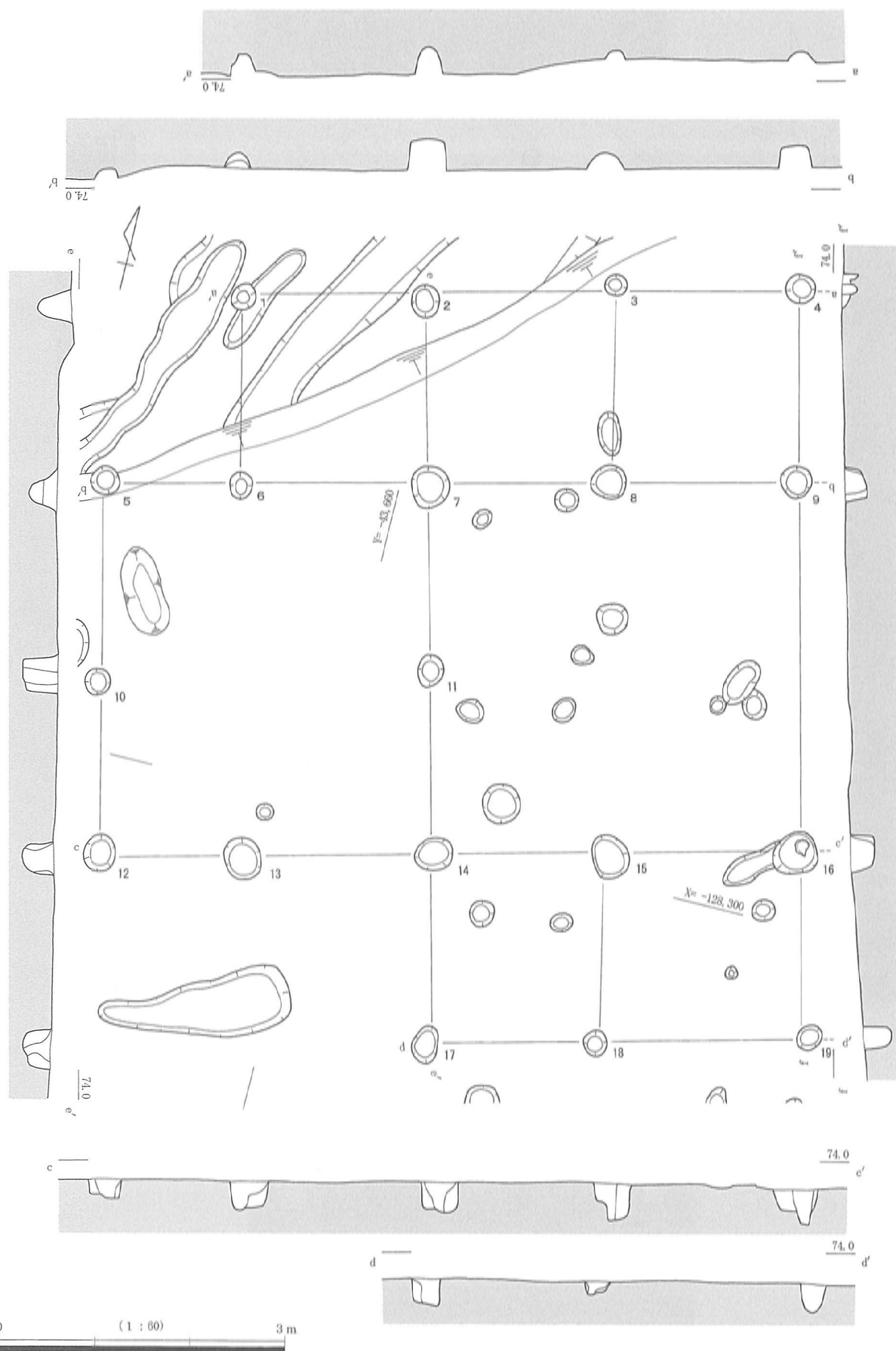
遺物は、黒色土器A類椀の小片が1点出土したのみである。



第78図 建物27 平面・断面図



第79图 建物28 平面・断面图



第80図 建物29 平面・断面図

建物31 (第76・82図 図版32・33)

南部に位置し、東西2間×南北2間、約4.4m×3.7m、約16.3㎡である。主軸方向は、N-18°-Wである。周辺は削平が著しいが、柱穴は深さ約0.3m遺存しており、削平により消失したものはないと思われる。遺物は出土していない。

土坑15 (第76・84~86図 図版32・34・183~186)

北東部に位置する大型の円形土坑である。南北径が約1.8m、深さが約0.5mのすり鉢状で底面には若干の平坦面がある。4層に多量の遺物を含み、上層は埋め戻されたと考えられる。

遺物は破片のみである。瓦器椀、土師器大皿・小皿、回転台土師器皿、白磁碗などが主に出土している。瓦器椀は確認できるものはすべて楠葉型である。土師器大皿は口縁部2段ナデがみられ、口縁端部は強く外反するものが多いものの、まっすぐにおさめるものもみられる。土師器小皿の口縁部が確認できるものは、すべて「て」字状口縁土師器皿である。回転台土師器皿は底部外面糸切り離しである。11

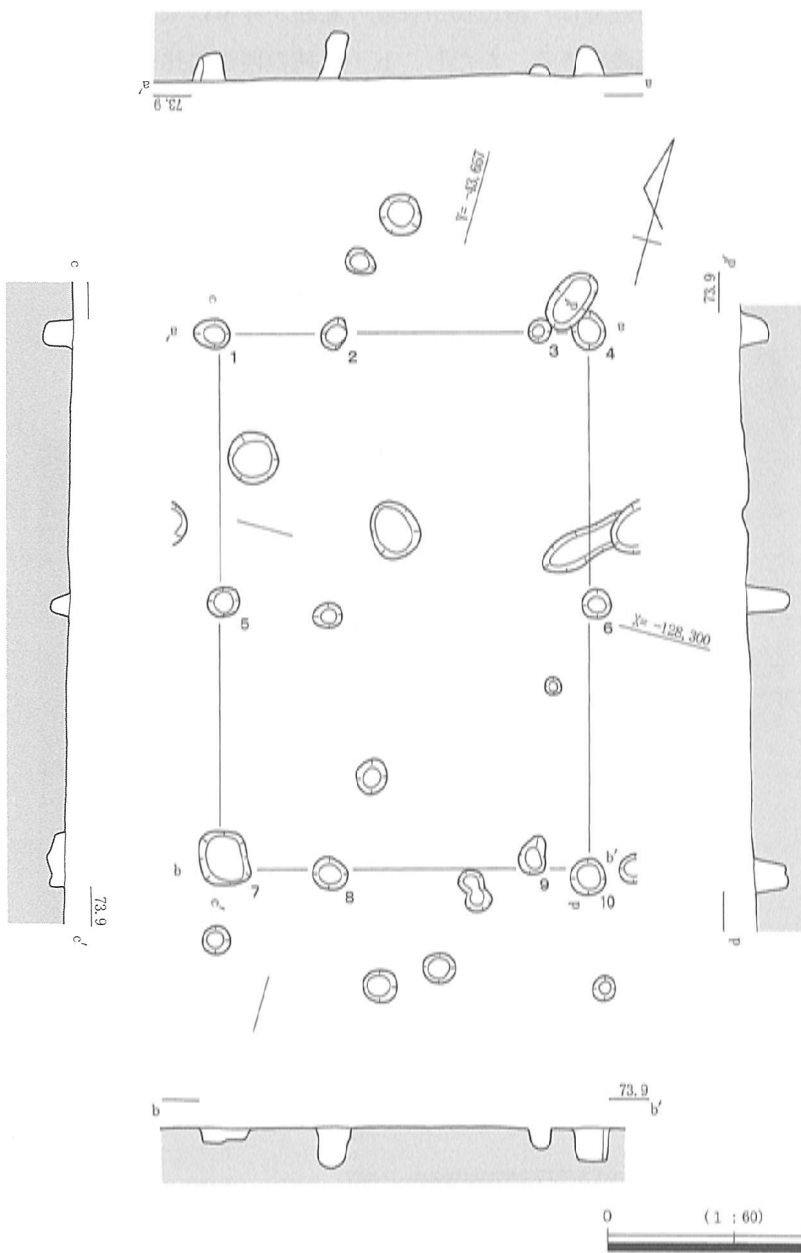
世紀後葉のものと思われるが、12世紀に入る可能性があるものが若干みられる。

焼土坑7 (第76・84図 図版34)

浅い谷地形で谷の堆積を除去した後に検出した。方形で長辺約0.8m、短辺約0.7m、深さ約0.3mである。壁はほぼ垂直で、上層はブロックを含んでいることから埋め戻し土であると思われる、下層は炭化物層である。被熱痕跡はほとんどみられないが、埋土の状況から焼土坑である可能性が高いと考えている。遺物は出土していない。

焼土坑8 (第76・84図 図版34)

谷の東側、焼土坑7の東約5mに位置し、方形で1辺約0.7m、深さ約0.3mである。壁がほぼ垂直で、上層は埋め戻し土と考えられ、下層が炭層である。焼土坑7同様、被熱痕跡はほとんどみられないが、埋土の状況から焼土坑で



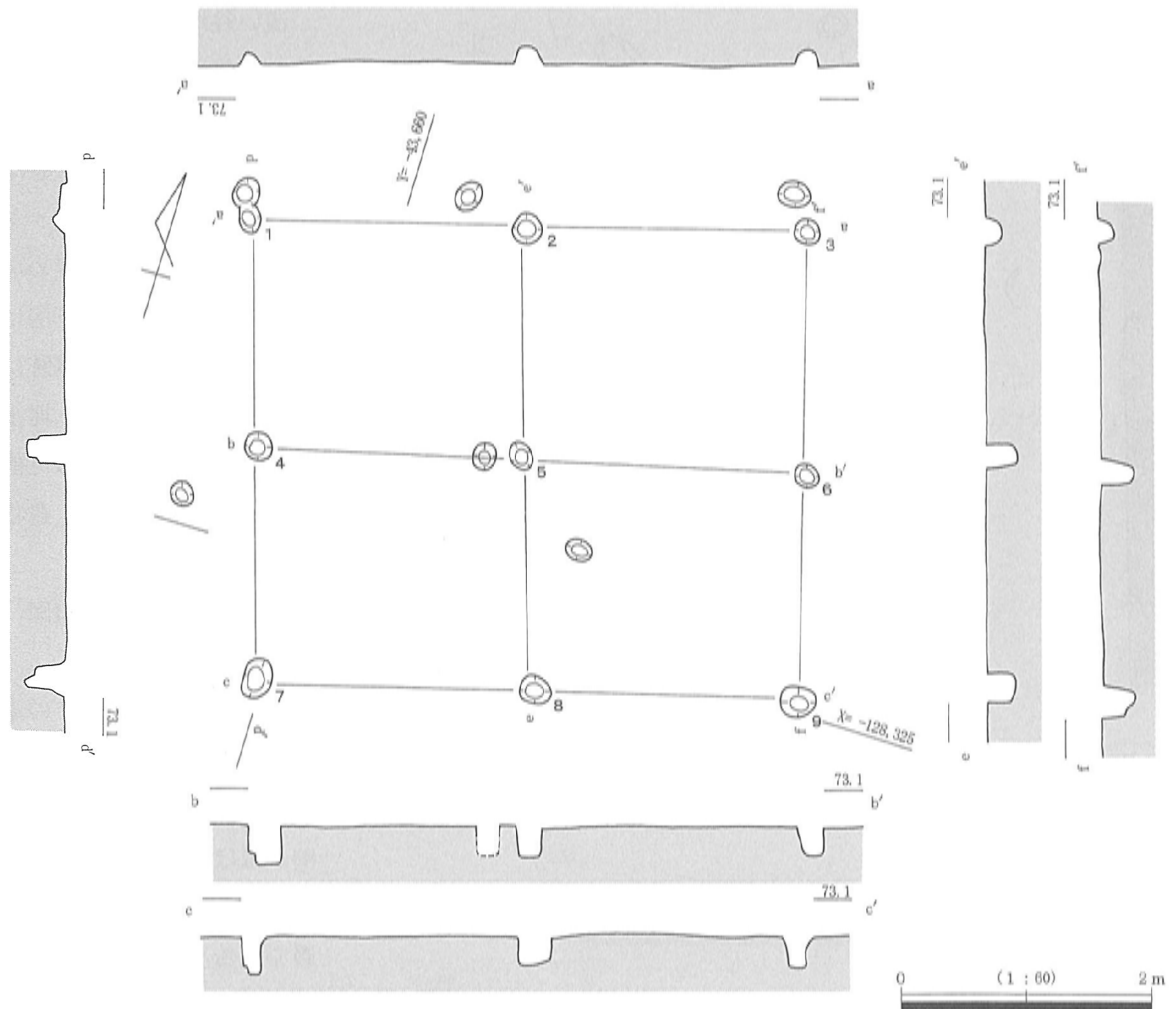
第81図 建物30 平面・断面図

ある可能性が高いと考えている。遺物は出土していない。

焼土坑9 (第76図)

西部の中央に位置し、隅丸方形で、長辺約0.9m、短辺約0.7mである。削平の著しい部分に位置し、後世の水田攪拌で一部が壊されている。被熱して壁の上部が焼土化しており、埋土に炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

包含層は南西部に部分的に薄く遺存するのみで、大部分は近世作土層を除去した段階で基盤層上面となる。北西部分においては現代作土層を機械掘削で除去した段階で基盤層上面となる。作土層は複数層に分けられるが、その掘削中に古い段階の棚田の段差を確認した。d域はa～c域に比べるとやや地形に傾斜が付いているため、棚田造成の影響を強く受けている。削平はほぼ全域におよんでいると思われるが、棚田の段差直下などが特に大きく削平されていると思われる。なかでもc域と接する北端部、北部の建物が集中している箇所のある棚田の段差では、南に10m程度の範囲が非常に大きく削平されている。これは第21図の断面図をみれば明瞭に認識できる。ただし、b・c域の西半に比べると本来より全体的に遺構の密度が低かった可能性が高い。丘陵の先端部分にあたる南部では、包含層は遺存していなかったものの、旧地形と思われるなだらかな傾斜をもつ地形を検出しており、比較的削平の影響が少ないと思われる。



第82図 建物31 平面・断面図

包含層からは磨滅した小片が少量出土したのみで、近世作土層からは土鍾が比較的多く出土した。

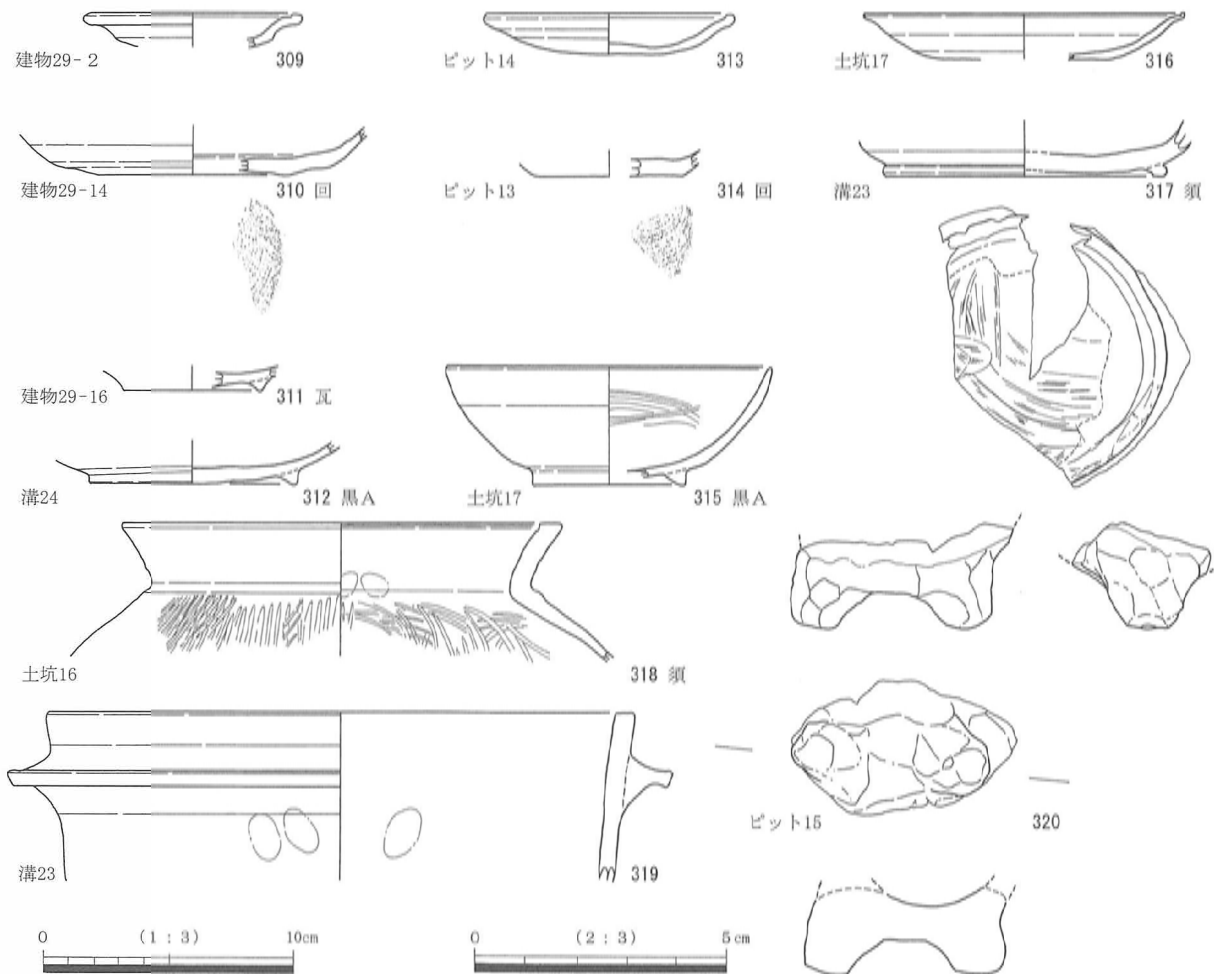
その他の遺構からは、黒色土器A類碗、黒色土器B類碗、瓦器碗、「て」字状口縁土師器皿などが出土している。北東部では11世紀中葉～後葉のものが多く、ごく一部ではあるが12世紀代のものもみられる。南半では11世紀代のものも若干みられるが、特に包含層の遺存していた南西部分（溝23・24、土坑17などを中心とする部分）では黒色土器A類碗、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿が多く、10世紀後葉前後のものが主である。

小結

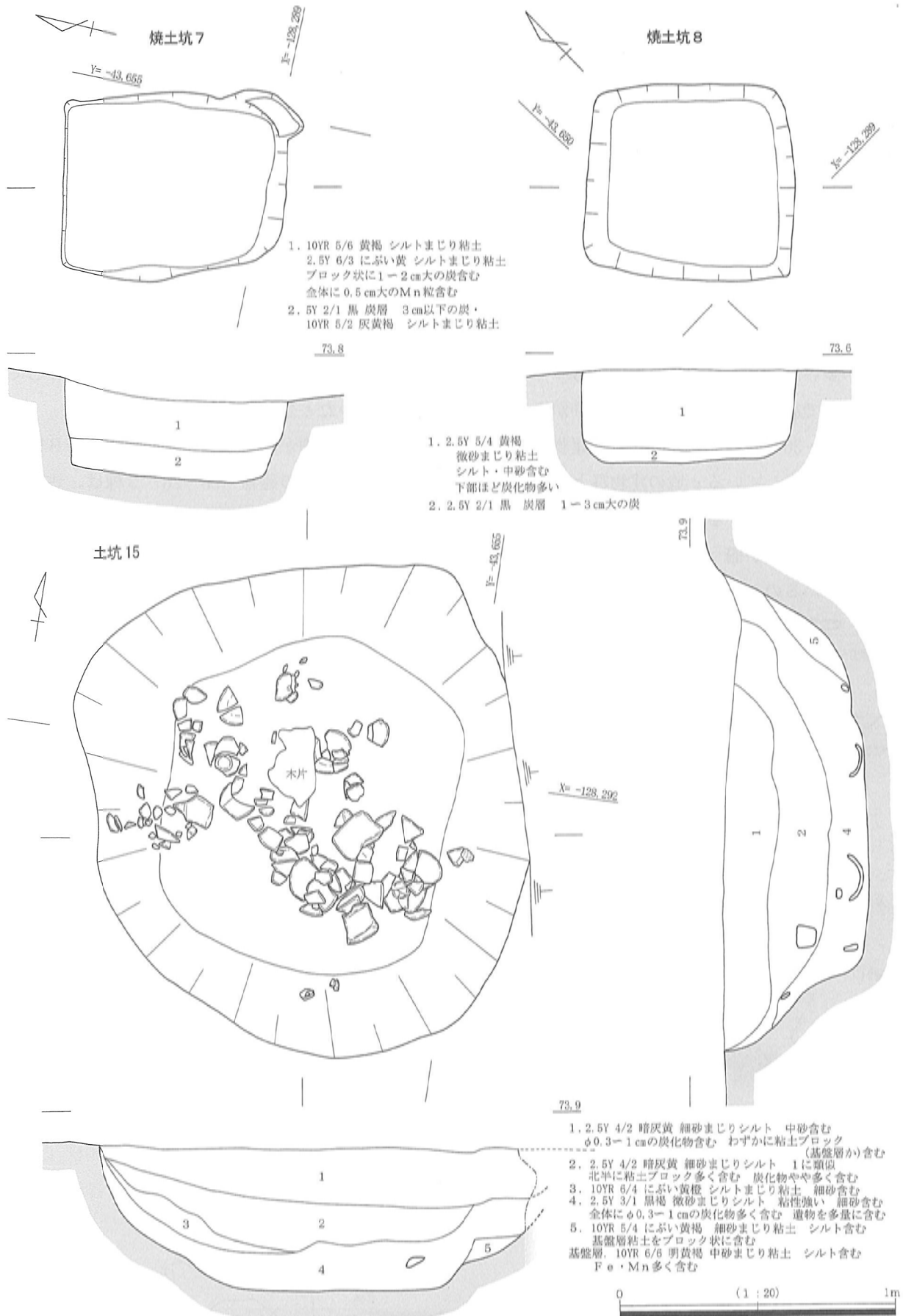
全体的に出土遺物が少量であり、時期の決め難い遺構が多い。

南西部分には10世紀後葉前後の遺物を出土する遺構が分布しているが、性格不明といわざるを得ないものが多い。この部分では周辺よりも多くの遺構を検出しているが、それは部分的に包含層が遺存していたためであり、本来これらの遺構群がより周辺にも広がっていたと想定される。

建物26～30が北半部に位置する。建物29は11世紀中葉～後葉の遺物が出土しており、黒色土器B類碗、瓦器碗が出土しているc域の建物群と同時期のものと思われる。西側の建物（26～28）3棟は、建物29とは方向軸を異にする。3棟の方向軸がほぼ合っていること、建物26・27の東辺が揃い、建物26の南辺と建物28の北辺が揃うことなどから、関連が想定できる。建物27の柱穴1基から建物29と同様な遺物が出土しているのみである。周辺に分布する遺構からもほとんど遺物が出土していないが、建物27から出



第83図 建物29 その他の遺構 出土遺物 (2/3 = 320)



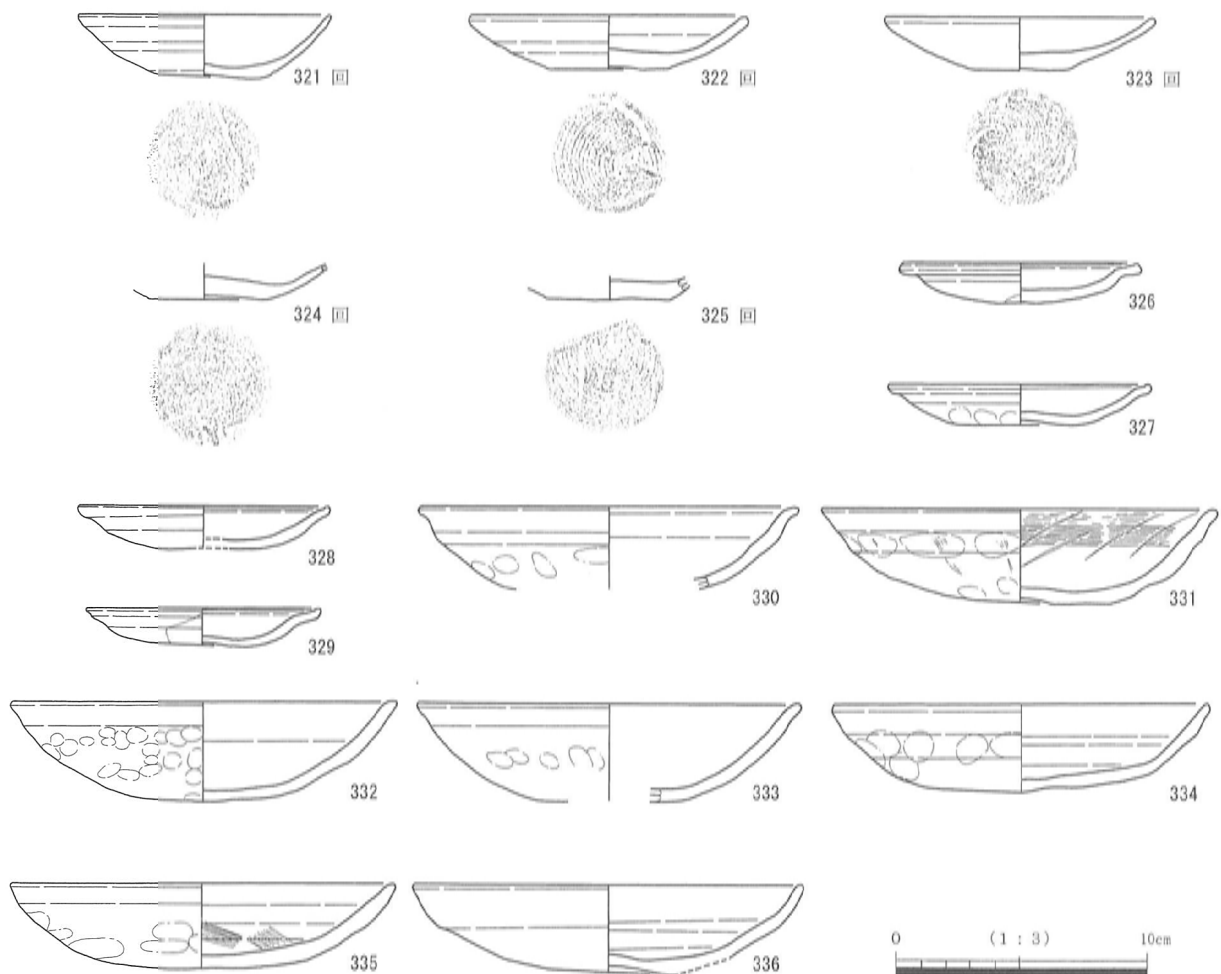
第84図 土坑15 焼土坑7・8 平面・断面図

土したわずかな遺物の時期と、前述したd域出土遺物の全体の傾向から、建物29と同時期、または連続する時期である可能性を想定しておきたい。さらに、方向軸が異なっているが、建物29は東側に存在する浅い谷地形に規制されている可能性もあり、同時に存在した可能性を完全に否定することはできない。ただ、建物が複数重複するc域の状況をみれば、多少の時期差が存在する可能性は高いと思われる。建物29と重なる建物30からは黒色土器A類碗の小片が1点出土したのみであるが、これも方向軸が建物29と揃っており、建物29前後の時期のものである可能性が高いと思われる。

建物31は中央やや南よりに単独で存在する建物であるが、遺物が出土していないため時期が不明である。検出状況では北側の11世紀代と思われる建物群と空白地を挟んで離れている状況であるが、この空白地は激しく削平を受けている部分であり、両者は一連の建物群であった可能性も否定できない。また、西側の10世紀後葉を中心とする遺構群と同時期である可能性もある。

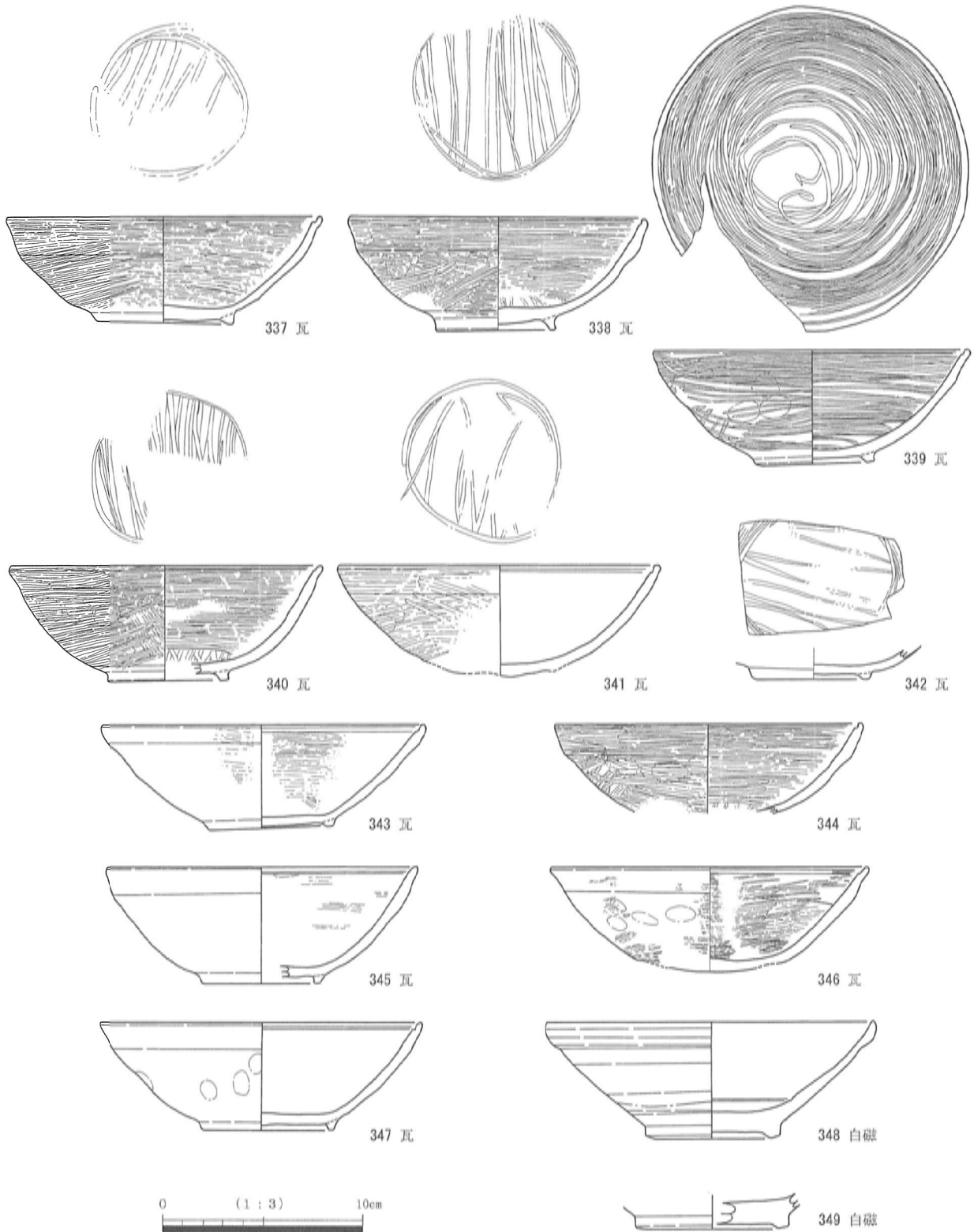
東寄りに南北方向の浅い谷地形を検出しており、周辺の遺構と同時期の遺物が出土している。谷内で多くのピットを検出しているが、杭の痕跡である可能性が高い。この東側はf域で、同様に11世紀代の遺構がみられる。建物もこの時期の可能性のあるものが存在しているが、d域の建物とは谷地形を挟んでいるため、同時に存在していたとしても、別の家地であると思われる。

d域の西側は調査地外である。北側はc域で、建物29と同時期と思われる建物群が展開している。検



第85図 土坑15 出土遺物(1)

出状況ではd域の建物群とは空白地を挟んでいる。建物29は、c域の建物群と方向軸が同じである。ただ、削平の影響が少ないと思われるc域南部の遺構の分布状況とその時期をみると、c域とd域の建物は一連のものではないと思われる。南側は約3mの高低差をもつ段丘崖が存在し、勝尾寺川段丘面のv域にいたる。段丘崖、段丘面ともにd域と関連する遺構はほとんどみられない。



第86図 土坑15 出土遺物(2)

第5項 e域(付図2)

丘陵上西部の中央部東よりに位置し、丘陵上ではきわめて平坦な地形の部分である。北側がb域東半部、南側がf域、西側がc域で、東側が川1に面する。

主な遺構には、建物5棟があり、他に、溝・土坑・土器集積・ピットなどがある。

建物32(第87・88図 図版35・36)

西部に位置し、東西2間×南北2間、約4.9m×3.3m、約16.2㎡である。主軸方向は、 $N-8^{\circ}-W$ である。

遺物は出土していない。

建物33(第87・88・93図 図版35・36)

建物32の東側に位置し、南北3間×東西2間、約5.5m×3.6m、約19.8㎡である。主軸方向は、 $N-5^{\circ}-W$ である。柱穴2にはスギの柱根が遺存していたほか、柱穴4でも柱根の可能性のある木片を確認している。柱穴3は平面形が歪であるが、1基の柱穴である。

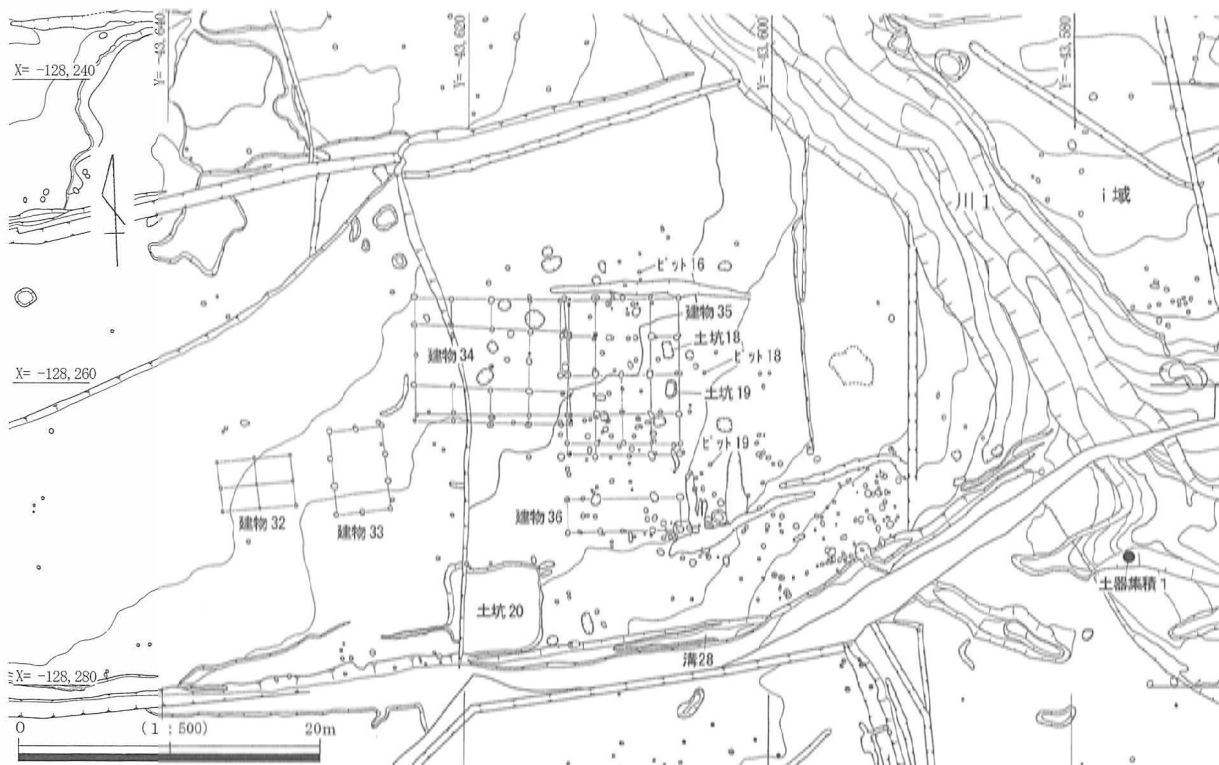
遺物は、黒色土器A類椀、土師器煮炊具などの細片が出土したのみである。

建物34(第87・89・90図 図版35~37)

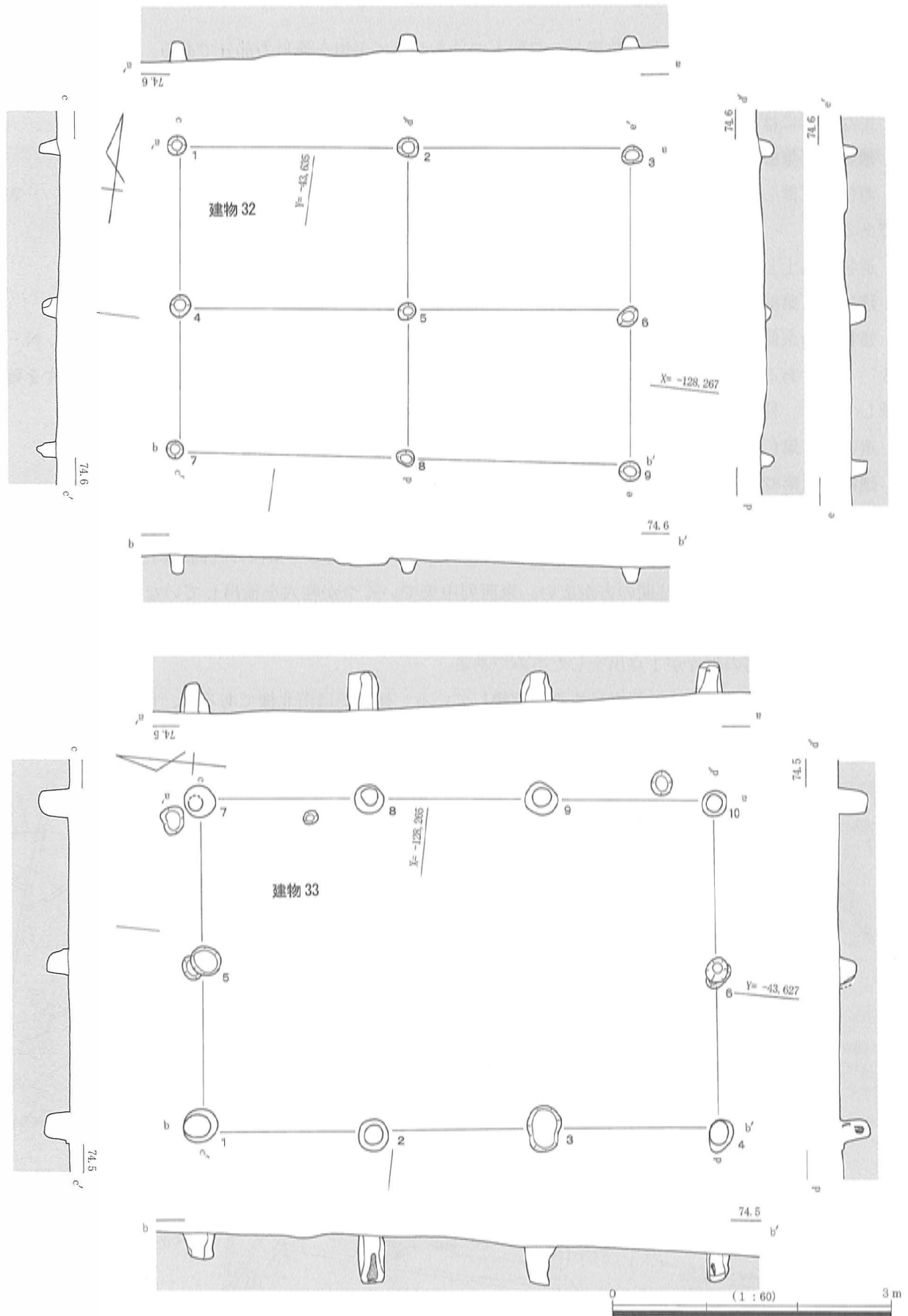
中央部に位置し、東西4間×南北4間であるが、さらに南辺に柱間の狭い部分が1間付属する。約10.1m×8.1m、約81.8㎡である。主軸方向は、 $N-1^{\circ}-W$ である。東西の柱間が約2.6m、南北の柱間が約2.0mとやや東西の柱間の方が広い。東西列中央でいくつか柱穴を検出していない箇所がみられるが、他の柱穴の深さからみて削平されて失われたとは考えられない。

遺物は種類不明の細片が1点出土したのみである。

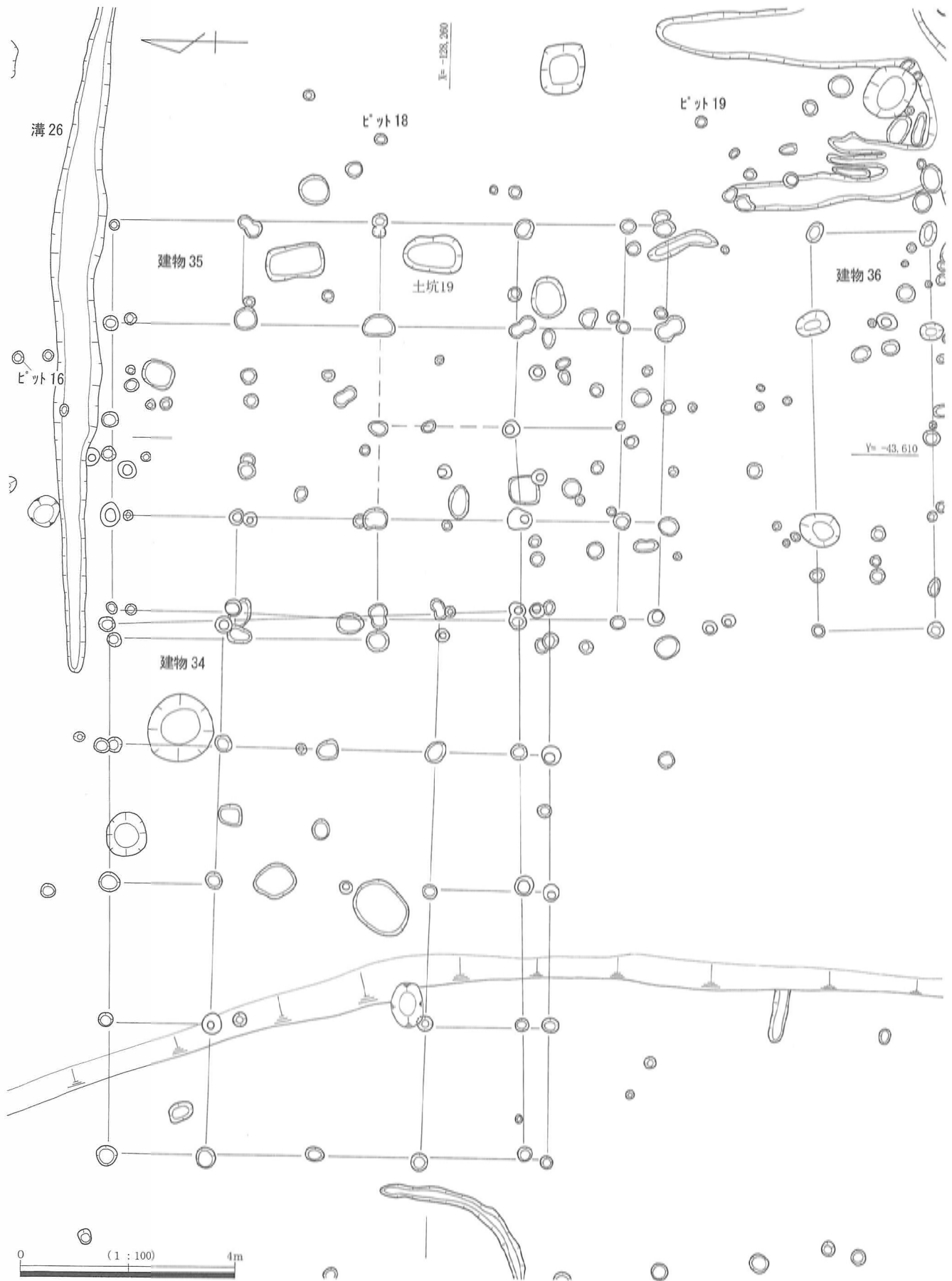
建物35の西端部と、ごく一部ではあるが重複している。建物35は南北棟であるが、規模や構造が類似している。



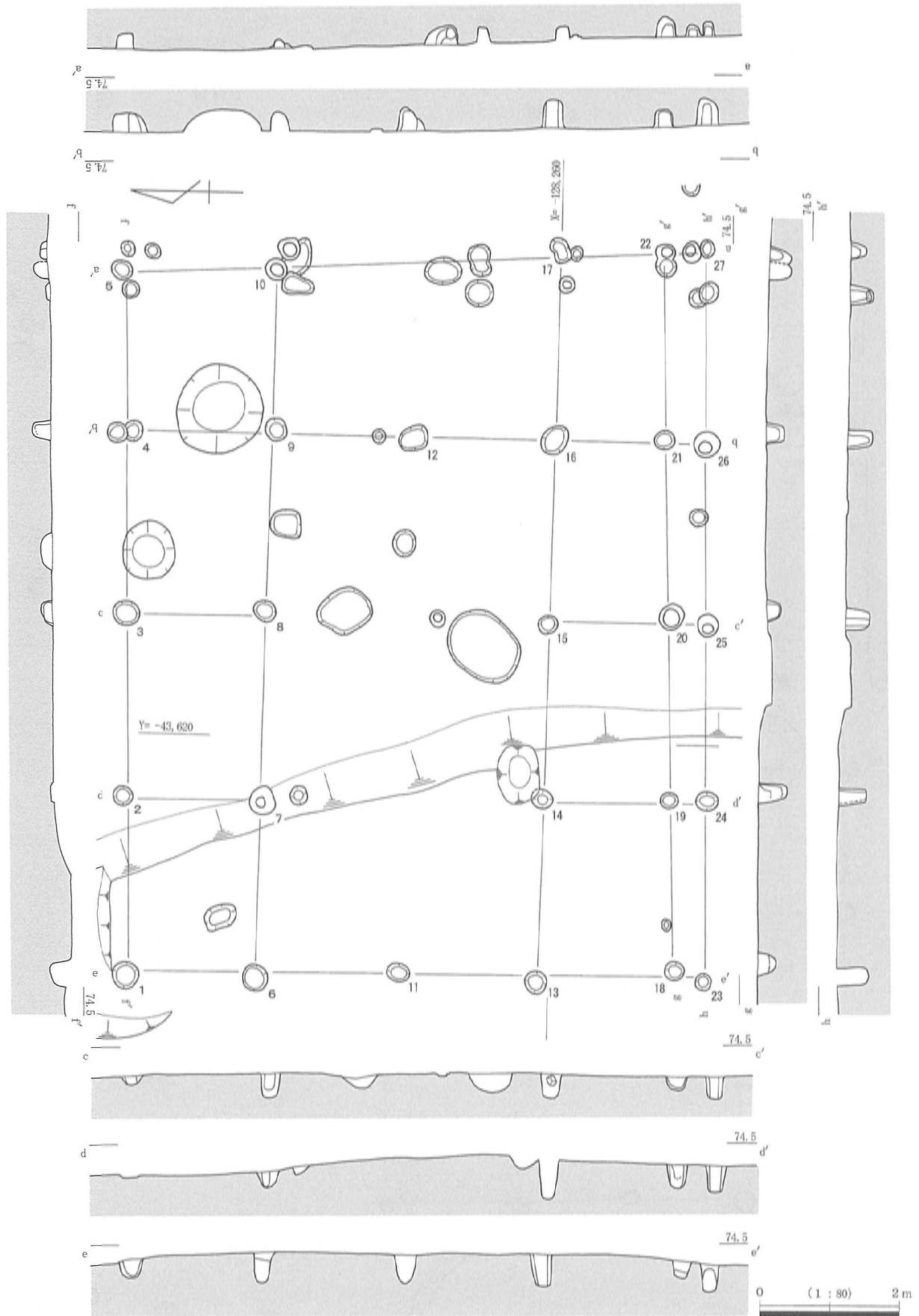
第87図 e域 平面図



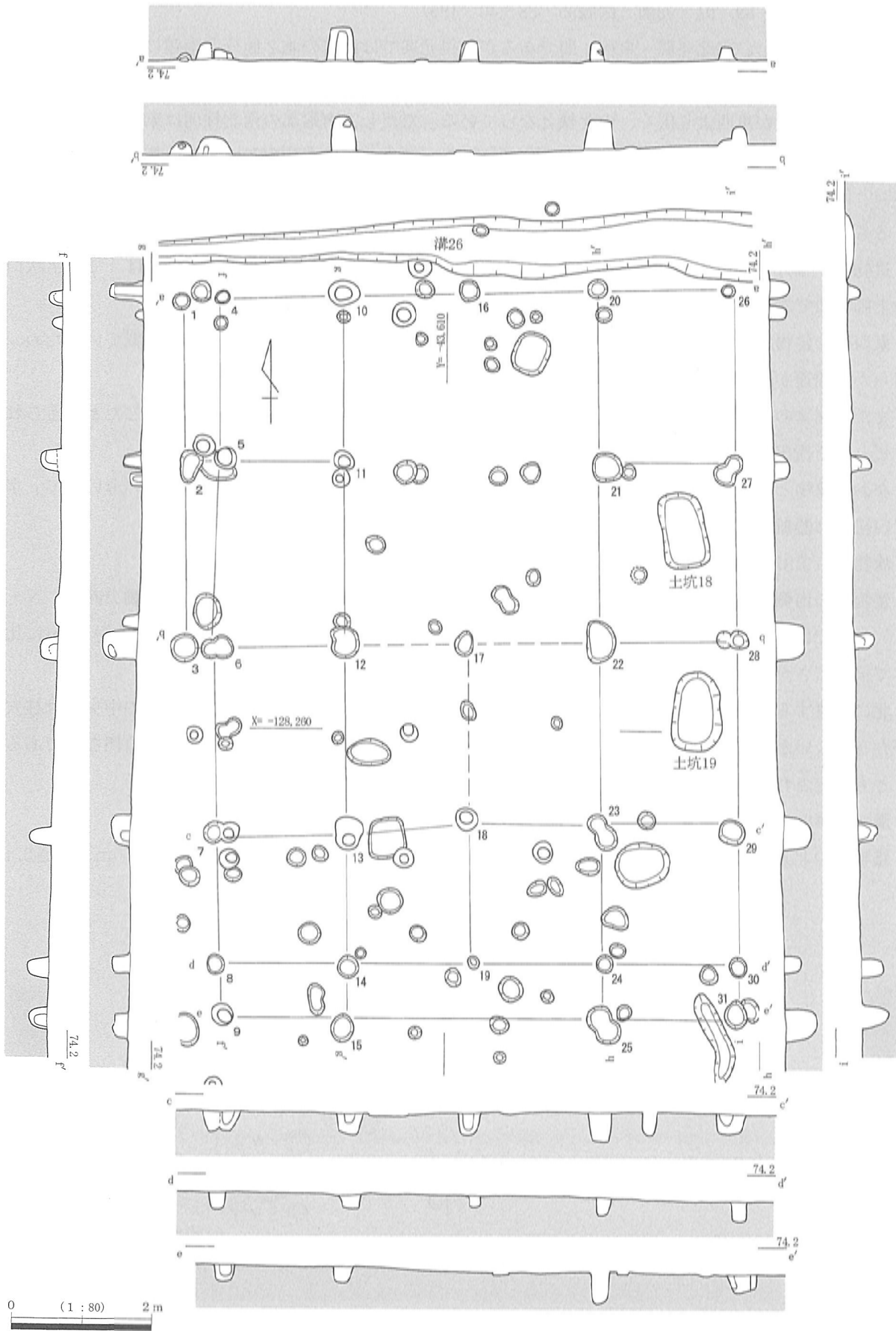
第88図 建物32・33 平面・断面図



第89図 建物34~36周辺 平面図



第90図 建物34 平面・断面図



第91図 建物35 平面・断面図

建物35 (第87・89・91・93図 図版35・38～40・186)

中央部に位置し、南北4間×東西4間であるが、復元案では西辺の北2間分と南辺に、柱間の狭い部分が1間付属する。南北約10.3m×東西約7.8m、面積約77.7㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。南北の柱間が東西より広く、南北棟となっている。ただし、南端部の南北柱間は東西とほぼ同じで、付属部分を含めると他の南北の柱間と同じ広さになる。中央の柱穴を検出していない部分に関しては建物34と同様である。柱穴17は非常に浅く、柱穴ではない可能性もある。柱穴には、断面に柱痕が確認できるものが多い。また、他のピットと切り合い関係を有するものがいくつかある。

遺物は、細片が5点出土したのみである。柱穴11・14から器壁の薄い土師器皿(350は「て」字状口縁土師器皿であることが確認できる)、柱穴24から黒色土器A類などが出土している。

東西棟の建物34の東端部とごく一部ではあるが重複している。これらは規模や構造が似ているため、何らかの関連が想定できる。

また、建物の北側に1基(ピット16)、東側に2基(ピット18・19)、銭貨などを埋納したと考えられるピットを検出している。これらは位置関係から、この建物との関係が想定される。

なお、建物と重複して土坑19がある。この建物の柱穴から出土したものと同様の器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿が出土しており、同時期または近い時期であると思われる。

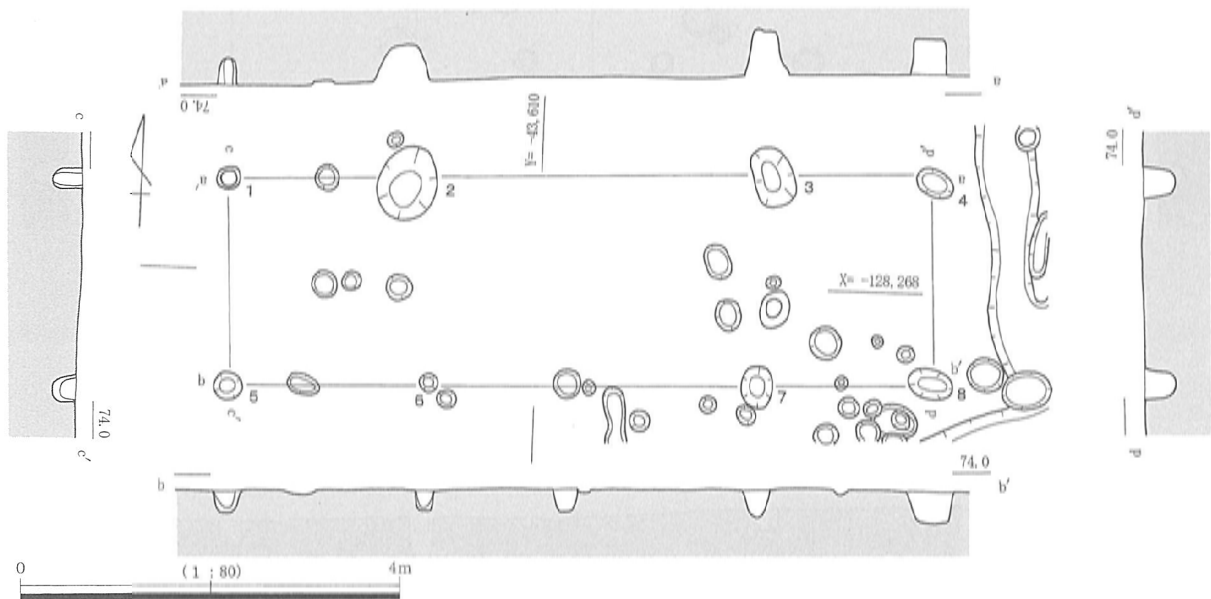
建物36 (第87・89・92図 図版35・38)

建物35の南側に位置し、東西3間×南北1間、約7.5m×2.2m、約16.5㎡である。主軸方向は、N-1°-Wである。東西列中央には柱穴はなく、この部分の柱間は約3.4m~3.8mと両側の約1.8mに比べて倍の広さがある。遺物は出土していない。

北に位置する建物35と方向軸および東西の幅と柱間を揃える。建物35南端の東西柱列の中央には柱穴が存在しないが、これは建物36の柱配置と対応している可能性もある。建物36に付属する門などであることも想定される。

溝26 (第89・91図 図版35・38)

建物35の北辺に並行し、建物35に伴うものと思われる。長さ約13.2m、幅約0.4m~1.0m、深さ0.1



第92図 建物36 平面・断面図

m程度と浅く、断面形は皿状である。底面のレベルは、地形の低い東へと若干下がっている。

遺物は細片のみで、黒色土器A類碗・口付鉢、須恵器甕、土師器煮炊具などがある。

溝28 (第87・93図)

建物群の南、土坑20南辺の延長線上にあたる部分に位置する東西方向の溝である。検出長約10.5m、幅約0.9m、深さ約0.4mである。東、南部分は棚田の造成時に削平されている。造成によってこの部分には段差がつくられたが、これはもともと地形の変化点であったことを示している可能性がある。

遺物は細片のみで、黒色土器A類碗、土師器煮炊具などである。

ピット16 (第87・89・94・95図 図版35・38・40)

建物35のすぐ北側に位置し、径約0.2mの円形で、深さ0.04mである。この部分には包含層は遺存しておらず、直上が作土層であったため、上部が削平されていると思われる。

銭貨が中央やや南西よりに位置し、周囲には小石がみられた。

銭貨は、複数枚が重なり斜めに立っている状態で出土した。いずれも、遺構の底面からは若干浮いている。銭貨は9枚確認したが、作土層を除去して遺構を検出した際にすでに露出していたため、攪拌によって失われたものがある可能性は否定できない。遺存状況は悪く、白色化し非常に脆い状態である。銭種が確認できた数枚は軋元大寶である。サイズがすべて揃っていること、また白色化するのには鉛を多く含む軋元大寶の特徴であることから、すべて軋元大寶である可能性が高い。重なって出土したが、その表裏、文字の上下は揃っていなかった。

小石は5個を確認したが、これも銭貨と同じく本来の数であると断定できない。

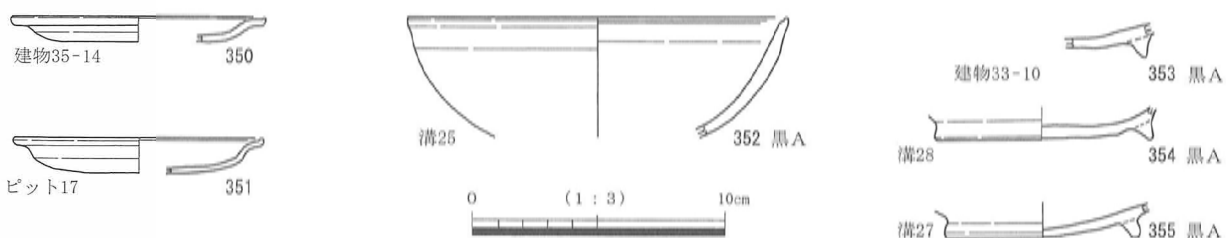
出土状況から、銭貨と小石を埋納した遺構と考えられる。建物35の東側には同じく銭貨を埋納したと考えられるピット18・19も存在し、建物35との関連が想定できる。

ピット18 (第87・89・94・95図 図版35・38・40)

建物35のすぐ東側に位置し、径約0.2m、深さ約0.1mである。

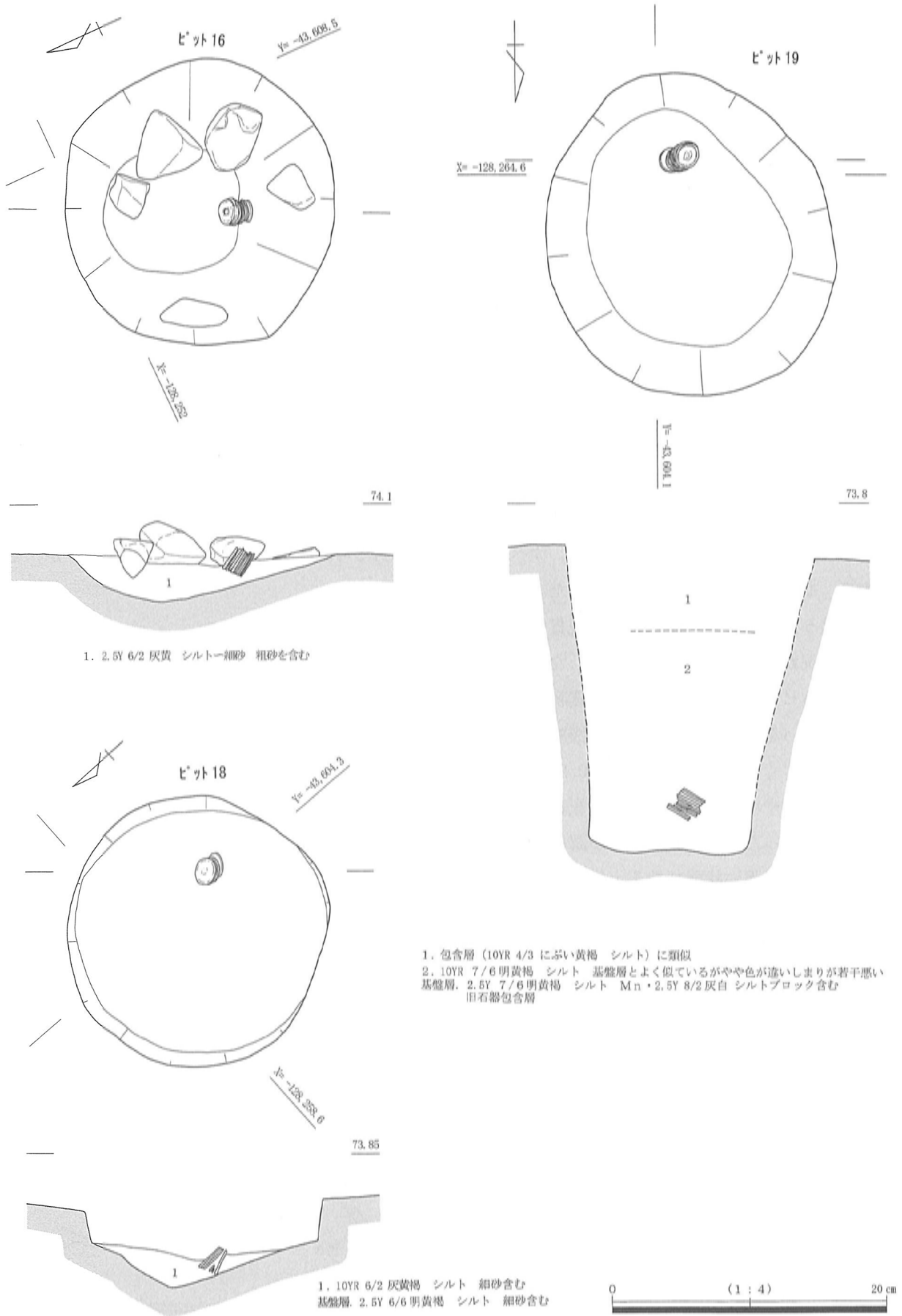
銭貨は、やや南東よりの位置で、複数枚が重なって出土した。6枚を確認したが、掘削の際に一部が粉砕してしまった。北東側に痕跡が認められたためそれ以上であった可能性が高い。遺存状況が悪く、白色化し非常に脆い状態である。銭種が確認できたものはすべて軋元大寶で、その他のものもサイズが同じであること、また白色化するのには鉛を多く含む軋元大寶の特徴であることから、すべてが軋元大寶である可能性が高い。ピット16同様に周囲には小石がみられたが、図化する前に取り上げてしまった。3～5cm大のものを3個確認しており、2個は角礫、1個が丸みのあるものであるが、いずれも一部に平らな面を有する。井本氏の鑑定では、丹波帯の砂岩で、遺跡近くのものではない。かなり均質な中粒砂岩で花崗岩質であるとのことである。

出土状況から、銭貨と小石を埋納した遺構であると考えられる。同様に銭貨を埋納したと考えられる



第93図 建物33・35 溝28 その他の遺構 出土遺物

第1節 丘陵上西部(e城)



第94図 ピット16・18・19 平面・断面図

ピット19が建物35の東南側に、ピット16が北側に位置している。ピット18は、建物35柱穴28の東西柱列の延長線上にもあたっており、建物35との関連が想定される。

ピット19 (第87・89・94図 図版35・38・41)

建物35の東南側に位置する。径約0.2m、深さ約0.2mである。埋土は、上層は包含層同様の黄褐色シルトであるが、以下が基盤層と酷似している。

銭貨は南よりの位置で、11枚が重なった状態で出土した。遺存状況は悪く、白色化し非常に脆い状態である。銭種が確認できた数枚は軋元大寶で、他のものもサイズが同じであること、また白色化が鉛を多く含む軋元大寶の特徴であることから、すべてが軋元大寶であった可能性が高い。重なった状態で出土したが、表裏、文字の上下は揃っていなかった。全部で11枚であるが、この遺構では確実に本来の数を確認することができた。このピットでは、石を検出していないが、遺構の性格を認識していなかった上層部分の掘削時点で石を除去してしまった可能性も否定できない。

同様に銭貨を埋納したと考えられるピット18が建物35の同じく東側に、16が北側に位置しており、この建物との関連が想定できる。ピット19は、他の2基に比べて深い。

土坑18 (第87・91図)

南北に長い長方形で、長辺約1.0m、短辺約0.6m、深さ0.02mである。土坑19のすぐ北に位置し、建物35と重なっている。

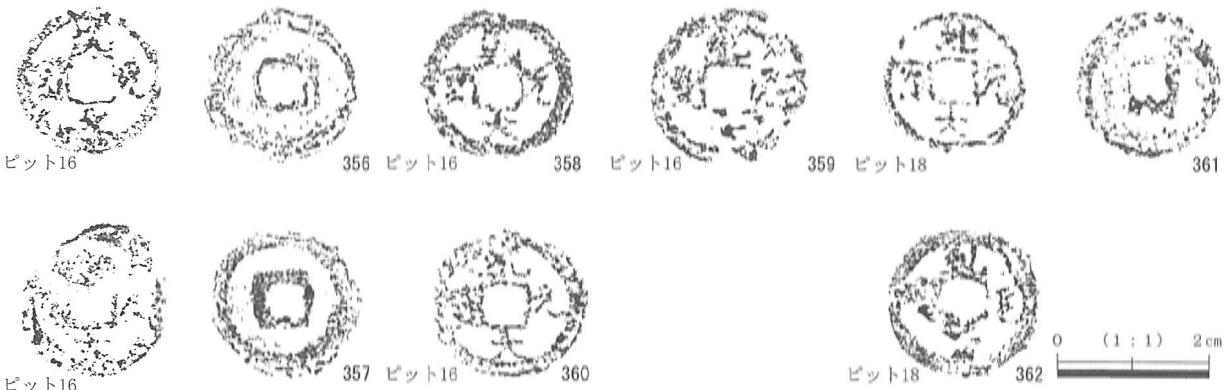
遺物は、黒色土器A類など小片が出土した。

土坑19 (第87・89・91・96～98図 図版35・41・186～188)

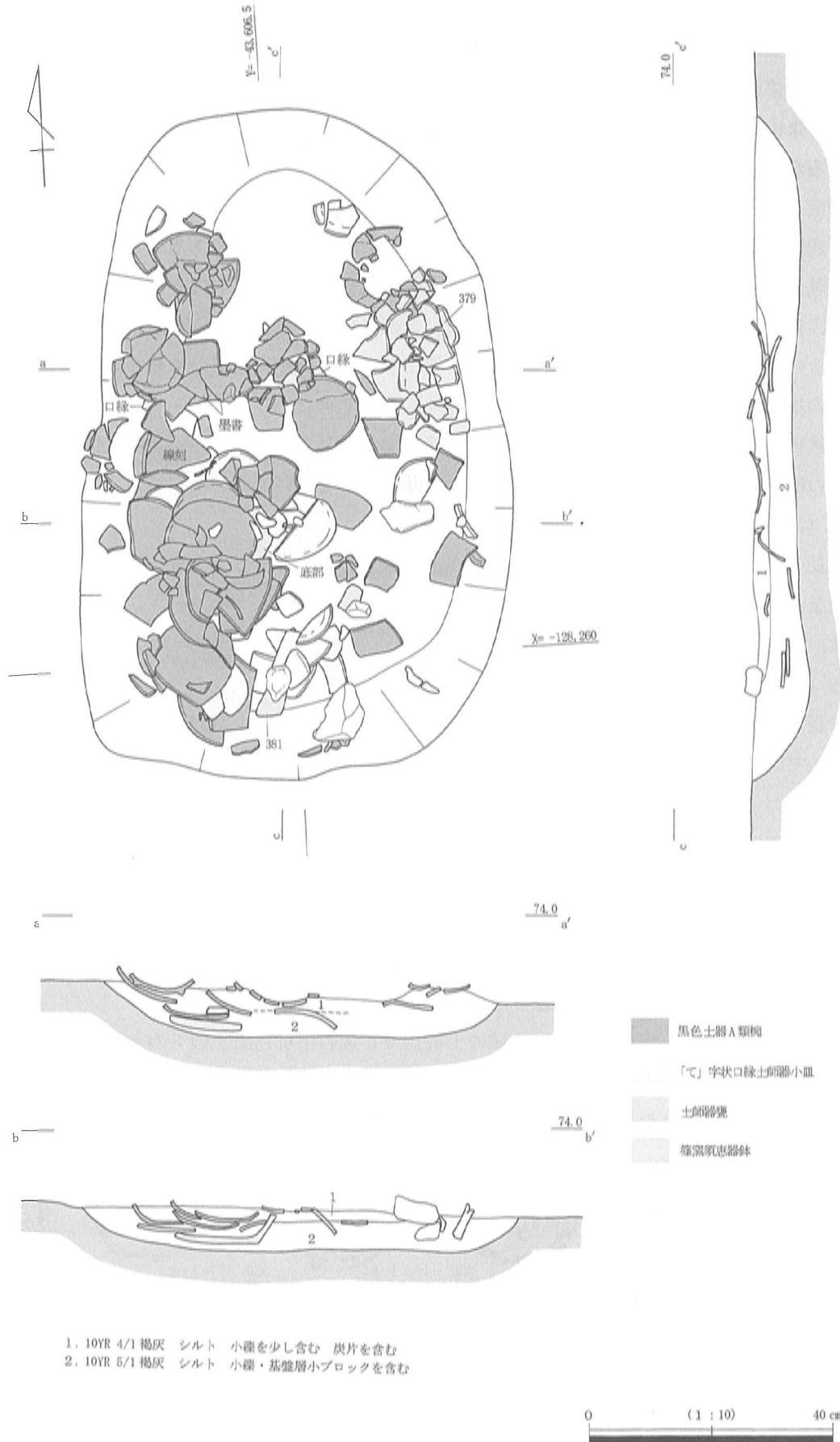
南北に長い隅丸長方形に近い楕円形で、長径約1.1m、短径約0.7m、深さ約0.1mである。埋土には炭片を含んでいるが、遺構自体に焼けた痕跡はない。建物35と重複する

遺物は、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類碗、篠窯須恵器鉢、土師器甕が出土した。碗の多くは正置の状態、破片は東側にもみられるものの、ほとんどは西側に偏在している。線刻をもつもの(386)、墨書をもつもの(400)は、どちらも土坑中央西よりで出土した。皿は南西部に多い。甕と鉢はともに1個体であり、甕が北東部に、鉢が土坑中央やや南西よりにあった。特に遺物が集中して出土した土坑中央南西よりの部分では、鉢の上に皿、碗が複数重なっている状況がみられる。碗、皿は、可能な限り図示したが、他にも別個体と思われる破片が存在する。

土師器皿はすべて「て」字状口縁で、b域の土坑10やd域の土坑15出土のものと比較して器壁が非常に薄い。また、当遺跡出土の土師器のなかでは特に精緻な胎土をもち、乳白色である。碗はすべて黒色土器A類である。器形にはややバリエーションがみられるが、底部から体部にかけて球状を呈するもの



第95図 ピット16・18 出土遺物 (1/1)



第96図 土坑19 平面・断面図

が少なからず含まれている。口縁端部内面には沈線があるが、なかには幅が広く、面的になっているものもみられる。高台は、比較的小規模で、断面三角形のものが目立つ。表面が磨滅しているため、ミガキ、ケズリなどはほとんど観察できない。おそらく多くのものが、外面はケズリ後ミガキ、内面にはミガキを施していたと思われる。10世紀後葉のものとする。

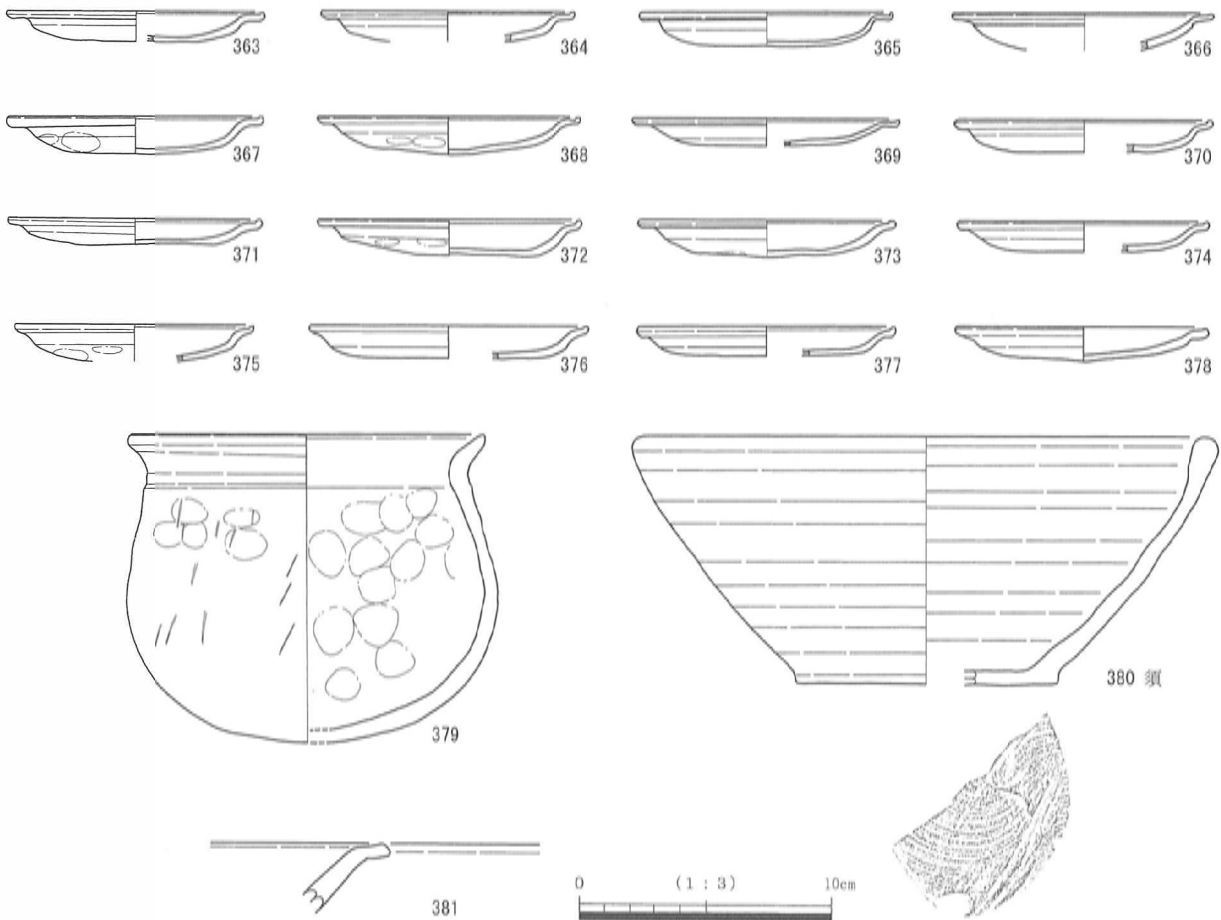
土坑20 (第87・99・100図 図版35・42・189)

中央部南に位置する正方位の正方形の大型土坑である。1辺約6.4m、深さ約0.3mである。西端部分以外は棚田造成時に0.2m以上削平されている。埋土上層はブロック混じりで埋め戻されたと考えられる。下層は止水堆積の砂層、シルト層である。ただし、上層は削平を受けていない西端部でのみ確認しており、掲載した断面図にはない。断面や底面にみられる凹凸は、踏み込みによるものと思われる。遺物はすべて最下層に含まれていた。西辺南寄りには長さ約4.4m、幅約0.3m、深さ約0.1mの溝が取り付いている。

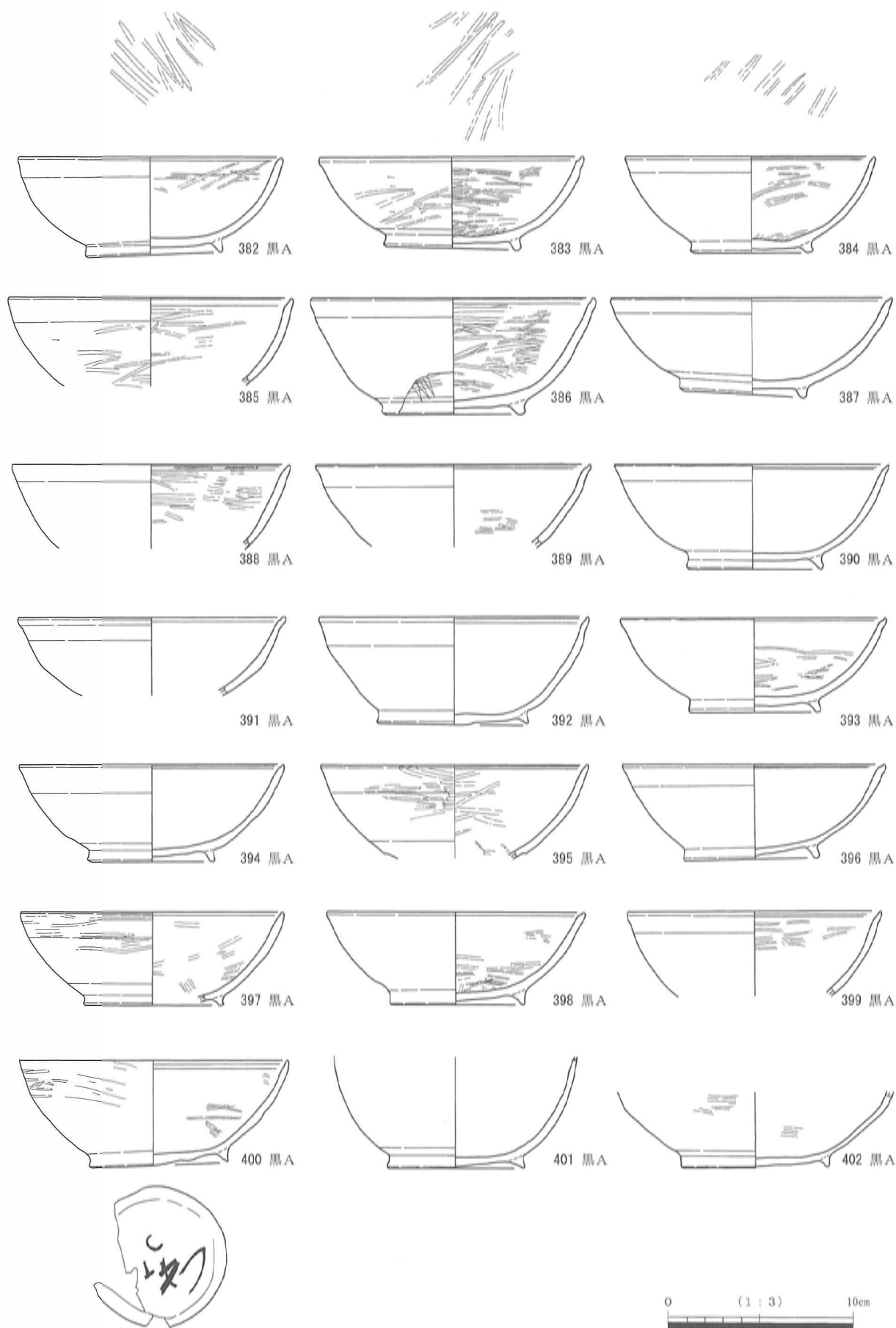
遺物は、黒色土器A類椀、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類鉢、土師器羽釜片である。溝部からも黒色土器A類椀片が出土している。土師器皿、黒色土器A類椀ともに土坑19出土のものと同様であり、同時期のものと考えられる。

土器集積1 (第87・101・102図 図版42・189・190)

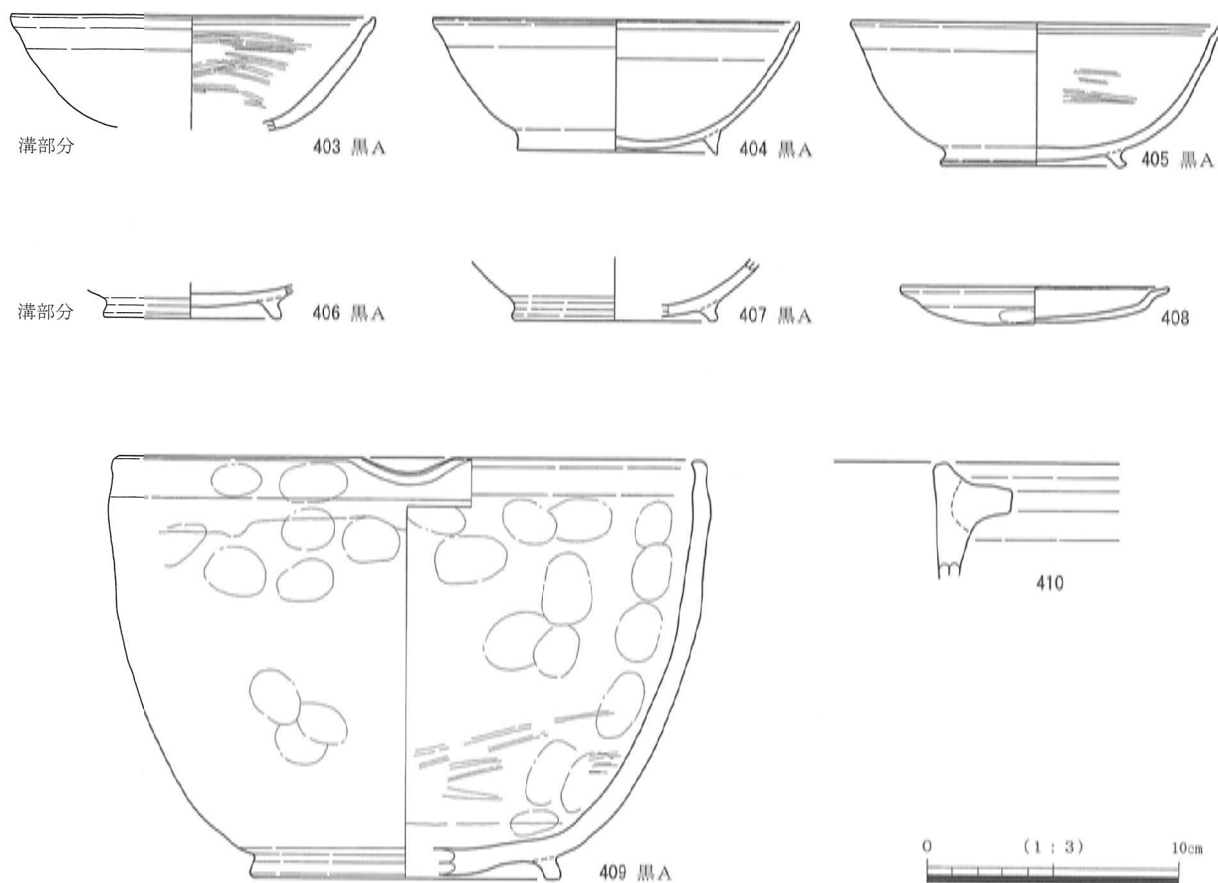
東南部の川1西岸部、溝が流れ込む部分に位置し、溝または川の埋土と考えられる、シルト層の途中で確認した。黒色土器A類椀のみがまとまって出土しており、9点がほぼ完形に復元できた。ただし、ほとんどが高台部と体部の境目で割れており、その部分の破損が著しい。出土状況は土坑19とは異なり、



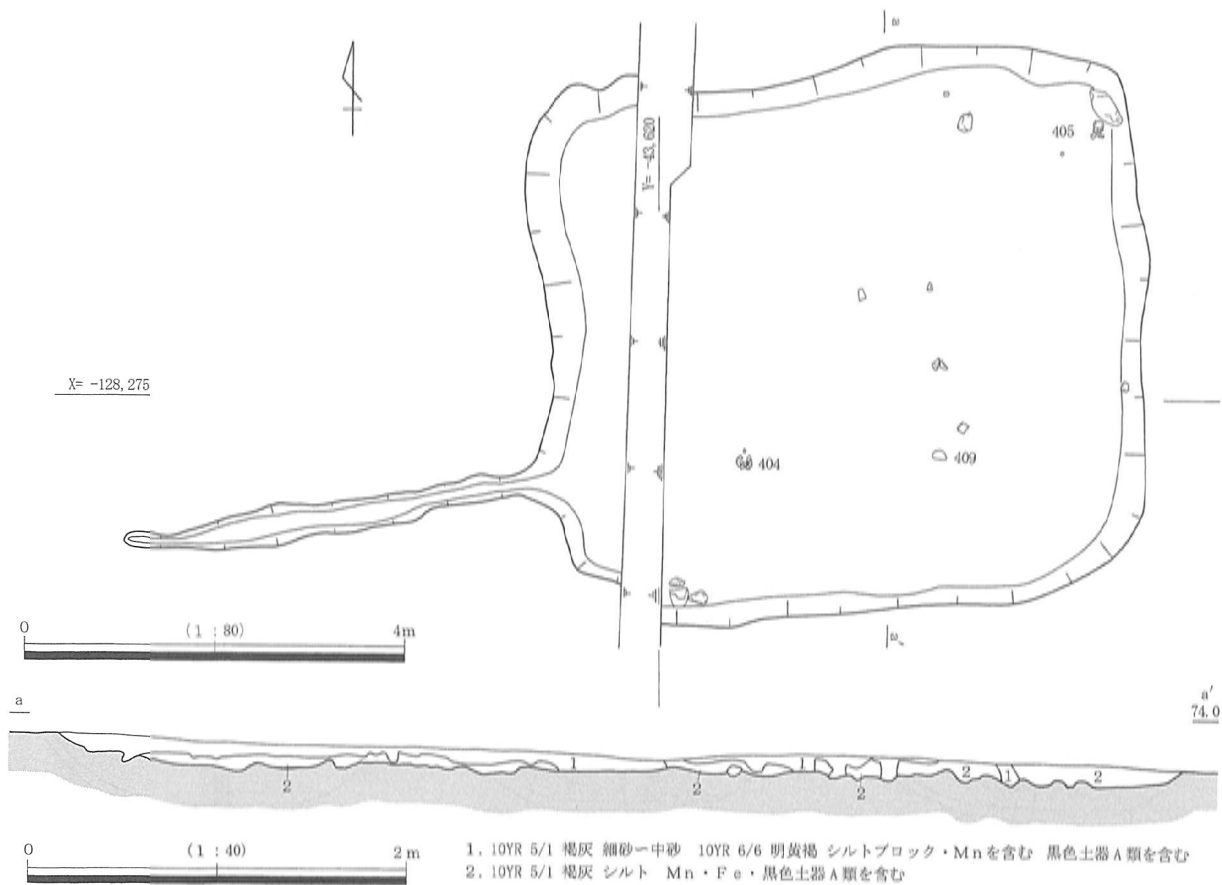
第97図 土坑19 出土遺物(1)



第98図 土坑19 出土遺物(2)



第99図 土坑20 出土遺物



第100図 土坑20 平面・断面図

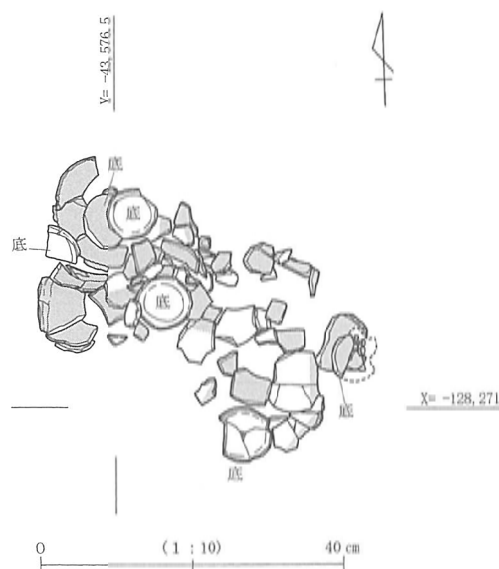
高台部には内面を上にするものと外面を上にするものの両者がみられた。溝が川に流れ込む部分に置かれたものか、本来掘り方を伴うものか、不明である。

黒色土器A類碗は、土坑19と20出土のものが酷似しているのに対して、やや異なる様相を示している。土坑19出土のものに比べて若干ではあるが器壁が厚く、ミガキの幅が太い。また、口縁端部内面に沈線はみられない。器形は土坑19出土のものにはバリエーションがみられるのに対し、口径の割には器高が低く、やや腰のはる器形のものが多い。

包含層は、南東部分と、土坑20の西側部分にのみ遺存していた。細片がわずかに出土したのみである。

丘陵上では非常に平坦な地形の部分であり、柵田造成の影響は少ないと想定される場所であるが、南東部とそれ以外の部分との遺構密度の差、南東部以外で検出した遺構が、柱穴など比較的深いものに限られていることなどをみると、南東部以外では削平の影響を少なからず受けていると思われる。特に建物34内を南北に通る柵田の段差直下の部分などは、周辺よりも削平の影響が大きいと想定される。

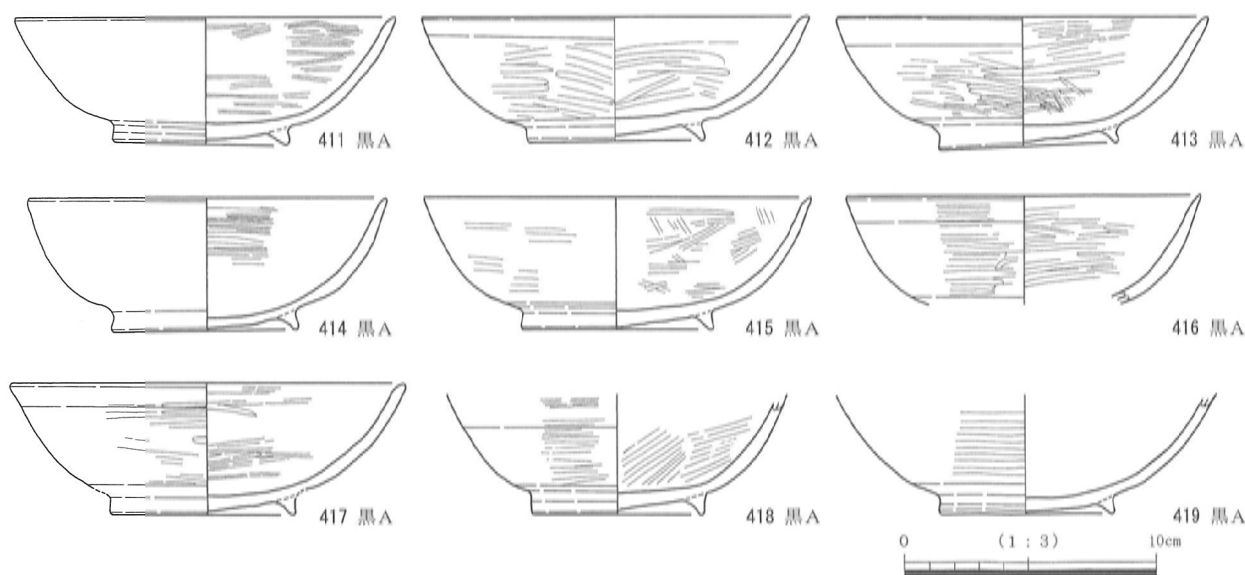
また、遺構群の周辺には、全く遺構を検出していない部分が存在している。特に北側、東側、南側は柵田の段下にあたり、大きく削平を受けたと思われる。西側は柵田の段差は近接してはいないが、近世作土層に伴う鋤溝を多く検出しており、大きく削平されている可能性が高いと思われる。



第101図 土器集積1 平面図

小結

e域は土坑19、土器集積などの一括出土資料を除けば全体的に出土遺物が非常に少なく、かつ細小片がほとんどである。ただ、黒色土器A類碗、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿など、一括資料と同様なものばかりであり、個々の遺構の時期は決め難いものが多い。



第102図 土器集積1 出土遺物

いものの、大局的にみると e 域の遺構群はほぼ10世紀後葉前後の時期と考えてよいのではないかと思われる。

e 域の遺構群は、丘陵上において、奈良時代のものを除けば、時期確定のできる遺構の中で、最も古いものであると考えられる。丘陵上に同時期の遺構は他にもみられるが、その数は少ない。

建物34と35は、重複関係にあることから同時に存在し得ないと思われる。2棟は規模、形態ともに似ており、建て替えの関係であることが想定される。建物35は位置関係から建物36とセットであると思われる、建物36が門であることも想定される。

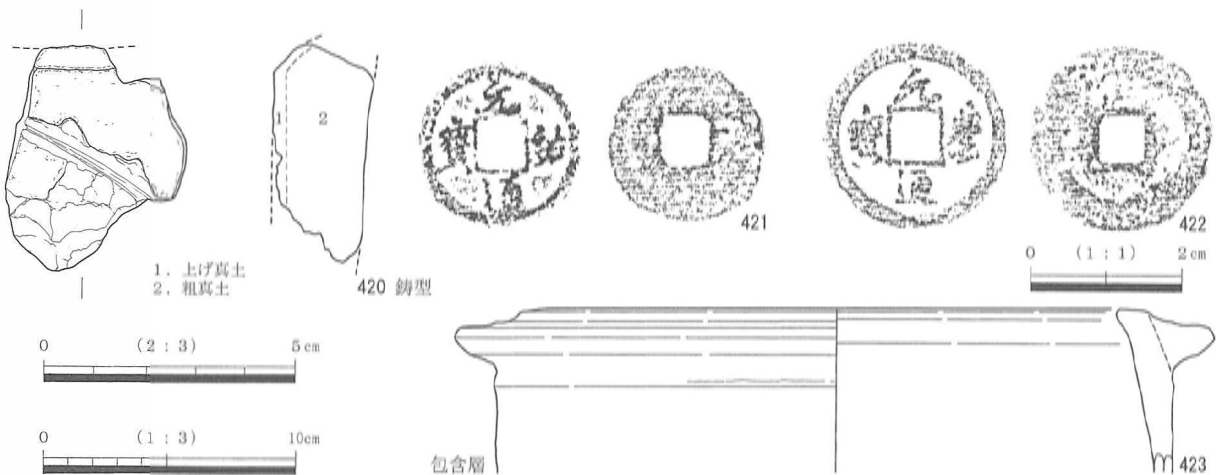
e 域では10世紀後葉前後以外の時期の遺物がほとんど出土していないため、建物32・33も同時期のものである可能性が高いと考えられる。

軋元大寶を埋納したピット3基（ピット16・18・19）は、いずれも建物35のすぐ北側、東側に位置している。軋元大寶は、鑄造が958年で、流通するのが11世紀初頭までと考えられており、これは建物35柱穴出土遺物の時期と合っている。

建物34・35は、遺跡内でも大型のものに属す。軋元大寶埋納の目的が、地鎮であるとすれば、建物35だけではなく、その他の建物も含めた家地に対しておこなわれたことも想定される。また、冒頭で述べたようなこの遺構群の遺跡内における状況を鑑みると、丘陵地全体に対する地鎮、占地に伴う行為であるとの解釈も可能である。a 域の須恵器壺埋納遺構であるピット1は近い時期のものであると思われるが、これとも同様な目的に関連している可能性がある。

土坑19からは、黒色土器A類碗、「て」字状口縁土師器皿を中心とする良好な一括資料が出土した。また、土器集積1からは完形の黒色土器A類碗のみがまとまって出土している。同じ黒色土器A類碗でも土坑19出土のものとはやや様相を異にしている。土坑20は方形の大型土坑で、埋土から滯水していたことがわかる。

東側は川1を挟んで i 域で、同時期の遺構はみられない。西側は c 域で、建物群が展開しているが、e 域とは時期が全く異なる。北西側は b 域で浅い谷地形である。南側の f 域にも建物群が展開しているが、時期不明な建物が多い。e 域と同時期のものが全くないとはいいきれないが、仮に存在したとしても、位置的に別の単位であると思われる。ただし、e 域の周辺は削平を受けており、遺構群を検出し得た範囲以上にもう少し周辺に広がっていた可能性は高い。



第103図 包含層・近世作土層等 出土遺物 (2/3 = 420 1/1 = 421・422)

第6項 f域(付図2・3・7)

小規模な谷を挟んでd域の東側に位置し、西半部の北側はe域で、東半部の北、東部が川1に面する。南側はg域である。比較的平坦な地形の部分である。

主な遺構には、建物15棟・柱列2列・焼土坑1基があり、他に、溝・土坑・ピットなどがある。

建物37(第104・105図 図版43・45)

西部の北西に位置し、東西3間×南北2間で、南に比較的小規模な柱穴で構成される1間の付属部分が付く。東西約7.2m×南北約5.7m、約36.7㎡である。主軸方向はN-10°-Wで、やや西に振れ地形に沿っている。柱穴5が比較的浅く、東にそれに対応する柱穴がないのは削平されてしまった可能性も考えられる。南西部分に柱穴がみられないのもその可能性を否定できない。さらに北側は棚田造成時の削平の影響が大きい部分である。柱穴7に1個、10に2個根石が入っていた。

遺物は小片がわずかにあるのみで、須恵器杯蓋・甕など古代のものである。しかし、建物の時期は方向軸を揃えて隣接している建物39と隔たった時代とは考えづらく、平安時代以降のものである可能性が高い。

建物38(第104・105図 図版43・45)

西部に位置し、東西3間×南北2間、約8.8m×3.9m、約34.3㎡である。主軸方向はN-10°-Wで、建物37と同じである。南辺の西から2番目の柱穴は攪乱により失われた可能性が高い。建物39と重複している。

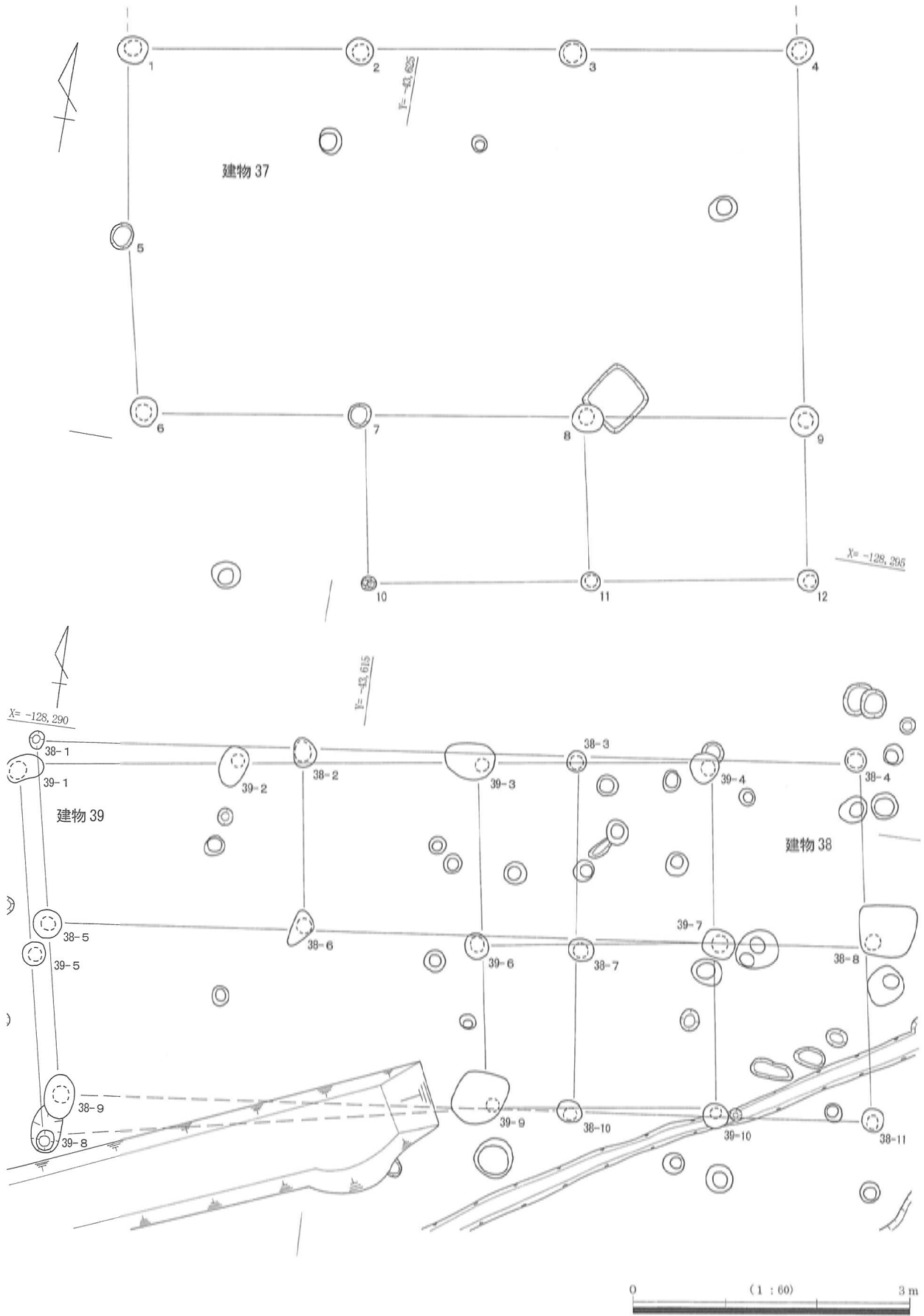
遺物は、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類、焼土の細片が出土した。

建物39(第104・105・107図 図版43・45・190)

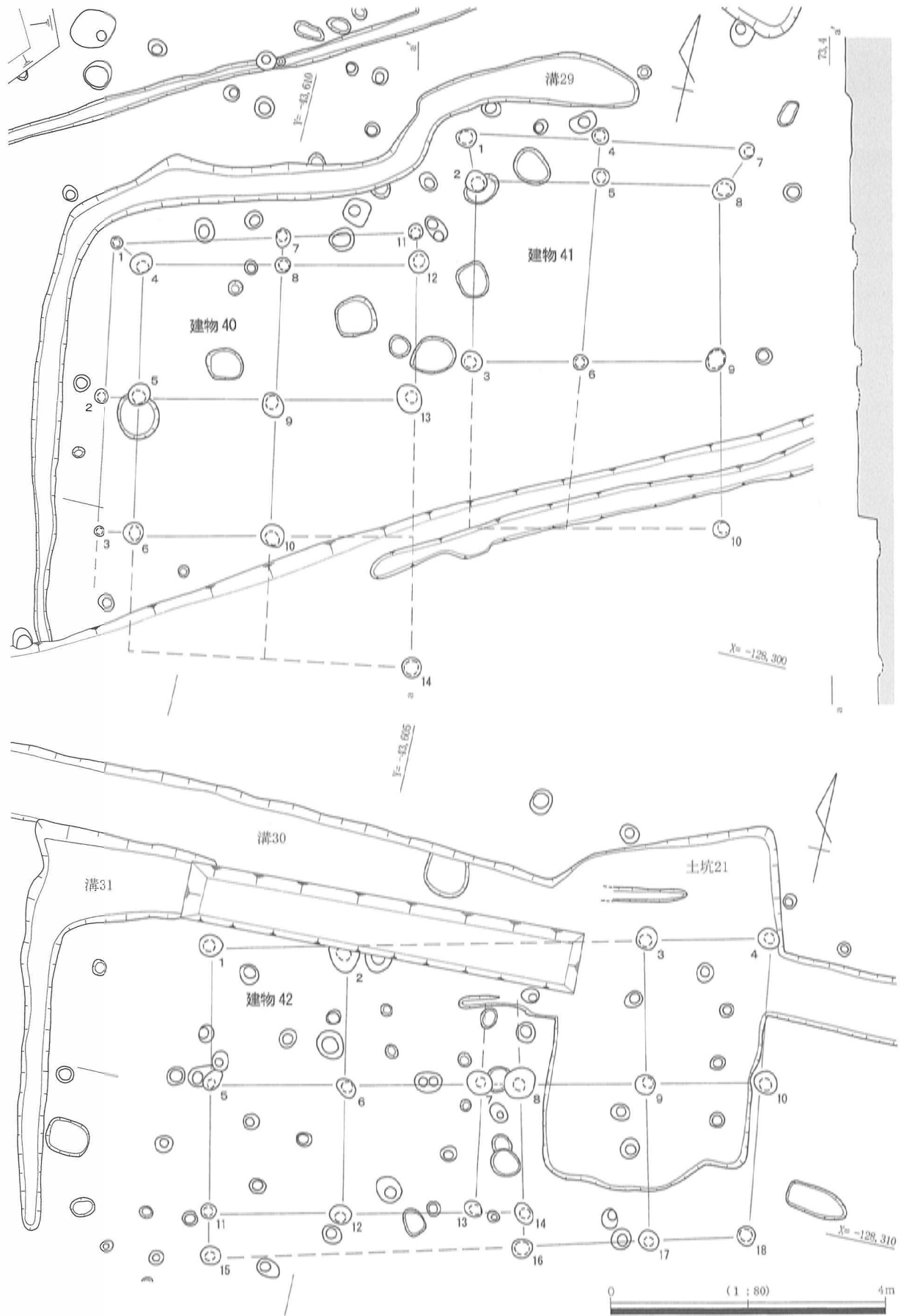
建物38と重複しており、東西3間×南北2間、約7.3m×3.9m、約28.5㎡である。主軸方向は、N-



第104図 f域 平面図



第105图 建物37~39 平面图



第106図 建物40~42 平面・断面図

8° - Wである。南辺の西から2番目の柱穴は、攪乱により失われた可能性が高い。建物38と重複し、主軸が建物37にほぼあっている。

遺物は小片のみで、柱穴7から黒色土器A類片、柱穴9から「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類、鏝が狭く口縁部の短い土師器羽釜、柱穴6から黒色土器B類片が出土している。11世紀代を中心とする時期のものと考えられる。

建物40 (第104・106・107図 図版43・45)

西部に位置し、南北3間×東西2間で、小規模な柱穴で構成される北辺、西辺の付属部分も含めて、約6.2m×4.5m、約27.9㎡である。主軸方向は、N - 12° - Wである。南部分は棚田造成時に削平を受けているが、柱穴14の遺存状況から、棚田の段差により近い部分に位置する柱穴が、削平により消失したことが想定できる。

遺物は小片ばかりであるが、口縁部2段ナデの土師器大皿・小皿、和泉型瓦器椀、小ぶりで口縁部が垂直に立つ瓦質土器羽釜、椀以外の器壁の厚い器種の黒色土器A類などがあり、12世紀のものである。ただし、位置的に同時期である可能性が考えられる建物41の柱穴からは13世紀代の遺物が出土している。

西辺と北辺に沿って溝29が存在しており、この建物に伴うものと考えられる。この溝は東に隣接する建物41の北辺にも沿っており、建物40と41は溝29を共有して同時期に存在していた可能性が高い。

建物41 (第104・106・107図 図版43・45・190)

西部に位置する。南北2間×東西2間で、北辺に付属している柱列部分を含めると約5.6m×3.6m、約20.2㎡である。主軸方向は、N - 8° - Wである。建物40同様南部分が棚田造成時に削平を受けており、柱穴を削平により消失した可能性が高い。中央の柱穴6は非常に浅い。

遺物は、土師器皿のほか土師器煮炊具、和泉型瓦器椀がある。土師器皿は13世紀のものと思われる。

溝29は東に隣接する建物40の西辺、北辺に沿っているが、この建物部分では北側にずれ、その北辺に沿っている。建物40と41は、溝29を共有して同時期に存在していた可能性が高い。

建物42 (第104・106・107図 図版43・45)

西部に位置する。1棟の東西棟と考えたが、2間×2間の建物2棟である可能性もある。ただし、それぞれの柱位置が対応している状況から、いずれにしる同時期に存在していた可能性は高いと考える。1棟の場合は、東西約8.0m×南北約4.4m、約35.2㎡である。主軸方向は、N - 12° - Wである。北辺中央部分では、攪乱により柱穴を消失した可能性が高い。

遺物は小片のみで、西部分では楠葉型瓦器椀、器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿、椀以外の器種の黒色土器A類、東部分でも同じく楠葉型瓦器椀、「て」字状口縁土師器皿などが出土している。11世紀後葉のものと思われる。

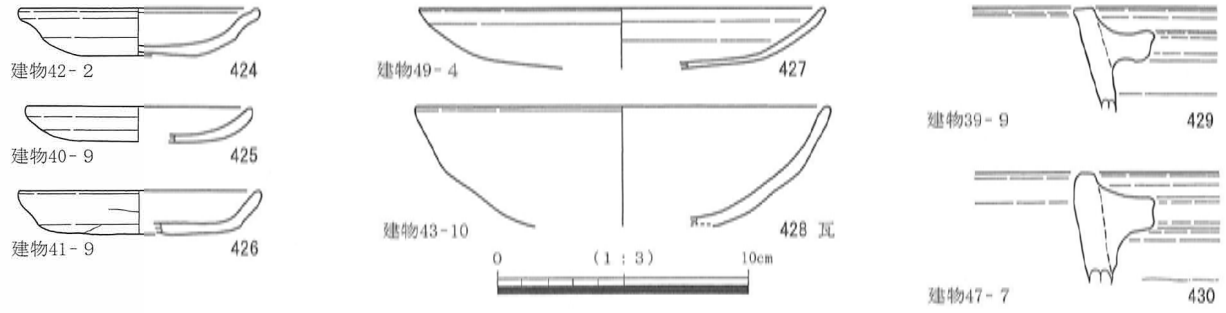
西辺から北辺に沿って溝31が存在するが、この建物に付属するものと思われる。土坑21に切られる。

建物43 (第104・107・108図 図版44)

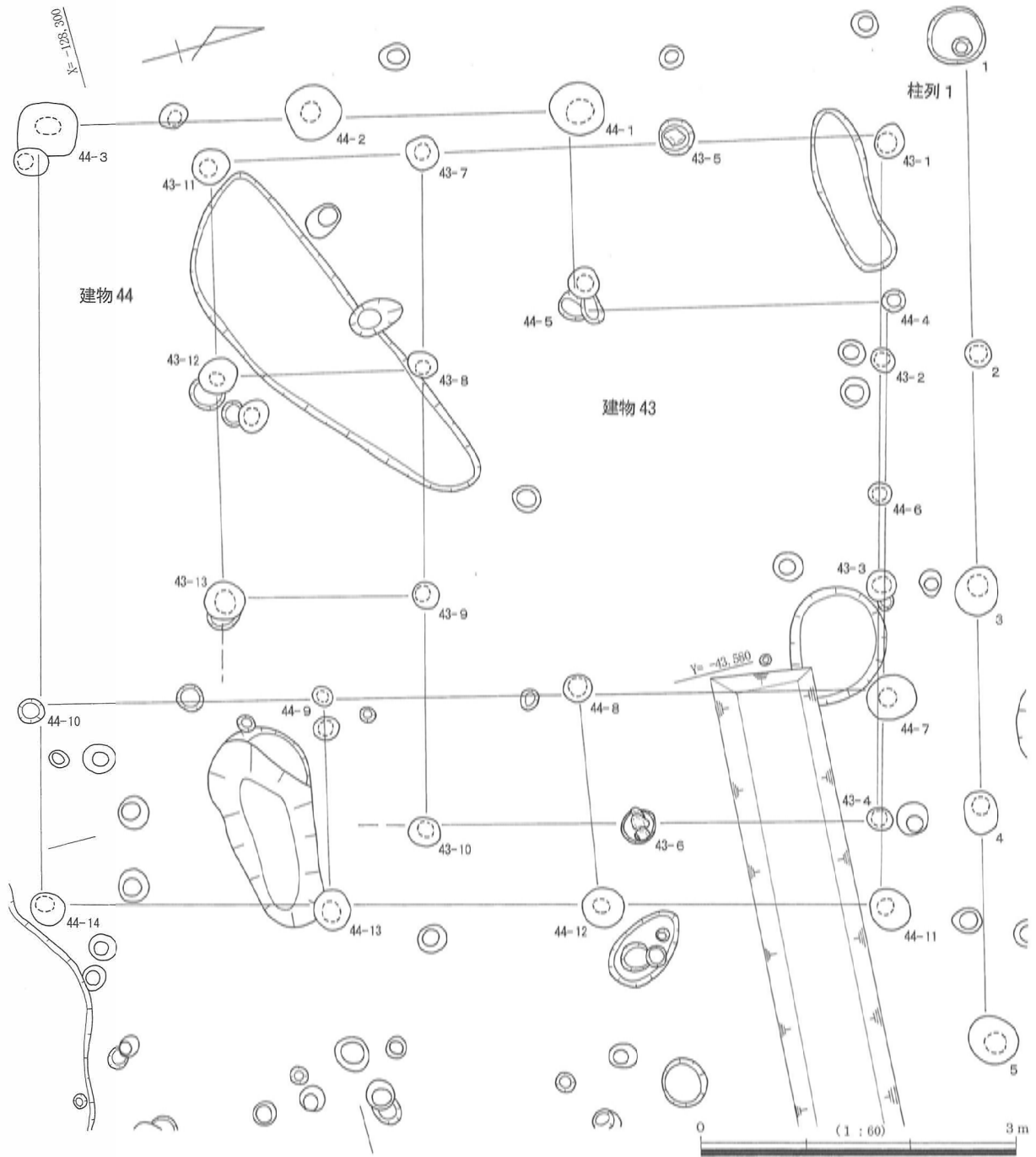
東部西寄りに位置し、東西3間×南北3間、約6.4m×6.2m、約35.5㎡である。主軸方向はN - 12° - Eで、地形にあわせて正方位からは振れている。南辺部分は付属部分である可能性もあるが、柱穴の規模が他と同規模である。南東部分では柱穴を確認していないが、土坑によって失われた可能性がある。柱穴5・6内には根石と思われる石が入っていた。

遺物は小片がごくわずかに出土したのみで、「て」字状口縁土師器皿、和泉型瓦器椀などがある。この2点は11世紀後葉～12世紀中葉の範疇に入るものである。

第1節 丘陵上西部(f城)



第107図 建物39~43・47・49 出土遺物



第108図 建物43・44 柱列1 平面図

建物44とは方向軸をほぼ揃え、北辺がほぼ重なり、重複している。北辺北側に柱列1があるが、この建物43と方向を揃えている。ただし、これは建物44に付属していた可能性や、2時期にわたって使用されていた可能性もある。建物44、柱列1では掘り方の比較的大きい柱穴が目立つが、この建物の柱穴は当遺跡内では平均的なものである。

建物44 (第104・108図 図版44)

建物43と重複し、東西4間×南北3間、約7.4m×8.0m、約53.5㎡である。方向軸は地形に合わせて正方位から13°東に振れている。東辺部分は付属部分である可能性もあるが、柱穴の径が内部のものよりも大きい。南辺で柱穴を検出していない部分があるが、この建物を調査時に認識していなかったため、本来の有無は不明である。北西角でも柱穴を検出しておらず、建物を変則的な平面形としているが、これも同様である。柱穴は掘り方が径0.4m前後と、比較的大きいものが目立つ。

遺物は小片のみで、「て」字状口縁土師器皿、楠葉型瓦器椀、黒色土器A類、土師器羽釜、須恵器甕、焼土片などが出土している。柱穴2には比較的多くの破片が入っていたが、時期は不明である。

建物43とは方向軸を揃え、北辺がほぼ重なっている。

建物45 (第104・109図 図版44・46)

東部の北東側に位置する隅丸方形掘り方の柱穴からなる東西約17.5m×南北7.6m、約125.0㎡の大型建物である。主軸方向はN-5°-Eである。東西5間×南北2間に、南、東、西3面に廂がつく形であるが、特に南側は構造が複雑である。また、廂の西辺南部分にはさらに柱穴が2基付属している。建物および西側廂部分は、1辺約0.6m~0.7mの隅丸方形の掘り方をもつ柱穴からなる。それ以外の部分は1辺約0.4m~0.5mとやや小規模な柱穴で構成されている。柱間は約2.1m~2.2mで、約7尺である。建物面積は遺跡内で最も広く、その数字は群を抜いている。掘り方がこのような方形に近い形をとる柱穴も遺跡内ではきわめて少なく、その規模も他の建物に比べて大きい。また、建物の構造についても、このような複雑な構造のものは当遺跡内では他にみられない。これらの点から、この建物は遺跡内の建物の中でも特異な存在であるといえる。

遺物は、土師器の細片がごく少量出土したのみである。

建物46 (第104・110図 図版44・47)

東部に位置し、東西4間×南北2間であるが、さらに南辺と北辺に沿って柱列が存在し、何らかの付属施設を構成していたと思われる。約9.9m×6.0m、約59.4㎡で、建物部分は約40.6㎡である。主軸方向は、N-29°-Eである。比較的大きい柱穴が6と7に根石の可能性のある石が入っていた。正方位から大きく東に振れており、建物46~48と重複している。

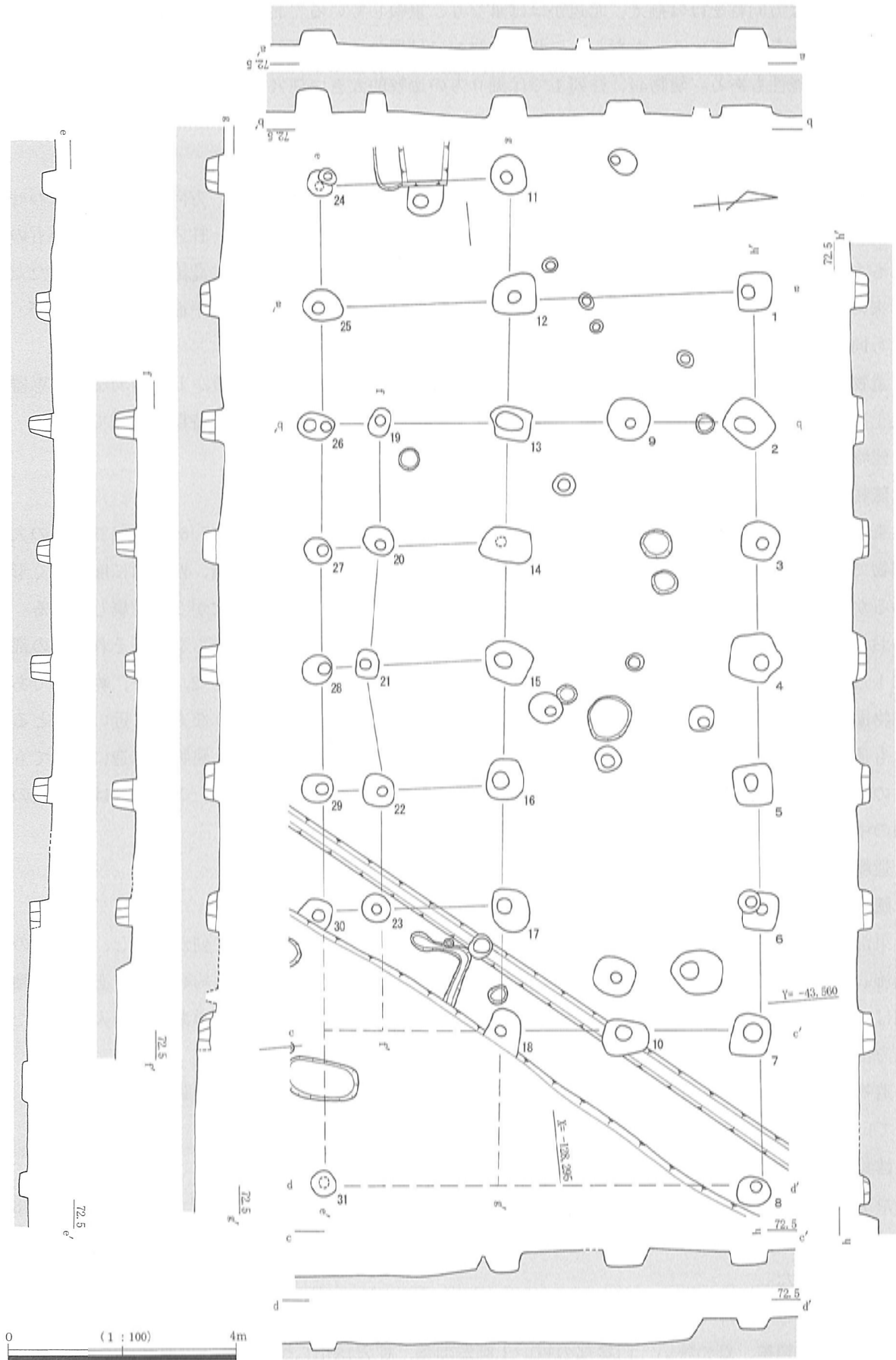
遺物は小片がわずかに出土したのみで、口縁部2段ナデの土師器大皿、楠葉型瓦器椀などがある。あえていえば11世紀後葉~12世紀中葉の範疇に入るものである。

建物47 (第104・107・110図 図版44・47・190)

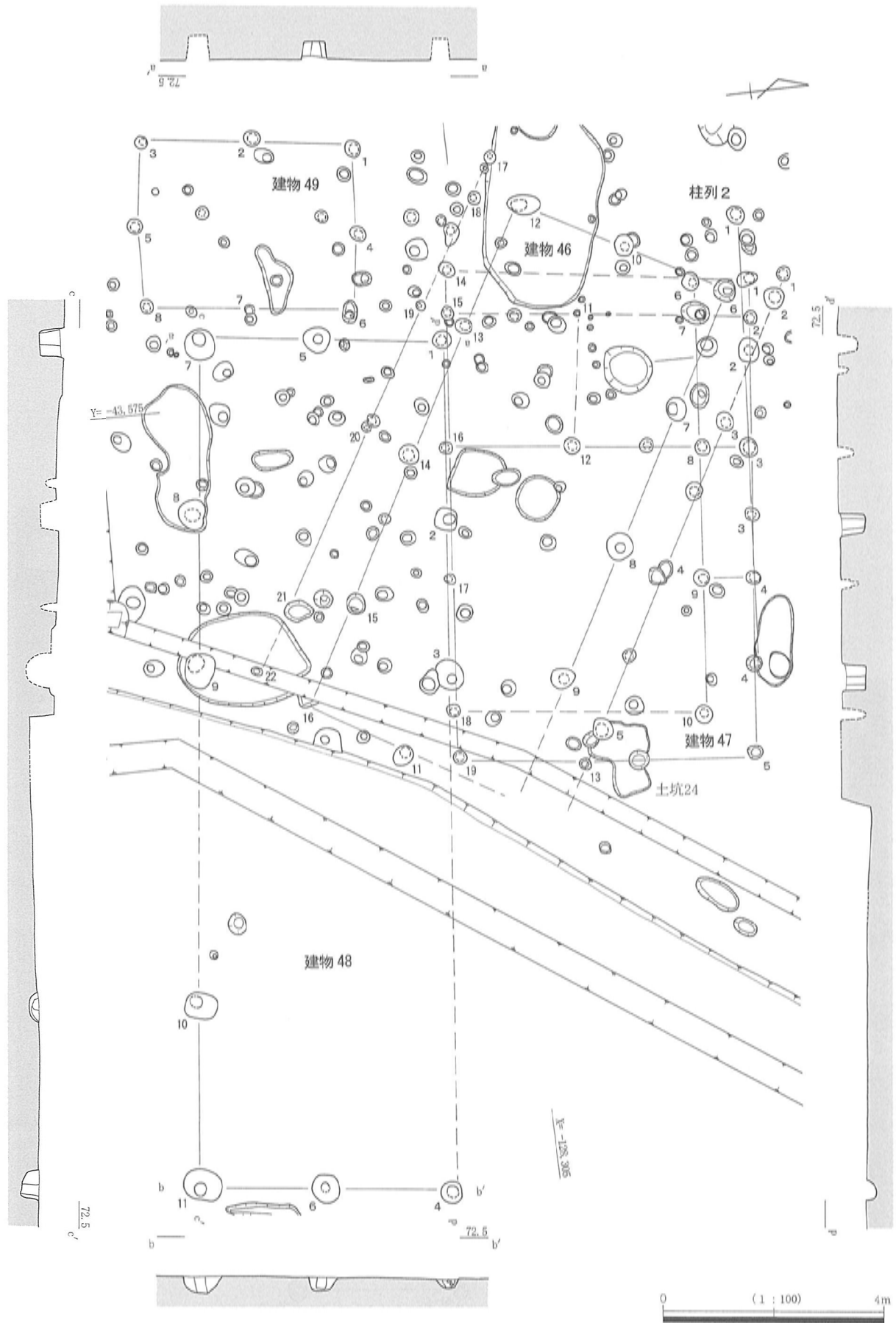
東部に位置する。東西3間×南北2間で、北と東、西に付属部分を有する構造と思われる。東西約8.7m×南北約5.4m、約47.0㎡である。主軸方向は、N-6°-Eを向く。柱穴7に根石の可能性のある石が入っていた。

遺物はいずれも小片で、柱穴8から口縁部が外反する土師器皿、柱穴13から楠葉型瓦器椀、柱穴7から黒色土器A類椀、鏝の狭い、口縁部の短い土師器羽釜、柱穴18から焼土片が出土した。

隅丸方形の柱穴をもつ大型の建物45・48とほぼ方向軸を揃える。南辺は建物48の北辺と重なり、北辺



第109図 建物45 平面・断面図



第110图 建物46~49 柱列2 平面・断面图

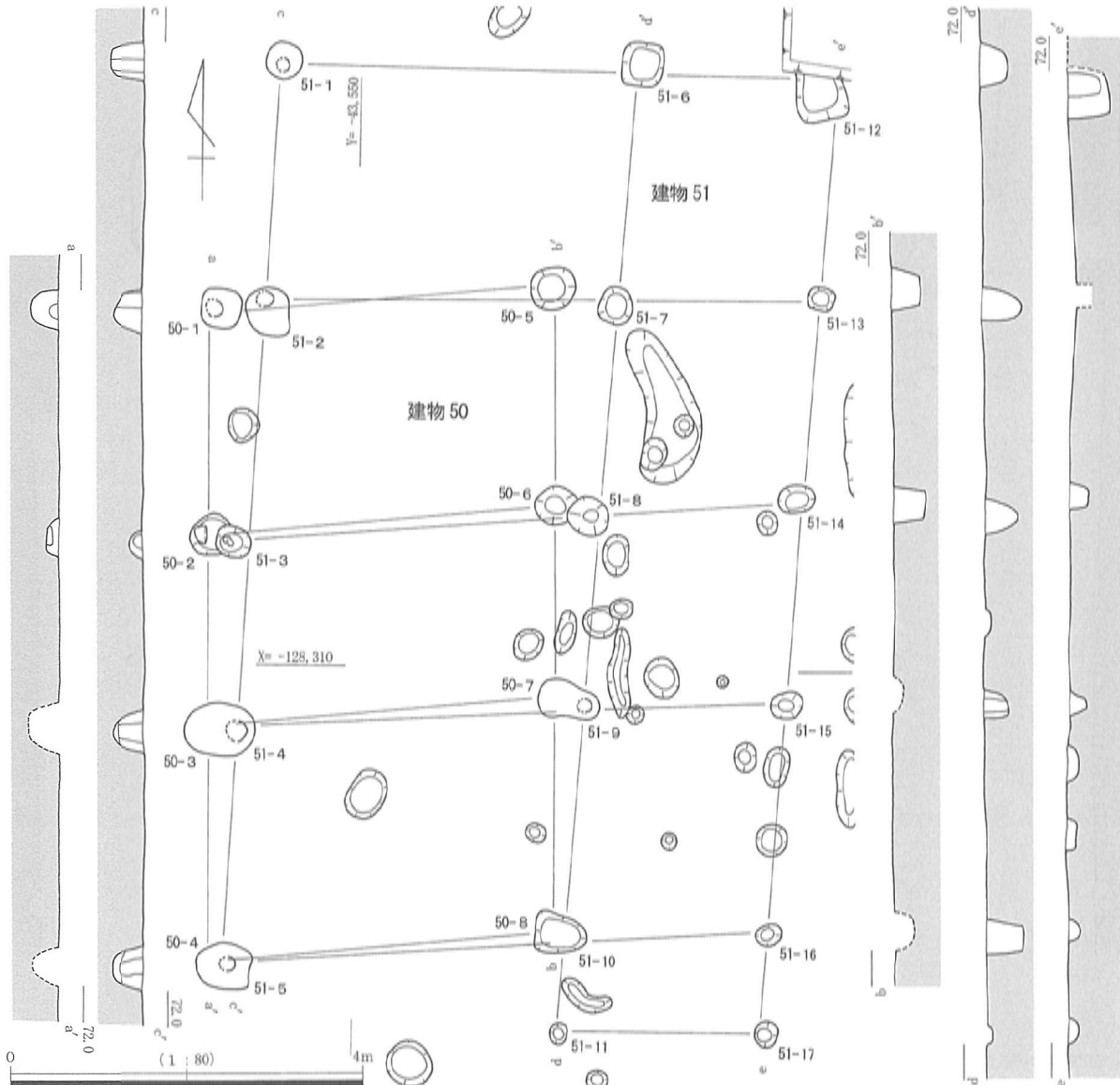
は建物48に対応する柱列2と重なる。

建物48 (第104・110図 図版44・47)

東部に位置する。隅丸方形掘り方の柱穴からなる、東西に細長い建物である。東部分は棚田造成時に大きく削平され、柱穴を失ったと思われる。東西4間または5間×南北2間、約15.3m×4.5m、約68.9㎡である。主軸方向は、N-8°-Eを向く。柱穴は径約0.5m~0.7mと大きなものである。柱穴11に根石と思われる石が入っていた。

遺物は、出土していない。

建物46・47・49と重複する。北約5.5mの位置に東西方向の柱列2があり、この建物と柱の並びを揃える。建物47の南辺はこの建物の北辺と重なり、北辺が柱列2と重なる。



第111図 建物50・51 平面・断面図

建物45のものと比べると小規模ではあるが、類似した形の柱穴をもち、方向軸も揃う。建物47との関連も想定されるが、これらは同時には存在し得ない。建物45と、同時存在の可能性も含めてその関連が想定される。

建物49（第104・107・110図 図版44）

東部に位置する。南北2間×東西2間、約3.8m×3.0m、約11.4㎡である。主軸方向は、N-8°-Eである。

出土遺物は小片であるが、口縁端部をつまみ上げる土師器大皿、瓦器、黒色土器A類、土師器煮炊具などがある。あえていえば12世紀前葉～中葉のものであろうか。

建物50（第104・111図 図版44・48）

東部に位置する。南北3間×東西1間、約7.4m×3.9m、約28.9㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を示す。東西の1間が約4.0m前後と南北の約2.5mに比べて広い。柱穴2には根石が入っていた。

遺物は出土していない。

建物51の南西部分とほぼ重なる。切り合い関係から建物51の方が新しい。柱穴のなかにはやや大きく方形に近いものもあり、建物45や、建物48との関係も想定されるが、ほぼ方向軸が揃っていること以外に、詳細は不明である。

建物51（第104・111図 図版44・48）

建物50と重複する。南北4間×東西2間で、南辺東側に柱間の狭い部分がつく。南北約10.9m×東西約6.2m、約63.8㎡である。主軸方向は、N-4°-Eである。東西の柱間は西部分で約4.0m、東部分で約2.3mと、東部分の方が広い。東西方向と南北方向の柱列が直角になっておらず、平面形は歪である。柱穴3に石が入っており、根石の可能性はある。

遺物は出土していない。

南西部分が建物50とほぼ重複している。建物50の柱穴はやや西に位置するものの、北の2基以外はすべて建物51の柱穴と切り合っており、建物51の方が新しい。

柱穴の中にはやや大きく方形に近いものもあり、建物45や、建物48との関係も想定されるが、ほぼ方向軸が揃っていること以外、詳細は不明である。

柱列1（第104・108図 図版44）

東部に位置する。東西4間、約9.4m、柱間約2.1m～2.9m、柱穴の径約0.2m～0.5mである。建物43または44の北側に付属すると考えられる。建物43と柱の並びを揃えているが、それは同時に建物44の柱間の中央に対応する位置でもある。2時期にわたって使用されていた可能性もある。建物の東西長よりも長く、建物からの距離は約1.0mである。

遺物は出土していない。

柱列2（第104・110図）

東部に位置する。東西3間、約8.2m、柱間約2.5m～3.0m、柱穴の径約0.2m～0.4mである。柱穴4に根石の可能性のある石を有する。

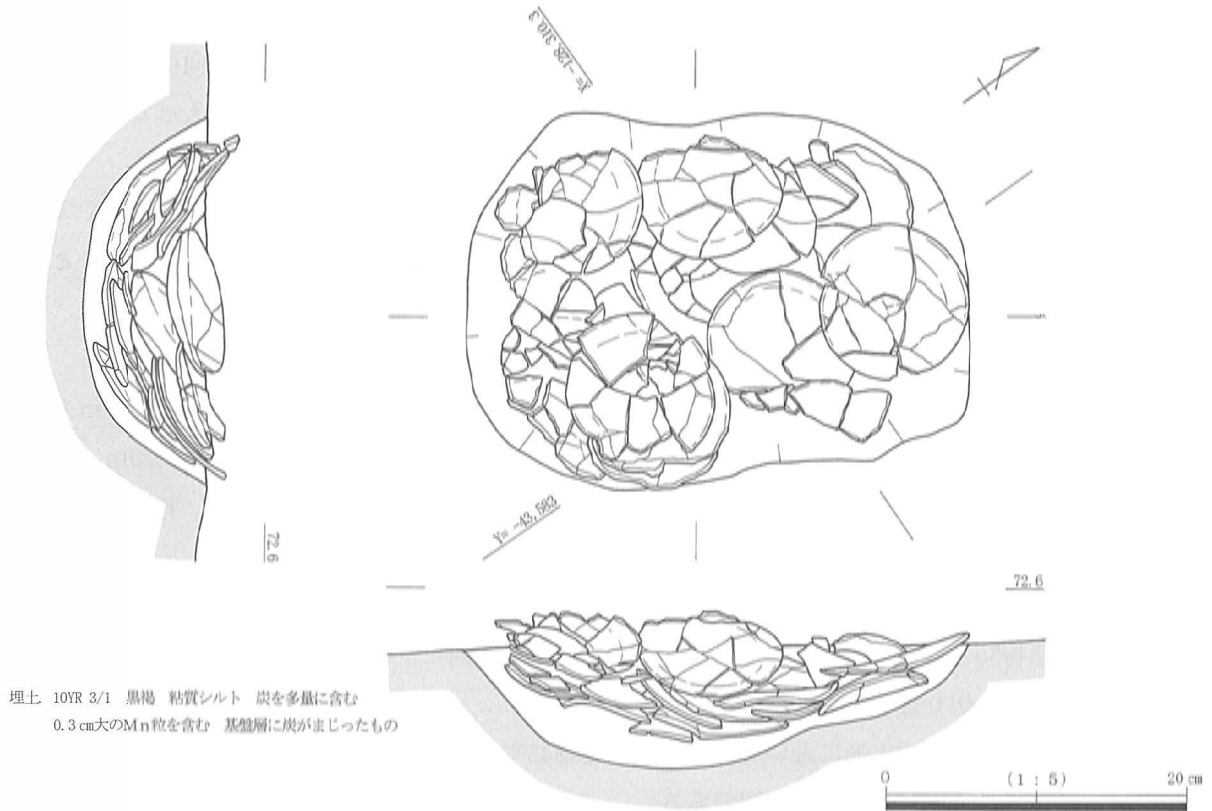
遺物は柱穴1から黒色土器A類などの細片がわずかに出土したのみである。

建物48と方向軸を揃え、その東西列と柱の並びも揃える。建物47とも方向軸が揃っており、その北辺と重なる。

溝29 (第106図)

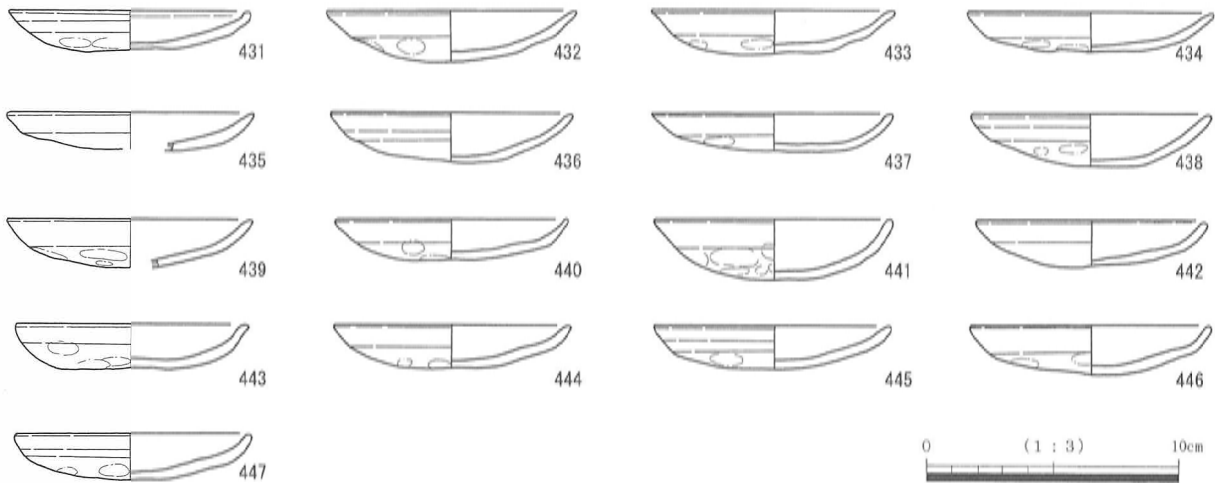
東西に隣接する建物40・41の西側と北側に巡る。建物40・41の北辺は揃っていないが、溝が屈曲してそれらに並行している。検出長約14.8m、幅約0.5m、深さ約0.1mである。底のレベルは、地形同様南へと低くなっている。南部分は柵田造成時に削平されている。

遺物は出土していない。



埋土 10YR 3/1 黒褐 粘質シルト 炭を多量に含む
0.3 cm大のMn粒を含む 基盤層に炭がまじったもの

第112図 ピット33 平面・立面図



第113図 ピット33 出土遺物

溝30 (第106図)

建物42の北側に位置する、東西方向の溝である。検出した長さ約16.8m、幅約0.8m~1.1m、深さ約0.1mである。西端と東端の底面のレベルに差はない。

遺物は、細片がわずかに出土している。

南側には建物42以外にも多くの柱穴があり、この溝とセットになる建物が存在した可能性もある。建物42との切り合いは不明である。

溝31 (第106図)

建物42の西側と北側に巡る。東側は試掘時のトレンチにより不明である。南北長約6.0m、幅約0.4m、深さ約0.1m、東西長2.0m以上、幅約1.0m、深さ約0.1mである。底面のレベルは地形通り、南へと下がっている。

遺物は出土していない。

ピット22~26・29・30

柱穴と考えられるピットで、根石の可能性のある石を含む。いずれも遺物は出土していない。

ピット28 (第116・119図 図版194)

土坑24と重なる。径約0.4mの円形で、深さは約0.3mである。下部から完形の土師器皿が1点出土した。外面を上に向けて45度程度傾いた状態である。

土師器小皿は「て」字状口縁の最終段階のもので、土坑24出土のものと類似している。他に土師器羽釜片も出土している。11世紀後葉のものと思われる。

上部に完形の土師器皿などがみられたが、出土状況や土器の類似性から土坑24のものであると判断した。遺物の出土状況から、土坑がピットを切って掘削されたと考えられる。

ピット33 (第104・112・113図 図版44・49・191)

東部南端に位置する。隅丸方形で、長辺0.34m、短辺0.25m、深さ約0.1mである。上部が削平を受ける。

遺物は、完形の土師器小皿が3~4枚重なる状態で、全部で17点が出土した。

土師器皿は同様なものばかりであるが、微視的には口縁端部に違いがみられ、外反するものから内傾するものまでを含んでいる。表面が磨滅しているため詳細は不明であるが、口縁部1段ナデのものと2段ナデのものが存在し、1段ナデのものの方が多くを占めている可能性がある。ただし2段ナデとしたものにおいても1段目と2段目の差は明瞭ではなく曖昧である。11世紀後葉~12世紀前葉に位置づけられると思われる。

土坑21 (第106・119図 図版190)

西部に位置する。長方形で、南北約5.0m、東西約3.0m、深さ約0.1mである。建物42と重なるが、時期関係は不明である。

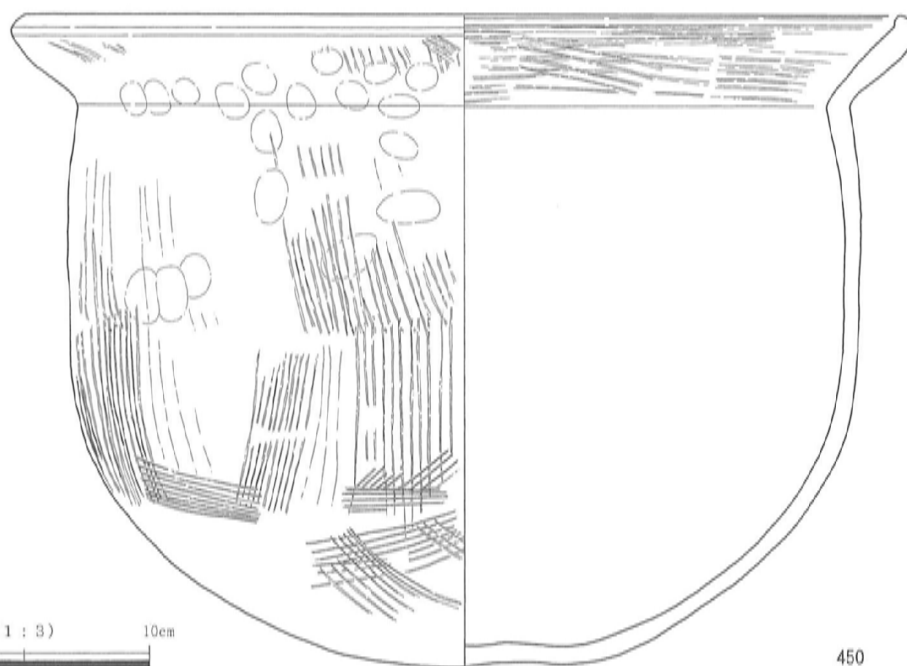
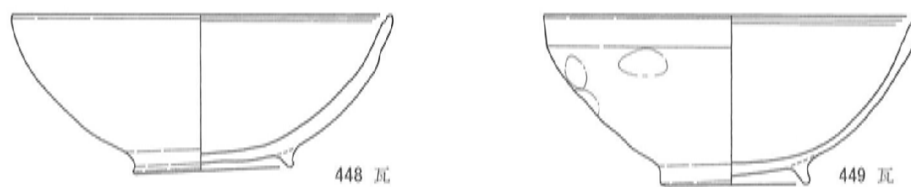
遺物は小片で、「て」字状口縁土師器皿、楠葉型瓦器椀、回転台土師器などがあり、11世紀後葉~12世紀前葉のものと思われる。

土坑22 (第104・114・115図 図版48・192)

東部の柱列1北側に位置し、やや歪な楕円形で、長径が約1.5m、短径が約1.3m、深さが約0.3mである。直径10cm前後の礫と混在して楠葉型瓦器椀と土師器甕が出土し、共に土坑底面からは若干浮いた状態である。11世紀後葉のものと考えられる。



第114図 土坑22 平面・断面図



第115図 土坑22 出土遺物



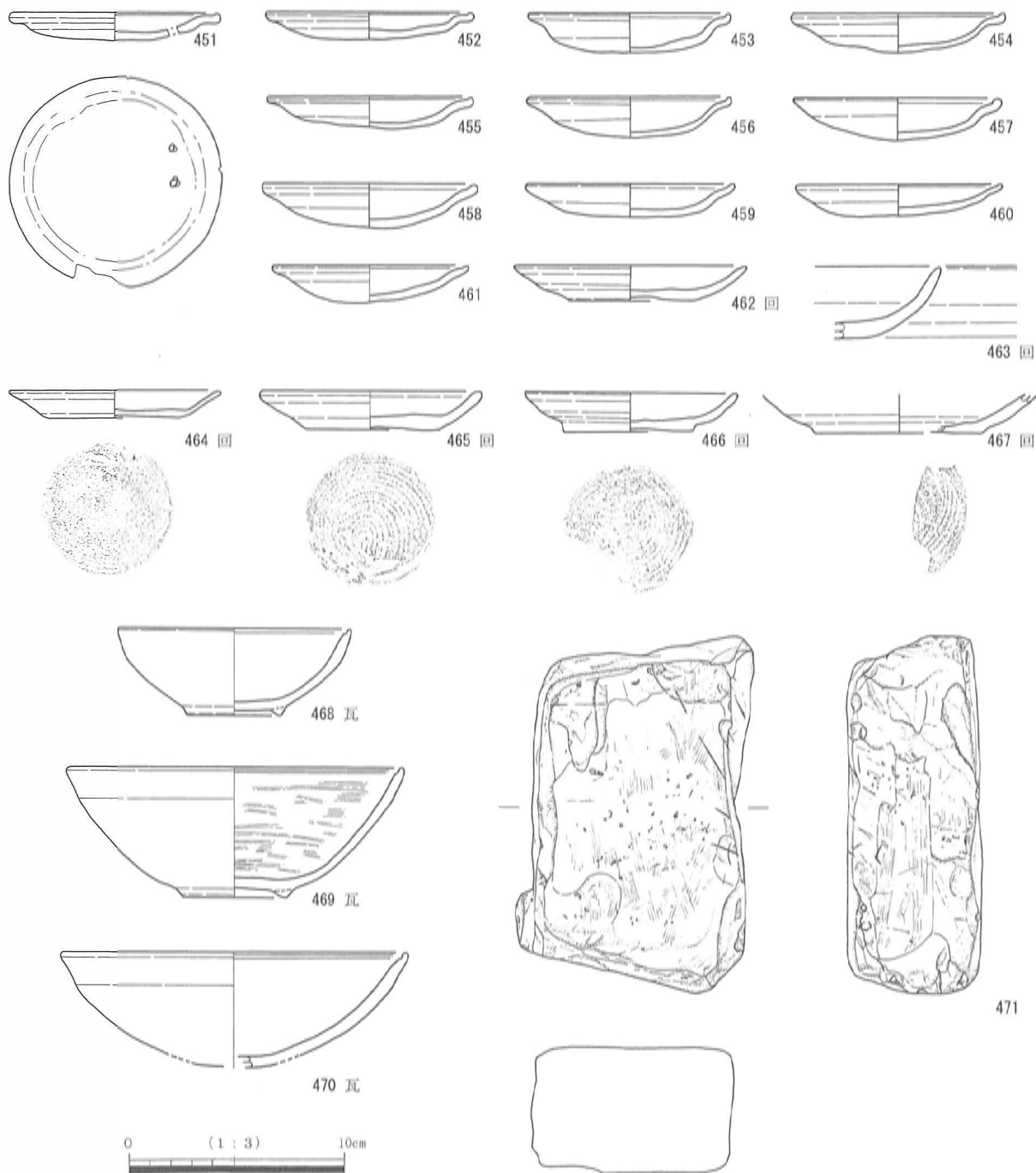
第116図 土坑24 平面・立面図

土坑24 (第104・110・116・117図 図版49・192・193・249)

東部に位置する。不定形な土坑で、南北約1.1m、東西約1.3m、深さ約0.1mである。土師器皿などが西半部から出土した。

土器はおおよそ土坑の底面より上位で出土している。完形の「て」字状口縁土師器皿が正置の状態であり、回転台土師器皿の完形品もみられる。その他は、楠葉型瓦器椀、瓦器小椀、土師器大皿片、須恵器などの破片であるが土師器小皿と対照的に散在している状態である。

ピット28との切り合い関係は不明であるが、ピット28上に位置する土器(458・465・470)も、他の



第117図 土坑24 出土遺物

土器と出土レベルがほぼ同じであることから、この土坑の遺物として掲載した。

「て」字状口縁土師器皿は、最終段階の器形である。回転台土師器は、底部外面糸切り離しである。瓦器椀は楠葉型である。小椀も口縁端部内面に沈線をもつ。西端部分では大型の砥石が出土した。井本伸廣氏の鑑定により、遺跡周辺に存在する泥岩であるとの結果を得た。荒砥であると思われる。11世紀後葉を中心とする時期のものと思われる。

埋土が同様であったため明らかにし得なかったが、東側の方形に張り出した部分は、切り合いを有する別の遺構の可能性が有る。建物46・47、ピット28と重複している。

焼土坑10（第104・118図）

東部の東端に位置し、円形で径約0.5m、深さ約0.1mである。壁の被熱などは確認していないが、埋土下層が焼土混じりの炭層であり、焼土坑である可能性が高いと考えている。

遺物は出土していない。

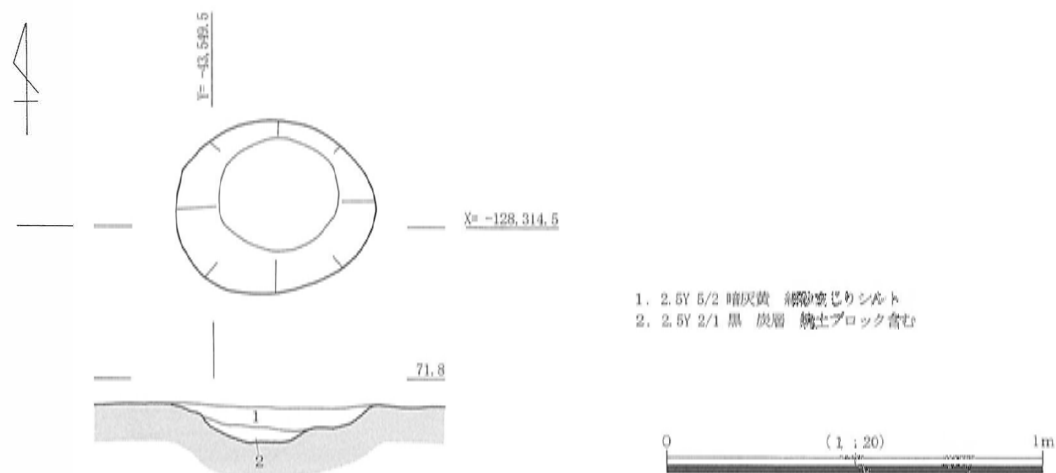
包含層は、一部を除いてほとんど遺存していなかった。全体的に棚田造成による削平を受けていると思われる。

北端部では、少数の遺構を検出したのみであるが、棚田の段下部分にあたっており、特に削平を受けていると思われる。ただ、本来存在した遺構が失われているとしても、f域と北側のe域とは遺構群の様相を異にするため、f域の一連の遺構群は、e域までの範囲で収束していたと考えられる。西部も遺構が希薄であるが、これも本来の状態であるか不明である。遺構が比較的密に分布している範囲においても、棚田の段下部分は遺構が失われる程の削平を受けている。特に建物50・51の西側、建物45、建物48を通る棚田の段差造成による影響は大きい。

包含層、その他の遺構共に出土遺物は少なく、小片がほとんどである。11～13世紀と思われるものがみられるが、特に11世紀代のものが目立つ。

小結

f域では比較的多くの遺構を検出したが、出土遺物が少量であり、時期を決定できるものは少ない。ただ、ピット33、土坑22・24から良好な一括資料が出土しており、これらがすべて11世紀後葉～12世紀



第118図 焼土坑10 平面・断面図

前葉の範疇に入るものであること、またf域の出土遺物全体をみてもこの時期のものが比較的多く認められることから、11世紀後葉～12世紀前葉を中心とする時期の遺構が展開していた可能性は高いと思われる。また、12～13世紀の遺物が出土した遺構も存在する。なお、出土遺物から時期を知ることができないが、古代のものである可能性をもつ遺構群もみられる。

東半と西半とでは建物の方向軸が異なっている。時期の詳細は不明であるが、同時期のものが存在するとしても、家地は異なると考えられる。ただし、両者の間の遺構を検出していない部分は、本来より遺構が存在していなかったのか、削平されて失われたのか不明ではある。

西半では、全体的に建物、溝の方向軸がおおよそ揃っている。

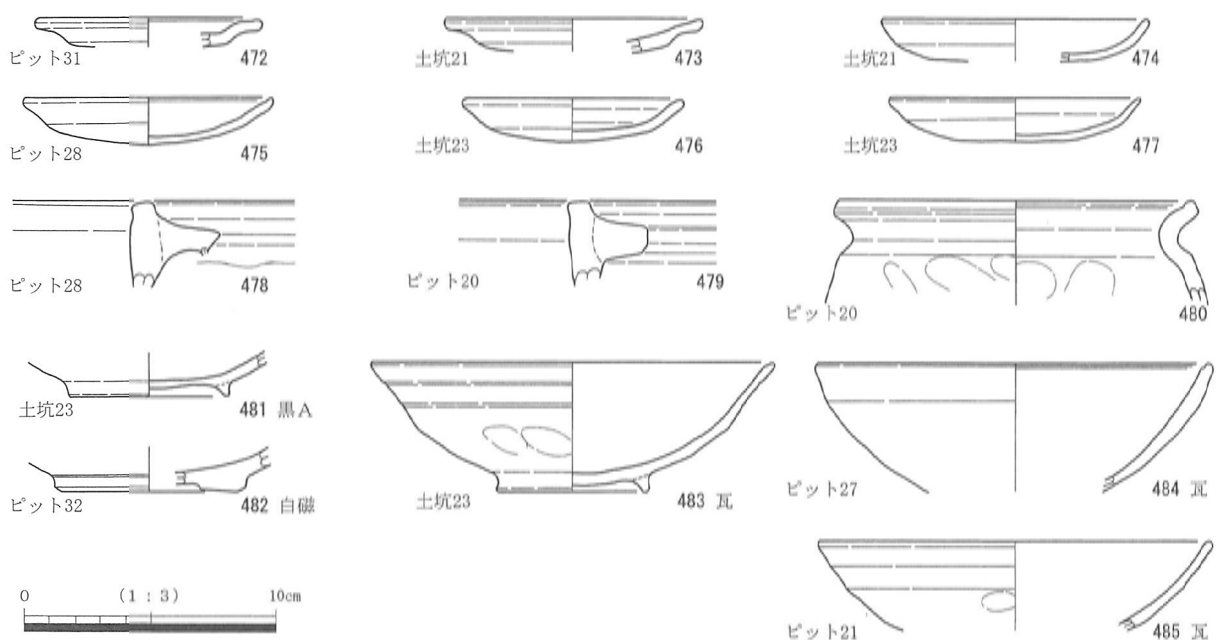
中央部に位置する建物40・41と、その南に位置する建物42は、規模、西側と北側に溝が巡る点などが共通している。建物42からは11世紀代の遺物が、建物40・41からは12～13世紀代の遺物が出土しているが、出土遺物は少量であり、その時期関係は不明とせざるを得ない。北部に位置する建物37～39は、さらに出土遺物が少量で、以南の建物群よりやや古い様相も看取されるものの、これも詳細な時期は不明とせざるを得ない。

西半の建物群は、同程度の規模のものが多く、建物38・39を除いて重複するものがみられないことが、東半の状況と対照的である。建物38と39から、少なくとも2時期あることがわかるが、全体的に建物の時期関係は不明である。おおよそ11～13世紀のものと想定される。

東半は、西半とは対照的に、方向軸の異なる建物が重なりあっている。

方向軸から、やや東に振れてはいるが正方位に近い建物45・47～51、東に振れる建物43・44、さらに東に触れる建物46の3群にわけられる。建物47・48、50・51の重複関係から、正方位のものだけで少なくとも2時期が想定される。さらに建物47・48が、東に振れる建物46と重なっていることから、全体として最低でも3時期が想定できる。建物43と44、建物50と51は、それぞれほぼ同じ位置に方向軸を揃えて重複しており、近い時期のものであると考えられる。

柱穴出土遺物が少なく、時期が確定できる建物はない。ただ、出土した遺物は細片ではあるがおおよそ11～12世紀のものが多く、冒頭で述べたこの域全体の出土遺物の傾向も考慮に入れば、建物群のな



第119図 ピット28 土坑21 その他の遺構 出土遺物

かに、11～12世紀のものが存在している可能性は高いと思われる。

正方位に近い方向軸をもつ建物群の中には、建物45・48・50・51など、比較的大型の柱穴からなる建物がある。特に建物45の中心部分の柱穴は、規模が非常に大きい。この建物は、遺跡内で最も建物面積が大きく、その構造も特異なものである。さらに、その南に位置する建物48もその細長い形態と東西約15.3mにおよぶその長さは、遺跡内で特異なものである。

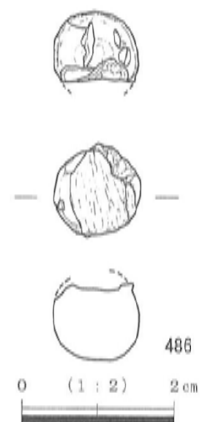
これらの建物の柱穴掘り方には、方形または隅丸方形のもの、円形または楕円形のもの半々程度みられる。当遺跡内で、方形掘り方の柱穴を有する建物は、これら以外には丘陵上中部j域の建物98のみである。遺跡内でも、比較的古い時期のものであることが想定される。

前述したように、特に建物45・48は、遺跡内でも、その規模が群を抜いて大きく、構造も他にはみられないものである。主体の階層の高さ、特殊な機能の付加などが推測される。詳細な時期が不明であるために、遺跡全体のなかで位置づけをおこなうことに困難が伴うが、おそらく遺跡全体の開発を考える上で、看過できない建物群であろうと思われる。

なお、正方位に近い建物群のなかには、建物47・49など、当遺跡内で標準的な規模の柱穴をもつものみられる。これらからは11～12世紀代かと思われる遺物が出土している。

冒頭で述べた一括出土資料は、すべて東半に位置する。ピット33からは土師器小皿がまとめて出土した。土坑22からは楠葉型瓦器椀と土師器甕が、土坑24からは土師器皿、回転台土師器皿などが出土している。しかし、いずれもその性格、ほかの遺構との関係は不明である。

f域の西側は、小規模な浅い谷地形を挟んでd域である。谷の東側部分は遺構が希薄であるが、前述したようにこれは本来の状態であるのか、削平を受けたためであるのか不明である。d域には11世紀代の建物など、f域と同様な時期の遺構が展開しているが、f域のものと同時存在していたとしても、谷を挟んでいるため、異なる家地であると思われる。北側は、10世紀後葉を中心時期とするe域である。f域にはこの時期と断定できる遺構はないが、時期が曖昧な遺構が多く、全くないとはいきれない。北東から東側は川1で、川の対岸は丘陵上中部地区のi・j域である。両域共に11～12・13世紀の建物がみられ、f域の建物と同時に存在したものがある可能性が高い。また、前述したが、j域には小規模ではあるが方形掘り方の柱穴をもつ建物88がある。南側はg域で、11～13世紀の遺構が展開している。建物はf域同様、時期不明のものも多く、両域の関係は不明である。それ以外の遺構には、11世紀後葉～12世紀前葉の、f域と同時期と思われる遺構も少数存在するが、全体的にはf域で比較的多く出土している遺物よりもやや新しい、12世紀代の遺物が多く出土しており、g域ではf域の遺構群に連続する、次時期の遺構群が展開していた可能性が高いと考えられる。



第120図 近世作土層
出土遺物
(1/2)

第7項 g城(付図3・7)

丘陵上西部の南東にあたる。丘陵の先端で、やや南に張り出した部分である。南および西側は勝尾寺川段丘面に面して崖となり、北側がf域で、東側が川1を挟んでj域である。

主な遺構に、建物4棟・焼土坑1基があり、他に、溝・土坑・ピットなどがある。

建物52(第121・122図 図版50・51)

北西部に位置し、南北3間×東西1間、約6.8m×4.5m、約30.6㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。柱穴6では柱痕を確認している。建物53と重なる。

遺物は出土していない。

建物53(第121・122図 図版50・51)

建物52と重なり、南北2間×東西1間、約5.5m×3.7m、約20.4㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。柱穴2・3・6に柱痕を確認している。

遺物は出土していない。

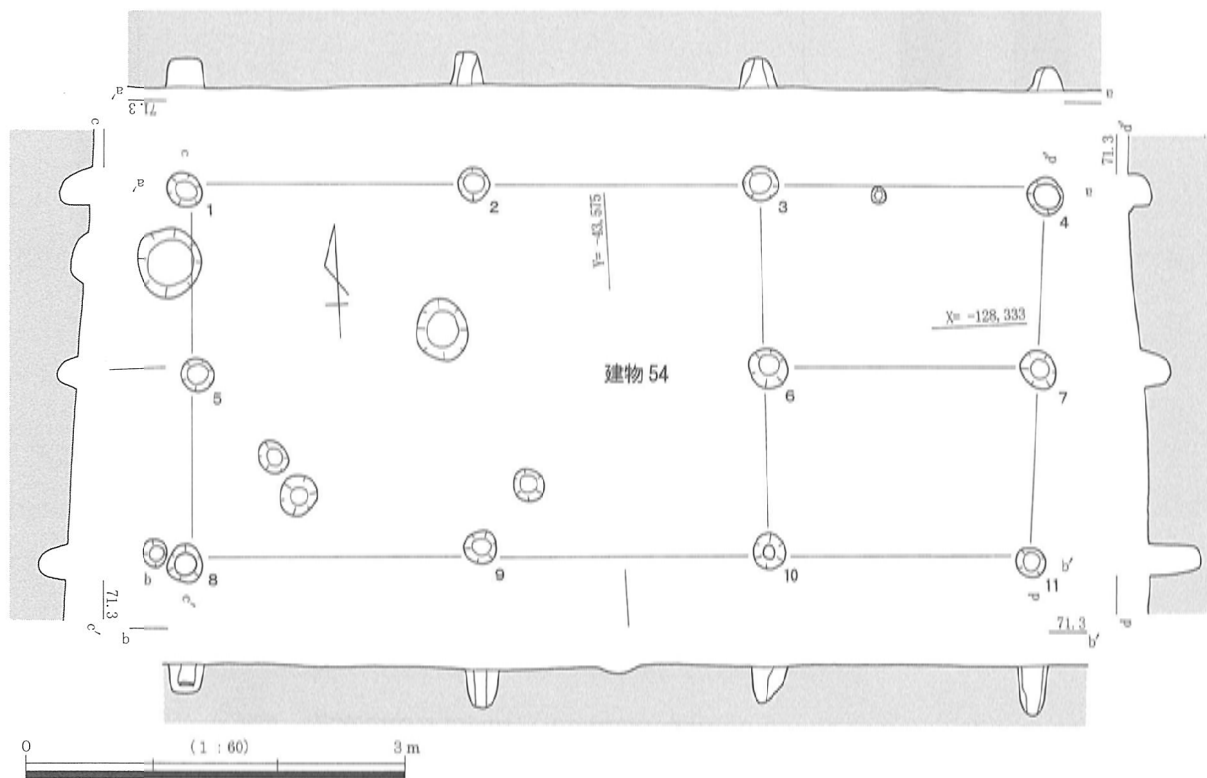
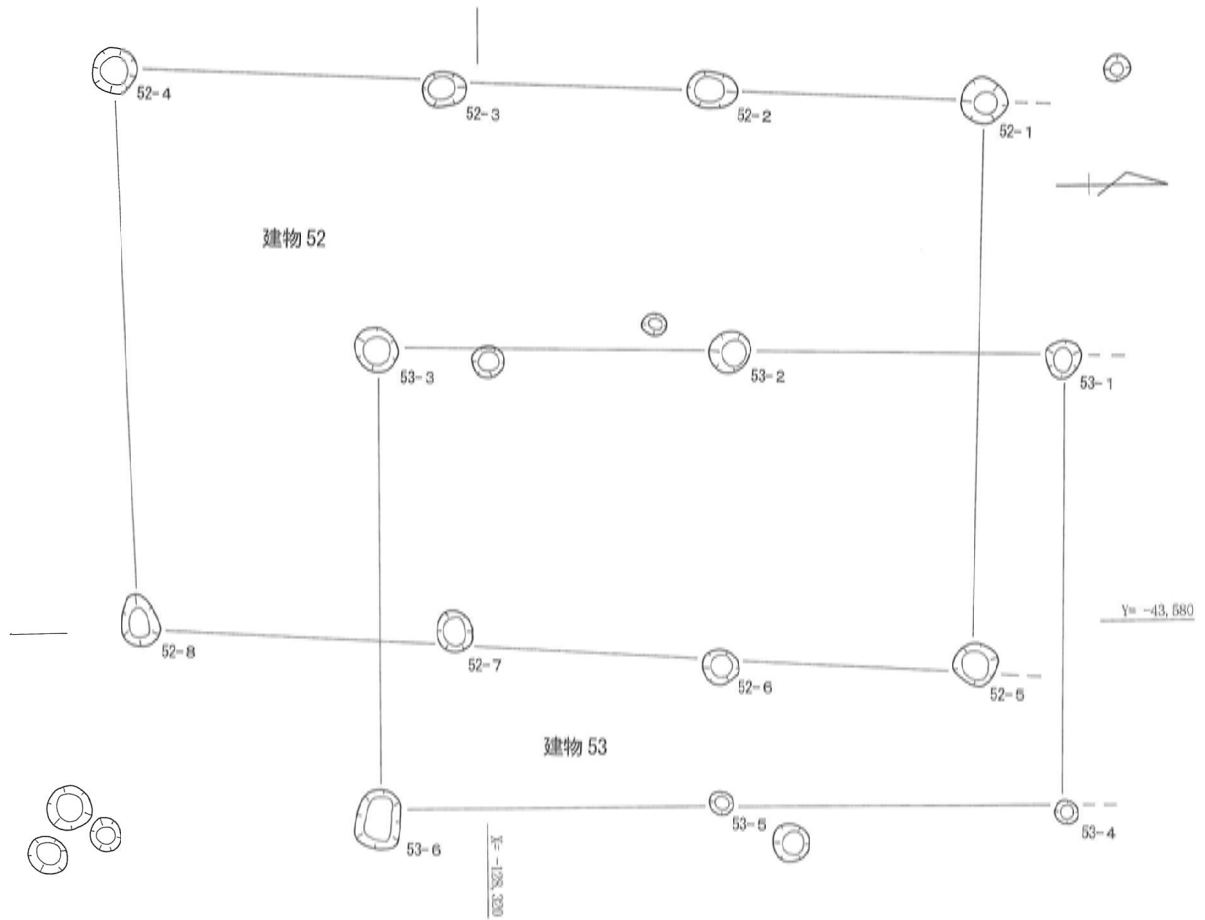
建物54(第121・122・124図 図版50・51)

西部に位置し、東西3間×南北2間、約6.8m×3.0m、約20.4㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。

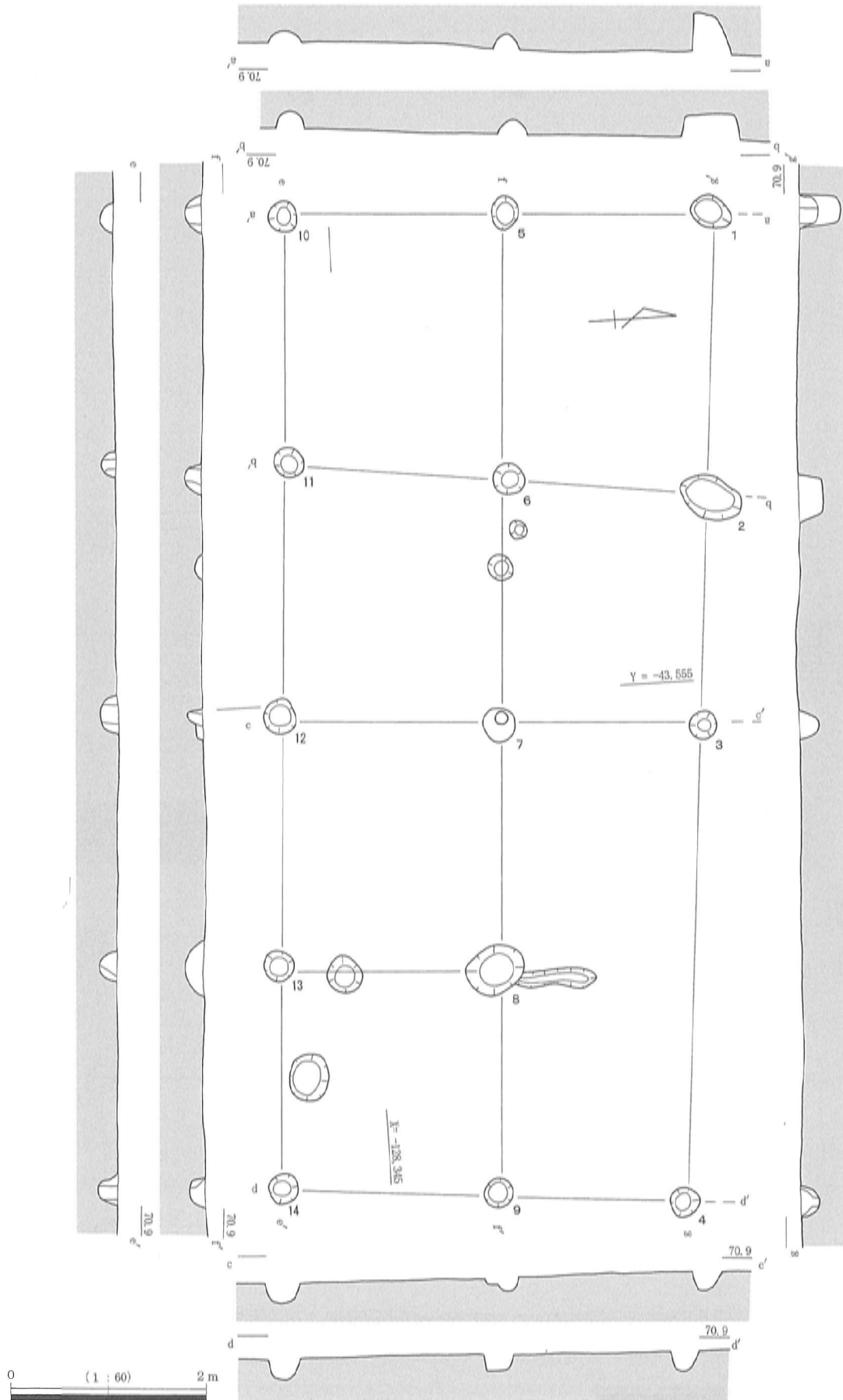
遺物は、487の口縁部2段ナデの土師器小皿以外が小片であり、和泉型瓦器椀、土師器煮炊具などが



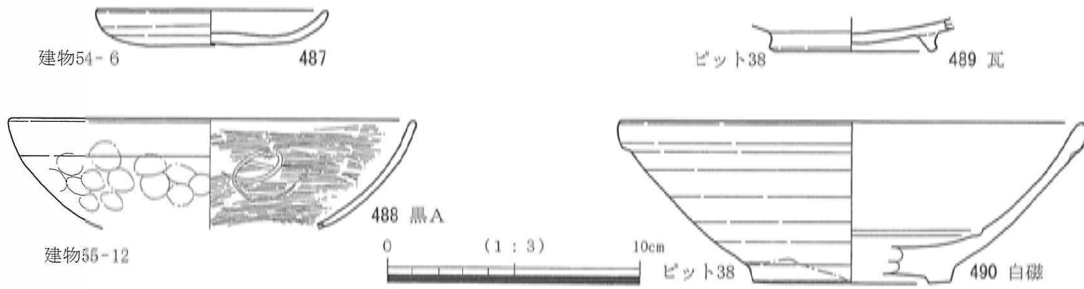
第121図 g城 平面図



第122図 建物52~54 平面・断面図



第123図 建物55 平面・断面図



第124図 建物54・55 ピット38 出土遺物

ある。

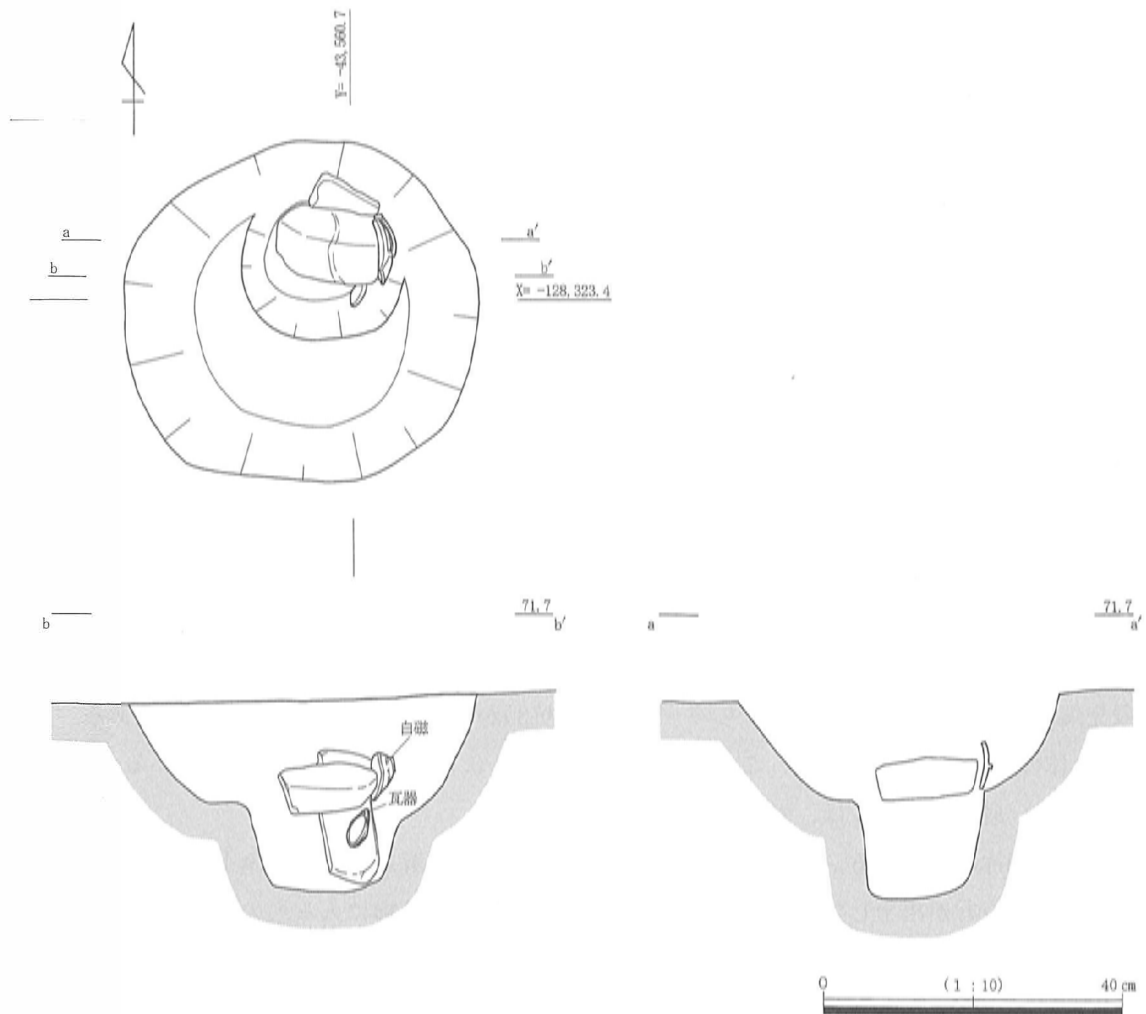
建物55 (第121・123・124図 図版50・51)

南東部に位置し、東西4間×南北2間、約10.0m×4.3m、約43.0㎡である。主軸方向はN-4°-Eである。北辺で柱穴が存在しない箇所があるが、これは本来より存在しなかった可能性が高い。

遺物は438の黒色土器A類椀の他に、柱穴3からも小片ではあるが黒色土器A類椀が出土している。

溝32 (第131図)

丘陵先端部分に展開する遺構群の北端部に位置する。西端は段丘崖まで伸びている。検出した長さ約15.0m、幅約0.5m、深さ約0.1m~0.2mである。底面のレベルは、中央から東部は一定であるが、西部では西に向けて低くなっている。これより南の丘陵先端部分には多くの遺構が展開しているが、これ



第125図 ピット38 平面・断面・立面図

らに丘陵上の水が流れ落ちないための排水溝の機能を果たしていたとも考えられる。土坑28などを切っている。

遺物は瓦器、須恵器などの小片がわずかに出土したのみである。

溝33 (第131図)

丘陵先端部分に展開する遺構群のうちの一つである。土坑31の南西隅から西へ伸びる。検出長約4.7m、幅約0.2m～0.3m、深さ約0.1mである。底面のレベルは、西端部で西に向かって低くなっている。溝34につながる可能性がある。

遺物は小片が出土したのみで、「て」字状口縁土師器皿、和泉型瓦器椀、土師器煮炊具、焼土塊などがある。焼土塊は板状で、スサが入っている。11世紀後葉～12世紀中葉までのものであろうか。

溝34 (第131・132・134～136図 図版53・195・196)

丘陵先端部で段丘崖に沿うように伸びる溝である。長さが約23.5m、幅は平均的な部分で、約0.3m～0.8m、深さが約0.1m～0.4mである。底面のレベルは、東に向かって低くなっている。

遺物は比較的多く出土した。溝部分にはまとまって土器が出土する箇所がみられる。図示した瓦器椀・皿、土師器皿・甕・羽釜、溝35出土の破片と接合した瓦質小壺などのほか、黒色土器A類椀、瓦質甕、須恵器甕、東播系須恵器鉢などの破片が出土している。瓦器椀はほとんどが和泉型で、ごく少量楠葉型がみられる。土師器小皿は「て」字状口縁のものと口縁端部をつまみ上げるものとがみられるが、つまみあげるものが多い。11世紀代のものも含まれるが、12世紀代のものが多い。

西端部分は削平を受けているため厳密には当初の形を残していないが、段丘崖へと続いていたと思われる。崖際部分には礫の集積がみられた。集積のなかに土器も多く含まれており、出土状況から礫と土器片をまとめて投棄したものかと思われる。東端部分も削平を受けているが、こちらも段丘崖まで伸びていたと想定される。

西端の崖際の集石部分からも比較的多くの土器が出土した。出土破片数は多いが、あまり接合はしない。とりわけ羽釜片が多く、なかに瓦器、土師器皿が混じっているといった状況である。羽釜の種類は、土師器、瓦質土器、小型、大型とバリエーションに富む。その多くは破片であるが、554の大型羽釜は、7割程度まで復元できた。瓦器椀は和泉型で、555は土坑28出土のものと接合した。土師器皿は口縁端部をつまみ上げるものである。他に、細片で図化できなかったが、鉄滓が出土している。溝部分出土のものと同様に時期幅があるが、12世紀中葉～後葉のものが多く、13世紀に入る可能性もある。

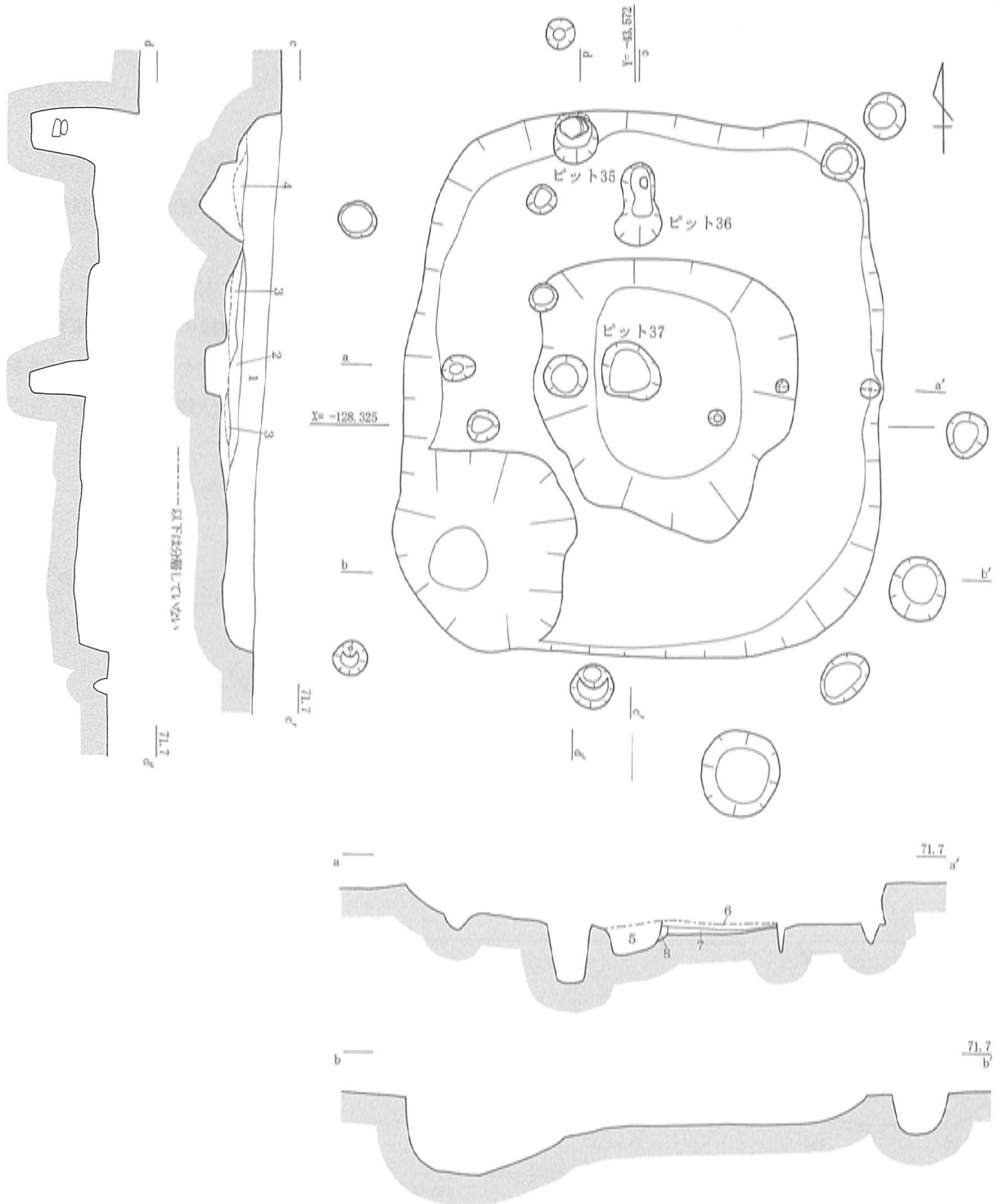
大型の土坑30から伸びる溝33や、溝35がこの溝に口を開けており、同時に存在していたと思われる。これらの遺構からの排水を担っていたと想定される。

溝35 (第131・132・134図 図版53・196・238)

丘陵先端部分に展開する遺構群のうちの一つで、土坑30から溝34に伸びる一連の溝群である。長さ約4.7m、全体の幅約1.5mであるが、このなかで幅約0.2mや0.7mの溝が枝分かれしている。深さは0.1m前後である。底面のレベルは、南へと低くなっている。

出土遺物は細片のみである。口縁端部の外反する土師器皿、口縁端部をつまみ上げる土師器皿、瓦器、土師器羽釜、釘などが出土している。11世紀後葉～12世紀後葉の範疇に入るものである。

土坑33を切っている。土坑30から溝34へ排水するための溝と考えられる。



1. 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂まじりシルト 中砂-粗砂含む Mn粒含む
2. 10YR 5/4 にぶい黄褐 中砂まじり粘質シルト 粗砂含む 粘土ブロック含む Mn粒・Fe含む
3. 2.5Y 5/4 黄褐 シルトまじり微砂 細砂含む
4. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 細砂まじりシルト 中砂含む
5. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト質細砂 中砂-粗砂多く含む $\phi 0.3$ cmの炭化物含む 10YR 5/6 黄褐 シルト質細砂ブロック含む
6. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト質細砂 中砂-粗砂・小礫多く含む
7. 2.5Y 7/2 浅黄 細砂 中砂若干含む
8. 要質、硬化している部分

0 (1 : 40) 2 m

第126図 土坑25 平面・断面図

ピット38 (第121・124・125図 図版52)

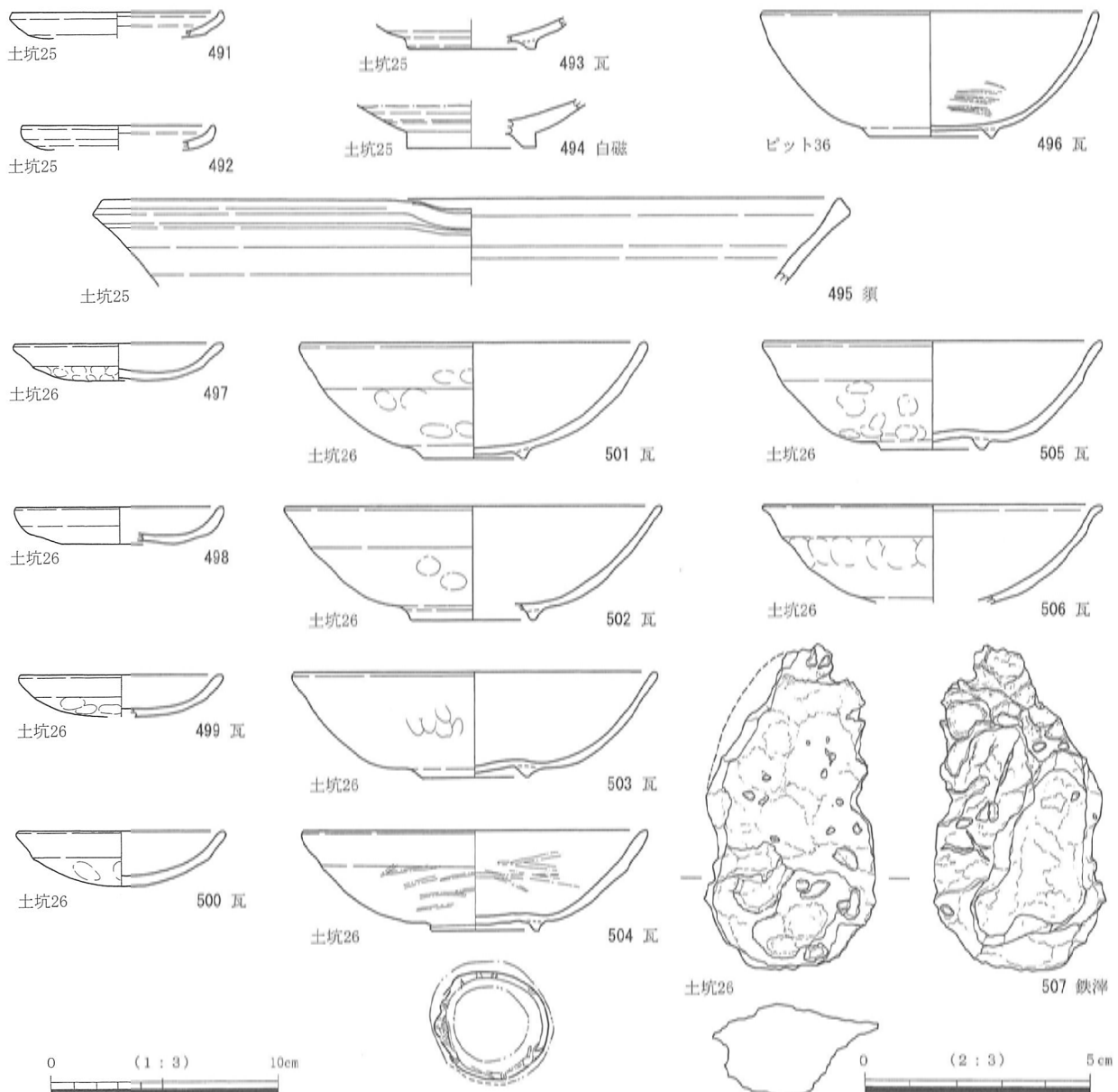
北部の中央に位置し、径約0.5m、深さ約0.3mの2段掘りである。柱穴である可能性もあるが、詳細は不明である。

白磁碗とともに出土した瓦器碗の底部は、比較的古手のものである。

土坑25 (第121・126・127図 図版50・52)

北西部に位置し、方形で南北約3.5m、東西約3.1m、深さ約0.2mで、正方方位を指向する。底面中央部の浅い落ち状の部分に砂がみられ、壁が垂直に立ち上がる。

出土遺物は、非常に細かく磨滅したものが多い。ほとんどが土師器と瓦器で、大型品は少ない。瓦器碗はごく少量楠葉型がみられるものの、ほとんどが和泉型である。他に玉縁状口縁の白磁碗、東播系須恵器鉢、少量ではあるが黒色土器A類碗などもみられる。少量ではあるが、焼土片や炭片、および鉄製品の破片が2点出土している。鉄製品の破片は図示し得ない細片であるが、1点は鑄造品である。瓦器



第127図 土坑25・26 その他の遺構 出土遺物 (2/3 = 507)

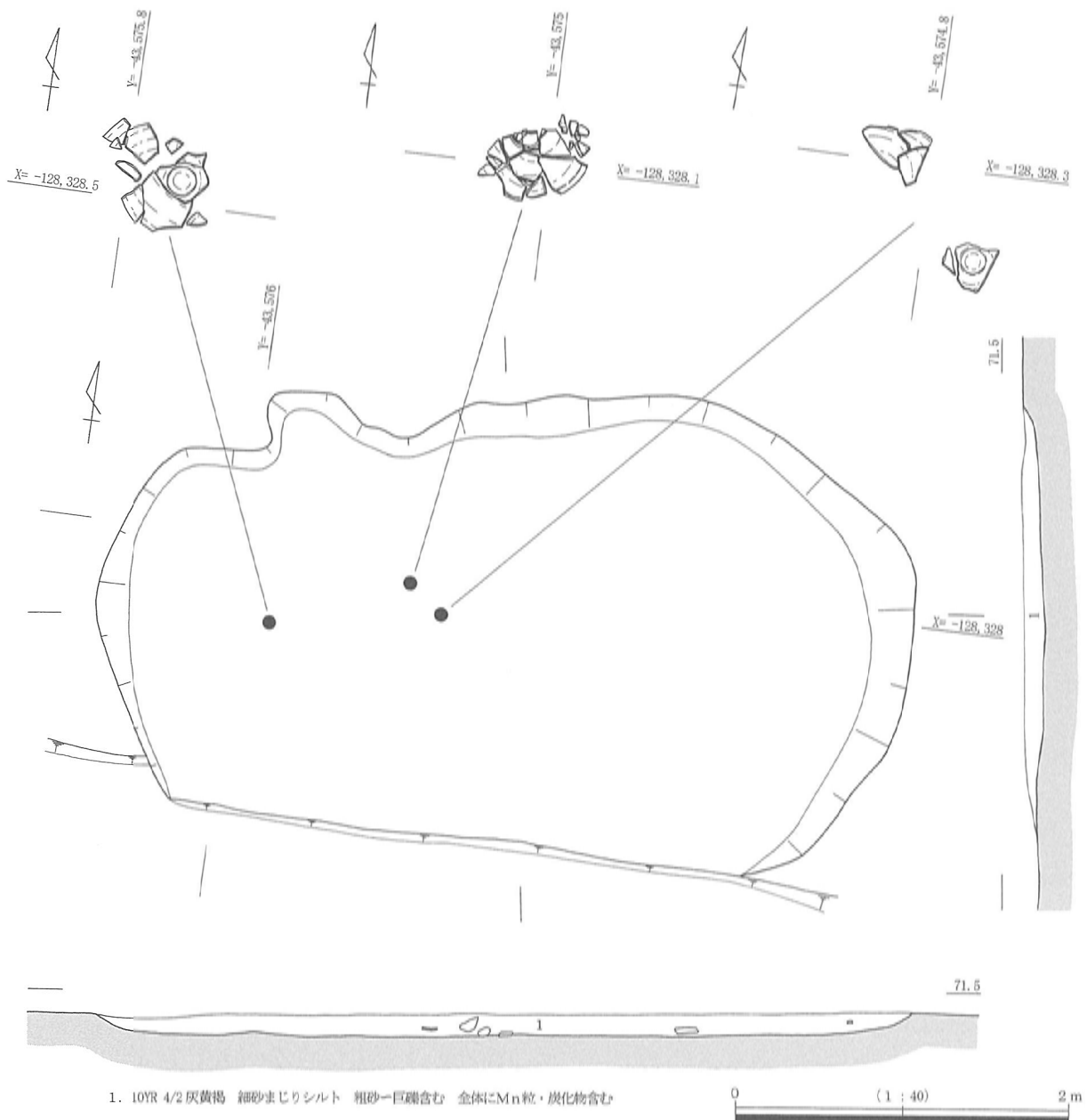
や土師器の細片からは、12世紀中葉～後葉を中心とする時期が想定される。

土坑内部および周辺にピットを十数基検出している。土坑北端部に位置するピット35には平らな石が2枚入っており、柱穴の可能性もある。ピット36からは瓦器椀が出土している。土坑との時期関係は不明である。

土坑26 (第121・127・128図 図版194・243)

土坑25の南側に位置する楕円形の大型土坑である。東西約4.9m、南北2.6m以上で、検出面からの深さは約0.1mと浅く、壁の立ち上がりが緩やかである。南端は棚田造成時に削平されている。瓦器椀が逆さまの状態出土した。

遺物は比較的多く出土しているが、ほとんどが瓦器椀と土師器皿の小片である。種類が確認できる瓦器椀はすべてが和泉型で、土師器大皿・小皿の他に、東播系須恵器鉢、土錘、鍛冶滓などがある。12世紀のものである。



第128図 土坑26 平面・断面図 (土器出土状況 1 : 10)

土坑28 (第131図 図版196)

丘陵先端部分に展開する遺構群の北西端にある。長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約0.3mである。出土した瓦器碗が、溝34の西端部から出土したものと接合した。溝32に切られる。

土坑29 (第121・129・131・133図 図版53)

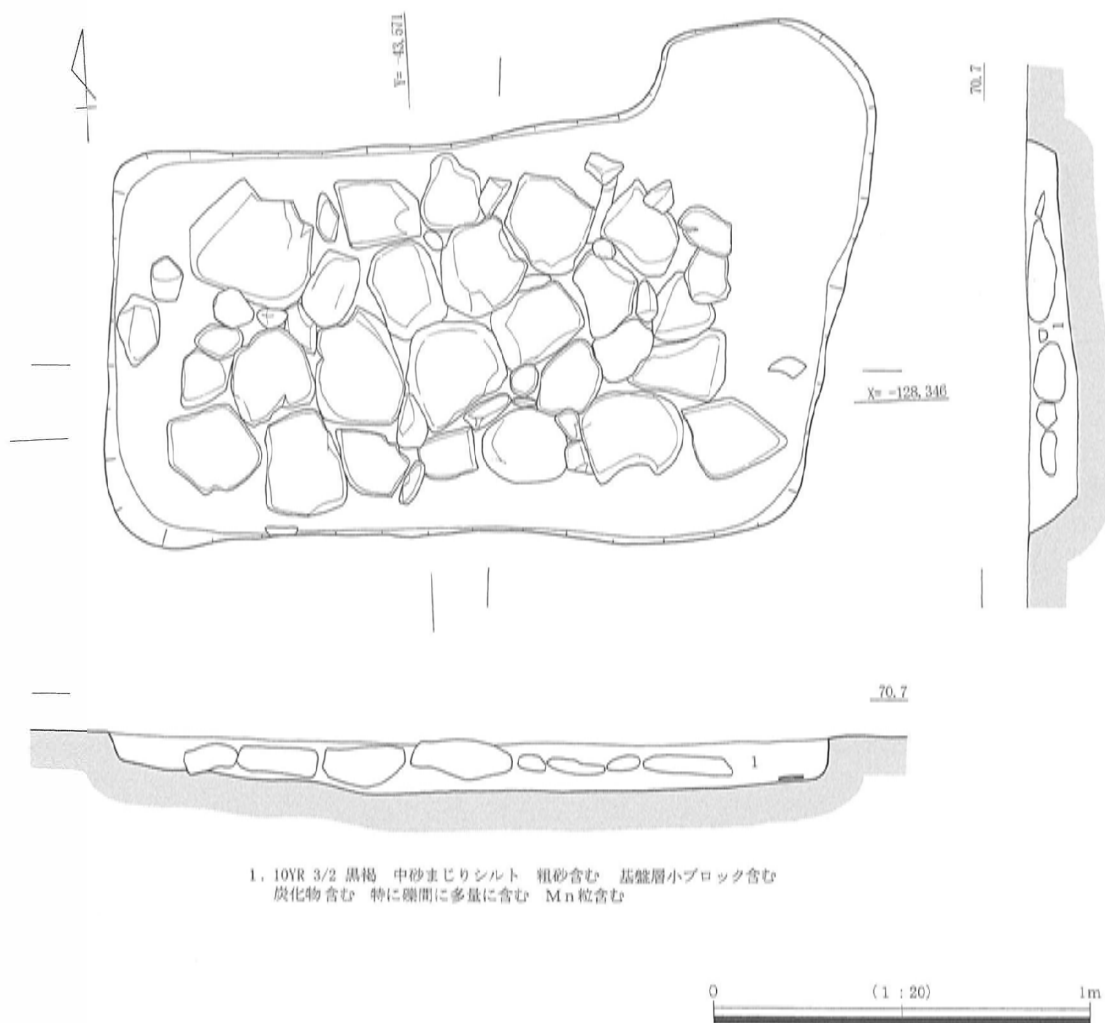
丘陵先端部分に展開する遺構群の東部に位置する。北東部に張り出し部がある長方形の土坑である。正方位を指向し、東西約1.9m、南北約1.0m、深さ約0.1mである。

石を、上面を平らに揃えて約1.4m×0.8mの範囲に並べている。埋土に炭化物が顕著に含まれる。土坑30・33を切っている。

遺物は、磨滅の著しい細片ばかりで、土師器皿、和泉型・楠葉型瓦器碗などがある。11世紀～13世紀前葉のものである。

土坑30 (第131～133図)

丘陵先端部分に展開する遺構群の中心に位置する、大型の土坑である。東西に長い不定形で、東西約8.2m、南北約4.5m、深さ約0.2mである。溝35がこの土坑から溝34へと伸びており、一連で機能すると思われる。埋土に土器片、炭化物、焼土粒を多く含み、作業場またはそれに付属するものとも考えられる。土坑33などを切っており、土坑29に切られる。



第129図 土坑29 平面・断面図

遺物は、磨滅気味の小片が多く出土している。和泉型瓦器椀、白磁、土師器皿などのほか、古代の須恵器杯Bも出土している。図化できなかったが、鉄滓の付着した羽口の先端部分も出土している。おおよそ12世紀のものである。

土坑31（第131・132図）

丘陵先端部分に展開する遺構群のうちの一つである。長辺約1.2m、短辺約0.8m、深さ約0.1mである。南西隅から溝33が西に向かって伸びている。土坑30に北端部が切られている。

遺物は、細片がわずかに出土している。

土坑33（第131図）

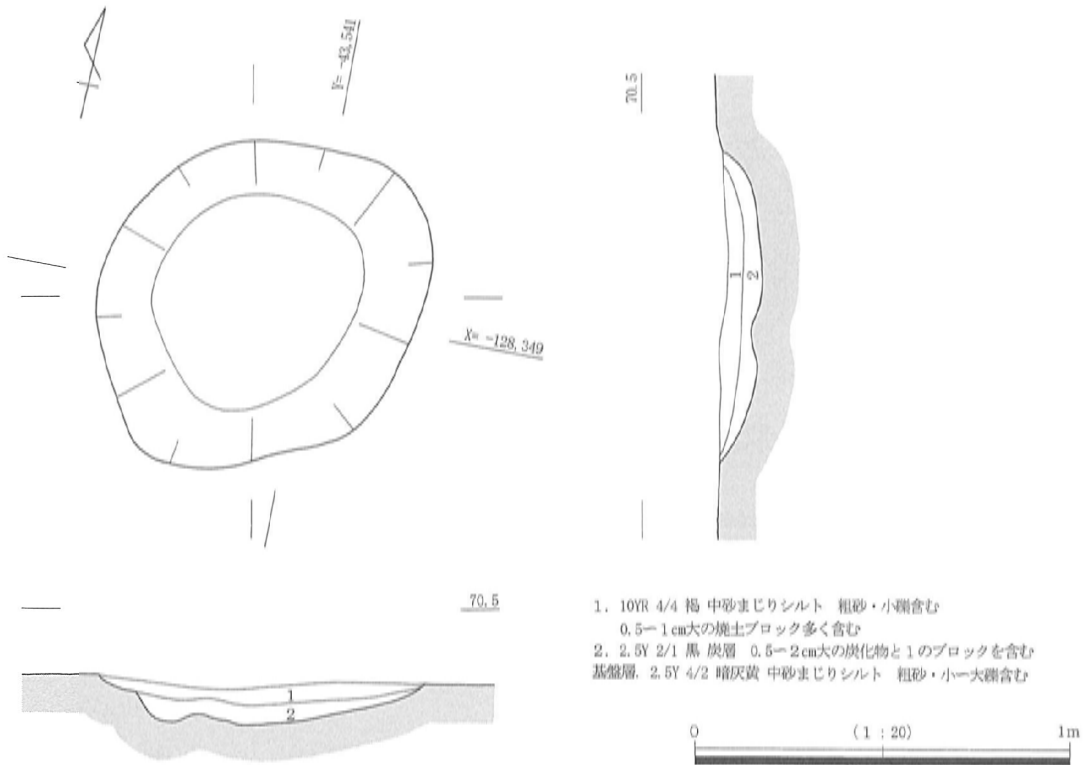
丘陵先端部分に展開する遺構群のうちの一つで、不定形な大型の土坑である。南北長さは約6.0mで、深さが約0.2mである。埋土に炭片、焼土片が比較的目立つ。土坑29・30、溝35に切られているため西部分が不明である。

遺物は小片のみで、楕円型・和泉型瓦器椀、土師器皿、須恵器甕などがみられる。土師器皿には、「て」字状口縁のもの、口縁部1段ナデで外反するもの、口縁部2段ナデで端部をつまみ上げるもの、口縁端部がやや内傾する大皿がある。11世紀後葉～12世紀中葉の範疇に入るものである。

土坑34（第131～133図 図版195）

丘陵先端部に位置する、やや歪な方形の土坑である。南北約3.1m、東西約2.7m、深さ約0.3mである。溝33や34と近接している。

完形と半分程度の和泉型瓦器椀がそれぞれ1個出土したほか、非常に多くの細片が出土している。口縁端部を少しつまみあげる土師器大皿、黒色土器、白磁碗、土師器煮炊具、須恵器甕、瓦質甕などがある。須恵器杯蓋、製塩土器片など、古代のものがわずかに混じっているが、おおよそ12世紀代のもものと



第130図 焼土坑11 平面・断面図



第131図 丘陵先端部 溝・土坑群 平面図

思われる。

焼土坑11 (第121・130図)

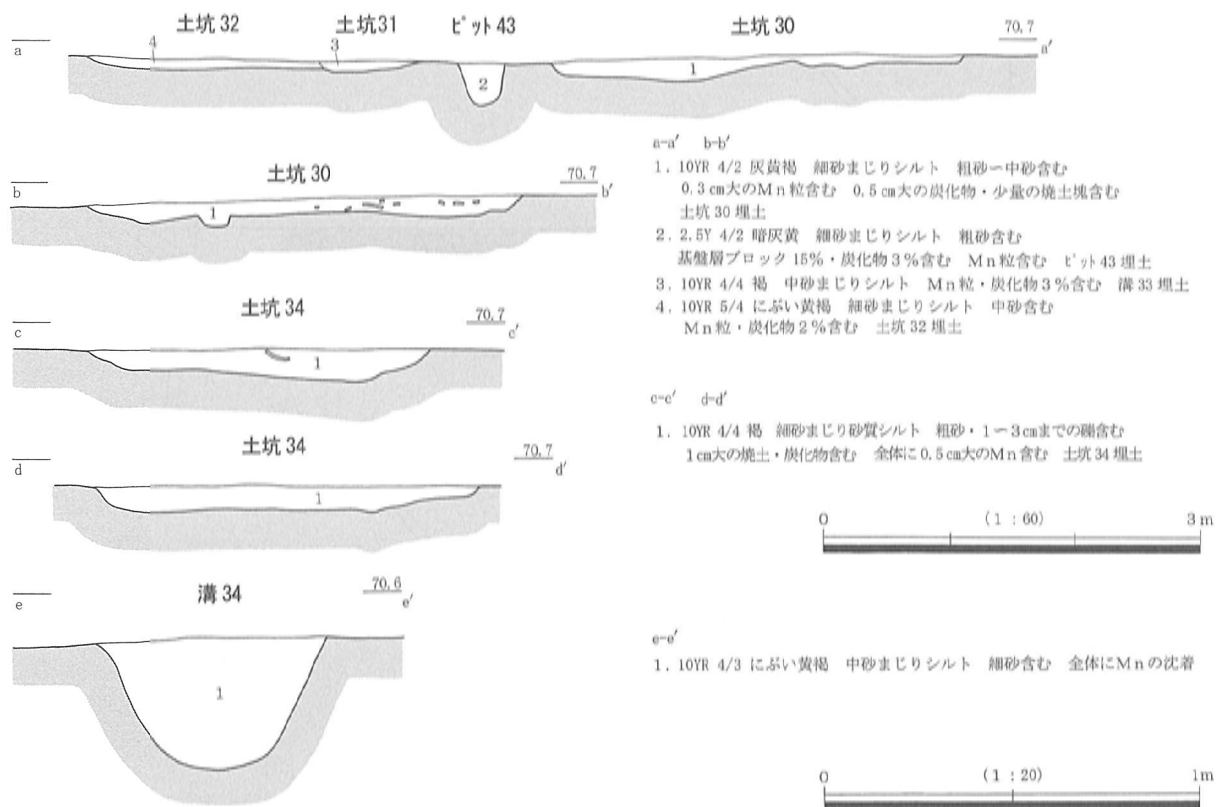
南東隅に位置し、川1近くの遺構の希薄な部分に立地する。不整な円形で、径約0.9m、深さ約0.1mである。下層は炭層である。遺物は出土していない。

包含層は、南西部の土坑、溝など遺構が密集している部分にのみ存在していた。他の部分は、近世作土層を除去した段階で基盤層上面となり、棚田造成時に削平を受けていると思われる。特に東半分では、西半分とは対照的に遺構をほとんど検出しておらず、大きく削平された可能性が高いと思われる。ただし、もともと遺構の分布密度が西半分に比べて低かった可能性もある。

また、南端部分は丘陵の先端にあたり、崖の地形は大きくは本来のものであると思われるが、棚田造成時にやや削りこまれていると考えられる。2段ある段丘面のうち、上段の崖は高低差約2.0mで、直下部分は全く遺構を検出しておらず、大きく削平された可能性がある。勝尾寺川段丘面x域にいたる下段の崖は、高低差約3.2mであるが、調査をおこなっていない。

包含層から出土した遺物は多くはない。11～13世紀のものが主であるが、きわめてわずかではあるが古代のものもみられる。

その他の遺構からは、小、細片ばかりではあるが、比較的多くの遺構から遺物が出土している。11～13世紀のものがみられるが、口縁端部をつまみ上げる土師器皿、和泉型瓦器碗など、12世紀のものが多くを占めている。土坑27からは鍛造でつくられた利器破片が出土している。

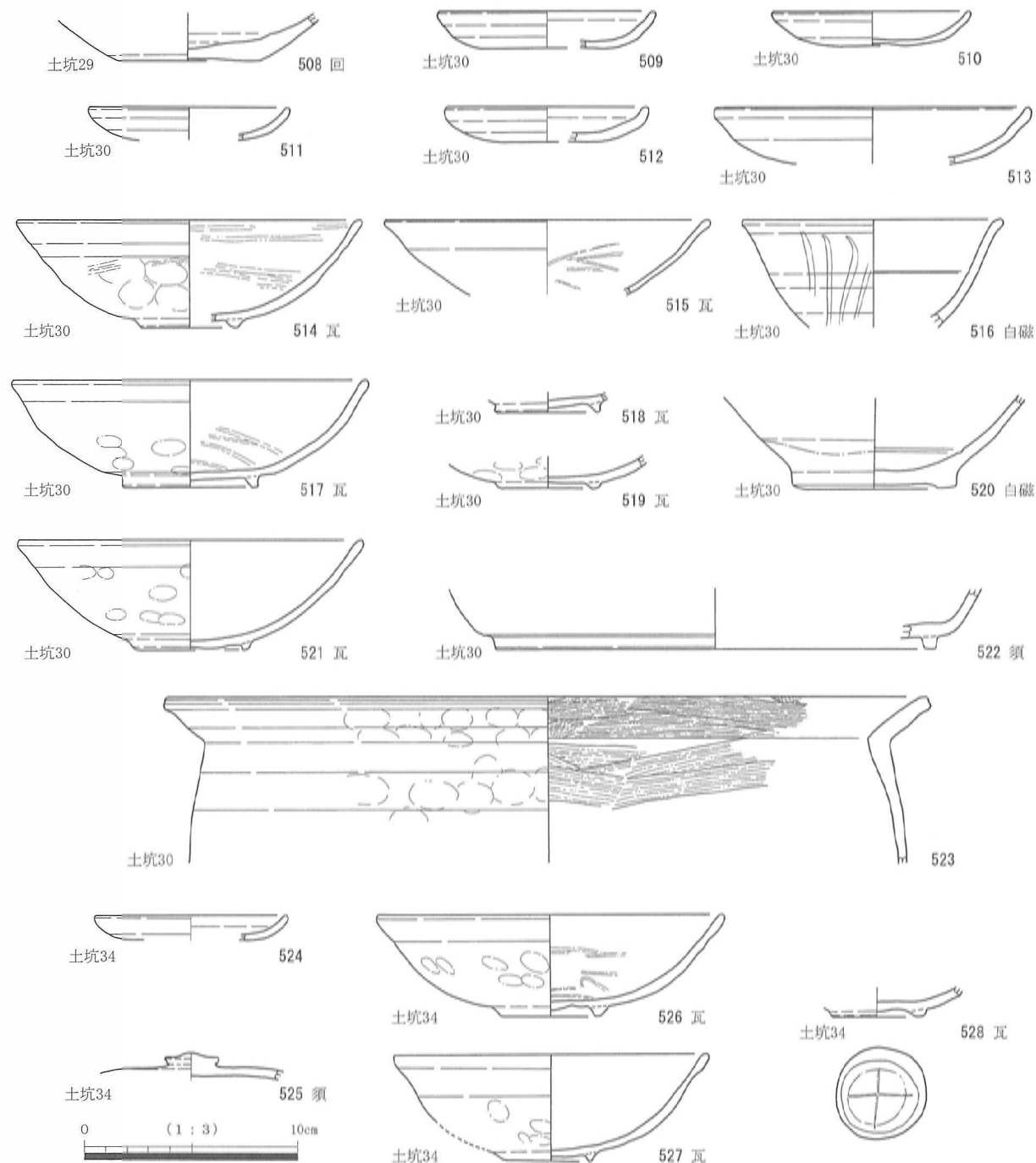


第132図 丘陵先端部 溝・土坑群 断面図

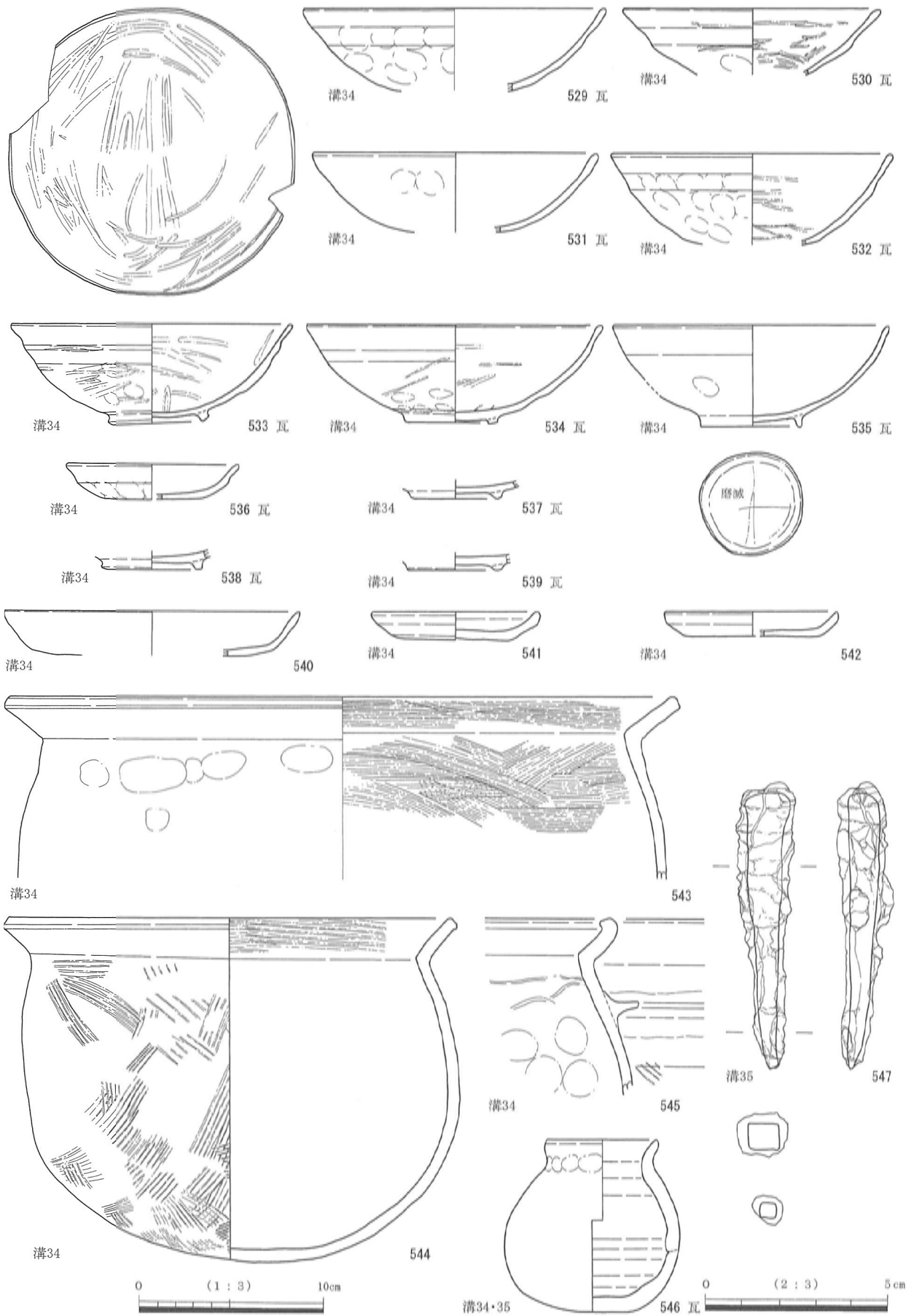
小結

建物は4棟を復元したが、北西部で建物52・53が重複するものの、建物54と建物55はそれぞれ、中央部西よりと南東部に単独で所在している。時期の確定できるものはない。

建物以外の遺構から出土した遺物は、おおよそ11世紀後葉～13世紀前葉のものであり、12世紀中葉～後葉のものが多くを占めている。大局的にみればこれは当域の遺構全体の時期を示していると思われる。南西部分の遺構が密集している地点では多くの遺構が重複しており、これらの存続期間と、中心となる時期を示していると考えられる。建物はこれらと同時期または近い時期である可能性もある。



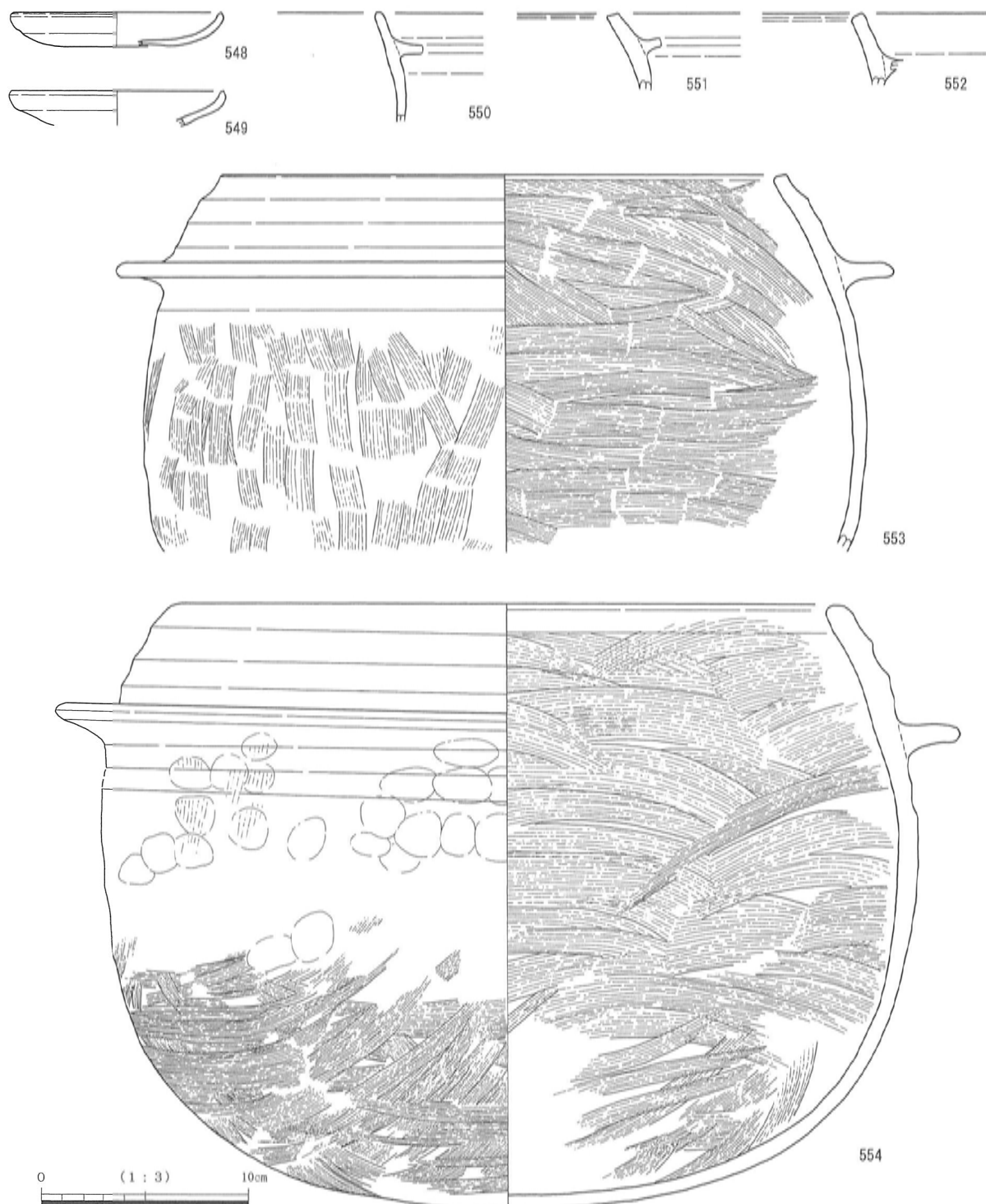
第133図 土坑29・30・34 出土遺物



第134図 溝34 出土遺物(1) 溝35 出土遺物(2/3=547)

建物52・53はf域に近く、北側にピット33、建物群が位置しており、f域の遺構群との関係も考慮に入れる必要がある。また、土坑25北側には断面観察から柱穴の可能性が高い、ピットが多くみられ、建物などが復元し得た以外にも存在したことが想定される。

g域で特徴的なのが、丘陵先端部分に展開する、土坑、溝などの遺構群である。中心的位置にあるのが浅い大型の土坑で、これと溝が組み合わさっている。土坑29・30・33の切り合い関係から、最低でも3時期が想定できる。



第135図 溝34(西端集石部) 出土遺物(2)

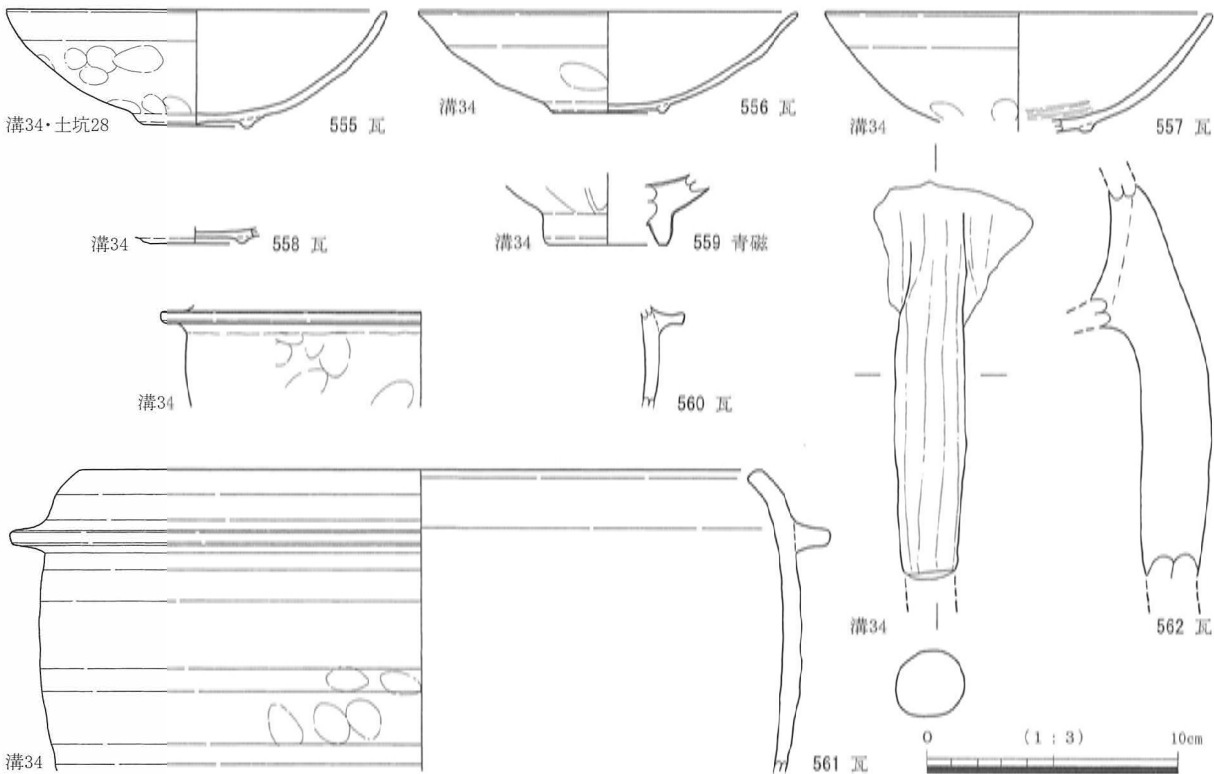
これらの遺構の性格は明らかにできなかったが、何らかの作業に伴うものとも考えられる。遺構埋土に炭化物や焼土塊を多く含むものが目立ち、なかには多量に含むものもみられるが、その成因を具体的に明らかにすることはできなかった。

溝群は排水の機能を果たしていたと想定できる。大型の土坑30から伸びる溝35は、丘陵先端の肩部に沿って伸びている溝34につながっている。また、土坑31から伸びる溝33もこの溝に合流している。立地から、崖下部分に排水するためのものであると考えられる。また、遺構群の北端部に位置する東西方向の溝32は、この遺構群に丘陵上の水が流れこまないためのものである可能性がある。

土坑29は、丘陵先端の遺構が密集している部分に位置しており、大型の土坑30や、ピットを切っている。南西部の遺構群のなかでは最も新しいものと思われるが、出土遺物から時期的に大きく隔たったものではないと考えられる。ただし、性格については周辺の遺構群と連続しているかどうか不明である。

類例として大阪府堺市・南河内郡美原町日置荘遺跡¹⁾、広島県福山市草戸千軒町遺跡²⁾などに類似した遺構がある。日置荘遺跡の土坑B-103は、約1.2×0.7mの隅丸方形である。底面に10cm～15cmの偏平な礫が敷かれており、礫の上面では炭化物が検出されている。削平によって底部が遺存していたのみであるが、礫上で火を使用したと考えられている。瓦器などの小片が出土しているのみで、時期は不明である。草戸千軒町遺跡のS X 1789は、上部施設、釘、副葬品をともなう墓である。墓壙は約1.5×1.0mの隅丸方形で、深さ約0.4mである。底部に平たい石を敷いており、棺台であると考えられている。15世紀後葉～16世紀初頭のものである。

なお、土坑25は、東日本で多く調査されている「方形堅穴状遺構」と類似している。その性格は作業場や納屋などが想定されている。ただし、土坑25が小規模であること、焼土、炭、鉄製品の出土が少量であることから、同種のものであるといいきれない。また、土坑内とその周囲にはピットがみられ、覆



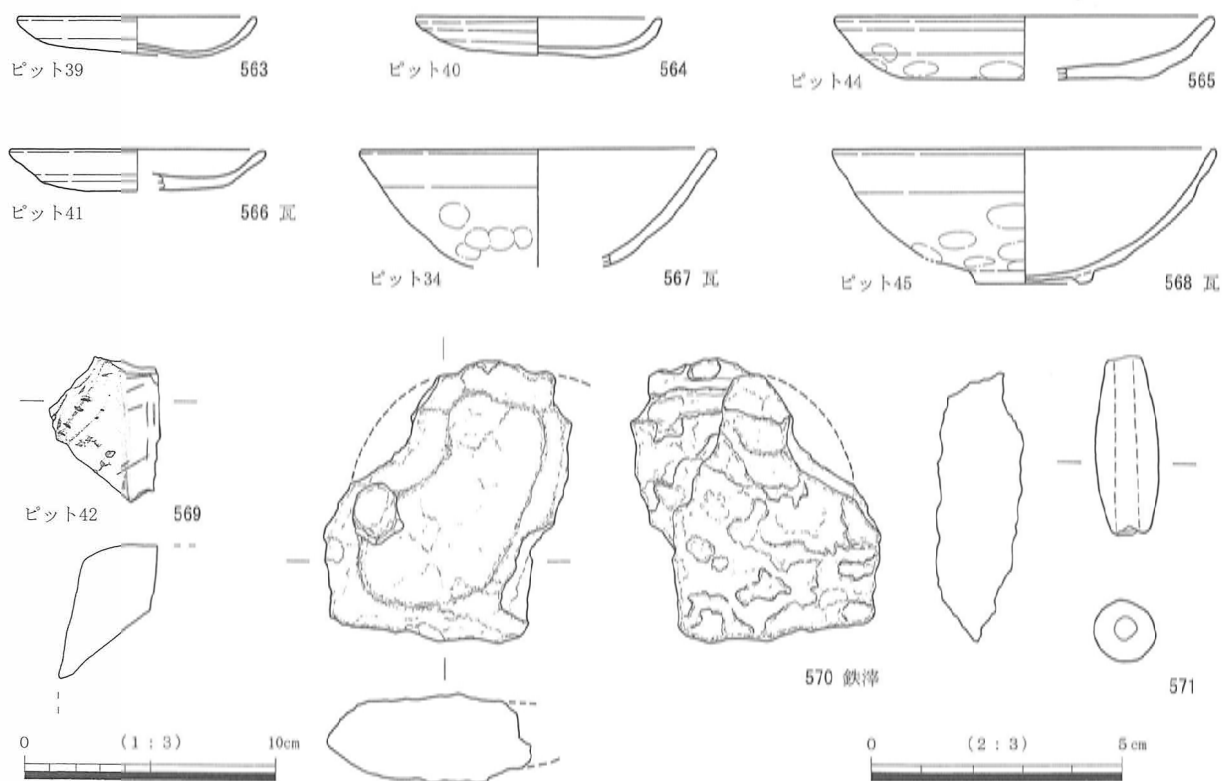
第136図 溝34（西端集石部）（3） 土坑28 出土遺物

屋などとしてその関連も想定される場所であるが、規則的に並んでおらず、これも詳細は不明とせざるを得ない。

g域の北側は、f域である。遺物はg域で中心となる12世紀中葉～後葉の時期よりもやや古い11世紀後葉～12世紀前葉の時期の遺物が多く出土している。g域には、f域の遺構群に時期的に連続する、次時期の遺構群が展開している可能性がある。東側は、未調査のため池であるが、これは川1の名残りである。この部分は丘陵上最下流であり、深度が増していると思われる。川1の対岸は、丘陵上中部地区j域である。南側は、段丘崖を経て勝尾寺川段丘面地区w域にいたる。西側は、f城南の丘陵先端部分と、段丘崖、その下の勝尾寺川段丘面地区v域である。

註

- 1) 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 『日置荘遺跡』 1995
- 2) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』 1994



第137図 その他の遺構 近世作土層 出土遺物 (2/3 = 570・571)